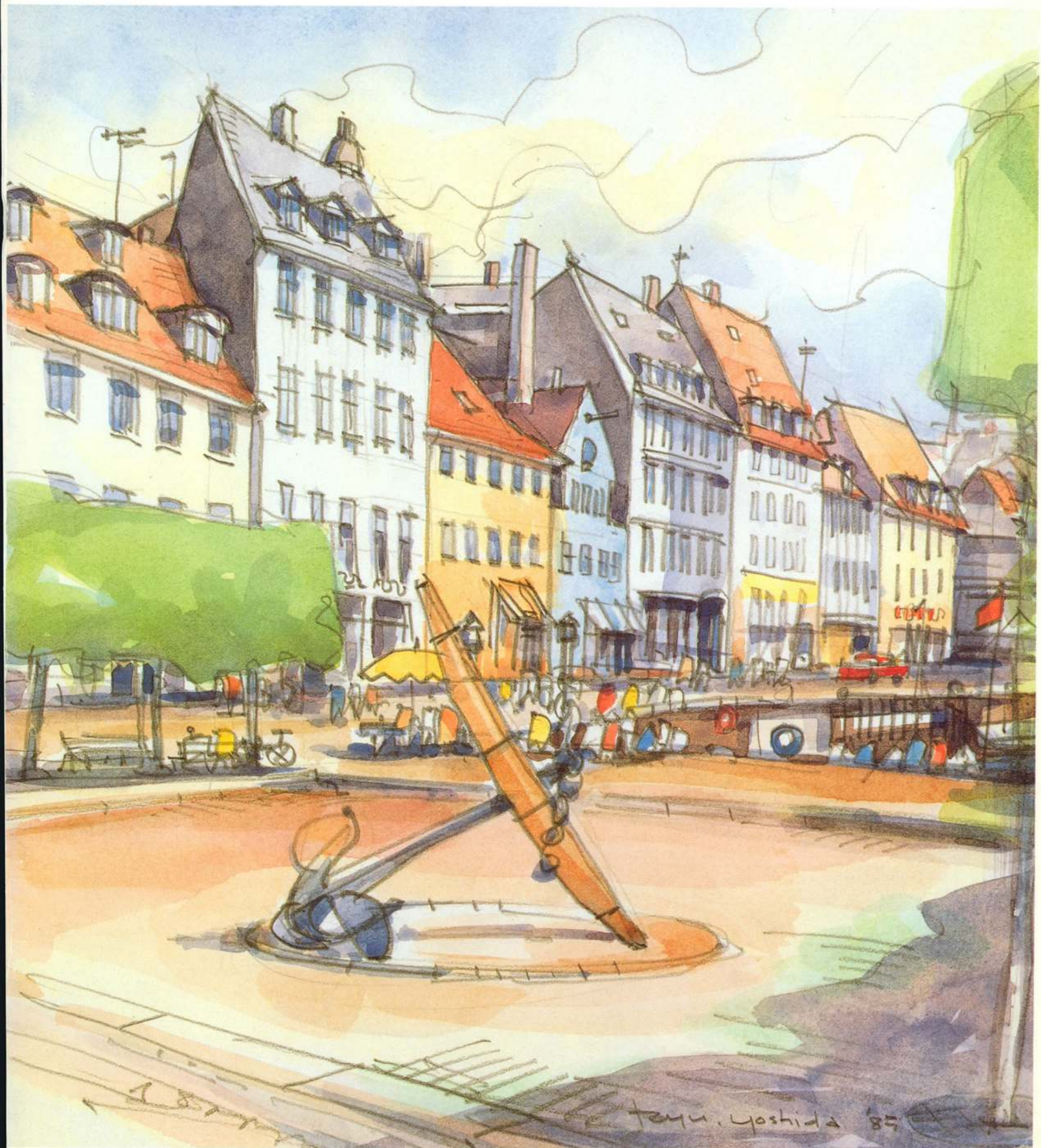
Vol. 67通巻768号
昭和61年3月25日発行
毎月1回25日発行
昭和24年3月19日第3種郵便物認可

建築と社会

1986 3

ARCHITECTURE AND SOCIETY

特集●現代デザイン―ポストモダニズム10年―／これからの防水工法



日本建築協会

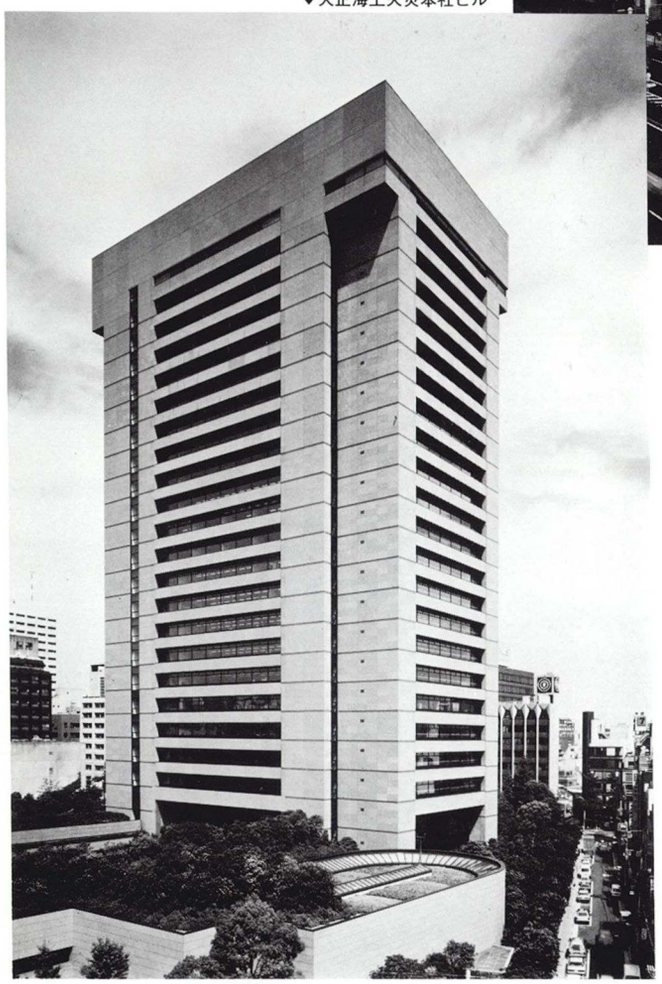
時代が求めた高性能。

変成シリコーンシーリング材
カネカMSポリマー®

主成分カネカMSポリマー®が
耐久性、耐候性、石材への非汚染性、
塗装性などの優れた特性を
バランスよく発揮する
変成シリコーンシーリング材。
建築界の高度で多様なニーズに対応する
新時代のシーリング材として、
幅広い用途で注目を集めています。



▲都ホテル大阪

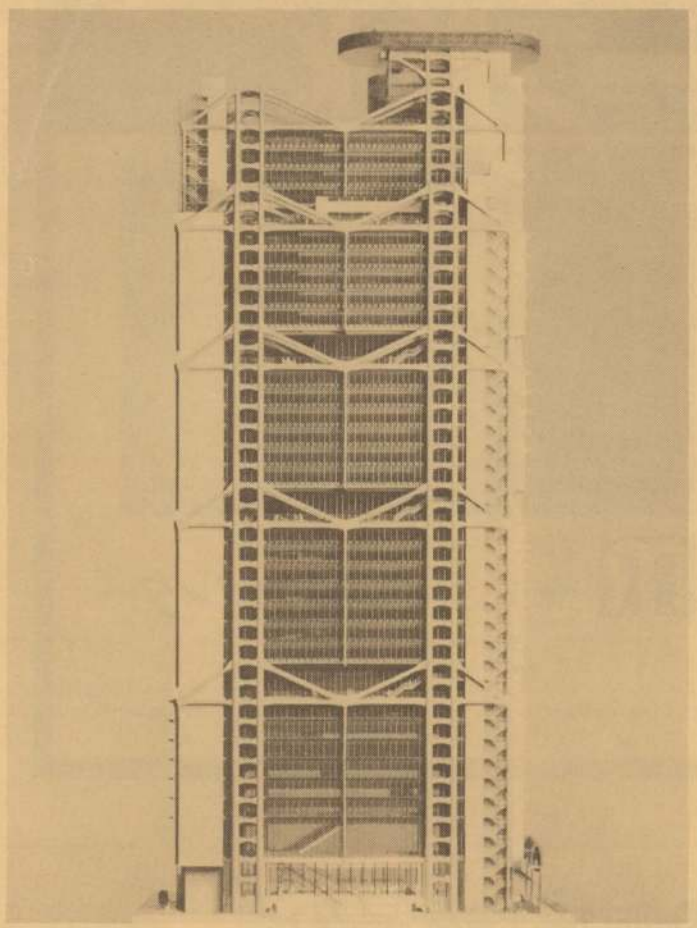


▼大正海上火災本社ビル

超高層ビルからプレハブ住宅まで、
幅広い用途で大躍進。

鐘淵化学工業株式会社
特殊樹脂三部
●本　　社　〒530 大阪市北区中之島3丁目2番4号 朝日新聞ビル
電話：大阪(06)208-6220(ダイヤルイン)
●東京支社　〒107 東京都港区元赤坂1丁目3番12号 赤坂センタービル
電話：東京(03)405-1015(セクションイン)

◀香港上海銀行新本社ビル
——16mmとスライド映写会——



本会事業委員会の広報小委員会が昭和44年より59回続けてきました北浜京阪地下通路の写真展示は、協会事務所の大阪駅前第３ビルへの移転など諸種の理由により中止いたしました。それに替るものとして建築と社会に関連する情報提供やふれあいの場づくりなどを目的とした各種の催しを企画していきたいと考えております。その一環として、建築に関連する記録映画等の映写会を検討しておりますが、今回は初めての試みとして、**「今世紀最大のビッグプロジェクト、80年代を代表する超高層ビル」**と前評判の高い**香港上海銀行新本社ビル**の16mmとスライド映写会を次の通り開催することになりました。多数のご参加をお待ちしております。

なお、映写のフィルムは工事に直接参加されましたナカ工業株式会社のご提供によるもので、より臨場感のある詳しい説明が受けられるものと思われます。ご期待下さい。

日　　時　**4**月**18**日(金)　開場18：00　開会18：30→閉会20：30
会　　場　日本建築協会・ラウンジ（大阪駅前第３ビル・21階）
定　　員　40名
参加会費　500円（飲物代ほか）当日受付にていただきます。
申　　込　はがきまたは電話にて、氏名・勤務先名・所在地・連絡電話番号・郵便番号・催し名称及び会員、会員外の種別をお知らせ下さい。申込締切は４月10日（木）。
申込者多数の場合は抽せんにて決定の上、参加証をお送りいたします。（日本建築協会事業課：〒530　大阪市北区梅田１－１－３－2100　大阪駅前第３ビル・21階 TEL.06－348－0633）

※本誌「構造の頁」欄（103頁）に香港上海銀行新本社ビルの構造に関する記事が紹介されています。ご高覧下さい。

◀監事並びに本部所属評議員の当選

昭和61年２月26日開催の通常総会におきまして、監事並びに本部所属評議員の選挙を執り行いたしましたところ、下記の方々が当選せられました。

監　事

尾亀清四郎君（三晃空調）

本部所属評議員

（技術部門）

岩本尚三君（大阪市同和対策部）
奥村嗣夫君（京阪電鉄事業計画室）
梶山宗夫君（吉田都市建築研究所）
篠塚宏三君（大阪工業大学工学部）
西尾久雄君（近畿地建工務検査課）
米田芳松君（米田建設工務店）

（総合部門）

石井朝美君（間組）
篠崎一郎君（淺沼組）
巣山繁雄君（戸田建設）
高橋保夫君（錢高組）
野村茂則君（新工務所）
三木敏男君（奥村組）
山田博君（藤木工務店）
原精一君（コーナン建設）
和田眞一君（東和組）

（電気部門）

今村騰君（中央電気工業）
栗原信英君（栗原工業）
山本永造君（ヤマト電気）

（管工部門）

齋藤潁君（三晃空調）
松尾一郎君（菱和調温工業）

（建材部門）

小山年光君（タジマ）
原田孝太郎君（原田セメント化工）

◀支部選出評議員の当選

下記の方々が評議員に当選せられました。

記

東海支部　宮崎辰敬君（宮崎辰五郎建築事務所）
　　森口雅文君（伊藤建築設計事務所）
京都支部　井手正巳君（清和建築設計事務所）
　　神野武司君（山田工務店）

◀'86～7年版日本建築協会会員名簿頒布お知らせ

昨年12月に発行した日本建築協会の会員名簿は、建築界に活躍される会員の現況（出身校・現住所・勤務先・所在地）を紹介するばかりでなく、官公庁、学校、関係諸団体の外、建築事務所・建設業者・建材業者・設備業者その他関係業者の主要なものを業種別に収録しておりますので、日常業務上大いに役立つものとおもわれます。

何卒お買い求め下さるようお願い致します。

記

1．体　　裁　B５判　約270頁　本文上質紙
1．会員特価　2000円（送料共）

◀プロのノウハウ２冊新刊発行予告

〈プロのノウハウ〉シリーズとして、すでに数冊刊行してまいりましたが、来る４月10日には、つぎの２冊が新刊として発行されます。

現場マンのアイデア発想　合原　一夫著　定価￥1,800
建築基準法の実際　矢吹　茂郎著　定価￥1,800

事務局でお求めの場合、定価より￥100割引です。

AR防水

新設防水も改修工事もこれで決まり!!

積層重厚型ケミカルアスファルト常温工法

ケミアスルーフ防水

特　　長

❶無公害で安全
火気を必要とせず、熱溶融や燃焼による悪臭が全く発生しません。

❷厚い丈夫な防水層
通常のシート防水や塗膜防水の３～５倍の厚膜防水層が得られます。

❸ふくれ現象を追放
３成分塗膜ライニング材が下地の水分と吸着反応し、気孔ルーフィング材が通気性能を内蔵する独自のメカニズムを発揮します。



全国エイアール防水工事業協同組合
株式会社 ARセンター

大阪本社　〒553　大阪市福島区福島6－4－11(クリスビル)TEL.451－9091(直通)
東京支店　〒105　東京都港区新橋6－1－1(秀和御成門ビル)TEL.436－1676(直通)
名古屋営業所　〒460　名古屋市中区錦3－7－15(大日本インキビル)TEL.951－3117(直通)
広島営業所　〒730　広島市中区田中町5－9(マルチビル)TEL.249－0911(直通)
福岡営業所　〒810　福岡市中央区天神2-14-8(福岡天神センタービル)TEL.713－1381(直通)

素材の耐水・耐候性を高める
シリコーンゴム皮膜形成コーティング材

水性タイプ **SE1980**

溶剤タイプ **SE5060**

産業への新しい提案とその開発技術がテーマです。

Toray Silicone® **トーレ・シリコーン**

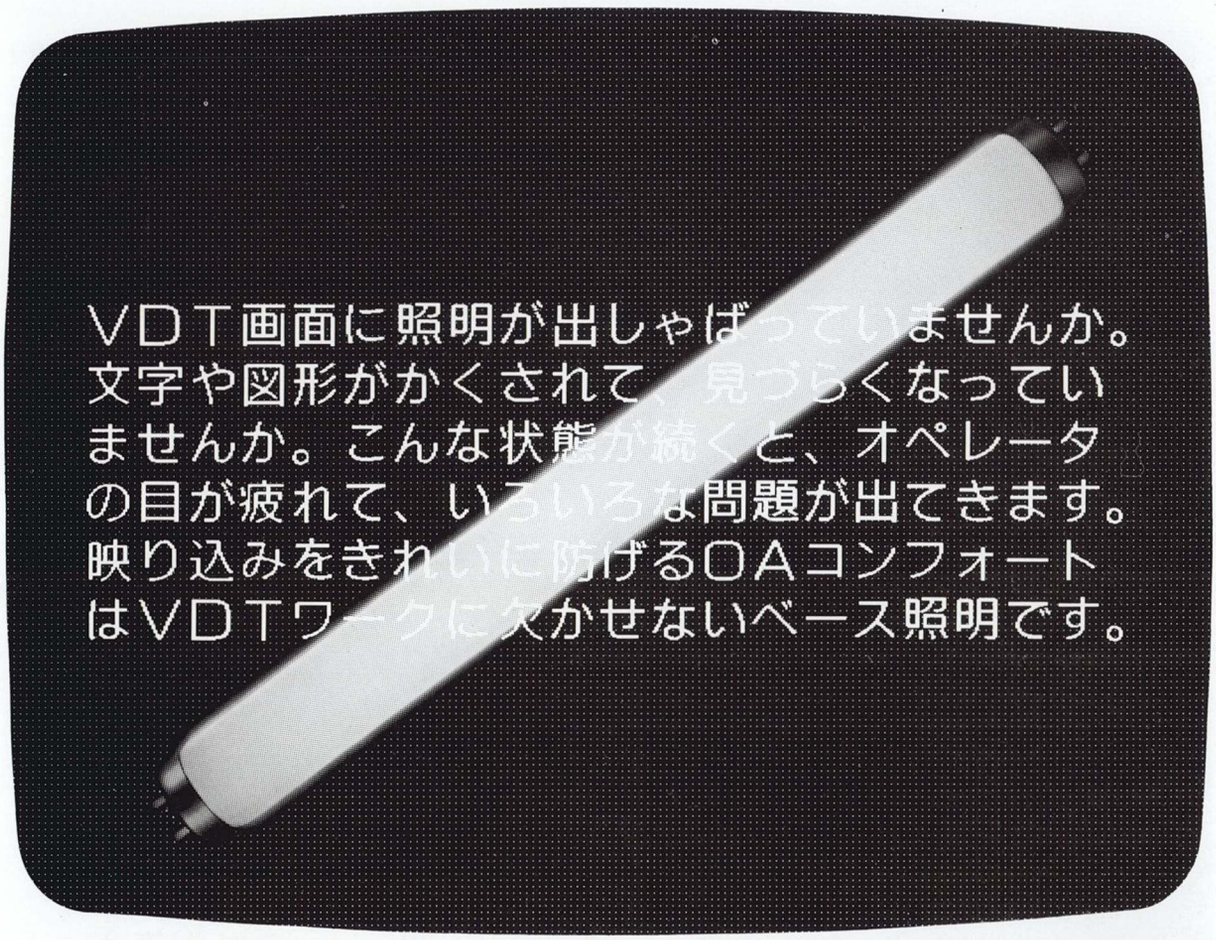
本　　店　TEL　(03)246－1641代表　東京都中央区日本橋室町２－８(三井ビル６号館)
大阪営業部　TEL (06)376－1251代表 大阪市北区芝田１丁目１－４ (阪急ターミナルビル９階)
名古屋営業部　TEL (052)563－3951代表　名古屋市中村区名駅３－25－９　(堀内ビル８階)

※資料請求またはお問合せは上記へお寄せ下さい。

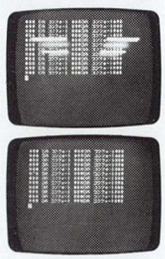
技術で創造する

National
松下電工

あかりが見えると、データが見づらい。



VDT表面に照明が映り込むと、画面の背景と文字のコントラストがなくなり、ひじょうに判読しづらくなります。すると無理をしてでも内容を読みとろうとし、疲れやすくなります。VDT作業用のベース照明には、ランプを隠し反射板の輝度も抑えたOAコンフォートをおすすめします。映り込みが消え、画面の文字や図形がくっきりと見えるようになります。OA専用室に適したCLASS-I、一般事務兼用室に適したCLASS-IIのほか、いまの器具に取り付けるだけで映り込みがなくなるOAフレームなど、多くの品種がそろっています。



一般の下面開放型器具によるひどい映り込みの状態(写真上)がOAコンフォート(CLASS-I)にするとすっきりと解決します。(写真下)。



ナショナル蛍光灯器具
OAコンフォート

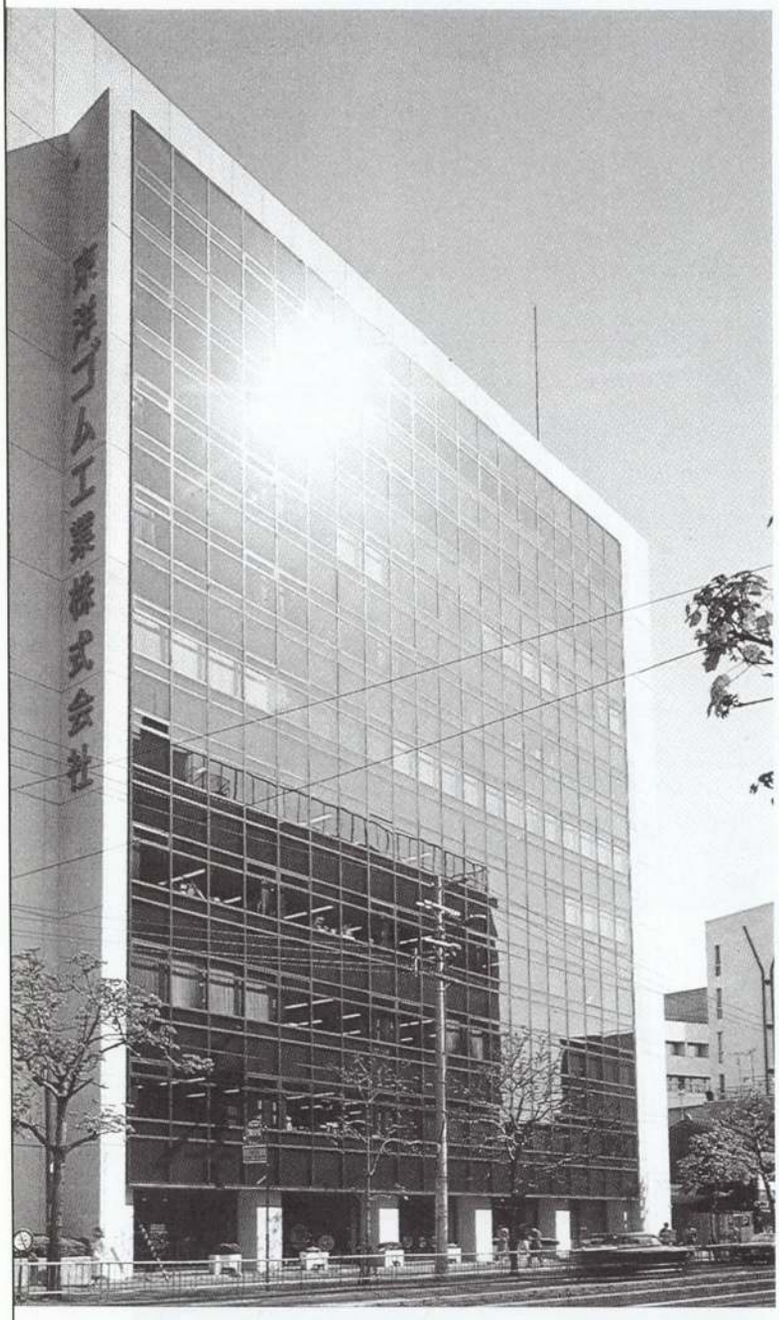


資料を差し上げます。

OAコンフォートのほか、アンダーカーペット配線システム『パナトラック』、オフィスファニチャー『OAパネルシステム』など、トータルに紹介した詳しい資料を差し上げます。〒571 大阪府門真市門真1048 松下電工・電材事業本部 マーケティングOA係 ☎06(908)1131

防水は建物の生命です!!

適所にトーヨーシートの適材をお選び下さい!!



"降水を防ぐ"

このテーマは極めて古くからありますが、現在でも依然として新しいテーマであります。トーヨーシートエキストラは発売以来、着実に実績をあげ評価をたかめてまいりました。

EPTトーヨーシート エキストラ

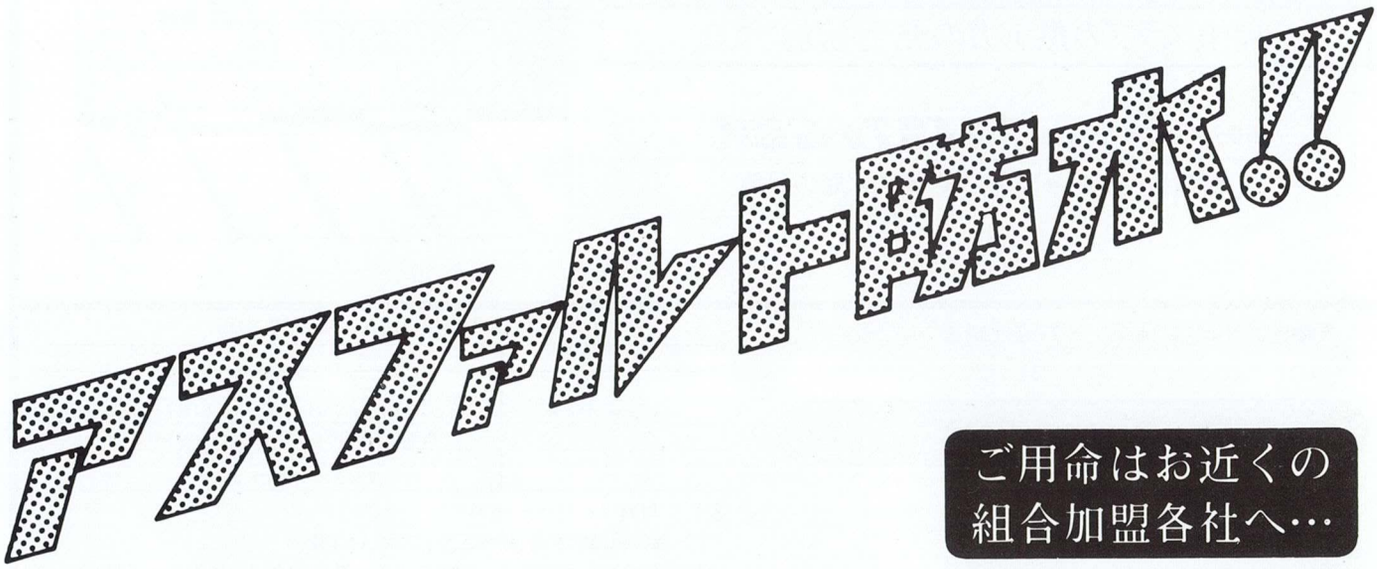
- ●TS—4———発泡層付シート
- ●TS—WA———軽歩行用カラーシート
- ●TS—カラー——非歩行用カラーシート
- ●TS—2W———フクレ対策用シート
- ●TS—SF———難燃シート
- ●TS—DPE——断熱層付シート

その他各種有ります

TOYO 東洋ゴム工業株式会社 防水販売部

〒065 札幌市東区北２６条東１—７７８ ☎011-721-1711
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷４—24—15 ☎ 03-404-1251
〒460 名古屋市中区伊勢山 １ — １ — ９ ☎052-332-0818
〒550 大阪市西区江戸堀１—17—８ ☎ 06-441-8801
〒810 福岡市中央区警固１—１—８ ☎092-761-6292

信頼の大きさ……
……東亜アスの技術です



ご用命はお近くの
組合加盟各社へ…

（建設省計振発第55号認可）

東亜アスファルト防水事業協同組合

〒581 大阪府八尾市南太子堂6-4-27 ☎(0729)91—1536

■関東・東北・信越

興洋産業㈱東京営業所	☎(03)969-2521
㈱森鉄	☎(0425)22-5730
㈲朝霞防水工業	☎(0484)66-0326

■中部・北陸

㈱木村物産	☎(052)262-7541
興洋産業㈱名古屋出張所	☎(052)991-4855
川内防水㈱	☎(0564)21-8171
㈱岩城工務店	☎(0762)41-4343
北国防水工業センター	☎(0762)29-2205
㈱赤矢商事	☎(0764)25-6900
北陸防水工業㈱	☎(0766)24-2330
㈱刀禰	☎(07784)3-0751

■近畿・中国・四国

㈱長谷建材店	☎(06)671-1952
㈱渡辺アスファルト商店	☎(06)211-2166
㈱タツミ防水技研	☎(06)912-8634
相互瀝青工業㈱	☎(06)353-4506
㈱中川防水工業所	☎(06)714-2312
㈱村井工業所	☎(06)757-1725
丸星工業㈱	☎(06)462-2288
㈱マスダ防水工事店	☎(06)418-3577
富士アスファルト販売㈱	☎(06)441-5195
三浦興業㈱	☎(06)793-7602
ミキアスファルト工業㈱	☎(06)908-6038
城南建材㈱	☎(06)972-2906
㈱光防水商会	☎(06)393-7877
森国商工	☎(06)471-9909
初阪建工	☎(078)521-1953
岡防水工業	☎(078)753-0302
山陽建材工事㈱	☎(078)881-8841
川内防水㈱	☎(0720)81-4513
玉木興産㈱	☎(0720)84-5131
横井工業所	☎(0724)31-0261
富士防水工業㈱	☎(0727)81-2480
衣笠防水工業所	☎(0729)87-0921
山中施エコンサルタント	☎(0742)33-2921
興洋産業㈱	☎(0734)55-1166
福井綜建㈱	☎(0792)97-5017
山陰防水工業㈱	☎(07966)2-3561
丸福建材工業㈱	☎(082)232-6155
日化工材㈱	☎(0862)25-2021
朝日産業㈱	☎(0888)33-2100

■九州・沖縄

東亜興業㈲	☎(092)531-4701
㈲高尾防水工業所	☎(093)481-3638
サカタ工業㈱	☎(0956)31-7027
㈱南防	☎(0992)52-0432
ワールド産業㈱	☎(09889)7-4309

以上 順不同

（東亜印ルーフィング）

東亜工業株式会社

本社 〒581 大阪府八尾市南太子堂6-4-27 ☎(0729)94—5682
営業所 東京・名古屋 工場 大阪・東京・和歌山

建築工事共通使用書の改定にともなって、使用する断熱材の規格が新らたに指定されました。

躯体保護にすぐれた外側断熱工法

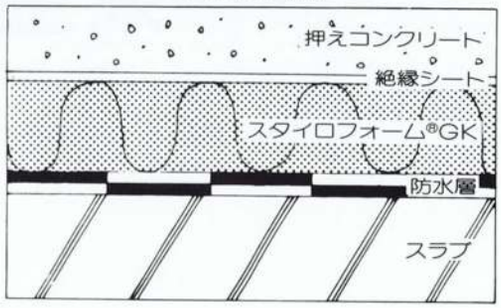
スタイロ防水®

屋根スラブの熱応力の発生を防止する

屋根外断熱工事用断熱材 **スタイロフォーム®GK**

●躯体の保護 ●防暑効果 ●防水層の保護

USD工法



表❶昭和60年版"建築工事共通仕様書"より抜粋

9章 防 水 工 事

1節 アスファルト防水

9.1.1 種別

アスファルト防水層は、9.1.1表～9.1.6表により、種別は特記による。(9.1.1表及び9.1.3表～9.1.6表省略)

9.1.2表 屋根保護防水層(断熱工法)

種 別	A1－1	A1－2
工 程	材料、工法	材料、工法
アスファルト防水層	9.1.1表A－1による	9.1.1表A－2による
1	断熱材(最終工程のアスファルトによるはけ塗り)	
2	アスファルトフェルト アスファルト線付け張り(kg/m²)	

9.1.2 材料 (a)～(h)省略

(i) 屋根保護防水層(断熱工法)に用いる材料

(1)断熱材の材質及び厚さは特記による。特記がなければJIS A9511(ポリスチレンフォーム保温材)の規格品とし、種類はB類(押出法ポリスチレンフォーム)3種とする。

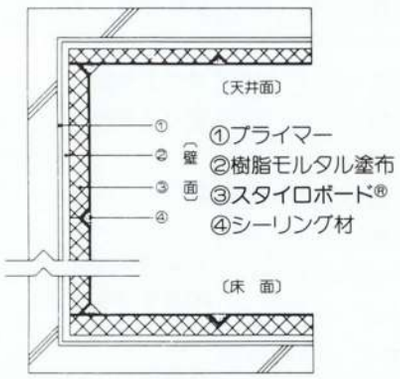
(2)、(3)省略

スタイロボード®

省エネルギー蓄熱槽用

断熱材、内面防湿材、仕上材の3役を同時にこなす、理想の蓄熱槽用断熱パネル

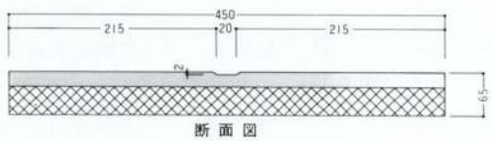
●省力・スピード施工
●安定した品質
●優れた目地部処理
●一貫した作業体制



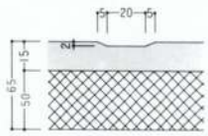
スタイロガード★

理想の屋上外側断熱用パネル

●軽くて、安全、構造上大変有利です。
●作業の簡素化、短縮化を実現します。
●すぐれた断熱性能と防露効果抜群。
●良好な仕上り。 ●便利なメンテナンスフリー。
●優れた耐久性



断面図



断面詳細図

理想の環境づくりへ。自然とのよりよい調和をめざす。

DOW ダウ化工

■東 京 本 社 〒105 東京都港区虎ノ門一丁目6番12号 住友虎ノ門ビル ☎ 03-502-5521
■大 阪 事 務 所 〒530 大阪市北区太融寺町3番24号 日本生命梅田第二ビル ☎ 06-315-9541
■名古屋営業所 〒450 名古屋市中村区名駅3-16-22 名古屋ダイヤビル ☎052-581-8711
■福 岡 営 業 所 〒810 福 岡 市 中 央 区 天 神 4-1-7 第3明星ビル ☎092-714-7250



バランスのよい材料構成が防水性能を決定！

ビニガードルーフ®

㊐日本工業規格表示許可　許可番号384129日本工業規格番号 JIS A 6009

日進月歩の建築技術をオカモト(株)の優れた製品開発により、もう一歩前進。
どんな下地にも、完全に対応する優れた機能性。

何故ビニガードルーフ(VGR)なのか

建設省監修昭和60年度版「建築工事共通仕様書」において、ルーフィングはJIS A 6008（合成高分子ルーフィング）およびJIS A 6009（基布その他を積層した合成高分子ルーフィング）により、特記製造所の製品とすることになりました。

ビニガードルーフは、永年にわたる研究と過去に蓄積されたすべての経体験をもとにして、塩化ビニル樹脂基材の特性と優れた数々の特徴を選択して特殊な配合と製法に工夫をこらし3層の層によって複合性を高め高性能ルーフィングとして優れた防水性、耐候性、耐摩耗性、耐老化性、耐熱・耐寒性、耐薬品性などを充分に備え、さらに仕上材としてカラフルな色彩によって建築物を保護しながら、美しく美観性にも優れ、建物の附加価値を高めます。長年にわたりこれらの諸性能が認知され、広く多く採用使用されるようになりました。

〈長所〉

- ●電気特性：絶縁性に非常に優れています。
- ●耐薬品性：酸、アルカリなどの無機薬品にはまったくおかされず、有機薬品への抵抗性は非常に高性能を示します。
- ●耐 火 性：難燃性です。(自己消火性)
- ●防水性透湿率：吸水率も非常に低く、耐水性は抜群です。
- ●耐摩耗性：引き裂き強度、引張り強度、耐圧縮性にも優れているため、外圧に対して強靱な抵抗力を示し、長時間にわたる歩行、防水性機能をいかんなく発揮することが可能なビニガードルーフ（VGL）製品ですから安心してご使用頂けます。

(他の防水工法には見られない数々のメリット。)

1. 防水性能の確かさ（下地にフィット）
2. 優れた耐候性(寒冷地にも最適)
3. 建物の軽量化(施工の単純性)
4. 歩行可能で屋上の利用
5. オープン工法
   (メンテナンスフリー施工の単純化、工期短縮)
6. コスト軽減(経済性に優れています。)
7. 色彩選択の豊富さ
   (5色と特注により無限に近い色合わせ可能)

ビニガードルーフ規格寸法

規格 ＼ 品名	ビニガードルーフ OR JIS A 6009	ビニガードルーフ SR JIS A 6008
厚さ (mm)	2 ± 0.1	2 ± 0.1
巾 (mm)	1,800	1,200
長さ (m)	18	10
重量 (kg/m²)	2.9/m² ±10%	2.9/m² ±10%
使用個所	歩行用	歩行用
色	5色 No.1 ベージュ No.2 若草色 No.3 グレー No.4 茶色 No.5 グリーン	5色 No.1 ベージュ No.2 若草色 No.3 グレー No.4 茶色 No.5 グリーン
補強材	布つき	なし

——工期短縮の至上命令にお応えする——

タイセイ商工株式会社

本社営業部　埼玉県川口市弥平3－8－20　〒332　TEL0482(24)6811(代表)　ファックス 0482(23)4880

大阪営業所　東大阪市今米437－1　〒578　TEL0729(63)6355(代表)

福岡営業所　福岡市博多区光丘町1－1－43　〒816　TEL092(573)1226(代表)

仙台営業所　仙台市八木山香澄町3－43　〒982　TEL0222(29)6414(代表)

札幌出張所　札幌市白石区北郷三条2－7－13　〒003　TEL011(872)3336(代表)

屋根外断熱兼用複合シート防水材——

日立バイナリーシートP

——優れた材料と確かな施工で信頼防水を!!

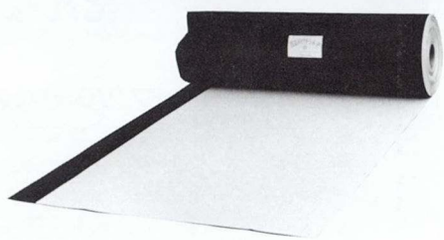


▲宇治市民文化センター(京都府)

●日立バイナリーシートPとは……

日立防水シート（JIS A6008)と外断熱材（発泡ポリエチレン）を、昭和53年から日立独自の特殊技術によって積層一体化した、わが国で最初の複合防水ゴムシートです。

〈用途〉 ①屋根外断熱用露出防水工事　②屋根改修用防水工事



特長

①外断熱による省エネ、結露防水がはかれる。

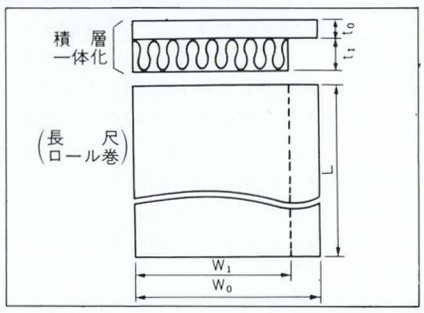
②防水シートと発泡ポリエチレンの複合によって二重防水効果がある。

③積層一体化なので、表面ふくれの心配がなく外観仕上りがきれい。

④防水シートと外断熱材の別貼り手数が省け、さらに下地への片面接着が可能なので施工迅速かつ能率的である。

⑤発泡ポリエチレンが下地調整材にもなるので、改修防水工事などにも適している。

形状とサイズ



標準サイズ

※断熱材の厚さは他サイズ(2.5、15、20、25、30mm)も積層可能です。

略号	日立防水シート 厚さ(mm) to	日立防水シート 幅(m) Wo	断熱材(発泡ポリエチレン)※ 厚さ(mm) t1	断熱材(発泡ポリエチレン)※ 幅(m) W1	断熱材(発泡ポリエチレン)※ 発泡倍率	長さL (m)	〔参考〕重量 (kg/本)
BSP1.0-3004	1.0	1.2	4.0	1.1	30	20	30
BSP1.2-3004	1.2						34
BSP1.0-3010	1.0		10.0			15	25
BSP1.2-3010	1.2						29

日立電線株式會社 ゴム事業部

本　社　東京都千代田区丸の内2-1-2(千代田ビル) ☎03(216)1011(大代)
関西支店　大阪市東区北浜4－6（日生日立ビル) ☎06(203)3821（代)

九州 ☎092(751)6331(代)　茨城 ☎0294(24)4821　北陸 ☎0764(23)2181(代)
中部 ☎052(551)4111～4　北海道☎011(241)8024(代)　四国 ☎0878(33)8661(代)
中国 ☎082(221)2481(代)　東北 ☎0222(24)5711(代)

関西日立防水シート工業会

事務局 〒550 大阪市西区京町堀2－10－25
三国商事㈱大阪支店 ☎06(443)1161

新時代の防水工法

ゴムアスファルト・トーチ工法

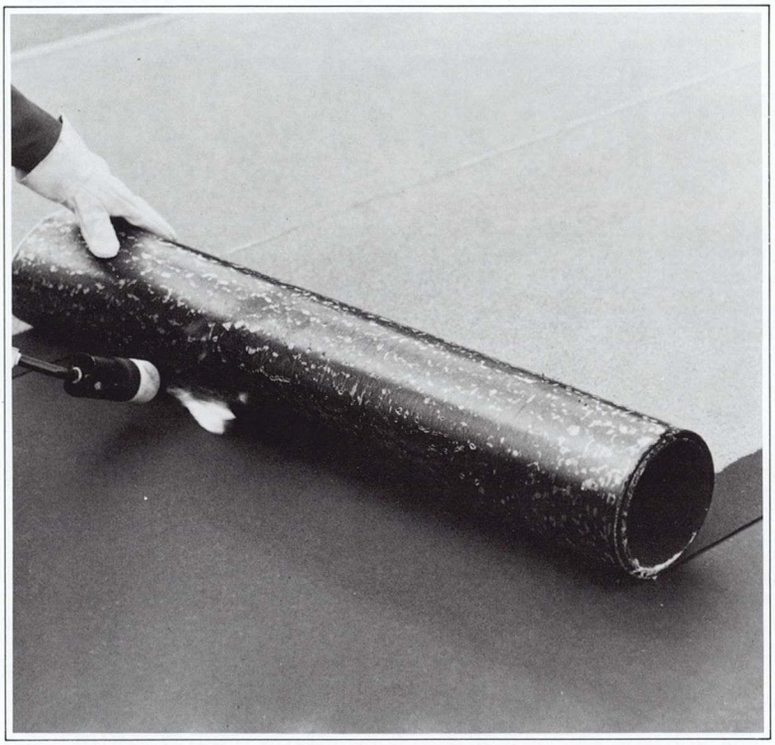
メルタン21

★メルタン21はトーチ工法によるシングルプライの防水工法です。

★メルタン21の材質は補強基材に高性能の《合成ゴムで改質されたゴムアスファルト》を加工した重厚なルーフィング材です。

★メルタン21防水工法は高品位の材料による省力タイプの新時代の工法です。

メルタン21の特長



●ジョイントの信頼性

熱融着工法による完全一体化で継目解消

●破断抵抗性

合成繊維の不織布と織布の複合補強基材および柔弾性を有するゴムアスファルトが下地の動きに追従

●耐久・耐候性

ゴムアスファルトのハイテク素材を採用し、低温から高温までコンパウンドの硬化・ひび割れ・だれを排除、重厚型で耐用年数の向上

●外傷抵抗性

厚さがあるため外傷に強く押え工法にも最適

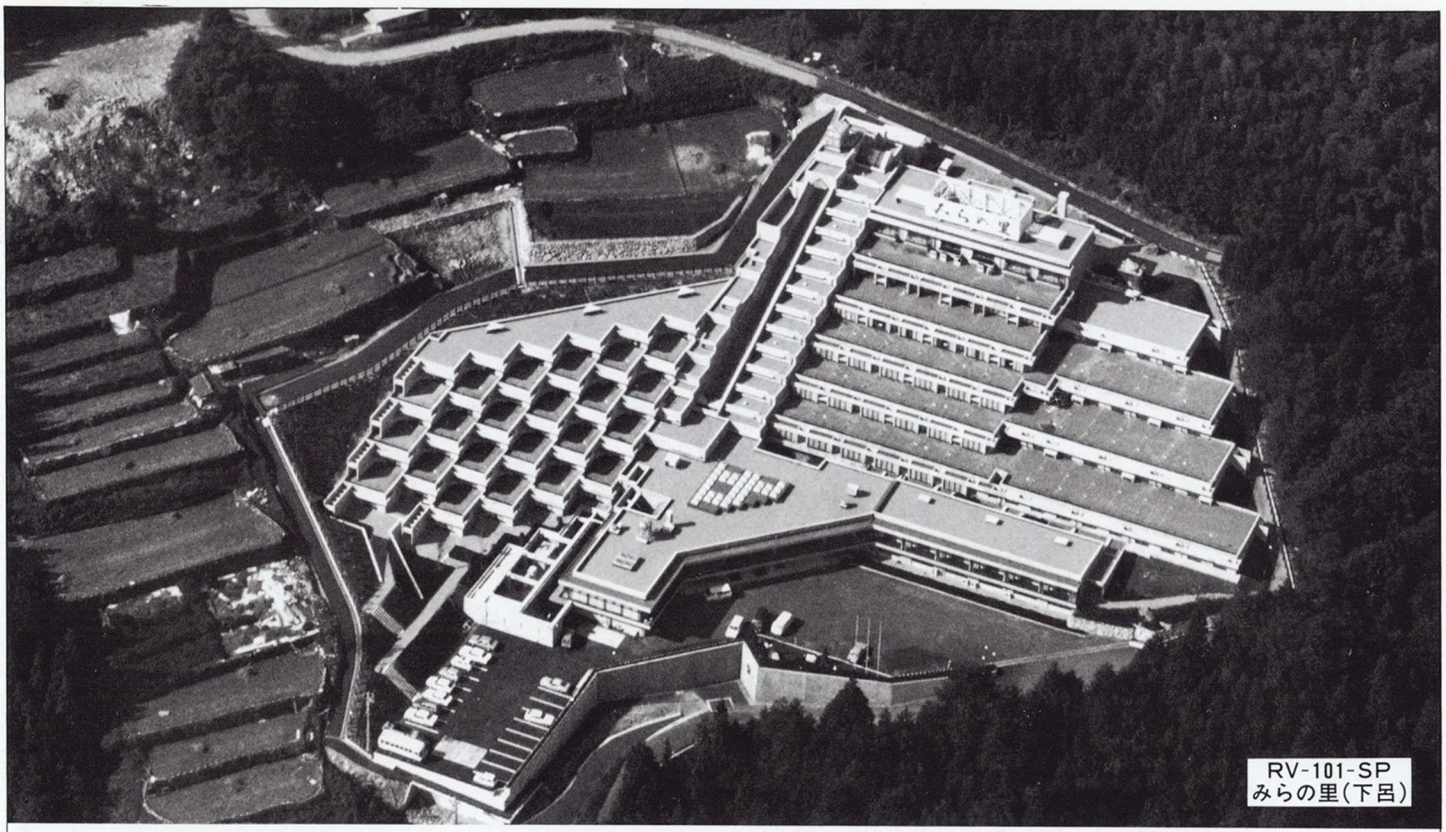
●施工の省力化・工期の短縮

トーチ工法（熱融着工法）は一人で施工でき、アスファルト溶融釜不用

マルエス S 日新

日新工業株式会社

本社・東京営業所■120／東京都足立区千住東2-23-4—☎03(882)2424(大代表)
大阪支店■550／大阪市西区新町1-12-22—☎06(533)3191(代表)
九州営業所 ☎092(451)1095(代表)　仙台出張所 ☎0222(63)0315(代表)
名古屋営業所 ☎052(741)6257(代表)　埼玉工場 ☎0487(54)4151(代表)
札幌営業所 ☎011(281)6328(代表)　山形工場 ☎0236(43)0437(代表)
広島出張所 ☎082(221)1019(代表)　北海道工場 ☎01267(2)4773(代表)



シート防水の主流

三ツ星ベルトの

ネオ・ルーフィング

ネオ・ルーフィングE〔加硫ゴム（EPDM）系建築用シート防水材〕
JIS規格A 6008（合成高分子ルーフィング）の加硫ゴム系に合格した製品です。
（JIS表示許可番号：474061）21年の実績があります。

ネオ・ルーフィングSPE〔ふくれ防止機能付加防水材〕
JIS規格に合格した加硫ゴムシートに4.0㎜厚のシボ付発泡ポリエチレン(登録実用新案第1277835号）を積層した防水シートです。シートのふくれ防止効果があり、特に改修工法に適しています。

ネオ・ルーフィングGA-C〔ＳＡ工法用ゴム化アスファルト防水材〕
溶融アスファルトの熱で下地、シートと接着する特殊配合の感温層を積層したゴム化アスファルト防水材です。熱アスファルトを併用する「ＳＡ工法」用の材料です。

ネオ・ルーフィングSシリーズ〔ＳＳ工法用ゴム化アスファルト防水材〕
熱アスファルトを使用しない常温積層工法「ＳＳ工法」用のゴム化アスファルト防水材です。役割の異なる上層材と下層材の二層構造で機能を分担させています。

信頼のマーク

三ツ星

三ツ星ベルト株式会社 建材事業部

本社／神戸市長田区浜添通4丁目1番21号　☎(078)671－5071
東京(03)865-2217/大阪(06)448-6356/名古屋(052)242-1127/福岡(092)441-4451
札幌(011)841-9131/仙台(0236)39-6551/広島(082)286-0608/四国(0879)42-3189

表紙デザイン●吉田隆一
（東畑建築事務所）

ニューハウン　コペンハーゲンと対岸のスエーデンを結ぶ連絡船の桟橋がある賑やかな港町で、運河に沿った家並みは18世紀頃のものが多いそうです。アンデルセンもここの南通りに住んで、童話を書いたと言います。

1917創刊
1986
第67集
建築と社会 © ARCHITECTURE AND SOCIETY
CONTENTS
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

3 通巻768

特集●現代デザイン—ポストモダニズム10年—
●これからの防水工法

SPECIAL FEATURES ON THE POST-MODERNISM
SPECIAL FEATURES ON WATERPROOFING

会告
香港上海銀行新本社ビル—16mmとスライド映写会—．監事並びに本部所属評議員の当選．支部選出評議員の当選．'86～7年版日本建築協会会員名簿頒布お知らせ．プロのノウハウ2冊新刊発行予告——— 1

作品作風
レナウン新町別館——設計監理：日建設計／大阪本社　施工：大林組— 12
サンマリーンながの——設計監理：大建設計　施工：前田建設工業・北信土建建設共同企業体— 16
浜坂町庁舎——設計監理：東畑建築事務所　施工：鹿島・株本・オザキ建設特別共同企業体— 20
POCKET PARK やんぐ・すくえあ— 22
最近竣工した新建築9点(No.1927～1935)— 25
岡澤雄次郎(裂地)／開き手・堀畑裕一— 27
東孝光(大阪大学教授)氏を訪ねる／インタビュア・西川純一— 29
読書の楽しさを味わう—海野弘著「モダン都市周遊」／太田隆信．新刊寸評— 30
建築・プロ・アマ？／渡辺豊和— 31
私はこう思う—女性会員の声—〝主夫の目〟で台所づくりを！／馬場昌子．建築界で働いて／吉村智子．女性の進出分野は増えたけれど／杉本章子．建築の中のやすらぎ／河戸満喜子．日常雑感／高橋昭子— 33
アメリカ、カナダの主要都市における容積移転制度／寺田恭信— 35
浸透型・吸水防止剤「アクアシール」／尾松一夫— 36
受託試験における鉄筋コンクリート用異形棒鋼の引張及び曲げ試験に関する調査報告— 37
住環境維持のソフトウエア(その1)—分譲住宅における住宅管理組合の結成—／岡崎憲一・坂下貞次— 38
建築と身体感覚／東孝光．都市の美観を考える(その3)／山田耕蔵
新しい盛り場への試み／高田昇．建築業界の現況とこれから／井上司郎— 42

Gallery—まち・建築・ひとスケッチブック
この人
設計者のプロフィール
書評
私が読んだ本
読者の頁

法令コーナー214
新建材紹介コーナー
日本建築総合試験所だより
すまいづくり講座19
建築の眼

特集
1
2
アンケート

現代デザイン—ポストモダニズム10年—

芸術史・デザイン史におけるモダンとポスト・モダン——阿部公正— 44
ポスト・モダンと日本の伝統—末期的近代の動向———向井正也— 49
ポストモダニズム10年—私とポスト・モダン— 54
梅澤修／赤坂一之／岡山伸也／栄久庵祥二／岡田稔弘／太田博信＋4／駒田楊子／有村桂子／難波和彦／池上俊郎／林昌二／岡橋作太郎／久徳敏治／鈴木良介／紙野桂人／柴田正己／佐野潤一／鷲見康夫／北辻良央／江田修司／上野千鶴子

3
資料

ポスト・モダンのジャーナリズム—ジャーナリストの立場から——松葉一清— 66
ポスト・モダンとその周辺(1967～1985)— 68
a＋u／建築文化／SD／JAPAN INTERIOR DESIGN／美術手帖／各種雑誌
「ポストモダニズム10年」—編集を終えて— 73

あとがき

特集

これからの防水工法

総論
防水の歴史とJASS8制改定の経緯——小池迪夫— 76
リフォームと防水
屋上防水の改修——辺見　仁— 82
1.メンブレン防水
最近のアスファルト防水の動向——斉藤彪／荒木孝— 84
塗膜防水——伊藤松夫— 86
シート防水工法の動向——藤木俊昭— 87
2.シーリング防水
シーリング防水の現状と今後の課題——操上弘昌— 88
3.外壁防水
外壁塗膜防水——永井健太郎— 89
4.特殊防水
ステンレスシート防水——高橋行雄— 90

構造の頁135
施工材料の頁136
設備の頁137
月報
香港上海銀行新本店ビルの構造／丸岡義臣— 103
無足場工法／駒形康雄— 105
氷蓄熱空調システム／市橋隆— 106
日本建築協会月間の動き(昭和61年1月分)— 107

■特集予告
4月号／インテリジェントビルの建築・設備計画
5月号／大阪市庁舎(第2期)／官庁営繕と公共建築
6月号／建築防災と法

会　長　佐野正一
副会長　足立　孝・市川　宏
松村雄二・薬袋公明
編集委員会（昭和60年度）
編集委員長　◎井上　滉
編集理事　井上　滉／今井潤之介／金井　弘次／金多　潔／木内　清三／竹中　臻一／武田　恭一／長谷部明郎／松村　慶三／渡辺　忠
編集委員
（特集小委員会）
■計画分科会　足立　啓／岡田　信幸／奥村　礼子／金澤　成保／杉本　章子／田附　尚／＊田中　直人／中山　徹／藤田　治彦／舟橋　國男／本多　友常／山根　勝利
■構造分科会　日下部　馨／阪本　隆敏／田中　茂樹／西田　理／＊真塚　達夫／保野　博／山田　裕治
■設備分科会　磯田　憲生／＊遠藤　進／加賀和郎久男／柿内　隆雄／川戸　敏雄／河津　隆之／久須美高朗／中尾　信之／秦　學
■施工材料分科会　荒木　弘之／田中　光紀／西牧　忠吉／前田　松和／＊水口　譲／横井　征夫
■法令分科会　押川　兼宏／＊広江　雅樹／松田　洋三／南出　和延
（投稿増小委員会）　赤井　富弘／伊藤　郁郎／小林　正純／○中馬　博良／永原　守／堀畑　裕一
（作品作風小委員会）　荒川　朱美／浦山　哲／大泉　研二／小椋　豊久／加藤　俊明／菊池　稔／○北村　恭一／里川　省二／浜崎　彰／松村　孝治／湯地　龍一
（広告企画小委員会）　○伊藤　敬祐／池渕　俊男／大墨　正／木原　幹雄／北村　潤／嶋田　聖二／中井　進／原田　常介／平等　一之／広田　和正／藤田　孝吉／山下　修司／⊗吉田　健次／○渡辺　忠
○副委員長　⊗副委員長代行　＊幹事

編集人　松井昭光
印刷　昭和61年3月20日
発行　昭和61年3月25日
発行人　吉田悦二
発行所　（社）日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　06－348－0635
振替口座　大阪1-39975
印刷所　日本写植印刷株式会社
電　06－606－1111㈹
大信印刷株式会社
電　06－451－7631
定価　950円（送料共）

レナウン新町別館

設計監理　日建設計／大阪本社
施　　工　大林組



夜明けに北西外観を見る



外装仕上　45×95施釉磁器モザイクタイル貼、アルミカーテンウォール、アルミ連窓サッシュ　北東外観

所 在 地　大阪市西区新町３－１－26
敷地面積　5,610㎡
建築面積　3,200㎡
延床面積　25,500㎡
構造規模　ＳＲＣ、Ｂ１、８Ｆ、Ｐ２
工　　期　昭和58年10月～昭和60年11月
最 寄 駅　地下鉄四ツ橋駅、西長堀駅、阿波座駅

この建物は、アパレルの多様種、多品目のファッション商品を短サイクルで継続的に陳列して、百貨店、チェーンストア、専門店の専門業者と商談を行う自社専用の本格的な商品展示場ビルである。レナウンの最重要かつ最先端の商品販売の拠点である。

建物が道路に接する三辺に、それぞれ10ｍ以上の空間を確保した。これは近隣との良好な環境を維持するだけでなく、その北側緑地には特に緑を豊富にして、隣接建物の緑や、公園の緑を帯状に連ねて「街の緑の景観」を特に留意した。建物の外観は、ファッションのレナウンにふさわしく、シャープで瀟洒な表情を心がけた。

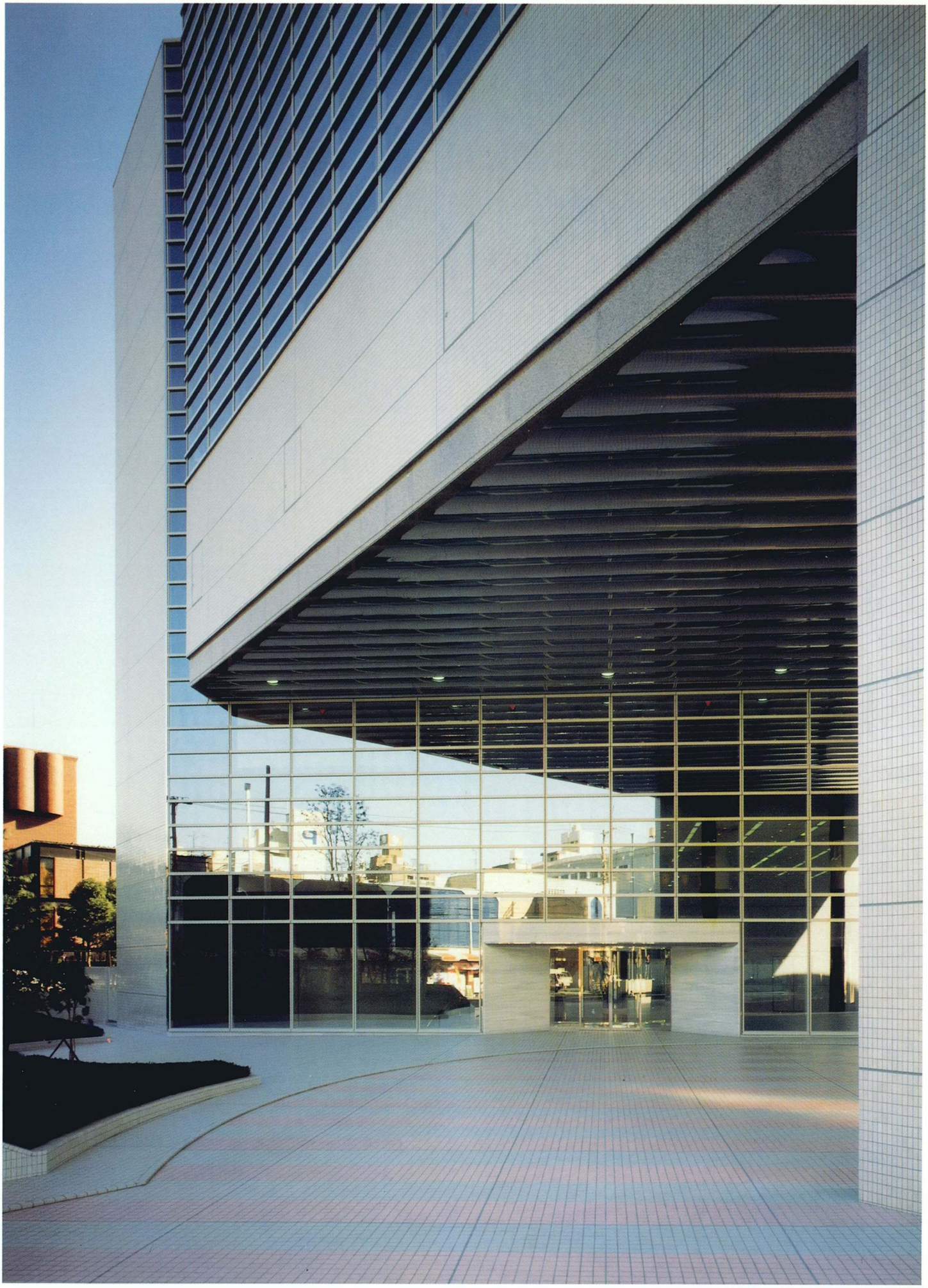
建物の主役である商品展示場は４層あって、延10,000㎡を占める。１階には 400 ㎡の円形特別展示場がある。ファッションショーを軸に、集会等多目的に利用される。これには昇降舞台装置、音響、照明の制御室をもち、展示内容によって、室空間を調節できる可動天井をもつ。

更に特徴としては、顧客のための立体駐車場４基を含む 200台の大規模な駐車設備をビルドインしている。

多様種、小ロットの大量の商品見本の搬入ルート、アパレルデザインの発注ルート、大量の展示機材の搬出入、組立、撤去ルート等、分化された多くの機能を単純な平面で解決している。

アパレルファッションの展示場は、単に展示空間があればよいというものではない。短期間に変化する展示装置の取り付け易さ、基調照明の変化、附加照明の取り付け位置とその明るさの任意性が要求される。一般に床及び壁、柱に電源及び展示固定装置を設けるが、これは歩行及び壁面展示に著るしく障害する。ここでは10,000㎡の天井全面に、 1.3ｍ間隔に電源ダクトと装置取り付け特殊ハンガを考案し、簡潔な形で設備している。今までの天井材によくある 100㎜角ルーバー天井では、時に天井内部が見えたり、天井面がうす暗く感じ、楽しい繊細な商品には不似合いである。アパレル商品はソフトで綺麗な天井を好む。展示場は、主役の商品の『よき装置』でなければならない。

（黄　進興／日建設計）



正面入口

撮影　河野 豊　三宅信吾



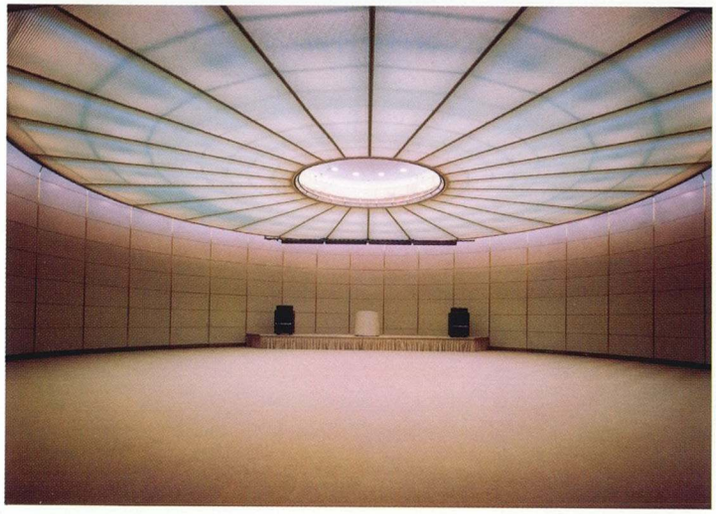
1階ラウンジ



ピロティ



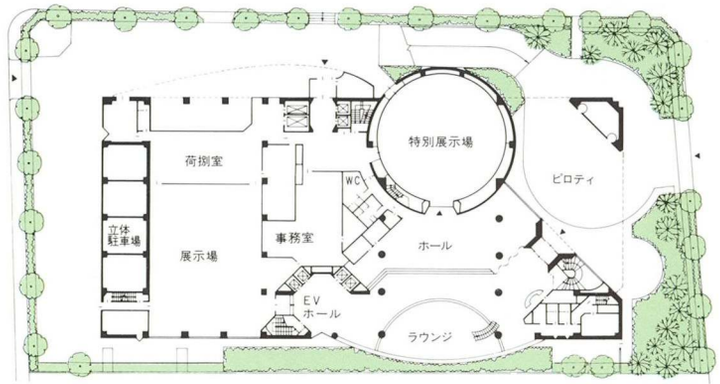
ファッションショー風景



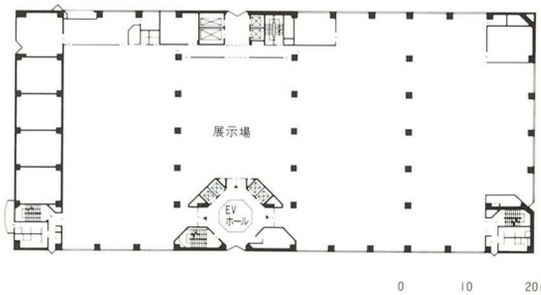
1階円形特別展示場



商品展示場



1階配置・平面図



基準階平面図

サンマリーンながの

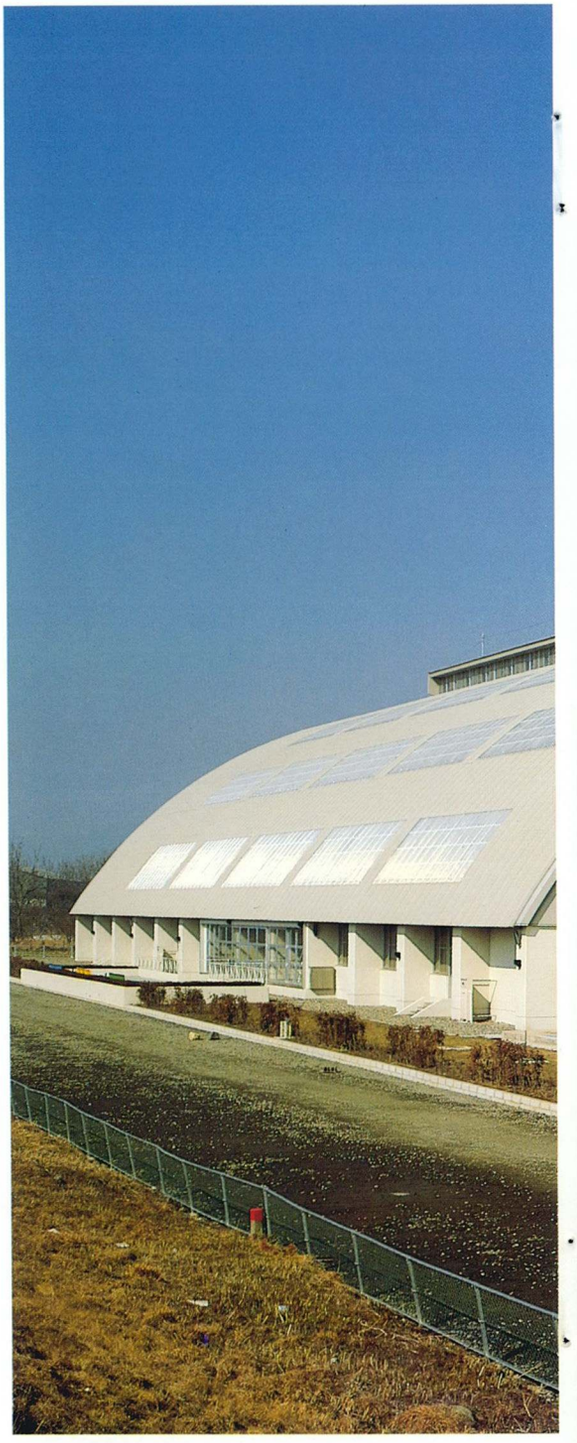
設計監理　大建設計
施　　工　前田建設工業・北信土建建設共同企業体



外観夕景



上空より



サンマリーンながのは、その名が示すように、海をもたない長野に太陽に輝く海を！の思いがこめられたもので、長野市清掃工場の余熱を利用した総合レクリエーション施設です。この海へのあこがれは老人から子供までみんなが四季を通じて明るい太陽の下で共に泳ぎ、木陰で憩い、語るという南太平洋に浮かぶ島々の海浜の原風景であり、計画にあたりそのまま本施設の基本コンセプトとして設定されました。具体的にはメイン施設であるプール棟のスペースデザインに具現化しました。建築計画上では、大屋根に可能な限りの自然採光面を確保し基本的には人工照明なしでも充分明るい太陽の日ざしを取り入れることが出来るよう配慮しました。また内部は海辺を思い起こさせるような広がりと開放性のある大空間のスケールを求めたのに対し、設備計画上では逆に極力プール棟の建物高さを低くし気積を押え厳冬期の暖房負荷の軽減化を図るという技術的に相反する性能要求に留意し、構造計画を進め、安全性、経済性、美観、雪対策等の諸々の要因を考え、鉄骨鋼管トラスドームによる大架構方式が決定されました。

所 在 地　長野市大字大豆島字川端向8585－65
敷地面積　17,928㎡
建築面積　 6,358㎡
延床面積　 8,695㎡
構造規模　S、RC、B1、3F
工　　期　昭和59年6月～昭和60年10月
最 寄 駅　国鉄信越本線長野駅



全景

プール棟の内部施設計画にあっては、特に幅広い年齢層の方々が参加し利用出来る造波プールをはじめ6種類のバラエティーに富んだ温水プールとスライダー、監視台を兼ねた灯台、床暖房されたプールサイド、サウナ気泡浴等のあるクワコーナー、また珍しい亜熱帯植物群と岩組等トロピカルなイメージづくりや、1522年マゼランが世界一周をした船「ビクトリア号」を模した帆船（その甲板は各種イベント時にはステージとして利用される）、イースター島のモアイ像、ナスカの地上絵等、歴史上の遺跡とミステリーの演出など意外性のある雰囲気づくりに留意しました。

一方、管理棟の施設計画ではくつろげるアットホームな施設づくりを基本に、大広間、和室、食堂、飲食コーナー、浴室等家族単位から団体まで楽しく利用出来るよう配慮しました。

また本施設の全体熱源としての余熱供給施設計画では小規模発電施設のタービン排気（超低圧蒸気）を駆使しヒートポンプの併用により冷却水熱を回収して熱供給するもので、先鞭的な廃熱利用システムとなっています。　（植松武彦／大建設計）

撮影　ミヤガワ



自然採光豊かな開放的プール棟内部



いろいろな種類のプールがある



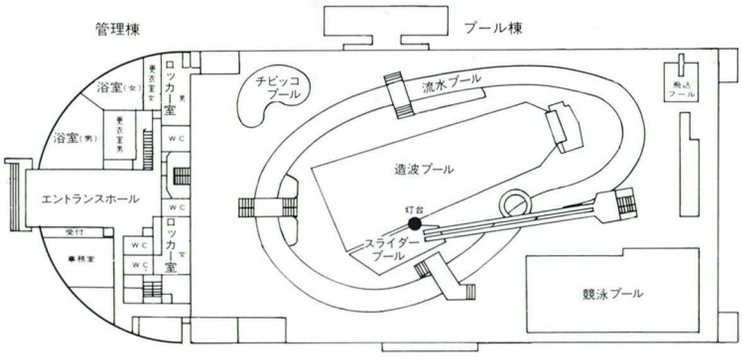
エントランスホール



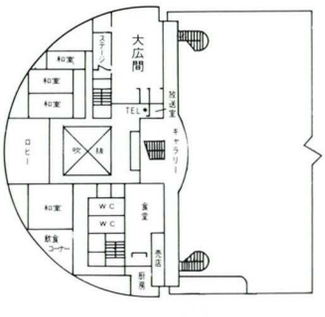
2階大広間



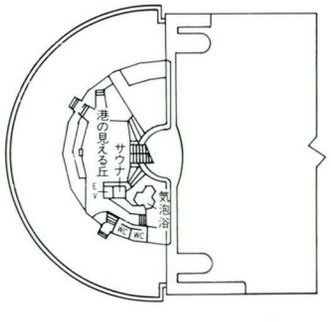
3階気泡浴とサウナ



1階



2階



3階

浜坂町庁舎

設計監理　東畑建築事務所
施　　工　鹿島・株本・オザキ建設特別共同企業体



遠景(左は多目的集会施設)



近景



コロネード

所 在 地　兵庫県美方郡浜坂町浜坂2673－1
敷地面積　3,803.86㎡
建築面積　1,808.85㎡
延床面積　3,227.48㎡
構造規模　ＲＣ(一部Ｓ)、３Ｆ
工　　期　昭和59年11月～昭和60年10月
最 寄 駅　国鉄山陰本線浜坂駅

兵庫県といえど、文化圏的には鳥取の範囲に入る浜坂町の庁舎である。日本海に面した人口12,000人の素朴な町であるが、新庁舎建設に際して投入されたエネルギーは膨大で、我々にも町の方々の熱意がひしひしと伝わり、心地良い緊張感のもとで設計作業が進められていった。

従来庁舎といえば、その地域におけるシンボル性、コミュニティ性、機能性等に言及されてきたが、結果としてできた建物は何故か画一的な様相を呈している。

ここでは、風土により抽出される要素をとり込み、全ての事項はいったん〝浜坂における公共性〟という点から考察が加えられ、この町独自の庁舎としてあるべき姿が求められた。

街並のいろいろな所で見え隠れする１本の塔。その塔より海に向かってのびやかに流れていくコロネード。また人々が自由に集え、この町の特色でもある温泉が湧き出る中庭。

これらの特徴的な部分と隣りにある多目的集会施設とが中庭を中心に統合され、この町の行政を中心とした様々なコミュニティ要素を内在する一つのコンプレックスを形成するよう意図されている。

内部は、陽光に満ちた吹抜を中心に諸室が配列され、色彩的にもニュートラルをベースに、一部、青、緑、赤に淡くカラーリングされ、全体として上品で落ちついた雰囲気を持っている。

尚、この吹抜には画家の宇佐美圭司氏によるタピストリーが設置されている。〝やがて総ては一つの円の中に〟というタイトルに示されるように、一足早いハレー彗星に乗り、未来へはばたかんとするものである。　（前川治彦／東畑建築事務所）





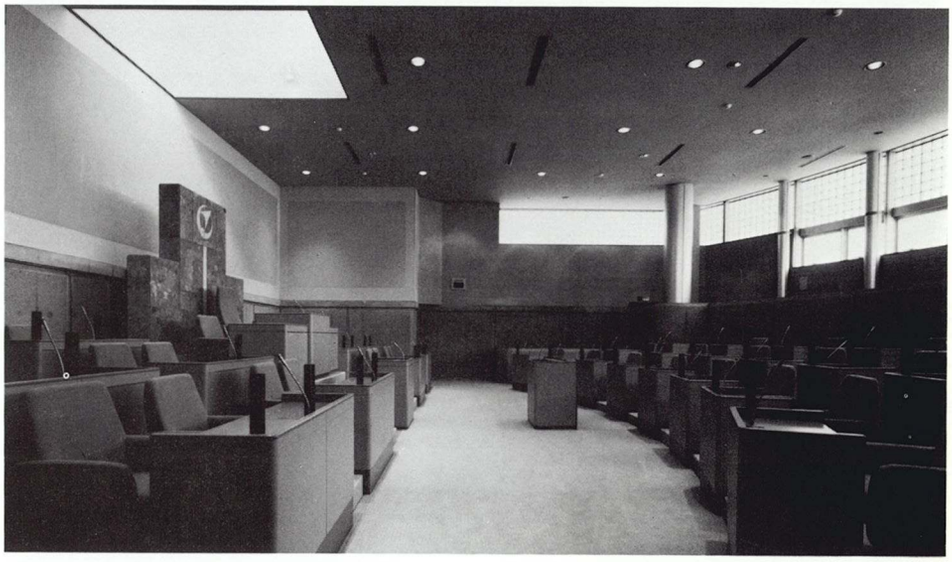
中庭



１階吹抜



タピストリー



議場

Gallery
まち・建築・ひと

POCKET PARK
やんぐ・すくえあ



ゲート　フレーム

ポケットパークは、ヴェストの――多くの物は入らないが、紳士がそこに手を入れてポーズをとったり、懐中時計などを入れておくのに有用な――小さなポケットのような公園という意味で名付けられた。

建築が高度に集積する都心部のそこここに、手近かでちょっとした憩いの空間であるポケットパークが散在することは、都市空間に淀みをつくり、それが都市の魅力として人々をひきつけ、安らぎとうるおいを与えるに違いない。

大阪府においても、昭和56年にポケットパーク構想を提案し、昭和59年より府有施設の充分に活用されていない外部空間をポケットパーク――緑豊かなオープンスペース――として順次整備し、魅力ある都市空間づくりに努めている。

このヤングスクエアは、大阪府北河内府民センター（枚方市）、大阪府旅券事務所（東区）につづく第３弾のポケットパークである。前２作は修景的要素の強いものであったが、ヤングスクエアは修景もさることながら、「国際青年年」の関連事業として、大阪府立青少年会館のアプローチ空間を利用して、会館の内部機能を外部まで延伸させることにより相互の活性化を意図し、若者たちが自由に集い交歓する場として計画された。

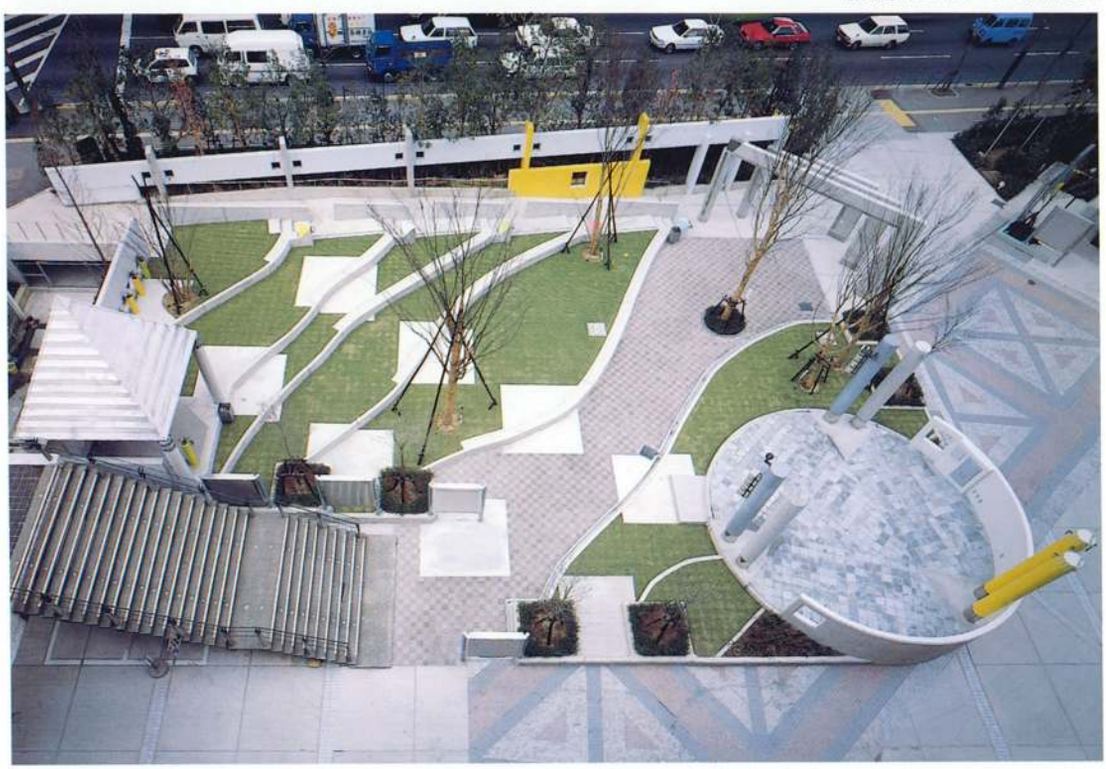
２本ずつ３組の列柱で構成された円形ステージ、道路との高低差を利用した芝生の段状テラス（観客席）、三角屋根のキオスク、ゲートフレーム、植栽、ＢＧＭが流れる展示ケースなどが、駐車場を整理し生みだされたスペースに配置され、コンサート、パフォーマンス、屋外映画等の上演、絵画、写真、彫刻等の展示に供され、若者たちのアクティビティを保証している。

今後共、公共施設における外部空間の見直しを行い高度利用していくことが、都市景観の修復につながり、都市を魅力あるものにすると確信している。

（大川和彦／大阪府建築部）

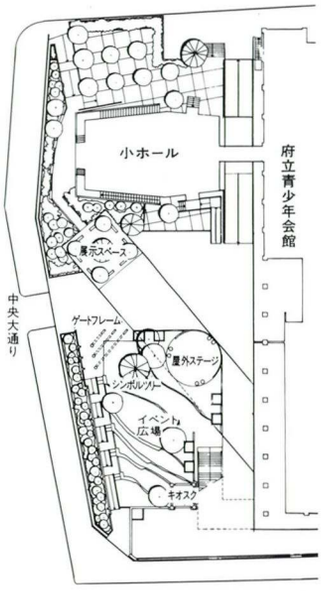

キオスク


前面道路のスクリーンと迂回歩道





イベント時

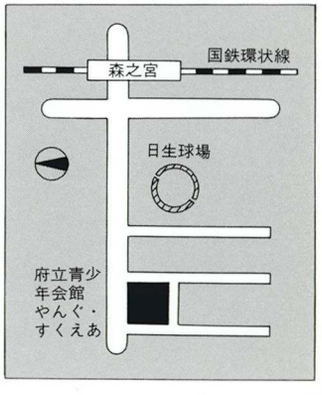




所在地　大阪市東区森ノ宮中央
　　２丁目13番33号
工　期　昭和60年７月９日
　　～昭和60年10月20日
基本設計　大阪府建築部営繕室
実施設計　大阪府建築部営繕室
　　設計事務所ゲンプラン
工事監理　大阪府建設監理協会
施　工　日本土建工業所
　　菊水園
　　東陽電気

大川和彦
1952年　福井県生まれ
1975年　大阪工業大学建築学科卒
現　在　大阪府建築部に在職中

企画編集　作品作風小委員会
　　大泉研二
撮　影　柄松　稔



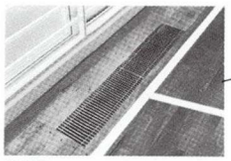
BRIDGESTONE



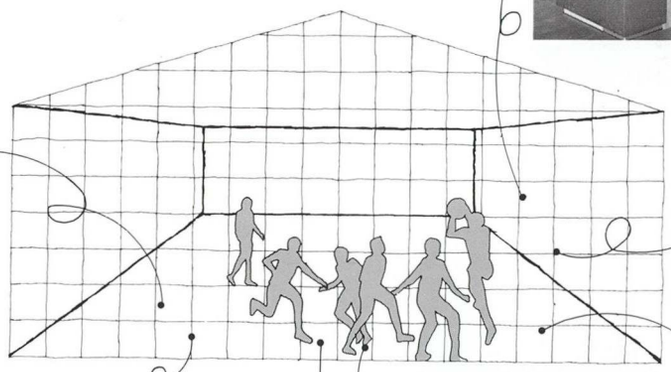
衝撃吸収用クッション壁
●セフティウォール
表面材は柔かな感触の塩ビレザー。エバーソフトと複合したクッション材の半硬質ウレタンフォームが優れた衝撃吸収力を発揮し、プレーヤーの安全を守ります。

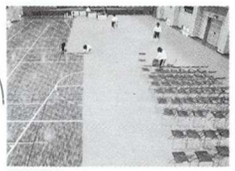


木質系内装壁材
●スーパーウォール
コンクリート壁の冷たさや硬さを解消し、快適で明るいあたたかみのあるスポーツ環境を実現。施工は縦張り・横張りとも可能で簡単乾式工法で美しい仕上りです。

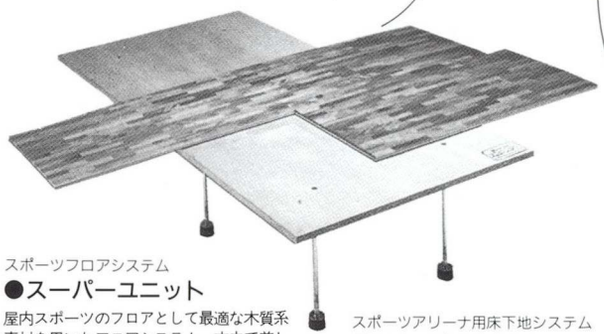


床面用
●フロア換気口
換気効率を高めるため切抜開口率は55%に設計、設置数が通常タイプより少なくてすみます。またステンレス製のためサビに強く、軽量で頑強です。



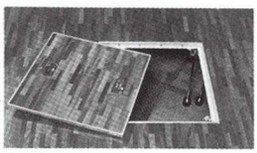


床保護シート
●フロアシート
高強力ナイロンを芯地に、良質塩化ビニール樹脂をコーティングしたナイロン・ターポリン。軽くて、敷き込みや保管がラクで汚れは水ぶきでOK。またすべったりズレたりしません。



スポーツフロアシステム
●スーパーユニット
屋内スポーツのフロアとして最適な木質系素材を用いたフロアシステム。丈夫で美しい大版木質系床パネルでスーパーフロアGを表面材とし、運動のしやすいクッション性を備えた床下地システム、ユニットフロアGとの組合せで構成しています。

スポーツアリーナ用床下地システム
●ユニットフロアG
クッションゴムの効果により、スポーツフロアに必要な弾力性を備えた置床工法。高い平面精度と十分な強度が得られます。



床用点検口
●G-ハッチ
十分な強度と床本体と同じ床弾性があり、取付け施工は容易。どんな床仕上材でも取り付け可能です。



床仕上塗料
●スーパーコートG
ポリウレタン樹脂を使用したスポーツフロア専用タイプ。すべらず、剝げにくく、耐久性に優れています。塗布作業は簡単で木質仕上材の自然の美しさを生かす明るい仕上りです。

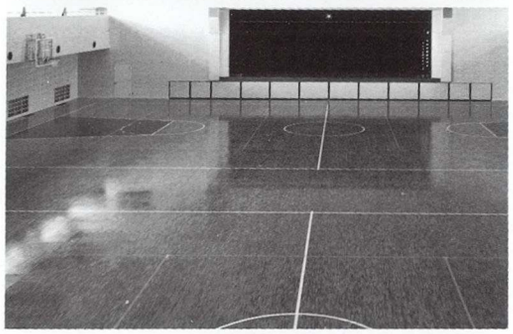
スポーツアリーナのグレードアップ宣言

スポーツフロアの総合施設メーカーとして、多くの実績を生んでいるブリヂストン。「スポーツアリーナは、より安全性・機能性の向上を重視していかなければならない」という思想のもとに、フロア関係はもとより、多くのアリーナ関連用品をも提供してきています。新設アリーナの設計ニーズを十分満足させるのはもちろん、改善を必要としている既設アリーナを見ちがえるようリフレッシュ。新設・既設を問わず、ブリヂストンはスポーツアリーナの向上をめざしグレードアップ宣言を提案します。

重層体育館の下階への騒音防止対策に

〈スーパーユニット〉の優れた床衝撃音遮断性はすでに多くの実績で証明ずみ。さらにブリヂストンが開発した建築内装防音ボード〈DBボード〉と天井支持用防振ゴム〈アイソホンC〉の併用により、重層体育館の特に静けさを必要とする部屋の騒音解消に最適。自由な設計ニーズを広げる防音製品として自信をもってお薦めします。

ブリヂストン
建築用品



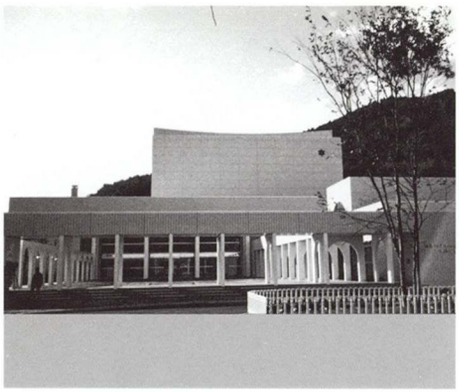
株式会社ブリヂストン
東京都中央区京橋1-10-1　〒104
TEL（03）563-6925㈹
お問合せ：建築用品販売部

■写真と概要をどしどしお送り下さい。
凡例：a．所在地　b．敷地面積　c．建築面積　d．延床面積　e．構造規模　f．工期　g．最寄駅



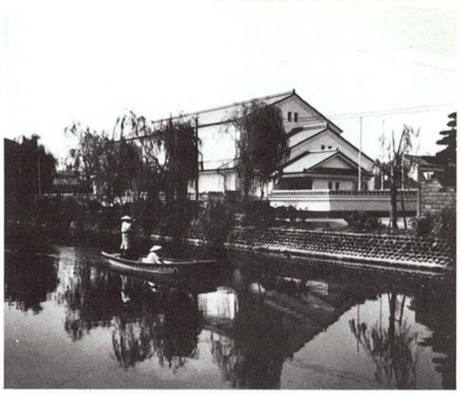
1927 椙山女子学園大学

設　計：清水建設
施　工：清水建設
a．名古屋市千種区田代町
b．35,248.43㎡
c．3,381.42㎡
d．14,534.79㎡
e．RC、6F、P1
f．昭和58年2月～昭和60年9月
g．地下鉄東山線星ヶ丘駅



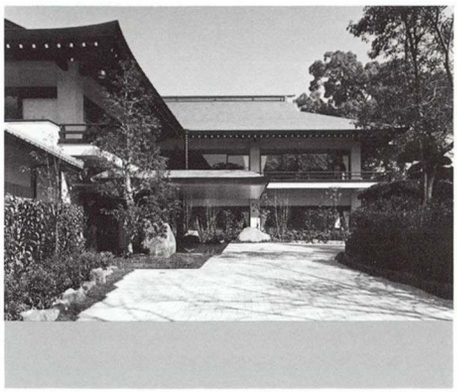
1928 高浜町立文化会館・図書館

設　計：佐藤武夫設計事務所
施　工：熊谷組
a．福井県大飯郡高浜町立石
b．10,586㎡
c．4,428㎡
d．5,513㎡
e．RC(一部S)、B1、2F、P2
f．昭和59年9月～昭和60年9月
g．国鉄小浜線高浜駅



1929 柳川古文書館

設　計：日本技建
施　工：かねぜん建設・広松組JV
a．柳川市大字隅町71－2
b．2,429㎡
c．637㎡
d．1,042㎡
e．RC(一部S)、2F
f．昭和59年9月～昭和60年4月
g．西鉄大牟田線柳川駅



1930 西宮神社会館

設　計：大林組
施　工：大林組
a．兵庫県西宮市社家町11
b．42,075.00㎡
c．1,126.21㎡
d．2,128.46㎡
e．RC(一部S)、3F
f．昭和59年2月～昭和60年3月
g．阪神電鉄西宮駅



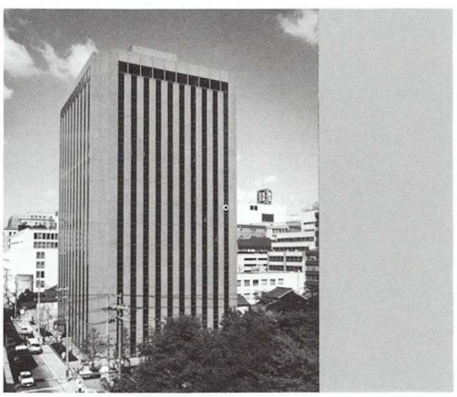
1931 広島サンプラザ(広島勤労者職業福祉センター)

設　計：久米建築事務所
施　工：三井・銭高・錦建設JV
a．広島市西区商工センター3－1－1
b．13,069.2㎡
c．8,741.6㎡
d．19,624.2㎡
e．SRC、B1、4F、P1
f．昭和58年11月～昭和60年7月
g．国鉄山陽本線新井の口駅



1932 間嶋医院

設　計：竹中工務店
施　工：竹中工務店
a．香川県大川郡長尾町西955－1
b．942.94㎡
c．418.96㎡
d．461.67㎡
e．RC、1F(一部2F)
f．昭和59年10月～昭和60年5月
g．琴平電鉄長尾線長尾駅



1933 日本生命今橋ビル

設　計：大林組
施　工：大林組
a．大阪市東区今橋3－11－1
b．2,575.82㎡
c．1,066.67㎡
d．16,802.06㎡
e．SRC、S、B2、14F、P2
f．昭和58年9月～昭和60年9月
g．地下鉄御堂筋線淀屋橋駅



1934 松江皆美館

設　計：竹中工務店
施　工：竹中工務店
a．松江市末次本町14
b．2,169.74㎡
c．838.67㎡
d．2,091.89㎡
e．RC、4F
f．昭和60年2月～昭和60年9月
g．国鉄松江駅



1935 センチュリー吉川ゴルフ倶楽部

設　計：東畑建築事務所
施　工：竹中工務店
a．兵庫県三木市細川町大字金屋字西山587－64
b．979,914㎡
c．6,020㎡
d．6,624㎡
e．RC、2F、P1
f．昭和59年11月～昭和60年9月
g．神戸電鉄三木駅

最新の設備とノーハウに基づく、PA外語学院独自のシステムが、

入学随時

あなたを海外進出めざましい建設産業に対応する語学力豊かな「国際人」に変身させます。

英米語・フランス語・中国語・ブラジル語・スペイン語・イタリア語

グループ・レッスン

レギュラー・レッスン　本格的な一般会話マスター・コースです。
入門から上級まで3ヶ月又は6ヶ月進級制、(ただし1月期は3ヶ月——20レッスン・コースです。)
授業は週2回（各1.5時間）でスケジュールに定められた時間に行い、1クラス10名前後のグループ・レッスンです。

TOEIC TOEFL　TOEIC・TOEFL受験の準備コースです。
外人と日本人専門家がペアで進める超能率カリキュラムにより確実に実力が向上します。
1クラス10名前後の少人数制です。
(TOEFL受験の上級者以外はTOEICコースに入学していただきます。)

プライベート・レッスン

セミ・プライベート　あなたの都合の良い時間を予約し、好きな教材と外人講師を選んでレッスンを受けられる画期的なラウンジ・システムです。レッスンは2、3名で受けられます。教材は一般教材(約80種)の他に海外旅行・ビジネス会話など多数の教材を用意しております。
1レッスン50分ですから忙しい方にピッタリ。
■セミ・プライベート・ラウンジレッスンの他に
1対1の個人指導もございます。

企業向けクラス

企業出張研修生受諾　企業内での研修のため優秀な外人講師を派遣し、目的に応じた内容のレッスンをカスタム・メードの教材に基づき行います。時間と期間は自由です。また研修生派遣をご希望の場合は少人数（5名以上～12名まで）特別クラスを新設し、学院内の設備をご利用いただけます。

設　備

英文ワープロ　英文ワープロ・コーナーでは、全くの初心者にも納得のいく親切な指導を個人的にいたします。中級以上の方には米国人専門家が英語で指導いたします。

LL教室　当学院が開発した最新LL装置"English Master"入門～上級はヒアリングとスピーキング訓練用自習機で、低価格で使用出来ます。当学院生は無料です。

■くつろいだ雰囲気の中でレッスンが受講でき、飲み物も無料で用意させていただきます。

英・米会話　本町校　　4月期生募集中

曜日	時間帯	クラス	Text	内容	期間	授業料
月・木	7:30－9:00	初級II	BC	6ヶ月 44レッスン	4/14～9/22	¥90,000
	7:30－9:00	中級I	CD			1年分一括納入される場合
火・金	5:50－7:20	初級I	AB		4/15～9/26	¥172,000
	7:30－9:00	中級II	DE			
	7:30－9:00	上級	ES			

TOEIC

月・木	7:30－9:00	TOEIC専門	6ヶ月 44レッスン	4/14～9/22	¥94,000

フランス語

水	6:00－8:00	初級	3ヶ月 10レッスン	4/14～6/23	¥38,000

中国語

金	6:00－8:00	初級	3ヶ月 10レッスン	4/17～6/19	¥38,000

セミプライベートラウンジレッスン

月～金 土	12:00－9:00 12:00－5:00	入門から上級	2から3名 全レッスン予約制	自由	1名につき1レッスン(50分) ¥2,400

企業からの受託生　企業からの依頼により随時特別クラスを新設します。

《参考例》

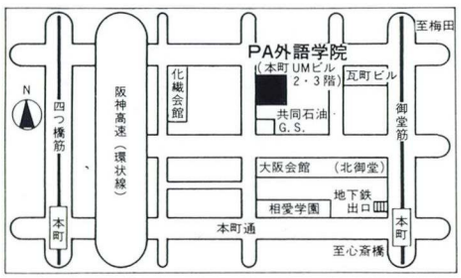
1クラスの人数	時間／曜日	期間	費用
7名まで	5：50～7：20又は 7：30～9：00 (週2回)	約6ヶ月 (44レッスン)	¥540,000 (月額¥90,000)
12名まで	同上	同上	¥780,000 (月額¥130,000)

出張レッスン　企業への出張レッスン費用は、

1クラスの人数	時間／曜日	期間	費用
10名まで	5：50～7：20又は 7：30～9：00 (週2回)	約6ヶ月 (44レッスン)	¥528,000 (月額¥88,000)

授業料は1.5時間で¥12,000の計算ですが、交通費は実費を別途頂きます。
また遠方の場合は出張料（片道30分以上60分以内は、各レッスンにつき、¥1,000）が加算されます。
週一回2時間授業も可能ですのでご相談下さい。
企業からの受託生特別クラス及び、出張レッスンの内容は、レベルと目的に応じたカスタム教材を使用します。
※年間契約等多数のレッスンをご予定の場合は割引があります。

最新設備を誇る本町校



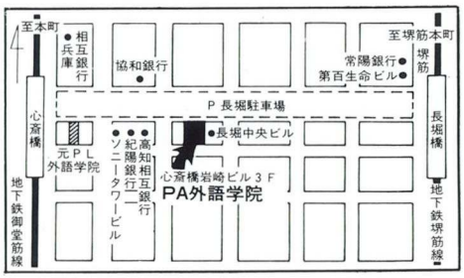
Tel　(06)227-0803(代)

〒541大阪市東区瓦町5丁目45番地の1　本町UMビル2・3階
(地下鉄御堂筋線本町駅よりすぐ)

PA外語学院

1965年　道頓堀ヒロタビルにおいてPL外語教室開校。
1968年　心斎橋に移転。PL外語学院と名称変更。全国初のコンピューターによるティーチングマシン開発。
1969年　企業内研修盛ん。
1970年　児童英才教育ノウハウ開発。
1975年　ティーチングマシンとLL装置を結び、画面と音声同調の新教材開発。
1983年　新築の心斎橋岩崎ビルに移転。PA外語学院と名称変更。
1984年　可搬式LL自習機"English Master"ソフト開発。
1985年　本町校新設。今後、京阪神地区を中心に積極的な展開を予定。

伝統を誇る心斎橋校



Tel　(06)261-5521(代)

〒542 大阪市南区鰻谷中之町72-4心斎橋岩崎ビル3F
(地下鉄御堂筋線心斎橋駅よりすぐ)

この人 15　岡澤 雄次郎 裂地

聞き手　堀畑裕一(近畿日本鉄道)

うその表現はするな

古く中国から伝来した金襴、緞子、間道等の絹織物は茶器の仕覆、掛軸の表装、製本裂地、額装裂地に利用され、染め、織り、紋様一つひとつが伝統の厚みとして代々引継がれ、現代の京西陣に生きている。

「表装裂地は裏好み裂地、表好み裂地というように決まった紋様にする必要があり、名物裂の写しの紋様には創作する余地も何も無い」と語る岡澤さんは、サラリーマン生活を経て、四代目として昭和27年に金襴緞子の家業を継ぐ。「最初は染め、織り、紋の職人の所で色の出し方、風合いの作り方、紋の作り方を覚え、紋紙設計の指図を出来るようになった」と語る。しかしサラリーマン時代と比べ、扱う数字が6つも違う。いつまでも個人営業で趣味的商品を扱う家業ではない。もっと身近なものをやろうと周囲の反対を押し、西陣織と内装を結び付けた壁装商品に乗り出す。伝統的な手仕事の織物を機械生産でどのように表現してゆくか、専門家のアドバイスを受けながら、パブリシティにも時間を掛けた。

京都国際会議場等の有名建築に使用され、次第に建築家から認識されるようになる。壁装の仕事に踏み込みながらも、本来の金襴緞子という辛気くさい商売を続けたおかげで、高級な表装裂地の色出し糸使い等のテクニックと良い物を作る原理を覚え、壁装の方の仕事に非常に応用できたと言う。量を売るには無理があるが、手仕事の持つ価値を生かし、個性を売る形と織物に徹したい。今迄、良い物さえ作れば必ず売れるという規定概念にとらわれていたが、今後は現場のニーズに合った物、値段の面でも、意匠の面でも付加価値のある物を検討してゆきたいと、職人的気質を持ちながらも経営者としての一面をのぞかせる。



おかざわ　ゆうじろう

1921年　京都生まれ
1939年　京都市立第2商業学校卒業後、石原産業入社
1952年　岡澤商店入社
1963年　㈱岡澤・代表取締役、現在に至る

㈱岡澤

京都市西陣浄福寺通今出川下ル　☎　075－432－1171

最近の主な施工例

京都／京都国際会館、大阪／大阪市庁舎・国立文楽劇場・都ホテル（上六）・ホテルプラザ、兵庫／兵庫県南庁舎、滋賀／ラ・フォーレ琵琶湖、愛知／熱田神宮会館、三重／志摩観光ホテル、東京／帝国ホテル・ホテルニューオオタニ・メトロポリタンホテル・全日空ホテル（六本木）・最高裁長官官舎・ＮＴＴ本社ビル、茨城／筑波万博政府館迎賓館、福岡／能楽堂・宇佐神宮

「現在では、日本の紋様を含め、織技術は欧州と比べても引けは取らないし、十分対抗できるだけの技術力、意匠力を持ってきた。建築界で仕事をしたおかげで、表現力の努力をさせてもらった。今後も設計の方々から指図やモチーフを戴くと共に、我々も勉強しなければならない」と付け加えられた。

10年程前、創業100年の機会に、建築界に何か残せる物はないかと模索していた時、神代雄一郎先生から、雑誌であれば編集の範囲でしか喋れないため大へん不便である。自由な論説の場と、論文の中でもう一度読み直してみたいもの、忘れかけた名文章をもう一度紹介することが役立つのではないかとアドバイスを受ける。対談を中心に据え、古い文章を再録してゆく方針で小冊子をつくることになった。宮内嘉久氏によって、自由な発言、風の声、『風声』とネーミングされる。岩本博行、大江宏、神代雄一郎、白井晟一、前川國男、宮内嘉久、武者英二らによる風声同人としてスタートし、現在、19号まで発刊されている。

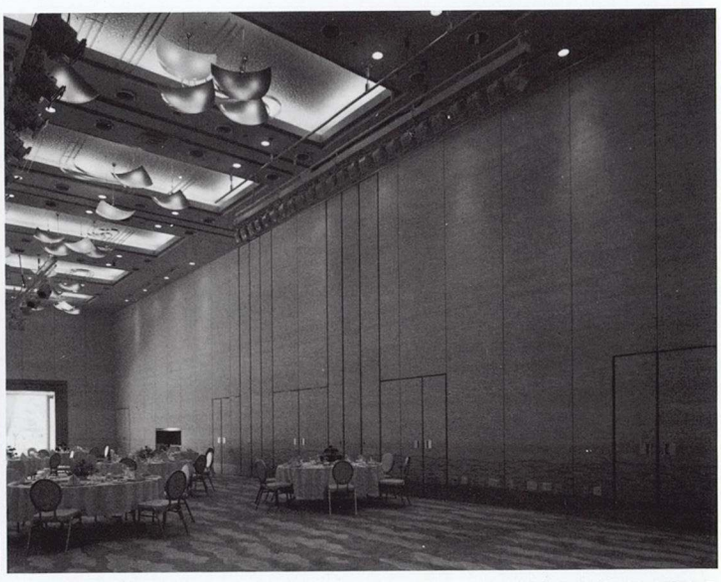
編集の過程で年2回程度の会合を、時には花見になったこともあったが、ジャンルの違う人との対談という形で持てたことによって、多くの考え方、物を造る心を教えられた。「白井先生から『デザインは自分の精神的な意匠だ』と教えられ、静岡の石水館を見学した時、その意味と白井芸術とはこのようなものかと感銘を受けた。岩本先生からも『うその表現はするな』と特に言われた」と語る。

建築との繋がりの中や風声の編集を通じて、人と人との巡り合いの大切さを痛感するとともに、自分の織物を作ってゆくのに大いに役立っているという。

帰るとき、表装裂地の数々を見せていただいたが、その色合、風合、紋様に魅せられると共に、伝統ある裂をもう一度見直す必要があるのではないかと感じた。

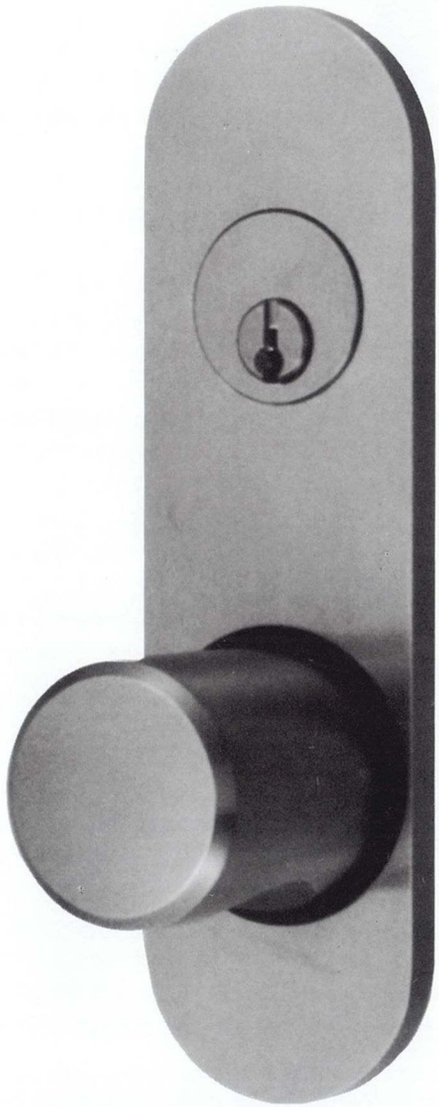


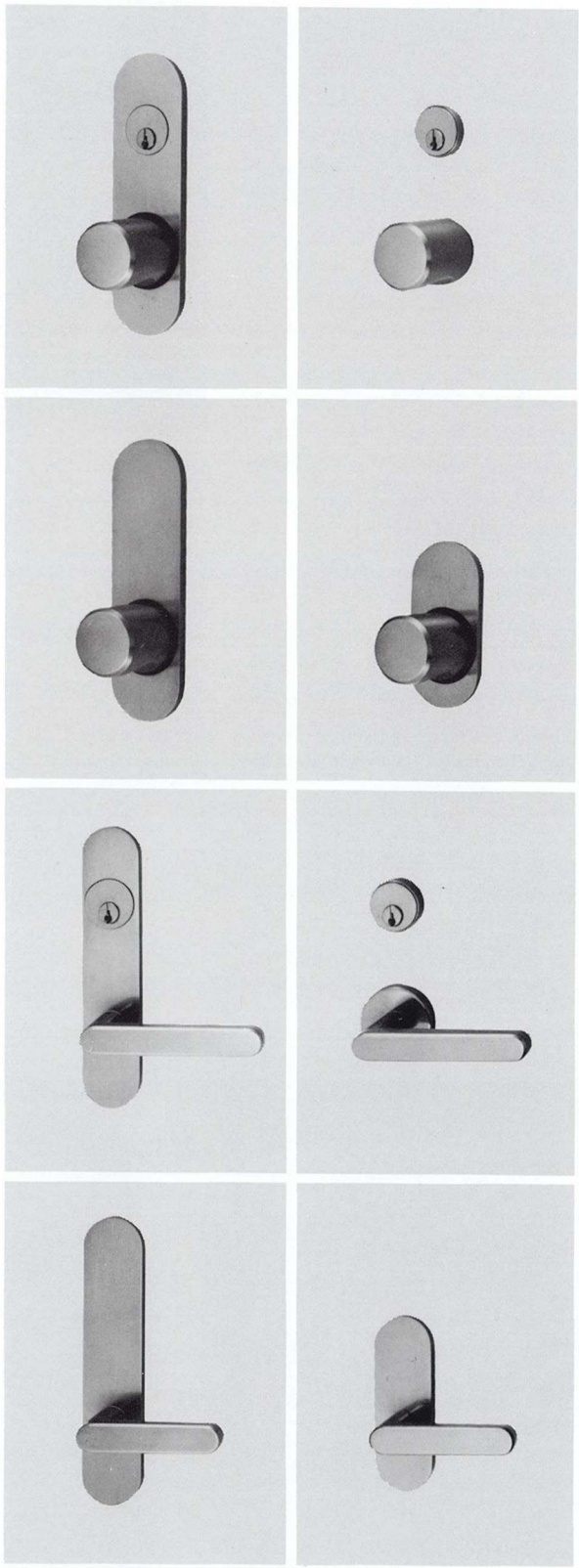
几帳



ラ・フォーレ琵琶湖大宴会場

2000 Series





〝良い建築は良い金物の選定から〞質感と重量感、それにシンプルな形態とディティールの処理があってこそ、錠としての信頼感が伝わる。

Certificate of Completion
ARCHITECTURAL HARDWARE INSTITUTE
TATSUO OHTA

BEST

建築・建具・家具・インテリア金物・高級木製ドアー

太田興業株式会社

- ●大阪店　大阪市天王寺区上本町9丁目3番7号　〒543
  TEL 06 (779) 7004　FAX 06 (779) 7563
- ●本　社　東京都千代田区神田紺屋町41　〒101
  TEL 03 (256) 1264　FAX 03 (256) 2708
- ●工　場　青　梅　市　TEL 0428(31) 7201　FAX 0428(31) 7203
- ●SHOP　千代田区神田　TEL 03 (256) 5505　FAX 03 (256) 2708
- ●営業所　東京店・神田店・西東京店・関東店

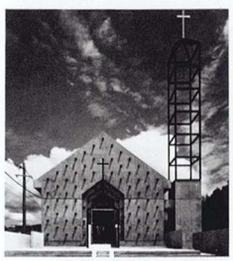
東　孝光

大阪大学

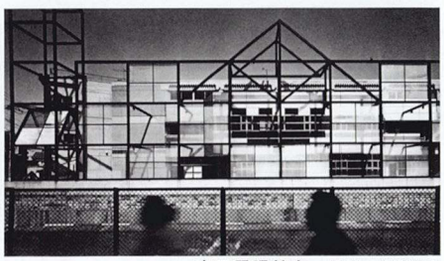
聞き手・編集幹事　西川純一（昭　和　設　計）
プロフィール撮影　島　修一（STUDIO A・T）

略　歴　あずま　たかみつ

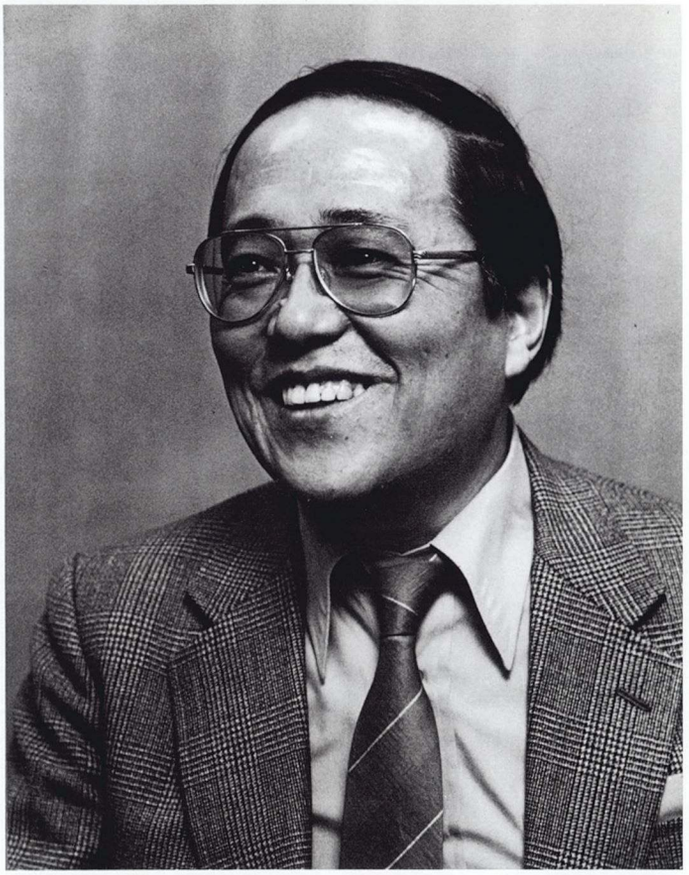
生年月日	昭和8年9月20日生(52歳)
出身地	大阪市
最終学歴	大阪大学工学部構築学科昭和32年卒業
教職	大阪大学工学部環境工学科教授
大学所在地	〒565 大阪府吹田市山田丘2－1
公職	日本建築学会計画委員会委員　日本建築家協会教育委員会委員
代表作品	塔の家(東京都)　さつき保育園(池田市)　清仁・清心保育園(城陽市)　聖書キリスト教会(東京都)　橋本バプテスト教会(橋本市)　他都市型住宅作品
趣味	ＳＦ小説は30年来読み続けていますが、他にこれといった趣味はありません。
好きな空間	旅行が好きで、新旧や建築、地域、風景を問わず、未知の空間に出会うのが最高の喜びです。



橋本バプテスト教会
撮影　彰国社和木　通



高田馬場教会　撮影　大橋富夫



実践と理論の間へ

「具体的に、私自身が日常の仕事のなかでかかげる基本方針は、自己の建築家的イメージを先行させず、施主の諸条件を綿密に聞き取り、話し合いによって堀りさげ、彼等の過去の体験や蓄積から出てくるものとして理解することから始めることであることは、機会あるごとに述べてきた。しかし重要なことは、その次には、私自身の専門家としてではなく、普通の市民としての考えを話し合いの場に持ち出し、結局は、両者のぶつかり合いのなかから、施主のでもなく私のでもない、第三の結論へと熟成させてゆく作業なしには、空間は生まれないことである。その前半は、いわゆるフィールドワークに近い作業であるが、後半こそが、実は施主と建築家がひとつの場で激しく行動する創造行為にほかならない。私の生きがいは、そのような場をつくり出し、そこへ自らをも参加させることである。」この文は、1971年9月の都市住宅臨時増刊号に掲載された論文『私にとっての都市的スペース』の一部である。この論文が自分で書いた最も思い入れの深い文章だという。そこには、15年前当時の決心が書き綴られている。そして今、そこへ付け加える「最終的に、形にしてゆくにはあくまで専門家としての判断が入っていなければならない」との言葉に、実践を通して確立した建築家としての一つの誠実な〝在り方〟をみた。

思想としての〝共同作業論〟、〝スリット〟〝ポリフォニー〟といった建築構成上の原理はすべて実践から生まれた。「〝共同作業論〟は、建築家が40％でクライアントが60％といった〝分割〟の話ではなく、〝重ね〟である。お互いの重なりが100％になれば理想」「大工も工務店も私も私のスタッフもそしてクライアントも、自分の作品だと思えるものが作れたら最高」と語る。そして「〝スリット〟はシンプルで楽しい複雑さを作る手法」「世の中、あらゆる事象に共通なことですが、単位となるものは非常にシンプルであっても、それがある構成原理をもてば、無限の複雑さを作り出す。〝スリット〟は建築におけるそういうもの」と説明する。また「〝スリット〟はあくまで手法、構成原理のひとつ。私は今まで一つのスタイルに執着せず、建築主や仕事の条件に合った最適の解決策が得られるよう心掛けてきた」と微笑みながら日頃の設計姿勢を語る。この言葉は、第一線を走る作家がジャーナリズムによって一つのスタイルに決めつけられ語られることへの抵抗ともとれる。

ところで、都市住宅の魁（さきがけ）ともいえる〝塔の家〟（自邸）のジャーナリズムへのデビューはセンセーションとなったが、そこに込められた思想が見事に住みこなされ実践された現在こそセンセーションとなるにふさわしい。〝生き様〟そのものが素晴らしい。

「独立前、郵政省と坂倉準三先生の事務所でおもに公共建築を設計していたが、建物は自分で使い、駄目な部分があれば自分で工夫して使いこなしてゆける人を相手に仕事がやりたくなった」「独立当時住宅からと心に決めていたが、大阪はオーソドックスな設計事務所のメッカで、竹腰先生や村野先生もまだお元気で、何かと出身地には知人も多く、お前は何をしているか、といわれるのが多少辛かったので」「大阪は最後の場所にとっておこうと思った」と、見知らぬ土地東京で当時まだ物珍しかった住宅設計を手掛けた理由を明かす。「しかし、そのことが今から思えば『何くそ』と頑張らせてくれた」とも振り返る。

大阪大学環境工学科教授として帰ってきた今、これからの抱負を、「血も肉もかよった建築の作り方を学生達に伝えたい」と語る。「建築家としての私の生き方をみてもらって、それが即、教育になればいいのだが。建築家と大学の先生ではなく、建築家＝大学の先生になりたい。建築家のまま大学に行く」これらの言葉には、〝実践〟と〝理論〟を結び、建築作品を作り続けてきたプロフェッサーアーキテクトの力強い夢と新たな環境への挑戦が感じられる。また、最近作の教会建築にも新しい展開がある。そのことを「機能主義教育を徹底的に教え込まれたモダニストが、自分なりに〝表現〟というものを理解し始めました」と語る。〝実践〟と〝理論〟両面でいつも話題の豊かな人である。これでまた、関西は、面白く魅力あるところになりそうだ。　〔次号の登場者は平山明義氏（平山明義建築事務所）〕

書　評

読書の楽しさを味う

太田隆信（坂倉建築研究所大阪事務所長）

今回の書評はこの本と、最初からきめていたのだが、編集部から見ると、ちょっと軽すぎるんじゃないかとの懸念があったらしい。そこを何とか、坂倉先生の巴里時代のエピソード等ともオーバーラップさせて書いてみたいので等と説得して、この本を読みはじめたのですが、驚きました。最後の章で本当に坂倉先生が登場してこられるのです。それも林芙美子の「巴里日記」に出てくる哲学と建築を勉強中のSとは、坂倉準三であると思われる……、との、著者の名推理が、全262頁（あとがきを除く）中の261頁に出てくるのです。偶然とはいえ、やはり驚きました。これも、読書の楽しさと言うべきでしょうか。

「私は〈1920年代〉を現代都市の風景が成立し、それをとらえる表現が新しい水準に達した時代であると考えている。日本にも〈20年代〉はあったろうが……。」著者は、このところ興味の対象を20年代に絞り込んで様々な角度から、都市を舞台に、モダンの濫觴の頃を精力的に論じている。

近代という語が、モダンの日本語であるとすれば、明治維新以後を、おしなべて近代と言うのは、ちょっとおおまかすぎる。例えば、ここで論じられている都市。近代化の萌芽の時期はともかく、モダン都市の成立は、やはり20年代のこと。少なくとも第1次世界大戦以後のことと考えるべきでしょう。建築についても同様でしょう。明治維新は、建築の目で見るかぎり、近代化ではなく、西洋化と言いたいのですが、このあたりを突っ込んでゆくと、日本における近代化とは、というあたりから、もっともっと実証的にこまかく論じねばならない。そして、そこいらを云々しはじめると、限りなく観念的な迷路にふみ込んでしまう。都市にテーマを限定し、データを積み重ねることによって、まずは、モダン都市の成立から論じようとする著者の姿勢は、迷路を避けて近代を語る巧みな方法であると同時に、迷路を解きほぐす有力な手法に成長することを期待できるのではないか。海野弘のドキュメンタリー・タッチが、この限られた時代を、ますます深く掘り下げてゆくことを、「都市の神話学」以来の読者の一人として望みたい。

モダン都市周遊
日本の20年代を訪ねて

海野　弘　著



中央公論社刊　1,500円

さて、今回は、20年代の、いわゆるモダン都市を、同時代の作家と共に、足早におとずれつつ、そこから逆に、日本の都市風景を写しだそうと、海外旅行である。各章それぞれが一つの本になってもおかしくない興味深い内容であるが、ここでは、それぞれの都市のスケッチを、コラージュ風につないで、ひとつの鏡映を構成する手法がとられている。大連・上海がその中に含まれていること、さらにあとがきで、いずれ上海をひとつの本にまとめてみたいと言う著者の視点は、問題を実に的確にとらえている。それだけに、本書中に、ハルピンがちょっとしか語られていないのは残念な気もする。第1次大戦以後、20年代のハルピンは、やはり、このテーマで、さけて通れない、いや、最も重要な論点のひとつ、是非共、著者の話しを聞かせてほしいものだ。

最後になってしまったが、坂倉先生の巴里でのことを一つ。先生のお話によると、万国博開催中のある日、自作の日本館で、夕刻そろそろ閉館という頃に、小柄な米国人が、突然、つかつかと入って来て、「君がこのバビリオンの設計者かね。これが日本館かね。日本の伝統はどうなってしまったんだ。今日は、もう時間がない、明日、ゆっくりと話し合おうではないか。」と、まくしたてると、そそくさと出ていってしまった。そして、次の日、一日中待っていたのだが、ついに、その人は現れなかった……。ということでしたが、小柄な米国人が誰か、おわかりでしょうか。フランク・ロイド・ライトだったのです。本当は、つかつかと入って来たライトは、「私は、フランク・ロイド・ライトだが、君が……」と語りかけてこられたのだそうですが……。話しはこれだけです。大阪万博の前にこの話を聞かせていただいたと覚えていますが、西沢文隆さんも初めて聞いたということでした。もう少し、ディテールを聞きたかったのですが、又の機会に……、と思っているうちに、ついに聞くチャンスを失ってしまって、残念。

新刊寸評

建築の絵本　世界のすまい6000年　全3巻

①先都市時代の住居

②東洋の都市住居

③西洋の都市住居

ノーバート・ショウナワー著
三村浩史監訳



人類は百万年以上前から生存していると考えられるが、当然の事ながらその大部分の期間は採集や狩猟の生活をしてきた。また植物の作物化や動物の家畜化により新石器時代に入ってからも、農耕生活を行い定住を始めるには相当の時間がかかっている。従って人類最初の住居と呼べるものがどのようなものであったかについては、今だ都市化していない人々の居住地において、今日存在して現に暮らしている住居に学ぶことから始める事が一番確かなようである。

本書はカナダの住居学の権威である著者の著作全3巻の訳本であるが、第1巻では先都市時代のすまいの発達をとりあげ、現在実際生活をしている各地の遊牧民・耕作民等の住居を観察・分析する事から論じられている。第2巻では古代四大都市文明の成立を基点として現れ、現在の都市住居の原型ともなるべき伝統的な住宅の型式の発達が観察分析され、更に第3巻では、それぞれの国土の中で近代化をはかってきた欧米の都市住宅論が論じられている。

「すまうということ」を中心として、民族の生活・文明を6000年という壮大な歴史の時間軸の中で広く総合的に学ぶことが出来る大作で、絵本と呼ぶにはいささか重い内容ではある。しかし各巻の約半分を占める著者自身の達者なスケッチとわかりやすいシナリオが、この幅広いテーマについての知見をわかりやすく楽しく読ませる事に成功している。建築に携わる人たちのみならず、生活文化に関心のある人たちに一読をすすめたい。（伊藤）

（彰国社刊　①③1,800円②1,900円）

私が読んだ本

建築・プロ・アマ？

渡辺豊和（渡辺豊和建築工房）

榎本了壱は「ビックリハウス」の編集発行者であり現在の都市の若者文化を陰で演出している第一人者なのだが、その彼が、飯沢匡、黒川紀章から写真家の荒木経惟、更にはコピーライターの糸井重里等とのおしゃべり座談を巧みにまとめたのが「ダサイズムの逆襲・現象都市解釈」であり、小生もひょんなことで彼を知るようになり恵贈にあずかった次第である。

「ビックリハウス」は読んだことはないが、要は糸井の「ヘンタイヨイコ」などと同位相の痛烈パロディー誌なそうで、これに寄稿して今の若者は自己表出の機会を得たとのことであり、しかも全ページとも読者の寄稿で埋まっているのだそうだ。要するに読者が筆者である雑誌であり、何が何んでも面白かったら掲載するのである。判り易く言えば新聞の投書欄で全て埋まっている雑誌だと思えばよいのだろう。但しそれも面白くなくてはとり上げられないから、やたら面白さを競うということになっている。丁度江戸時代の戯作者精神とよく似てはいる。この「ダサイズムの逆襲」を読んでいても、誠以って江戸後期的であって、パロディ精神の権化達がしゃべり合っているのだから楽しい。黒川紀章など徹底的にカラカワれている。ところがそれに気が付いていないのがまた面白いのである。真面目に利久ねずみ的中間領域論などぶつものだから、ここでは非常に喜劇的に見え、オカシイことおびただしい。

この様なマジメオジンカラカイの本でもあるのだが、その精神はやはり江戸の戯作者のものであろう。但し笑いのめしてやれと言うほど激しくもないのは飽食時代のヤサシさではあろうか。

この数多くの座談の中では糸井重里との対話が一番面白いしシャープである。糸井とは二度ほど対面したことはあるが、その時はわざとダジャレを飛ばしていたからそれ程にも思えなかったが、この本を読んでみるとやはりすばらしく鋭敏な感性の持主であることが判る。人形劇のことを語っているのだが、人形使いや黒子達が演技を始めないのは何故かという一見愚にもつかない問いを最後まで問い続けている。彼等人形使いや黒子はどうして自分の顔や体で演技せずに、死人と同じはずの人形に代替させるのか、と言うのである。



多分彼等は人形を可愛がると同じ位に憎んでいるはずである。そうでなかったらモノにしか過ぎない人形を動かす気になれるはずがないと言うのである。言っていることは他愛ないようではあるが、ギクッとする鋭さがある。要するに人間の死について語っているようなのだ。人形使いは使者と共にあるということらしい。人形は確かに死者のようなもので、動物の人形ならそれ程でもないが、人形はまさに人なのだ。マネキンが人なのと同じであって、しかもこれが操られて自在に動くのだ。死者の舞踏ではないか。人形劇が持つ死のイメージのこの暗黒を、糸井は実に鮮明にしかも簡単な短い言葉で語ってみせてくれている。伊達や酔狂で当代一のコピーライターになっているのではないのだと、つくづく感じさせる。

この本の副題は現象都市解釈となっているが、榎本は黒川紀章との対談で、私達本の編集者や、イヴェントのプロデューサーこそ都市計画者ではないかと自問している。そうだろう。いくら道や家屋や公園を計画し作ってみても、それを使用する人々の動きがない限り、そこは単なる場所であり建物でしかない。そのような建物や場所に人間が生動しない限り都市ではない。この自明のことを演出しているのが俺達ではないか。俺達こそ都市計画者なのだと彼は考えている。勿論小生も同感である。

次に、「ビックリハウス」のハガキ投稿方式による読者のページのみの雑誌の成功を彼等はアマチュアリズムの勝利として規定していて、これこそ現代都市化社会の文化情況なのであって、専門家なんて本来存在するはずもないと喝破しているのだが、これは常にその時点時点の若者達が言い続けることであって、20年前の若者達も決して専門家の存在を肯定しなかった。ただし現在は誰しも専門家になりたがらない時代なのかもしれず、もしそうだとすると大企業の専門職は将来なくなるのだろうか。多分そうはならないに違いなく、若者達はその出発に際しては必ずアマチュアであるということに過ぎまい。だから、ただ文化情況としてアマチュアを評価するというのが本当ではあろう。

建築もアマチュアが多数輩出する方が活気があっていいとは思うのだが、どういうわけか若者を自認する輩すら、アマチュアよりもプロに憧れているようであるのは不思議な現象としか言いようがない。何時、特殊社会でなくなるのだろう。

わたなべ　とよかず

1938年　秋田県生まれ
1961年　福井大学工学部建築学科卒業
1964年　RIA建築綜合研究所入所
1970年　同研究所退所後、都市問題経営研究所入所
　　渡辺豊和アトリエを開所
1972年　都市問題経営研究所退所
　　渡辺豊和アトリエを渡辺豊和建築工房に改称
1980年　京都芸術短期大学非常勤講師
1981年　同大学客員教授

主な作品

吉田邸、杉山邸、伊東邸、テラスロマネスク桃山谷、サンツモリビル、西脇市立古窯館、オッパイハウス（戸口邸）

主な著書

「地底建築論」（明現社、1981年）、「芸能としての建築」（晶文社、1983年）、「大和に眠る太陽の都」（学芸出版、1983年）、「神話と神殿」（原書房、1983年）

渡辺豊和建築工房
大阪市西区南堀江3-11-21 田賀ビル　☎06-532-3137

榎本了壱座談集「ダサイズムの逆襲・現象都市解釈」
パルコ出版局刊　1,200円

新刊寸評

東京ポスト・モダン

松葉一清著

『日本のポスト・モダニズム』につづく、第２弾。前書で、日本におけるポスト・モダンとは何か、について多くを語った著書が、自分の生活する東京に目を向けた。「……いまのトーキョー、それほど悪くはない」と始まる本書は、著者が日頃感じ、考えていることを、切れ味よくつづっている。中には、鶯谷駅前のラブホテルのサイン、西武新宿の思い出横丁の話しが出て来たりして、いろんな東京を再認識できる。また、巻末に付いている東京世紀末名所案内図は、コピーして、今度都内をゆっくり見て廻る機会のためにとっておきたい気にさせる。　（赤井）

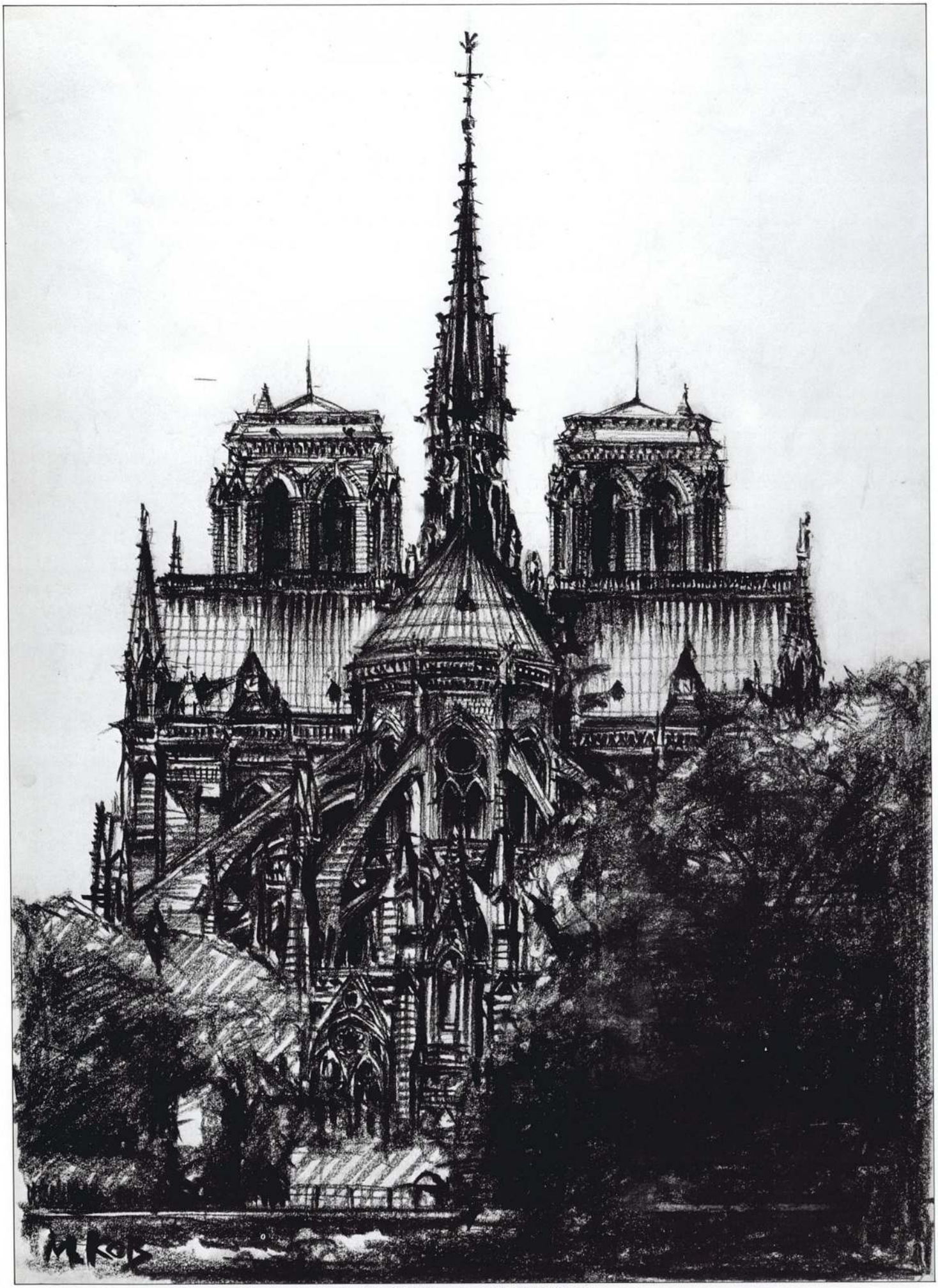
（三省堂刊　1,400円）

都市へ向かう旅

若山　滋 著

都市は何らかの様式性を持ち、それは近代化によって一挙に失われるものではない。又、都市はあらゆるものの交換の場であり、人間という生命体が造った過剰の消費装置であるのかも知れない、と著者は結んでいる。都市と人間・都市と生活・都市と文化の関連をアジア諸都市の旅を通じて探る。無意識のうちに欧米諸国を規範に置いてきたわが国の現状を、アジア諸都市の例をもって暗に、批判している。「日本は経済大国であるが、都市文明という点ではどうだろう。欧米に追いついたのであろうか。東南アジアの華橋都市に追い越されてはいないのだろうか。」（本文より）　（永原）

（冬樹社刊　1,500円）



ノートルダム寺院　　画　小林正純(清水建設)

読者の頁

〝主夫の目〟で台所づくりを！

馬場昌子（関西大学建築学科助手）

戦後の住宅の変化で最も目立つものに台所がある。戦前までは、多くは使用人の労働空間として住宅の北西隅部分になおざりにされてきた。ところが今や主婦の滞留時間が最も長い台所を環境条件の最も良い位置に設けようという考えかたは、当然のこととして受入れられるようになった。おまけに、各住宅メーカーは主婦の意向を汲み取ることに熱心で、主婦を落とせば契約成立と云わんばかりである。斯くて主婦の夢を叶えた高価な台所セットが巷に氾濫し、台所そのものがファッション化した感さえする。

しかし主婦の使い勝手だけに焦点をあてた台所の氾濫は、主婦以外の家族員にとっては非常に不利な状況である。他の家族員は生活技術の習得のチャンスを逃してしまっているのだから。例えば、単身赴任の主人が一夜にして主夫になり、自分の健康管理、生活管理をするべくもない。「おじいちゃんの台所」ではないが、高齢になってからの慣れぬ台所仕事は身に応える。幼時から、母のそばで調理を見、時々は参加し、次第に調理にかかわり、作る喜びとともに、生活技術を伝えられていなければ、花嫁（花婿）修業に料理学校に通っても何程のことがあろう。やはり誰もが自分の生活にもっと手を出す方が、結局は誰にとっても幸せ（得策）だということになる。即ち、誰でもが気軽に台所に立てる仕掛けが必要であり、台所は主婦一人のものにあらずということである。

建築界の男性も、生活者の立場（主夫）に積極的に努力して立てば、台所は、今とは違ったもっともっとすばらしいものが出てくるように思える。

建築界で働いて

吉村智子（長谷川工務店設計部）

建築界というより住宅産業の中で働いて6年になりますが、その短い経験でも、女性雇用に対する対応が遅れていると感じられます。但し、女性の進出という面では決して新しい分野ではなく、かなり多くの先輩方がおられます。それなのに何故女性の働く場として発展しないのでしょうか。

建築、特に住宅は単なる箱だけではなくその中で人が生活し、生活の中では女性が重要な役割りを果たしています。今、社会的にもその事が大きく取り上げられ、やっと目を向けられるようになりました。もっとも、すまいとは、女性（＝主婦）だけのものではなく、家族全員が協力して創りあげるもの。男性ももっと自分のすまい創りに目を向け、また向けられるような社会があってこそ良くなるものだとは思いますが……。

そこで現実に戻りますが、現在、建築業界で働いている女性はかなりいると思われるのに、業界あるいは企業では、まだ特殊というイメージが強く、あるいはそのイメージを無くしたくない、男性社会というイメージを残しておきたいのではないかとさえ感じられます。また、女性のライフサイクルは、男性と同条件で働くには、大きな選択が必要であり、かつ多くの困難があります。今はまだ、それらの問題の多くは、個人での解決にまかせられていますが、個人だけでなく、企業・社会も正面から問題解決に取り組む時期がきているのではないでしょうか。

時代は、ゆっくりとしかし確実に変わっていきます。それが、男女両方にとって良い方向であるよう願っています。

私はこう思う　女性会員の声



夕陽に光るツイン21（大阪）

女性の進出分野は増えたけれど

杉本章子（都市生活研究所）

〝女性の感性〟がもてはやされ、女性が進出できる場も多くなってきた。建築関連分野でもその枠が広がっていることは喜ぶべきことである。しかし〝女性の感性〟とはあくまでも仕事の手段であって、すべてではない。男性が〝女性の感性〟を手段とすれば済むことである。

たとえば、建築物そのものを技術面（ハード面）の追求のみでなく、どのような使われ方（ソフト面）があるのかが要求される時代になってきた。そもそも建築物は、生産・消費も含め、人間生活を包み、新しい生活を産みだすものと考えてきたが、社会の成熟化に伴って、ようやくソフト面からハード面をみることが求められるようになってきたのではないだろうか。

ソフト面を扱う場にいる私にとっては、女性の進出分野が増えてきたことは時代の要請であって、女性の力が認められた結果とは考えられない。このことは常に認識しておかねばならないと思う。増えてきた進出分野をどのように自分たちの分野としていくか、という課題の大きさばかりが気になっている。

建築の中のやすらぎ

河戸満喜子（建築士）

私が中学生時代を過ごしたのは、円形校舎と呼ばれた円柱形の建物でした。田舎でもあり、当時としては珍しい建物だったと思います。上から見ると1階の水飲み場がまるで台風の目のような螺旋階段、緩い弧を描くような窓は今でも鮮明に心に残っています。後に普通の矩形の教室で学ぶようになった時、円形校舎の持つ安らぎ、暖かさ、楽しさが思い出され、四角い教室が、ただ勉強するだけの随分と冷たい空間に感じられたものでした。

設計の仕事をするようになってからは、経済性、構造上、施工上の制約を横目に何かと曲線を使おうとしたのも、この円形校舎の影響があったのかもしれません。

また、住宅の設計の際、施主の中に何よりも食堂の1枚の戸に拘った主婦もいました。住宅雑誌の1ページにでも載っていたのでしょうか、アーチ型のガラス戸が希望でした。1日の大半を家で過ごす主婦にとっては、こんな事も居住性、耐久性と並ぶ大問題なのでしょう。

溢れる情報・高度な技術、新建材、目覚しい進歩を遂げる社会の中で、こんな取るに足らない拘りは軽視されがちだと思います。けれども中に住むのが人である以上、またこんな時代だからこそ、建築にもゆとりが必要なのではないでしょうか。

日常雑感

高橋昭子（関西大学建築学科助手）

以前、効率のよいかまどの採用が、農家の嫁を火の番から解放したが、同時につかの間の休息のひとときを奪ってしまったという話を住居学の本で読んだことがある。これは、当時の農家の嫁の立場を忘れたかまどという設備のみの改善への問題をなげかけた。最近の車公害、子供の非行、老人問題、通勤難、高層住宅の犯罪・騒音、ローン地獄など、どれをとってみても同様の疑問を感じる。子供、老人、いや人間の生活を忘れた感がするのである。

ところで、1970年代は女の時代といわれ、家計補助や生きがいを求めて外で働く主婦が増えた。また一方で、教育問題や生活環境問題を学ぶことから、多様な市民運動に目を向け、住民運動や消費者運動への主婦の積極的なとりくみがみられ、地域での主婦のパワーは拡大していった。

しかし、どうもそれだけでは限界があるようだ。もっとあたたかみのある、住みよい町づくりのためには、住宅や生活環境をどうすればよいのか。私は、世の男性方にもっともっと近隣社会のことに目を向けてもらいたいと思っている。それというのも、とりもなおさず男性の社会的な視野、能力、影響力の大きさを認めざるを得ないからだが……。

ALC 未踏の分野を拓く

ダイナミックで力強い壁面，ソリッドなファサード，風格ある重厚感，耐震・耐火・省エネ……。そうしたハイグレードの建築を高度な工業化で経済的に創るヘーベルグランデ。グランデはヘーベルの特性はそのままに，旭化成が世界で初めて開発した一体成型大型ＡＬＣ壁パネル。ＡＬＣの常識を破った幅1,800mmのパネルとして脚光を浴びています。



パネルは無開口と開口付きの２種。厚さ125mm・150mm，幅900～1,800mm，長さ2,700～4,200mm。いずれも10mmピッチ。ハイテク工場など，新しい分野の建築に次々採用され活躍中です。

旭化成建材株式会社

●東京03（507）7551●大阪06（347）3847●名古屋052(221)9654
●札幌011(221)0805●仙台0222(23)5155●金　沢0762(31)7188
●広島082(247)6131●高松0878(22)0305●福　岡092(721)7264

ヘーベルグランデ

世界初．常識を破った幅1800㎜一体成型大型ＡＬＣ壁パネル

セイコー電子工業谷津工場（千葉県習志野市）設計・施工＝鹿島建設



法令コーナー

編集委員会法令分科会

214

アメリカ、カナダの主要都市における容積移転制度

近年、わが国の建築行政施策の中で新しく注目を集めているものに、容積移転制度（ＴＤＲ制度＝Transfer of Development Rights、正確には開発権移転制度）がある。この制度は、簡単に言うと、ある敷地の未利用の余剰容積を他の敷地に移転、売却できるようにするものである。わが国ではまだ制度化されていないが、アメリカ、カナダの都市では実施例が多い。

ニューヨーク市

ニューヨーク市のＴＤＲ制度には、つぎの三つの手法がある。

(1) アーバンパークからの容積移転

これは、マンハッタンのミッドタウンにあるベストポケットパークで有名なペイリー公園やグリーンエーカー公園のような市民の憩いの場の設置を促進するために設けられた制度であるが、残念ながら現在のところ許可実績はない。

(2) ランドマークのある敷地からの容積移転

ニューヨーク市も他のアメリカの都市と同様、歴史的建築物の保存には力を入れている。市では約800の歴史的建築物にランドマークの指定を行い、その上空の未利用の容積をＴＤＲ制度によって他の敷地に移転、売却できるようにしている。ニューヨーク市の場合、移転できる先はランドマークのある敷地を含む街区内か、道路を隔てた敷地となっている。ただし、同じ街区内での容積移転は比較的自由であるが、道路を隔てる場合は都市計画委員会の許可が必要である。また、売却代金の一部はランドマーク建築物の維持管理に使われる。



写真①　ランドマークのインディアハウス。左が容積移転を受けた建物

(3) サウス・ストリート・シーポート特別地区（Special South Street Seaport District）

これは、フルトン魚市場と古い魚業倉庫からなる建物群と桟橋の古い帆船を改修し、地区一帯を海港博物館とする計画で、ウォール街を中心とする業務地区が広がるロウアーマンハッタンの中にある。現在、一部は完成し、フルトンマーケット（シーフード販売店と飲食店が入っている）、書店、ブティック店および帆船「北京号」などがオープンしている。休祭日は観光客で、また平日の昼食事には近辺のビジネスマンやＯＬらで賑わっており、ＴＤＲ制度を活用したユニークな成功例と考えられる。

これらの古いレンガ建物群はその抵当権を数銀行が取得し、オフィスビルに再開発される寸前にまで至っていたが、市がランドマークに指定し、上空の余剰容積の開発権の移転を認め、同時にこの開発権を銀行に譲渡することによって抵当権を抹消したものである。容積移転の方法としては容積を渡す街区（granting lot）を３街区、受ける街区（receiving lot）を11街区指定し、この間で移転を行う。こうした複数の街区間での容積移転はこの特別地区のみに認められたものである。



写真②　サウス・ストリート・シーポート特別地区。右がフルトンマーケット、左側遠方の高層ビルが容積移転を受けた建物の一つ

(4) 敷地統合制度（zoning lot merger）

ニューヨーク市にはもう一つ、ＴＤＲ制度ではないが、敷地統合制度（zoning lot merger）と呼ばれるものがある。これは所有者の異なる、用途上可分の敷地であっても10 feet（約３ｍ）隣接すれば同一の敷地と見なす制度であり、実質的に隣地間での容積移転を認めるものである。この利用例はかなり多いが、実態はよく把握されていない。



写真③　敷地統合制度を利用して建設されたトランプタワー（右）、左は同一敷地としたティファニー

サンフランシスコ市

サンフランシスコ市のＴＤＲ制度もニューヨーク市と同様、歴史的建築物の保護を目的としている。ランドマークとして251件を指定している。またつぎの二つの特徴がある。

一つは、保存の必要性、重要性に応じてランドマークを上下４ランクに区分し、上位２ランクについては保存を義務付けるが、その代償としてＴＤＲ制度の利用を認める。しかし、下位の２ランクについては保存するかどうかは事業主に任され、保存する場合に限ってＴＤＲ制度の利用を認めている。

もう一つは容積の移転先であるが、移転できるのは同じゾーニングエリア内かＣ－３－Ｏ（SD）地区に限られる。Ｃ－３－Ｏ（SD）地区というのは市が今後、民間活力を利用してオフィスビルを誘致していきたいと考えている地区である。

トロント市

トロントは、わが国では馴染みが薄いが、五大湖のオンタリオ湖に面し、セントローレンス水路沿いに発達したカナダ有数の経済都市である。市の人口は約60万人、周辺５市を含むメトロポリタン・トロントが約210万人である。オンタリオ州の州都でもあり、その風格を備えている。

トロント市のＴＤＲ制度（トロントではTransfer of Densityと呼んでいる）もアメリカの諸都市同様、歴史的建築物の保護が目的である。容積移転には市議会（council）の承認が必要とされ、手続きには相当時間を要する。実例は数件と少ないが、容積が１kmも先に移転する場合がある。



写真④　セント・アンドリュー教会(手前)とその余剰容積の移転を受けたサンライフ社ビル(後方)

おわりに

わが国でＴＤＲがまだ制度化されない理由としては、

①法的技術論が詰められていない。

②制度導入の目的が明確でない。アメリカ、カナダでは歴史的建築物の保存などを主眼とした利用のみに限っており、こうした取り組み方は学ぶべきと思われる。

③余剰容積を送り出す側は良いとしても、受け入れる側の敷地周辺で環境問題が発生する可能性がある。

④アメリカなどとは異なり、空中の容積利用についての登記等の権利処理法方法が一元化されていない。

などが考えられる。また、制度の導入が現在良好に機能している総合設計制度に悪い影響を与えるものであってはならない。

わが国に導入されるとすれば、ニューヨーク市のサウス・ストリート・シーポート特別地区のように、一方では公益性の高い、市民のためのアメニティ施設を整え、他方では民間活力を導入して特定地区の開発をするといった手法に応用できるように思われる。

（大阪市総合計画局建築指導部指導課指導係 寺田恭信）

浸透型・吸水防止剤　アクアシール

製鉄化学工業株式会社ポリマー事業部
大阪　大阪市東区北浜5－22住友ビル第2号館　Tel　06－220－8539
東京　東京都千代田区九段北1－13－5　日本地所第1ビル　Tel　03－230－8543

■はじめに

近年、建築物の総合的な耐久性向上が要求されるなか、特に外壁については建物の耐久性を左右するため研究開発が多くされている。

今回は、外壁に処理することにより、躯体への雨水の浸入を防止し、凍害、白華、汚れなどから建物を保護できる建材で、表面に被膜を形成しないため、外壁が打放しコンクリートや、石、タイルなどの建築物の新築、改修工事に適している、浸透型・吸水防止剤アクアシール 200Sを紹介します。

■特長

1．浸透型で通気性がある。

シリコーン化合物を含む透明でかつ、浸透性の良い溶剤型の建材であり、被膜を形成せず通気性を保持しているため水は遮断するが、水蒸気などの気体は自由に通過する。

2．汚れを防止し、美観を保つ。

3．エフロ現象（白華）を防止する。

4．塩害、凍害から建築物を守る。

5．耐アルカリ性に優れている。

6．塗布後に仕上げも可能。

■性能

吸水比、透水比、耐アルカリ性についての性能は表－1のとおりである。

■種類

種類はトップコート用の 200Sの他に仕上材の下地用のシーラーがある（表－2参照）。

■施工要領

施工要領は表－3のとおりであるが、特に次の点に注意する必要がある。

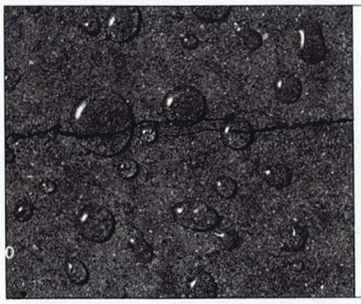
1．処理後の表面が変化しないため、塗り残しがないよう入念施工のこと。

2．有機溶剤を含んでいるため、密閉した場所での作業は換気を完全に行う。

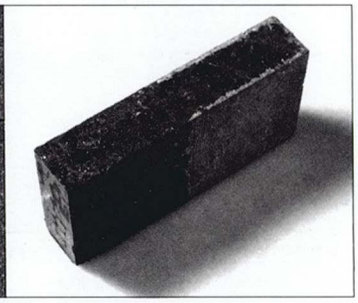
3．火気の付近での使用はさける。

建材委員／尾松一夫（大林組）

ヘアークラック部の撥水



アクアシールの浸透性（モルタル）



表－1　アクアシールの性能（吸水比試験300g／㎡刷毛塗布）

種別	吸水性		
	浸水後1時間	浸水後5時間	浸水後24時間
1：3モルタル　無処理	1.00	1.00	1.00
1：3モルタル　アクアシール塗布	0.02	0.05	0.14

表－2　種類と用途および塗布量

種類	用途（塗布体）	塗布量
アクアシール・200S	●打放しコンクリート、モルタル、プラスター、スレート板、PC板、リシン、スタッコなど吸水を防止し、老化、風化、凍害、汚れなどから護る。 ●打放しコンクリート、モルタル、タイル目地、レンガ、レンガタイルなどの白華現象の発生を防ぐ。	0.3～0.4ℓ／㎡ （約50㎡／16ℓ缶）
	●ALC板、コンクリートブロックなど吸水の大きいものも同様に老化、風化、凍害、汚れなどから護る。	0.4～0.5ℓ／㎡ （約40㎡／16ℓ缶）
アクアシール・シーラー	●リシン、吹付材、ペイントなどの下地に塗布することにより、下地の吸収防止、白華防止の役割を果たすと共に、下地と各種仕上材との接着性および耐水性を一段と向上させ、ふくれ、浮き剥離などの事故を防ぐ。	0.2ℓ／㎡ （約80㎡／16ℓ缶）

表－3　施工要領

	施工要領
事前調査	1．処理面の調査 新築か補修かによって又基材の種類によって施工の工程、数量、施工時期（養生）等に影響があるので充分に確認する。 2．処理面に旧塗膜がある場合特に試し塗りを必ず実施しておく。
前処理	1．処理面は汚れ、油分などを除去し清浄で且つ完全に乾燥した状態にする。 処理面が汚れている時、旧塗膜が残っている時はけれん又は高圧洗浄機にて除去し水洗後の乾燥を充分に行う。 2．処理面のクラック、ジャンカ等のある場合前もって補修する。 （モルタル、シーリング等） 但し壁面で0.3㎜幅以下のクラック、ピンホールの場合にはそのまま補修なしで塗布しても充分な防水効果が得られる。 3．処理面への影響及び効果確認のため試し塗りを実行する。 処理面の風合変色及び樹脂等にウキなどが出る事もたまにあるので、そのチェックとして且つ充分な効果を出すための塗布量決定チェックとして実施する。 4．溶剤の影響を受ける可能性のある周辺に対しては必ず養生する。
施工	1．稀釈せずそのまま使用する。 2．塗布方法はスプレー法（専用スプレーがある）、刷毛ローラー及び浸漬法などいずれの方法でも良く、作業環境を考慮の上最適な方法で施工する。 3．処理面が乾燥すると未処理との区別がつきにくくなるので、未処理箇所が残るのを避けるため、一つのブロック毎に中断することなく連続して処理する。 4．処理面にむらなく均一に塗布し基材内部に充分吸収させるためには一度に厚塗りせず2～3回に塗り重ねる。 浸透型なので追いかけ塗りが可能である。
養生、その他	1．処理面は20℃、4～6時間で充分な効果を発揮する。 2．処理面以外に付着した場合には乾燥するまでにラッカーシンナー、又は塗料用シンナーで洗い落とす。 3．シーリング材（ポリサルファイド系、アクリル系、ポリウレタン系、シリコーン系）は侵される心配はない。（但し、硬化後）場合により僅かに膨潤することがあるが、溶剤揮散後は元の状態に戻る。 4．処理面にシーリング材を施工する場合にはプライマーを使用することによって充分な付着が得られる。 5．アクアシールシーラーの施工後塗装する場合は20℃ 4時間後に施工する。
注意事項	溶剤タイプなので事前に小面積の試し塗りを必ずする。

受託試験における鉄筋コンクリート用異形棒鋼の引張及び曲げ試験に関する調査報告

1. 集計対象

集計対象とした異形棒鋼は、材質記号SD30またはSD35の素材（JIS G 3112－1975「鉄筋コンクリート用棒鋼」）及び同材質記号の圧接材（JIS Z 3120－1980「鉄筋コンクリート用棒鋼ガス圧接継手の検査方法」を適用する圧接棒鋼）である。

2. 集計方法および集計結果

2.1 引張試験

異形棒鋼の引張試験結果について、材質記号及び径（呼び名）別に、降伏点、引張強さ及び伸び（素材のみ）のデータ個数（試験本数）：n、平均値：$\bar{x}$、標準偏差：σ、変動係数：v、最大値：x_{max}。及び最小値：x_{min} を求めた。

圧接材の集計結果を**表－1**に示す。

2.2 曲げ試験

異形棒鋼の曲げ試験結果について径別及び材質記号別に試験本数、合格本数及び合格率を求めた。また圧接材については観察不能（ふくらみ終端部で破断したもの）の本数を同表に示した。

圧接材の集計結果を**表－2**に示す。

3. まとめ

3.1 圧接材の引張試験結果について

降伏点及び引張強さを平均値でみると降伏点はＳＤ30では37～38 kgf/mm²に、ＳＤ35では36～42kgf/mm²の範囲に分布している。また、引張強さはＳＤ30では54～58kgf/mm²に、ＳＤ35は56～61kgf/mm² の範囲に分布している。

次に不合格率についてみると99.2%が合格（母材破断かつ引張強さが母材の引張強さ以上）している。また、不合格のものについてその要因を調べてみると**図－1**に示すように、母材の引張強さ不足及び引張強さ過剰（ＳＤ30の場合）のもの52%及び圧接面不良のもの48%（試験本数の0.39%）となっている。

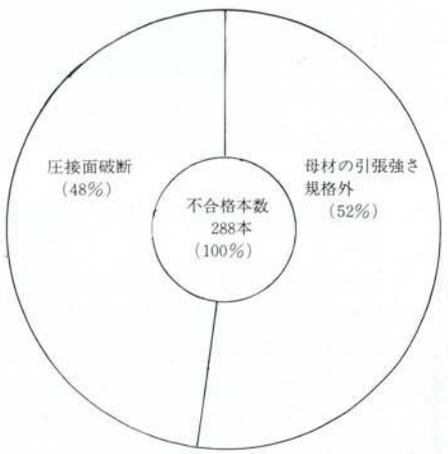
3.2 圧接材の曲げ試験について

曲げ試験については、合格率が99.5%であり不合格のものは曲げ角度約30°～45°で圧接面が破断するものが多くみられた。なお、今回の集計では前年度までと比べて曲げ試験の本数が大きく減少した。

4. あとがき

以上の結果から、圧接材の試験結果については引張試験及び曲げ試験とも前回とほぼ同じ合格率であった。なお、その他詳細については当試験所機関誌**「GBRC41号」**を参照されたい。

おわりに、昭和60年11月１日よりJIS G 3112「鉄筋コンクリート用棒鋼」が改正公示されていることをお知らせしておきます。



図－1　圧接材の引張試験結果による不合格要因の内訳

表－1　圧接材の引張試験に関する集計結果

径	材質記号	降伏点 n (本)	降伏点 $\bar{x}$ (kgf/mm²)	降伏点 σ (kgf/mm²)	降伏点 v %	降伏点 x max. (kgf/mm²)	降伏点 x min. (kgf/mm²)	引張強さ n (本)	引張強さ $\bar{x}$ (kgf/mm²)	引張強さ σ (kgf/mm²)	引張強さ v %	引張強さ x max. (kgf/mm²)	引張強さ x min. (kgf/mm²)	JISの規格上限値未満の本数(本)	JISの規格上限値をこえる本数(本)	圧接面で破断した本数(本)
D10＋D10	SD30	12	38	1.2	3.1	39	36	12	56	2.2	4.0	59	51	0	0	0
	SD35	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
D13＋D13	SD30	73	37	1.6	4.3	39	33	77	54	3.5	6.5	59	33	2	0	3
	SD35	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
D16＋D16	SD30	388	37	1.5	4.1	41	31	388	56	2.2	4.0	62	46	2	0	2
	SD35	9	36	0.9	2.4	37	35	9	56	3.0	5.2	61	53	0	0	0
D19＋D19	SD30	2286	37	2.1	5.6	50	32	2286	56	2.5	4.5	68	48	1	13	3
	SD35	3227	39	1.8	4.5	50	29	3241	60	2.9	4.8	73	39	4	0	8
D22＋D22	SD30	3777	37	1.7	4.8	51	30	3783	56	2.6	4.6	67	40	11	24	7
	SD35	7320	39	2.0	5.2	53	31	7360	60	3.0	5.0	73	32	21	0	20
D25＋D25	SD30	2540	37	1.7	4.7	46	31	2545	56	2.5	4.4	65	25	14	10	18
	SD35	11566	40	2.2	5.5	51	31	11589	60	3.0	4.9	77	24	17	0	46
D29＋D29	SD30	524	37	1.8	4.8	42	32	526	56	2.7	4.7	63	29	5	0	10
	SD35	1951	40	2.3	5.8	50	28	1960	61	3.3	5.5	77	31	9	0	9
D32＋D32	SD30	625	37	1.6	4.4	46	27	626	56	2.6	4.6	67	33	3	6	9
	SD35	406	40	2.3	5.8	47	32	409	60	4.3	7.2	70	36	7	0	3
D35＋D35	SD30	98	37	2.0	5.4	43	34	98	57	3.2	5.6	64	52	0	1	0
	SD35	3	42	0.6	1.4	42	41	3	60	0.0	0.0	60	60	0	0	0
D38＋D38	SD30	8	37	0.5	1.4	40	36	8	57	0.8	1.5	59	56	0	0	0
	SD35	6	41	0.4	1.0	42	41	6	61	0.5	0.8	62	61	0	0	0
D51＋D51	SD30	40	38	1.8	4.8	44	34	40	58	1.9	3.3	63	54	0	0	0
	SD35	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

備考　1) 引張強さのnは集計対象としたデータの本数に相当。
2) （引張強さのn）－（降伏点のn）は、降伏点が現われなかったもの（降伏点以下で破断したものを含む）の本数。

表－2　圧接材の曲げ試験に関する集計結果

種別	径	材質記号	試験本数 (本)	合格本数 (本)	合格率 (%)	観察不能本数(本)
圧接材	D16＋D16	SD30	18	18	100.0	0
		SD35	——	——	——	——
	D19＋D19	SD30	92	92	100.0	0
		SD35	126	126	100.0	0
	D22＋D22	SD30	167	167	100.0	0
		SD35	318	318	100.0	0
	D25＋D25	SD30	111	111	100.0	0
		SD35	453	451	99.6	2
	D29＋D29	SD30	67	67	100.0	0
		SD35	87	87	100.0	0
	D32＋D32	SD30	80	75	93.8	5
		SD35	45	44	97.8	1
	D35＋D35	SD30	12	12	100.0	0
		SD35	——	——	——	——

注　1) 主にふくらみ終端部破断となり観察不能のものは含まない。
2) 主にふくらみ終端部破断となり圧接面の検査（観察）ができなかったものの本数。

本試験所●所 在 地……〒565 吹田市藤白台５－８－１（阪急北千里駅より北西約１km、国立循環器病センター西隣）
●電　　話……(06) 872—0391(代)
●営業時間……平日：午前９時～午後５時、土曜日：午前９時～正午

住環境維持のソフトウエア（その1）

岡崎憲一／坂下貞次

—分譲住宅における住宅管理組合の結成—

1. 分譲住宅の管理

公団は、分譲住宅を全国で20万戸、関西支社においてはその⅙にあたる約4万戸を供給してきました(**図－1、2**参照)。その大きな特徴は約85%が中・高層の集合住宅（マンション）であることです。同じような集合住宅形式である賃貸住宅との大きな違いは、

①所有権を有すること。

②その所有権も、専有部分と共有部分とがあること。

③共有部分（土地、建物の躯体、屋根、廊下や階段室、給排水施設、および道路等）に対して、その持ち分に応じた維持管理の責任を負っていること。

があげられ、それが、賃貸住宅と違う自主的な管理システムを必要としています。

公団では、昭和39年まではその共有部分の管理について、公団と譲受人との間で譲渡契約と同時に「共有物管理業務委託契約」を締結し、賃貸住宅を管理する組織が分譲住宅の管理も行ってきました(受託管理)が、その経過の中で、

①昭和36年6月、集合住宅管理の専門機関として㈱団地サービスを設立した。

②昭和37年4月、「建物の区分所有等に関する法律」が制定された。

③公団に管理委託することにより、居住者の自主維持管理意識が低下し、スムーズに管理が行えなくなった。

などの理由により、管理委託制度を改め、昭和39年から自主的管理を行う現在の「管理組合制度」が出来上がりました。

マンションでの共同生活は、いまや大都市での主流となってきていますが、その生活の良し悪しを決定するといっても過言ではない「管理組合」の結成と運営の方法について、公団の分譲住宅の例をひきながら、ご紹介したいと思います。

31～39	40～44	45～49	50～54	55～59年度
(4.7)	(12.9) 5,060戸	(13.7) 5,384戸	9,753戸(24.9)	17,191戸(43.8)
1,828戸				(合計39,216戸)

図－1　関西支社分譲住宅年代別供給戸数(昭60.3.31現在)

低層	中層	高層
5,665戸 (14.5%)	26,789戸　(68.3%)	6,762戸 (17.2%)
		(合計39,216戸)

図－2　分譲住宅形式別供給戸数

2. 住宅管理組合の結成と規約作成

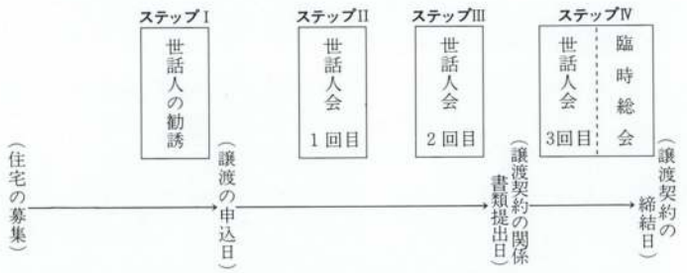
a. 世話人会から臨時総会まで

マンションという共有財産の住まいでの共同生活で、良好な住環境を維持するためには、まず〝ルールづくり〟が必要となります。

区分所有法（以下「法」といいます）では、ルールすなわち規約を定めるかどうかは、全く任意となっていますが、良好な住環境を維持するための大切なポイントが共有物の管理にあるといわれていることからしても、この**共有物の管理の方法を具体的に示す規約**は、ぜひ定める必要があります。



公団では、分譲住宅（マンション）の譲渡申し込みをされてから譲渡契約締結までの期間に、住宅の譲受の申し込みをされた皆さんの中から、適宜、規約づくりの世話人となっていただく方を勧誘し（ステップⅠ）、その方々に集まっていただき〝**世話人会**〟を開催しております(ステップⅡ)。世話人会では公団の作成した〝マニュアル〟を参考として、公団や、管理組合運営に関して豊富な経験をもつ公団の関連会社の助言をもとめながら、**規約の案文づくり**を実施してゆきます(ステップⅢ)。この案文は、住宅の譲渡契約を締結していただく日に、〝**臨時総会**〟として開催される管理組合総会席上で、世話人会から規約案として提示され、ご契約いただいた皆さんで審議・可決のうえ、管理組合の根本規則となります(ステップⅣ)。



図－3　世話人会から臨時総会までのステップ

住宅・都市整備公団協力業者(PR)

総合建設業・建築土木一般
株式会社 金山工務店
代表取締役　佐野友彦
本社　〒540 大阪市東区内淡路町1－2　電話　06－942－5461

佐藤工業株式会社
取締役社長 佐藤欣治
常務取締役大阪支店長 梅木正二
本　社　〒103 東京都中央区日本橋本町4－8　電話 03－661－1231(大代)
大阪支店　〒541 大阪市東区北浜1－25　電話 06－203－7221(代表)

このように、臨時総会で初めてお互いの顔を合わせることとなる住宅譲受人の皆さんが、スムーズに管理規約を定めることができるのは、過去の数多くの分譲住宅供給の実績にたつ公団ならではの知恵と経験が生かされたマニュアルが、皆さんの信頼を得ていることにほかなりません。

マンションで共同生活をする皆さん（法でいう区分所有者）が、これからの円満で楽しい共同生活を送ろうとすれば、お互いの「エゴ」を押さえねばならず、そのためには、区分所有者相互が客観的なルールをつくってそれに服する、という社会一般の当然すぎるほど当然な原理が、この規約づくりの過程において意識されるものとして、「世話人会」や「臨時総会」が運営されています。

また、法はその第３条で「区分所有者は、全員で、建物並びにその敷地及び附属施設の管理を行うための団体を構成し……」と定め、マンションのような区分所有建物においては、全員を構成員とする〝**管理組合**〟という団体が、当然に存在することをうたっています。当然に存在する団体ではあるのですが、譲渡契約の当日に、初めて共同生活者として顔を合わせる皆さんにとっては、全員で、全員のための「団体」であることを認識する（規約について全員のための「ルール」であることを認識し合ったのと同様に）ための有意義な総会として、この「臨時総会」が運営されています。

「世話人会」の開催から「臨時総会」開催までの期間は、短期間であり、その間に〝ルールづくり〟をすすめるのは、なかなか大変な作業ですが、区分所有者としての皆さんが、共同生活を開始された後に、初めて、〝ルールづくり〟からスタートするという場合における困難さを考えますと、分譲する側で、その経験を生かしながら、共同生活のスタートまでに一定の「ルール」作成に関与するということは、分譲する側の大切な業務ではないか、と考えます。

b．管理組合規約

さて、管理組合の憲法とでもいうべき規約の内容はどのようなものでしょうか。

法は、その第30条で「建物又はその敷地若しくは附属施設の管理又は使用に関する区分所有者相互間の事項は、この法律に定めるもののほか、規約で定めることができる」としています。建物等の管理や使用については、その建物のおかれた状況によって異なるため、規約による維持運営を広く認めています。

規約の具体的な内容は、公団の分譲住宅の例でみますと、**表－１**のようになっています。

以上のように、「管理組合」という全員参加の団体は、法の趣旨からして「当然」に存在するのですが、このことから、共有物を共同で管理する義務も当然に発生することになり、法で任意に定めることとしていても、その義務を円滑にすすめてゆくための「ルール」である規約づくりは必ず必要となることがお判りになると思います。

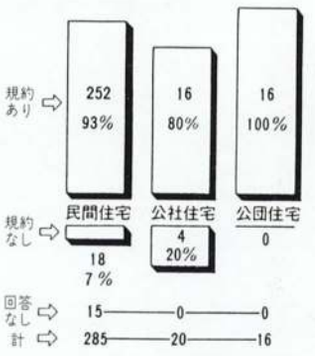
現在、分譲マンションの大半では、このような共同生活を営む皆さんによる自主的な組織とルールづくりが一般化するようになりましたが、この一般化の過程の中で、公団は先導的な役割を担ってきました。

たとえば、今から約８年前の昭和52年時点の調査（出典：「集合分譲住宅の管理と実際」（財）住宅管理協会）において、規約を100％定めているのは公団の分譲住宅だけであり、その他の分譲住宅では７％～20％の住宅が規約を定めていない状態にありました（**図－４**参照）。しかも、規約の制定手続きを、共同生活を営む皆さんの集会の議決による、という最も望ましいシステムで行っているのも、「公団の事例のみ」という状態でした（**図－５**参照）。

このように見てゆくと、共同生活のルールづくりの普及に果たした公団の役割は非常に大きかった、と評価できるのではないでしょうか。

表－１　管理組合規約

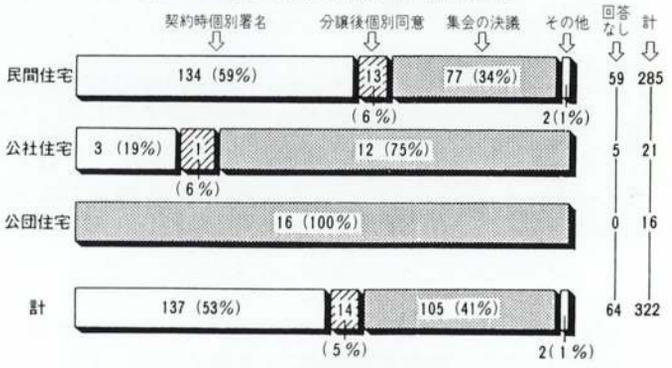
1.	総　　則	組合の名称・目的・規約の効力・管理対象物の範囲など。
2.	組合の業務	業務の内容・範囲・業務の委託など。
3.	組 合 員	組合員の資格・届出義務など。
4.	組 合 費	組合費の内訳・負担割合・修繕費の定め・承継人に対する債権の行使など。
5.	管理対象物の使用方法・共有地の専用使用・住宅と管理対象物の持ち分の分離処分禁止など。	
6.	役　　員	役員の選任・任期・義務・責任など。
7.	総　　会	総会の招集・出席資格・議決権・議決事項・議事録等。
8.	理 事 会	理事会の構成・招集・議事など。
9.	会　　計	収支予算の作成・決算報告・帳簿の保管など。
10.	雑　　則	細則の設定・規約の保管に関することなど。
11.	附　　則	規約の適用期日・初年度備品の購入費用など。
12.	そ の 他	上記5.の中で、「別に定める」としているのが通常ですが、住宅の模様替えや修繕に関する「協定」や、共同生活の秩序を維持するための「協定」（たとえば、住宅を他の用途に使用しない等）など。



	民間住宅	公社住宅	計
規約を定めることを知らなかった	0	0	0
規約を定めようとしたが実現しなかった	1	0	1
規約を制定する必要がない	9	3	12
今後、規約を定める計画である	4	0	4
回答なし	4	1	5
計	18	4	22

注）公団住宅では規約がない場合はないので、その分は表記していない。

図－４　規約の有無と規約がない場合の理由



図－５　規約の制定手続き

株式会社　**錢高組**

社長　錢高一善

本社・大阪支社　大阪市西区西本町２－２－11　電話06－531－6431

総合建設業

前田建設工業株式会社大阪支店

取締役支店長　川西光治

大阪支店　〒534 大阪市都島区東野田町２－４－20　住友銀行京橋ビル
電話 06－353－7891

シーリング防水／ＰＣプレハブ住宅防水／屋上防水／外壁化粧防水／各種樹脂注入工事／商業ビル・集合住宅
外装改修工事と総合診断

技術というひかりが建築物を守る



新築工事、改修·補修工事の防水施工に28年の実績を持つ、
技術のマサル工業が責任を持ってお手伝い致します。

●新　築　工　事——お客様のニーズに合ったシーリング防水の納まり・目地設計・材料選定を致します。優れた品質管理下で、良心的な施工を致します。

●補修・改修工事——実績のある技術陣の調査によって、適切な診断を致します。適切な施工方法で、外装全体のシーリング防水・化粧防水・面防水施工をし、建物を老朽化から守ります。

加　入　団　体

日本シーリング工事業団体連合会
東日本シーリング工事業協同組合
全日本プレハブ建築防水協会
東日本ロンプルーフ防水事業協同組合
フジクラプラスウォール会
ゴムアスファルト防水工事業協同組合
日本アスファルト防水工業協同組合
外壁補修工事業協同組合
全国アロンコート・アロンウォール防水工事業協同組合

豊富な実績で新しい防水技術に挑戦する

マサル工業株式会社

〒135 東京都江東区佐賀1-9-14 ☎03(643)5911(代)

美しき防水

〈下地処理システム〉 〈防水＋化粧＋躯体保護〉

「アロンACC工法」と「アロンウオール工法」の一体化が改修効果を高めます。

数多くの実績で、改修時代をリードする。

「コンクリート神話の崩壊」がマスコミで大きな話題となり、コンクリート建造物に真剣なまなざしが注がれるいま、改修・補修による建物の若返り効果に対する期待が日々高まっています。下地改修という部門と、外壁化粧防水という部門をドッキングさせた東亜合成化学の『リフレッシュ作戦』こそ新しい時代の改修システムであり、建物への思いやりなのです。

責任施工(防水保証付)

アクリルゴム・屋上防水工法 アクリルゴム・外壁化粧防水工法

アロンコート®・アロンウオール®

下地処理システム **アロンACC工法**

化学とくらしを結ぶ

東亞合成化学〈建材事業部〉

本社 東京都港区西新橋1-14-1 〒105 ☎03(597)7342

大阪支店(203)3171・営業所/仙台(91)5665・名古屋(541)1181・富山(42)2311・高松(25)2671・広島(228)5430・福岡(721)1902

全国アロンコート・アロンウオール防水工事業協同組合 建設省・東計振発第359号認可

YOKOHAMA

高層建築に生きるシーリングテクノロジー。ハマタイト

新時代の街のイメージリーダーとも言える高層ビルや中高層ビル。
それら大型建築を陰でしっかり支えているのが、ひとつには建築用弾性シーリング材です。
横浜ゴムのシーリングテクノロジーをかたちにした《ハマタイト》。急速に進展する建築工法の技術革新や
建築外装部材の多様化、高品質化、
あるいは新素材の導入化が著しい中で、たえずニーズに対応。
日本の高層建築を代表するビルのほとんどに採用され、
確実にこの分野のリーダビリティーを
発揮しています。



基材別に7タイプ。
カラーバリエーションも豊富な《ハマタイト》。
建築用弾性シーリング材の適材適所を実現!

- ●2成分形シリコーン「シリコーン70」
- ●2成分形変成シリコーン「スーパーII」
- ●2成分形ポリサルファイド「SC-500シリーズ」
- ●2成分形ポリウレタン「UH-30」 ●1成分形変成シリコーン「スーパーワン」
- ●1成分形ポリウレタン「シールエース」 ●1成分形シリコーン「SS-310」

ニーズをかたちに

ハマタイト

横浜ゴム株式会社 ハマタイト事業部
〒254 神奈川県平塚市中原上宿900 ☎0463(31)3002
※詳しい資料、お問合わせは、上記へどうぞ。



けんちくの眼

東　孝光
大阪大学工学部教授

山田耕蔵
大阪府建築部建築指導課長

高田　昇
COM計画研究所代表

井上司郎
松村組取締役副社長

正月号から6月号まで上記の4氏が担当

建築と身体感覚

近頃、街でピカピカ、ツルツルの建築を見かけることが、やたらと多くなった。平滑なガラスや金属板、光沢のあるタイルなどによって、まわりの環境を映し込むなど、建築の表現に新しい手法が加わったことは悪くない。楽しいことでもある。しかし一方で建築群の大規模化や複合化に併なって、巨大さや壮大さのみが強調され、人間の眼や手の届く範囲にくると途端に見る楽しみが急速に衰えてしまう現象と、このツルツル、ピカピカの安易な多用とは無関係ではないように思われる。

いうまでもないが、建築には少し離れての眺め、近寄っていく時の変化、細部を見上げての味わい、中に入って囲まれての空間感覚の喜びなど、無数の見方や楽しみ方が仕込まれていて、はじめて建築なのだ。とくに、この一歩踏み込んで建築に接する時の身体的な感覚、肌触りや手触りを感じさせる楽しみ、細かな凹凸の陰影や模様を味わい読み解く喜び、などが失なわれてはならない。設計組織の巨大化、合理化、分業化のなどの中で、いつの間にか個人の癖やこだわりといったものが排除され過ぎてしまい、つくる人たち自体の身体感覚が圧殺され、結局、頭脳は反応しても身体感覚には直接訴えてこない建築が現われてくる、ということのようだ。　（T・A）

都市の美観を考える（その3）

都市の景観を構成している要因は多いが、なかでも影響力のあるものは工作物、なかんずく建築物である。明治初期以来多数の日本人が欧米を初め都市先進国に学んだが、その実効は産業振興に表れて、街の景観には及ばなかった。それは宗教の関係もあるが、独逸の主君のように四百年も前に都市計画の中心に教区教会の用地を確保させ、それに永年かけて今でも世界第一級の（音楽的に見ても）聖堂を作り、建物に設けられたオルガンは建物とともに景観と音楽を保ち続けている。

日本古来の街と建物は、古くからある音楽（民謡、祭りなど）とはマッチしていたようだ、しかし文明開化以来の近代都市に入ってから日本の建築と音楽は関連がなくなってしまったと考えられる。音楽そのものが国富と関係ないと見られたこともあったが、国民の多くが実際に魂をゆり動かされるような音楽に直接に接する機会がなかったことも災いしたのだろうし、日本全体が今でも音楽文化を吸収消化できるほど心が豊かでないともいえる。今後日本の市街地が生産的建築だけでなく、本格的な音楽堂やオペラハウスなどを備えるには、まずもっと音楽に親しむ要があると考える。　（K・Y）

新しい盛り場への試み

かつて光り輝いていた伝統ある盛り場が、沈滞を余儀なくされていた中で、新しい活性化の動きが進みつつある。大阪の新世界、神戸の新開地がその例だ。それらのまちでは、人びとの遊び方が変わり、住まいが郊外化し、大手の資本がレジャー産業をリードするなど、共通の問題をかかえてはいる。しかし、古い盛り場がすたれていくのは時の流れだ、と割り切ってよいとは思わない。盛り場は庶民の解放区であり、都市個有の文化を育くみ、都市に多彩な表情をつけ加えていく重要な役割をになっているのだ。

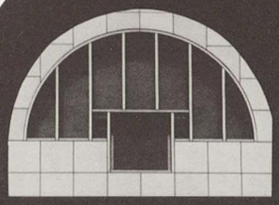
神戸・新開地では、地元の商売人、住民が立ち上がり、まちづくり協議会ができた。そこで二年間近く勉強し、考えぬいたあげくに、一つのビジョンが生まれ、いよいよ手づくりの盛り場再生事業にのり出すことになった。そんな中で最近、芝居小屋が復活して女性の人通りが増えるという明るいニュースがあり、キリスト教会と隣り合う飲食店街が共同ビルづくりの相談に入った。市が地元に協力するために取得した土地を生かし、まちづくりセンターとコーポラティブ住宅を自力でつくる計画も浮上してきた。盛り場の魅力は、何といっても異なったものが雑居し、共存するところからかもし出される計算しがたい雰囲気にある。盛り場再生の動きの中で、地元の知恵とプランナーの共同で、今までにない建築の表情、街角が生まれることを期待したい。　（S・T）

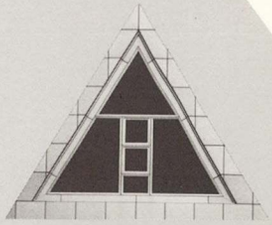
建築業界の現況とこれから

万年成長産業といわれてきた建築業界もサバイバルの時代に入った。公共工事は年々減少し、民需も軽薄短小の傾向である。民間建築市場のタタキ合いはまことに凄まじい。弱肉強食の経済競争原理そのままの反映にほかならない。このままでは数十万といわれる業者の浮沈にかかわる。業界のすすむべき方向は新市場の開拓と、それへの参入であり、今一つは時代の要求に応ずるものを自ら創り出し、ユーザーに提供することであり、さらには業界の再編成であろう。公共工事にも民活が叫ばれ、一方省エネ市場、高齢化対策などの社会的変化、メカトロニクス、バイオテクノロジー、ニューメディアなどの新技術に対応してゆく建築の需要は多種多様である。

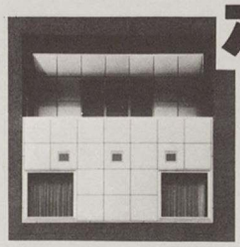
建築は生産面からいえば産業技術の集大成である。その技術はますます専門化し、細分化し、高度となってゆく。生産の過程よりいえば、ユーザーの企画があり、設計、施工、監理のプロセスをふんで建物が完成する。凄まじい技術の進歩と、社会の変化の中にあっては、このすべてを包含した巨大組織の企業はいざ知らず、今まで通りのおのおのの狭い職能領域に閉じこもっていては、とりのこされる。また、それだけの能力もない。あらゆる分野の専門家の諸領域を包含した大同団結による業際的プロジェクトが、そろそろ数多く出てきてもよいのではないかと考えている。　（S・I）

一時代を画したロバート・ヴェンチューリの「建築の多様性と対立性」の出版から20年、そして〝ポストモダニズム〟という言葉がアメリカで盛んに使われ出してから10年目を迎えた本年、〝ポストモダニズム〟の10年を、それに先行したラディカルな10年との関係において、さらにモダン全体の大きな枠組みにおいて、見つめ直し、今後のデザインの動向を探るために、本特集を企画しました。
〝ポストモダニズム〟がいわゆる〝モダニズム〟との関係においてどのような思潮領域に属するものか、建築ジャーナリズムをにぎわし、さまざまな批判を受けながらも現代デザインの中で生きつづけてきた〝ポストモダニズム〟の一端を解剖してみたいと思います。
建築デザインのみならず多角的なデザイン領域からの視点を交錯させることを試みておりますが、この〝ポストモダニズム〟なる怪物に対しては、今少しの歴史的経過の中でまた語られることも必要ではないかと思われます。
巻末には、現代のわが国の建築デザイン思潮をリードするジャーナリズムの中で、〝ポストモダニズム〟がどのように登場し、扱われてきたかを資料的に可能な限り客観的に紹介しております。





現代デザイン
特集
ポストモダニズム10年





芸術史・デザイン史におけるモダンとポスト・モダン
阿部公正
ポスト・モダンと日本の伝統―末期的近代の動向―
向井正也
アンケート
ポストモダニズム10年―私とポスト・モダン―
梅澤修／赤坂一之／岡山伸也／栄久庵祥二／岡田稔弘／太田博信＋4／駒田楊子／有村桂子／難波和彦／池上俊郎／林昌二／岡橋作太郎／久徳敏治／鈴木良介／紙野桂人／柴田正己／佐野潤一／鷲見康夫／北辻良央／江田修司／上野千鶴子
ポスト・モダンのジャーナリズム
松葉一清
資料
ポスト・モダンとその周辺（1967～1985）
あとがき
「ポストモダニズム10年」―編集を終えて―

本号特集編集幹事
藤田治彦／田附尚／田中直人／足立啓／岡田信幸／奥村礼子　金澤成保／杉本章子／中山徹／本多友常

芸術史・デザイン史における モダンとポスト・モダン

阿　部　公　正

はじめに

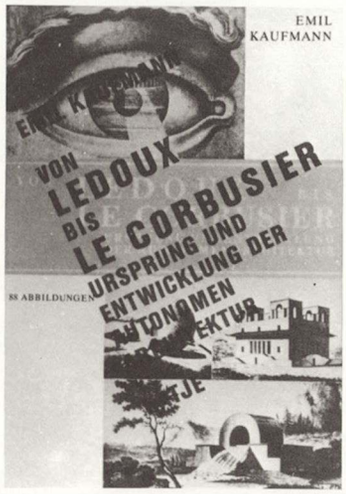
いうまでもなく、「モダン」(「近代」) という語は、「現在に近いころ」を指し示す単なる時代区分のための用語にとどまるものではない。歴史のなかでこの語が使われるとき、そこにはつねに、自らの時代を、過去の時代との関連において新しいものとして確立しようとする意識が含まれていた。

だが、20世紀のヨーロッパでは、この語はもっとラジカルな意識を含むこととなっている。世紀末のウィーンを論じたカール・E・ショースキーによれば、すでに18世紀において「モダン」という言葉は、「古代(エインシエント)」の対立語として、古典主義的古代との対照を意味するものであったが、この100年間のうちに、この語は、われわれの生活と時代についての知覚を歴史全体から区別するものとなった。つまり「近代建築、近代音楽、近代哲学、近代科学――すべてこれらのものは、過去から脱してではなく、いな過去に抗してともほとんど言えず、むしろ過去とは無縁に自己規定を行なっている」のである。(1) われわれは、ショースキーの指摘しているような「モダン」の意識を――若干のニュアンスがあるとはいえ――すでにオットー・ヴァーグナーのうちに、また20世紀のペーター・ベーレンスとそれに続く建築家たちのうちに認めることができる。また、キュビスム以降の多くの画家たちのうちにも、それを認めることができるだろう。

それゆえ、そのようなモダンの歩みのなかには、歴史の連続的な発展線上では考えられないような大いなる試みが見られる一方、誤りないし逸脱と見られるような企てのあったことも否定できない。また、「近代」がつねに「反近代」との拮抗のなかで進められてきたことも、見逃すことのできない事実である。「近代」の問題が、しばしば「近代の超克」の問題として論ぜられてきたのは、そうした「近代」の逆説的構造(2)に由来するものだろう。

一方、「ポスト・モダン」という言葉も、はじめから意図的に多義的であったと思われる。それは「後」モダンであるのか、「脱」モダンであるのか、それとも「反」モダンであるのかと問うたところで、そのいずれでもなく、またそのいずれでもある、という答えが残るだけだろう。どのような表現形式をとるものであれ、つまるところ「ポスト・モダン」は、「モダン」との関連におけるひとつの美的アプローチを示す言葉だ、ということになるだろう。それゆえ「ポスト・モダン」ないし「ポストモダン」についての言明はつねに主観的であることを免れえないように思われる。だが、いまではこの語は芸術ばかりでなく知的活動の多くの領域で定着しつつあるのだから、この小論では、「モダン」と「ポスト・モダン」をめぐって、いったい芸術史やデザイン史の上に何が起こっているのか、その一部分でも考えてみることにしよう。

1．『ルドゥーからル・コルビュジエまで』(カウフマン)



かつてウィーン学派の美術史家のひとりエーミル・カウフマンは、『ルドゥーからル・コルビュジエまで』(1933)という不思議な題目の本を書いた。[3] そのときカウフマンにとっては、18世紀末のフランスの新古典主義（ネオクラシシズム）建築のうちには20世紀のモダン・ムーヴメントの先駆的なものが含まれていた（のちにふれるように、この解釈をめぐってはいろいろの見解が登場することとなる)。 ところがほぼ2世紀ほど経った20世紀末の今日、ポスト・モダンの建築の動向のうちに——その動向を一概にどのようなものと規定してしまうことはできないにしても——しばしばこのネオクラシシズムとのつながりが認められることも、否定できない事実である。ネオクラシシズム建築の解釈は、ポスト・モダン建築の解釈と無関係ではなさそうだ。

カウフマンは、フランスの17世紀半ばから18世紀半ばに至る建築（古典主義）と、それ以後19世紀初頭まで続く建築（新古典主義）とを明確に区別し、後者においては、形式の諸関係は美的カテゴリーであるよりもむしろ倫理的カテゴリーになっている、と説く。彼によれば、「1770年から1790年に至る間に、ヨーロッパでは社会のシステムを完全に変革してしまうような大きな革命が準備されていた。ちょうどその時期に、イマヌエル・カントの著作が円熟期を迎えていた。それはけっして偶然ではない。ひとつの出来事からいまひとつの出来事へとたくさんの結合線が走っているのだ。重要なのは、因襲的なものからの離脱——今日では決定的な離脱と言えるような離脱——なのだ。つまり、明確に区別する境界線をはっきりと意識的に引くこと、すなわち新たな自律性への大いなる歩みが重要なのだ。……カントが、それまでの他律的な道徳に代えて自律的な人倫を確立したのと同じころ、ルドゥーは自律的建築への基礎を固めたのである」。[4] カウフマンは、一方ではフランス革命とカントの『実践理性批判』(1788）を大きな出来事として考えながら、他方では、古代のモティーフを用いつつ建築体の再構成を意図したルドゥーの著述とプロジェクトをひとつの画期的な出来事として見る。そうして、カント倫理学の中心概念である自律性（アウトノミー）が、ルドゥーの場合にも認められるのだ、と言う。いいかえれば、ルドゥーの建築を啓蒙思想の表現と見ているのだが、彼はさらに進んで、ルドゥーの時代と20世紀の近代には新たな理想主義が認められる、と説く。ルドゥーの理想都市はル・コルビュジエの「輝く都市」の構想の先駆であり、この2人の建築家のうちには、芸術と生活の内的結合への強い姿勢が感じとられるのであり、これこそが新たな建築への重要な契機だ、という解釈である。

もちろん、このような解釈に対する批判もあり、またルドゥーの建築についての別の見方もある。たとえば、カウフマンの記述のなかでかなり曖昧（あいまい）な「建築の自律性」という概念について、これを具体的な歴史的事例を無視したものであり、プラトン的な見方を前提としつつ人為的にねつ造したものだとみる見方（マイヤー・シャピロ）や、ルドゥーの建築の革命性は「建築記号に象徴の次元を与え直す」という建築美学内部の矛盾の解決にあった、とみる見方[5]がある。

カウフマンはその後『3人の革命的建築家——ブレ、ルドゥー、ルクー』(1952）を出版した。18世紀末のフランスの建築の動向を歴史上の重要な出来事として取り上げた功績は、明らかにカウフマンのものである。だが、上記の『ルドゥーからル・コルビュジエまで』が1933年という時にウィーンで出版されたものである、という事実も考えておかなければならないことだろう。今日では、カウフマンの解釈のほかに別の解釈が登場しているのだが、それによって、ネオクラシシズムの問題は、今日的な問題として、ポスト・モダンをめぐる問題と重なってきているように思われる。

2．反「近代」の思想

建築では、ポスト・モダンが生ずる土壌はすでにモダンのうちに――あるいは、さらにルドゥーのうちに――あったのだが、ポスト・モダンの華やかな登場の背景には、モダン以後1960年～1970年代にあらわになってきた反「近代建築」の思想がある。また、そうした反「近代」の思想は、その正当性のいかんにかかわらず、逆に「近代」のきわだった局面を――少なくともその一端を――知らせてくれるものだ、といえよう。

ここでは、一例としてイギリスの建築史家デーヴィド・ワトキンの指摘を手がかりとしながら、芸術史の方法論との関連の上で、反「近代」論の基本的なよりどころがどこにあるのかを見ておこう。

ワトキンはその著『モラリティと建築』において、「建築は建築固有の伝統を備えた芸術であって、科学ではない。したがって、建築が想像力の喚起に対してかかわりをもつことは、建築が実際的な問題を解決することに比べても、まったく遜色のない重要事である」という考えの上に立って、ピュージンの『対比』(Contrasts、1836）からペヴスナーの『モダン・ムーヴメントのパイオニアたち』（Pioneers of Modern Movement、1936）に至る１世紀の間の主要な建築論を、「近代建築」の神話として検討する。彼は、そこに、建築を「建築以外の何ものか」の表出して解釈する著しい傾向のあったことを指摘する。[6] そのような解釈として、彼は、

(1)　宗教・社会学・政治的解釈

(2)　時代精神による解釈

(3)　合理的、あるいは技術的な正当化による解釈

の３つを挙げ、それらのアプローチが、「建築家は想像力や自らの意志をもたない単なる『集団的無意識』の表現者にすぎない、と信じているロマン主義的で集産主義（コレクティヴィズム）的なポピュリズムによって広められてきた」ものであることを強調する。そのさい、批判の力点はとりわけ時代精神（ツァイトガイスト）による解釈の上におかれる。いうまでもなく、そのような解釈はギーディオンやペヴスナーに見られる特徴的なアプローチであるのだが、ワトキンは、これをカール・ポパーのいう「歴史主義（ヒストリシズム）」（あるいは「歴史法則主義」）に近いものと見ている。（したがって、ひとしく歴史主義といっても、ポパーの使い方では、ペヴスナーをはじめとする多くの人びとによって使われてきた場合の意味――歴史的様式のリヴァイヴァルという意味――とは異なる。）

オーストリア生まれで、論理実証主義の「ウィーン学団」に参加しながら異端者の立場をとり、のちにイギリスに帰化したポパーによれば、歴史主義とは「歴史的な予測が社会諸科学の主要な目的であり、またその目的は歴史の進化の基底に横たわる『リズム』や『類型（パターン）』、あるいは『法則』や『傾向』を見いだすことによって達成しうると仮定するところの、社会諸科学に対するひとつのアプローチである」。[7] もちろん、ポパーは芸術においても、そのような歴史（法則）主義が誤りであることを論証しようとするのであるが、その思考の根底には、むしろ異様とも思えるほどの強い反ヘーゲルの姿勢がある。ワトキンも、「歴史上の各時代にはそれぞれ完全に一貫した傾向があり、それは壮大なる発展計画の前進に向けて、次の時代の傾向に順次とってかわられてゆく」という考えはヘーゲルに由来するものであるとして、そうした「歴史主義的・ヘーゲル派的信念」を強く非難している。

ポパーは、実際には芸術については語るところが少ない哲学者であるのだから、ワトキンの「近代建築」批判の直接の根拠は、むしろゴンブリッチのほうにある。オーストリア生まれで、かつてヴァールブルク研究所員であったエルンスト・ゴンブリッチは、1939年にイギリスに移り、その後はイギリスの美術史家として活動することとなった。彼は『文化史の探究』のなかで、芸術において「時代精神」を「再構成する」試みが、カール・シュナーゼからヤーコプ・ブルクハルト、ハインリヒ・ヴェルフリン、アロイス・リーグル、マックス・ドヴォルシャックを経てエルヴィン・パノフスキーに至ることを検証しながら、その背後にヘーゲルの思想があることを指摘している。[8] 建築やデザインの立場からすれば、この思考のなかにあるいは延

長線上に、パウル・フランクル、ジークフリート・ギーディオン、ニコラウス・ペヴスナーを加えることができるだろう。[9] ゴンブリッチは、さらに1977年2月のシュトゥットガルトでの講演「ヘーゲルと美術史」では、ヘーゲルの思想の影響下にある歴史観を分析検討したのち、近代芸術史の場合もヘーゲルの影響を免れているわけではなく、たとえば「近代建築の誇らかな勃興と、その今日の危機的状況を理解するためには、その背後にヘーゲルの思想のあることを見落としてはならない」と語ってヘーゲル批判の姿勢を表明している。そして、「時代精神」や「世界感情」をめぐるヴァルター・グロピウスの言明を引用して、その思考のもたらす危険を指摘している。[10]

こうした反「近代建築」の思想の相互関連については、もちろん、詳細な検討が必要である。だが、そこには根強いヘーゲル批判、ドイツ文化哲学ないし文化史学批判、形而上学批判、一元論批判がある、といってよいだろう。そうして、ポスト・モダンの出現とともに、モダニズムの一元論的美学は否定される。それに代わって、ヴァーナキュラーなものの尊重、折衷主義、多元論といった思考が現れることとなるのである。

3．芸術史における多元論

芸術史の上でも、「ポスト」をつけたイズムの呼び名はある。よく知られている「ポスト・インプレショニズム」はイギリスの評論家ロージャー・フライによる用語だが、「後期印象派」と訳されてはいるものの、もともと適切な呼び名ではない。セザンヌやゴッホやゴーギャンと印象派との関係を考えれば、むしろ「脱」という邦語の意味を含むものと見たくなるだろう。また、キュビスム以後の20世紀のさまざまなイズムの展開をモダン・アートと見るとすれば、以後の現代の動向には、たとえばアンフォルメル、アクション・ペインティング、ポップ・アート、オプ・アート、スーパー・リアリズム、キネティック・アート、ミニマル・アート、コンセプチュアル・アートなど、数え上げることができないほど多くの動きが含まれている。それらのうちには、これまでのイズムの新たな展開と見られるものもないわけではないが、それらのほとんどは、在来のアートのもとでの新たなイズムの展開ではなく、新たなアートの創造を意図したものである。こうした変遷を経た今日、とくにアメリカの80年代の動向を指してプルーラリズム（多元主義）と呼ぶ名称も生まれるに至っている。

だが様式の多元論は、建築においてはすでに19世紀のはじめからあった。ゼードルマイアーは、ルドゥーの建築ののち、19世紀になって著しくラジカルな動きが現れたと見て次のように述べている。「時代の建築に課せられているさまざまな課題の性格は、あまりにも多種多様であって、それらの公分母を求めることは困難だという考えから、一般に様式の統一という目標は放棄され、少なくとも基本的な考えとしては、それぞれの建築をその独自の様式で処理しようとする試みが現れる。このようにして、建築のテーマの処理にあたって、いまだかつて見られなかったまったく新しい意識的な多元論がはじめて出現することとなる」。そしてまた、こうした現象の出現は「上から強いられた『様式の図式』に見られる表面的『統制的』な外観で満足するのではなく、反対に、多くの種類の建築に対しては、現代の要求に十分こたえうるような解決が見いだされたのだ、ということ、つまり単なる教義のために放棄されてしまうことのないような生きた価値のある解決法がすでに見いだされたのだ、という事実を認めるものである」と語っている。[11] もちろん、ゼードルマイアーは、かつてのウィーン学派の一人として、前述のE．カウフマンの研究に依存しながら論じているのだから、多元論とは反対に「すべての種類の建築の課題が同等の権利を主張するようになってくることを理論的に説明した」ルドゥーは、最高のレベルでの同等化――彼の主張する最高の課題であるモニュメントの形式への同化――を主張することによって、20世紀のル・コルビュジエの先駆となるのだった。

それゆえ、ネオクラシシズムのなかでのルドゥーの建築思想の読み取り、芸術史ないし建築史における多元論の解釈は、ポストモダンの解釈とけっして無縁ではないだろう。

4．課題

モダンとポスト・モダンの問題を考えるために、この小論では、意図的に「時代精神」への信念ないし一元論、および様式の多元論に焦点を置くようにしてきた。それらが、ポスト・モダンをモダンとの関連において歴史上に位置づけるために欠かすことのできないキーワードとなるだろう、と思われたからである。以下、補足的に課題めいたことを述べておこう。

ゴンブリッチやワトキンによって激しく非難された、近代建築の推進ないし解釈における「時代精神への信念」という問題も、直ちにそれを「集散主義」と結びつけたり（ワトキン）するよりも、むしろ、それが形而上学的、神的な理念への従属を強制するものか、それとも生活との関連で主張するものか、それぞれについて検討することが必要だろう。それへの手がかりとなるのは、それぞれの時点での技術論のあり方の検討だと思うのだが、そのような視点から見れば、バウハウスを中心とするモダン・デザインの思想には技術論がまったく欠けていた、といってよいだろう。

また、ポスト・モダンのデザインの特徴の一つは、いうまでもなく多様性である。それと呼応するかのように、今日では、インダストリアル・デザインの領域にはふたたびスタイリングの時代が到来するだろう、という見通しもある。イギリスの『デザイン』誌の前編集長マーク・ブラットンは、1978年の講演のなかで、いまやチップ・テクノロジーとマイクロプロセッサーが著しく小型化へ向かっているのだから、どのようなものに対してでも、文字どおりどのような形でも採用することが可能になっているのであり、やがては外観のデザインという、製品のスタイリングの新しい時代が到来するだろう、と暗示している。(12) ポスト・モダンのデザインには、そうした企業の販売政策と結合する面もあるのだから、実用であれ、遊びという無用の用であれ、消費者の本当のニーズを見いだすことが要請されるだろう。

最後に――最も重要だと思うのだが――今日激しく非難されているモダニズムには、一元主義やエリート主義と異なる局面のあったことを、あえてつけ加えておきたい。芸術の諸分野を貫いて見れば、たとえば、形による表現と音による表現の交錯、言葉による表現と言葉によらない表現の交錯、映画と文芸の交錯など、人間の諸感覚機能の統合を求める実験があったのである。それは感性の復権の試みであり、本当の意味でのエスセーティックなアプローチというものだろう。その意味では、ポスト・モダンが論ぜられるようになってきた今日、必要なのはむしろモダンの再考ではないだろうか。ゴンブリッチがヘーゲルを非難しつつ「ヘーゲルの形而上学を受け入れることなしに、ヘーゲルの仮定を救い出す」(13) ことをねがったように、ポスト・モダンが、モダンの一元論を受け入れることなしに、モダンを救い出すこと、それがわれわれの課題だ、と思う。

(1) Carl E. Schorske : Fin-de-Siècle Vienna―― Politics and Culture――、1961（安井琢磨訳『世紀末ウィーン――政治と文化――、岩波書店）の序論参照。
(2) 「近代」の「逆説的」構造については、上山安敏『神話と科学』岩波書店、を参照されたい。
(3) Emil Kaufmann : V on Ledoux bis Le Corbusier ――Ursprung und Entwicklung der Autonomen Architektur――1933.
(4) Kaufmann : 前掲書、11～12ページ.
(5) 篠田浩一郎『空間のコスモロジー』、岩波書店、の第1章「ルドゥーと都市の理論」参照。
(6) David Watkin : Morality and Architecture, 1977（榎本弘文訳『モラリティと建築』、鹿島出版会）。
(7) Karl R. Popper : The Poverty of Historicism, 1957（久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』、中央公論社）。
(8) Ernst H. Gombrich : In Search of Cultural History, 1969.
(9) ヴァールブルク研究所のゴンブリッチ、ウィトコウアーとペヴスナー、レイナー・バナム、チャールズ・ジェンクス、ジェームズ・スターリング、あるいはコリン・ロウとの関係については、藤田治彦「ポストモダンのアカデミー」（京都国立近代美術館ニュース『視る』218号―1985年8月号―所収）参照。
(10) Ernst H. Gombrich : Hegel and Art History ("On the Methodology of Architectural History", Architectural Design Profile, 1981 所収）。
(11) Hans Sedlmayr : Verlust der Mitte, 1948（石川・阿部訳『中心の喪失』、美術出版社）。
(12) Victor Papanek : Design for Human Scale, 1983（阿部・和爾訳『人間のためのデザイン』、晶文社）による。
(13) 前掲(8)による。

（あべ　きみまさ　前・筑波大学教授）

ポスト・モダンと日本の伝統
―末期的近代の動向―

向井正也

末期においては、先にくすんでいたものが明るく、力強かったものが繊細に、情熱的であったものが遊戯的になる。
ニコラウス・ペヴスナー

「いま、ニュー・ヨークが面白くなって来た。」などとよくいわれる。巨大な超高層ビルに奇妙なポスト・モダン風のスカイラインが目立つことなどをいうのだが、さしづめ東京なども、そのうちに面白くなって来るのではないかと思う。ここ数年ポスト・モダニズムの花盛りである。もともと建築の分野から生まれたこの言葉は、いまではデザインや美術・工芸はもとより、文学、哲学、演劇など、きわめて広範な文化の諸領域においても論議されるまでに至っている。こうした事実は建築の分野でのポスト・モダン状況の深化をいみするもので、発生の当初はむしろモノの裏付けのない概念だけであったものが、ようやく実作の上で可視的になったわけで、その何より大きな特徴の一つとして誰しも指摘するものは歴史主義（ヒストリシズム）の復活であろう。そうした徴候の端緒は、いまから約10年ほど前の、古い建築の再生・修復をめぐる一連の保存のデザインの発生ではなかったかと思う。

ちょうどその頃、私は本誌上で、今回と同様、当時の建築の文化状況について論じたことがある。題して「後期的近代の動向」('76－1月号)。 そして、その後10年の歳月が経過したいま、私は正しく上記論考の続編ともいうべきものを書くことになった。前回私は論文のタイトルを、最初は「末期的近代の動向」としたのだが、編集の側からの注文で、末期を後期に変更したことを思い出す。だが、いまや世紀末本番、まさに末期的症候を示すポスト・モダニズムは、この段階に至ってはじめて、日本の伝統文化と思潮的に深いかかわり合いを示すようになって来ていると考えてよいのではないか。

禁制の終焉

上記の論考、「後期的近代の動向」において、私は近代主義の発展を、他の領域からの借り物のコトバ（造形言語）によらずに、それ自身のコトバで表現しようという、機能主義的で伝統否定的、排他的な初期の状況から、次第に何らかの語彙の拡張を求めて、後期に向かうにつれて、次第にその傾向をエスカレートしていき、やがて最終的には、他領域言語をほとんど最大限に包摂した究極の段階を予想したものとして、初期の近代主義が何よりもタブーとした歴史様式をも包摂するものとして図式（シェーマ）化したが、それでもなお、ここでの歴史主義は、古い建物の修復・再生といった程度の、前記〈保存のデザイン〉の段階にとどまるもので、その好例の一つとして、当時建築学会賞を受賞した浦辺鎮太郎の倉敷アイビースクエアを引きあいに出したのを覚えている。それはまさしくモダニズムの後期ともいうべきものにふさわしい現象であったといえるのであって、歴史主義が「末期」にふさわしいポスト・モダン的症候を示すようになるのは、やはり何といっても80年代に入ってからで、その大きな引き金になったものは、1980年のヴェニス・ビエンナーレの建築展

に示された世界の先鋭建築家たちによる歴史主義の一大デモンストレーション：〈過去の現前〉〝The Presence of the Past〟であった。

ここに、それまでモダニストたちを呪縛していた建築の用語上の最後のタブーとしての歴史様式の封印は全く解除されたことになる。すなわち同展の組織者、パオロ・ポルトゲージのいわゆる〈禁制の終焉〉〝The End of Prohibitionism〟である。いわゆるポスト・モダニズム的なものが形式の上で顕在化するのは大体これ以後のことと見てよかろう。磯崎新の「つくばセンタービル」(1983)におけるレイト・モダンからポスト・モダンへの手法の転換など、その顕著な例の一つであるが、問題は、こうしたいわばポスト・モダニズム時代の開幕が、同時にポスト・モダニズムの通俗化——風化と時期的に重なるという事実である。

いかにも末期の芸術にふさわしく、ここにポスト・モダニズムは、いまや本来の〈近代主義の超克〉という歴史的思想的な意味をうしなった、単なる表相での流行現象に風化してしまっている面があるといえる。かねて話題の上州渋川の駅前再開発による街並みのポスト・モダン特有の幼児的景観などその一例といえるのではないか。



日本回帰——和風への傾斜

かつてバウハウスの基礎教育には歴史課目が削除されていた。モダニズムの大きな特性の一つは、それが歴史性を否定したことだが、それと同時に、歴史的建築に付随していた装飾(オーナメント)をも排除した。ポスト・モダニズムとは、端的にいって、デザイン上のすべての面で、モダニズムの裏返しを求めるのを身上とする。そこで、かつてのモダニズムの正面の対立物であったアール・デコが復活し、あらゆる歴史様式はデザイン上の主要なモチーフとして再び日の目を見ることになる。このことから、要するにポスト・モダニズムの末期性とは機能主義のリアリズムの裏返しとしてのロマン主義に由来するともいえよう。「ロマン主義とは、その目的の如何にかかわらず、憧憬の態度であり、現代及び近い過去への反逆である」とのペヴスナーの言葉はそのまま現状況にあてはまるものだが、その憧憬とは、時間的、空間的に遠く離れたものに向けられることから、それは建築デザインの上で「懐古趣味、異国趣味等の形をとって現われる」(森田慶一)のも、そのまま現状況にあてはまる事実である。

いまや世界的な傾向の一環として、わが国にもロマン主義にもとづく懐古趣味が、おそらく〈アズNo.1〉という未曽有の経済的発展をバックにしたナショナリズム的風潮とあいまって、建築の上でも日本回帰の歴史主義への傾斜をいっそう深めて来ているといえる。それはあたかも、あの昭和初期のデカダンス的文化状況下において「近代の超克」を叫んだ「日本浪漫派」時代の建築界での伝統回帰の動きを想起させる。

鈴木博之は明治以来のこうした〈和風への動き〉を三つの段階に分け、第1期を明治の和風様式摂取の動き、第2期を昭和初期のいわゆる〈帝冠様式〉による日本精神高揚の動き、第3期を昭和20年代末のいわゆる新日本調をめぐる〈伝統論争〉とし、このようにわが建築界で日本の伝統が問題にされてきたのは「つねに大きな建築の曲り角にあたる時期」であったとして、今また、このポスト・モダンという20世紀末の転換期における建築家たちの日本の伝統への注目について論じている(朝日夕刊820702)。鈴木がこの論考を発表した当時、一部若手のポスト・モダンの建築家たちは、すでに和風がらみの作品を発表しはじめていたが、こうした建築における日本回帰の現象が公共施設の形でより明らかに広く社会の目にさらされるようになるのはそれから約2年後のことで、朝日新聞の松葉一清が「和風に回帰する現代建築」という見出しで、同紙の文化欄で大きく取り上げた(840605)。ここで取り上げられた建物とは、大江宏の「国立能楽堂」、黒川紀章の「国立文楽劇場」、石井和紘の「直島町役場」で、大江の作品は別として、他の2作は、形はともかく、その精神は何らかのポスト・モダンの歴史主義によるものとして注目に値する。

特に黒川の場合、国立の施設をつくるという点で、おそらくその表現をめぐって〈国家の様式〉をいかに

すべきかという前述の明治この方、建築における〈和風への動き〉の起こるたびにくりかえされて来た設問に悩まされたものと思うが、おそらく同様の悩みは、これより先、同じく国立の施設の設計に当たった磯崎新の「つくばセンタービル」の場合にもあてはまるだろう。ところで、その結果としての両者の〈様式選択〉は、黒川の〈和風〉に対して磯崎が敢えて〈洋風〉をえらんだことは周知の事実である。聞くところによれば、黒川はこの作品によって磯崎の作風との対決を求めたというが、アメリカのポスト・モダンの代表作家マイケル・グレイヴスもまた、磯崎のこの洋風の選択について批判している。「……私は一方で、すべての要素があれ程明白に西洋風であるのをひどく不思議に思いましたが、同時にあなたがご自分の建築から東洋の文脈を完全にそぎ取ってしまっていることがたいへん不思議です。……」(「新建築」'83－11月号)。

磯崎が何故日本の建築的語彙や文脈によらなかったかについては、かつて、彼のレイト・モダン期の作品「神岡町役場」の作風について、上と同様の鈴木博之の批判への回答でも明らかなように、その本音はおそらく、ともすればキッチュに堕すおそれのある和風のデザインの敬遠ではなかったかと思う。それはともかく、面白いのは、磯崎の弟子筋に当たる石井和紘が、「直島町役場」の方で、敢えてこの難問に挑戦して、あっけらかんとした回答を示していることである。あのアメリカのポスト・モダンの日本語版といえる、問題の〈直島飛雲閣〉である。だがここでの問題は、作者がこの建物の外観の醜悪さ(アグリネス)をある程度故意に求めたという事実である。モダニズムの建築には偽善的ないやらしさがあり、偽善よりは偽悪の方をとるというのがポスト・モダンの本質だとの信条にもとづく創作活動の故に、これまで散々酷評された経験をもつ石井にとって、一度も叩かれずに、これまでいい子ぶりを発揮して来たモダニストたちが、いまやバスに乗りおくれまいと、ツケヤキバよろしく俄にポスト・モダンのポーズをとろうとする昨今の態度は鼻もちならぬというのである。(「朝日ジャーナル」850315参照)



〈茶の美学〉と建築

いま、世界の建築デザインのヘゲモニーを握るに至った先鋭的(ラディカル)なポスト・モダニストは主としてアメリカおよび日本によって占められているといわれるが、アメリカの主流はそのほとんどが歴史主義の立場に立つのに対して、わが国の場合は必ずしもそうではなく、その歴史主義にしても、前述のように、文脈の上で和洋の対立を生むなど、きわめて多様な展開を示しつつあるが、一面そのコンセプトに関しては、多くの建築家たちがいま何らかの日本の伝統によって導かれていることを意識に上(の)せて来ているのは注目すべき事実である。端的にいって今日、ポスト・モダンとかみあう〈茶の美学〉とは、〈数寄〉、特に〈侘び数寄〉の概念にふくまれるものといえる。かくてわが国のたび重なる建築の様式探求の歴史の上で、ここにはじめて、形ではなく精神が、指導理念として日本の伝統の中に見出されたといえるが、それがこのように、ようやくポスト・モダニズムの風化の段階においてであったことは注目に値する。

ともあれ、こうした過程の高まりの中で日本建築学会は「建築雑誌」'81－2月号で主集「日本建築の特質」を取り上げ、その目的として「伝統的なものを創造に根付かせていくための論議」の発展を期するものとしたが、同誌はさらに'82－7月号で、今度は〈数寄〉を正面にすえた主集「数寄屋と現代建築」に取り組み、そのすべての論説を、もっぱら建築創造における〈数寄〉あるいは〈数寄屋〉の問題にしぼっている。その他の同様の動きとしては、前述の石井和紘が一足早く70年代末に、GA HOUSES 刊の「日本の現代住宅－1970年代」の中で、伊藤ていじの「数寄屋」(淡交社)を下じきとした「スキヤ・コンセプト」なる論考を発表しているし、黒川紀章なども、近著「建築論」の副題が「日本的空間へ」とあるように、その建築創造の中核的な思想を〈数寄〉をはじめとする一連の日本的美意識からくみとろうとしているようである。また、よく彼と対比される、いまや国際級の大建築家としての磯崎新に至っては、もうかなり以前からそのマニエリスム的建築論の中に〈数寄〉や〈好み〉といった日本の伝統的なコンセプトを自在に取りこんで来たこと

が今更のように注目される。

〈つくば〉はもとより磯崎の、そうした思考の所産であるが、このビルに対して〈日本建築史家〉村松貞次郎が「一種の数寄屋だ」と述べたことがある（「日経アーキテクチュア」840604）。もはや欧米のあとを追う必要がなくなった先進国日本にとって、いまこそ「わが国将来の建築様式は如何にすべきや」という明治以来の設問に意味が見出される（「新建築」'76－6月号）と考えたことのある村松だが、そうした様式探求に対する回答とは、要するに数寄屋だったということになる。数寄屋というのは一種の組み立て直しの原理による建築だとする彼は、この世紀末の過渡的混沌の時代には、文明史的にもクリエートの時代ではなく、洋の東西を問わず、いろいろな過去の様式やディテールなどによる組み立て直し大いに結構と、ポスト・モダンや折衷主義を肯定しているのはさすがに御時勢だと思う。

なお前述のように、〈数寄〉については磯崎新がすでに60年代に、いち早く白井晟一の「親和銀行本店」における家具調度に対する〈見立て〉の絶対性に注目し、〈晟一好み〉にマニエリスム的な発想を見出し、これを長いタイトルの論文として発表している（「新建築」'68－2月号）が、私もまた60年代半ば以降のマニエリスム研究の過程で、現代建築と〈茶の美学〉との関連性に気付き、これを問題にする必要を痛感して、とりあえず試論の形で建築学会に発表したことがある（'76－6月）。

私の場合は磯崎と異なって、〈茶〉という、いわば近世日本のルネサンス期に見られたマニエリスム的な美意識の展開について、同時期における西欧のそれとの文化的併行性に注目する一方で、また現代マニエリスムとの比較検討を試みようとしたものであった。ここではそうした内容に立ち入る余地はないので、その輪廓のあらましを述べるにとどめるが、私がこの論考を発表した時点は前記10年前の本誌への投稿「後期的近代の動向」の時点と重なるもので、当時このポスト・モダン状況に先行する建築的状況を、私は一応マニエリスム的状況と呼び、これをあくまでマニエリスムの相の下に見ようとしたもので、次のように述べている。

「そもそも〈茶の美学〉が一つの建築論として取り上げる必要がみとめられるに至った背後には、今日の造形文化一般における〈マニエリスム的状況〉があり、建築の分野でも、モダニズムの後期的段階からのマニエリスム的なデザインへの価値転換によって、ようやくわれわれは〈日本のルネサンス期〉をはじめて本来的な形として、現代の眼によって正しく把握すべき段階に達したといってよかろう。こうして〈茶の美学〉は、一方では16世紀の西欧マニエリスムを、他方では20世紀の後期的近代（レイトモダニズム）における現代マニエリスムとの、いわば三角関係の中で、常に比較考察を加える必要があることはいうまでもない。日本の伝統としての〈茶の美学〉は、今日何よりも、建築的に一つのマニエリスムとして、ほとんどそのままの形で方法論的に現代に活かしうる特質をもつものと考えられる」こうした記述は10年後の今日でもそのまま通用するものといえるのではなかろうか。

私のこうしたマニエリスム的な思考は、やはり何といっても、あのポスト・モダニズムの始祖ともいえるロバート・ヴェンチューリの思想、特にその有名な著書「建築における複合と矛盾」(1966, 〝C&C〟と略記以下同じ）に負うところが大きい。この著の出た頃から神大でのゼミのテキストを、主として古今のマニエリスム関係にしぼったものだが、当初は〈古今〉ではあっても〈東西〉とまではいかなかった。後年になり、〈茶の美学〉関係に注目するようになって、そこにふくまれる〈侘び数寄〉なる美意識が、おどろくほどこのヴェンチューリの〝C &C〟の思考と通底するところがあるのを発見して驚いたものである。この書の全体を貫く思想の根幹にあるものが、何らかの〈数寄〉であることは、本書の冒頭における彼の宣言〝A Gentle Manifesto〟が、〝I like…〟にはじまることからもその一端がうかがわれるが、彼はこの宣言の中で自らの「好み」を〝straightforward〟「すなおなもの」(直)に対する〝Nonstraightforward〟「ねじれたもの」としている。すなわち〈侘び数寄〉の本質たる「すねすねしさ」(拗）である。

〈茶の美学〉と現代建築思潮とのかかわりは、実は前記明治以来くりかえされた日本回帰の建築的現象の中にもあきらかに見られる。例えばその第2期での堀口捨己の論文「茶室の思想的背景とその構成」（1932）において、堀口は〈茶の美学〉と上記西欧のデザイン思想との併行現象への注目などとは全くウラハラに、

〈茶〉の日本的特性を強調する線で、茶室の〈非対称性〉、〈多粗材主義〉、〈反多彩主義〉などに注目することから、これらに関して、茶室とパルテノンとの比較を試みるなどという、すこし見当外れのアプローチにより、かんじんの〈茶の美学〉の本質を見失う結果となっている。これは要するに当時の合理主義的思考によるマニエリスム的な美意識究明の限界を示すものだと思う。

一方、第3期の日本建築ブームに際しても、〈茶の美学〉は、当時のいわゆる〈縄文的なるもの〉の逞しさ志向の中で、むしろこれとは対立したものとして、もっぱら否定的にのみ解せられたことは、当時の丹下健三の論文「現代建築の創造と日本建築の伝統」(「新建築」'56－11月号)に明らかである。ここで丹下は〈縄文的なるもの〉の反テーゼとしての〈弥生的なるもの〉の例として〈桂〉をあげ、そこに「まつわりついた〈わび〉の性格」を文字通り、わび暮らしの〈貧〉にむすびつけることから、〈侘び数寄〉を「貧しさを貧しさとして肯定し、それを感性的にうけとめて美化するという消極的姿勢」として、否定的にのみ解し、〈茶〉における〈侘び〉が、単なる〈侘び〉ではなく〈侘び数寄〉としての〈侘び〉であり、それは文字通りに素朴に解すべきではなく、両義的に解すべきことに思い到っていない。これもまたモダニズム的思考の限界を示すものにほかならないだろう。

ちなみに白井晟一は、この時期において、一見丹下健三や岡本太郎と同じ線で〈縄文的なるもの〉に同調する論を発表してはいるが、彼の思考が丹下等とは異なって、より複合的、マニエリスム的であったことは、その論考「待庵の二畳」(「新建築」'57－8月号)に明らかである。「……利休の中では浦の苫屋と三千貫の肩衝と黄金の席が併存することができる。なるほど山上宗二は〈侘数寄〉とはいったが〈わび〉とは謂わなかった。利休は数寄の達人であった。…待庵の二畳は抵抗の数寄か、数寄のイロニィか…芭蕉の〈わび〉はイロニィではなかった。利休の抵抗はイロニィを出ることができない……」

★　　★　　★

昨秋、石井和紘からＴＢＳテレビに出演するから見て欲しいとの便りを受けた。題して「四角いビルはもう古い。――アメリカ現代建築の表情」。石井が案内役になって、ニュー・ヨークやヒューストン(テキサス)の奇妙きてれつなポスト・モダン・スカイスクレーパのあれこれを披露してくれた。それは人々の遊び心を楽しませるショウなのであった。冒頭のペヴスナーの言葉のように、いまや世紀末本番、ロマン主義の支配する遊戯的思考の時代である。ポスト・モダンのスキヤ・コンセプトは芸術至上主義のスキ勝手できままなデザインでトコトンまで個としての建築家の好むところに徹しようとする。〈茶の美学〉で最も重視される〈作意〉＝創造性がそのまま現代に活きる。そこでは作意の良否よりは有無の方が重視される。いまアメリカではアレコレと面白い趣向のビルほど大衆にもてるという。大衆に人気のあるビルはすなわちよい建築なのだ。そうしたポップ建築の代表作家の頂点に立つのは、ほかならぬ老ポスト・モダニスト、非ミース的(Miesless)ジョンソンその人である。

そのジョンソンに、石井が〈直島飛雲閣〉を見せる一幕があった。ジョンソンはいう。「過去から歴史のロマンを借りて来るのはすばらしいことです。単なる先祖帰りではなく、あなた自身のロマンを……」そこでテレビの字幕はこう語る。「いまアメリカは、ヨーロッパの歴史のロマンを、彼らの町の上に再び自由に描くことが出来るようになりました。」

文化的にアメリカニズムの圧倒的な支配下にあるわが国の建築の世紀末症候群は今後いかなる様相を呈するであろうか。そのうちジョンソンのあの〝ＡＴ＆Ｔ〟ビルのごとき、いかがわしい〈転合(ジョーク)建築〉が雨後のタケノコのように生まれ出る可能性もなしとしない。さなきだに表現の上で幼児退行的な側面のある、風化したポスト・モダニズムである。この上さらに日本の歴史のロマンなど、奔放自在に描かれてはと、21世紀の未来都市風景が気がかりなのは果たして私だけであろうか。

(むかい　まさや　神戸大学名誉教授・工博)

ポストモダニズム10年—私とポスト・モダン

〝ポスト・モダニズム〟について、建築設計のみならず各界のデザイン分野や諸領域で活躍されている有識者の声を反映させたい、こういう意図で、各界の方々にアンケートをお願いしたところ、21名の方よりご回答をいただきました。回答にあたり、編集委員会より後掲のような設問をさせていただきましたが、この際〝ポスト・モダン〟という言葉の定義については、とくに厳密に行わず、各界の最前線で活躍されている皆様の〝ポスト・モダン〟をめぐって、自分自身の専門領域と現代デザインについて、設問を参照しながら、自由に語っていただくことにしました。

十人十色と言われる通り、さまざまな想いや感じ方があり、〝ポスト・モダニズム〟の多様性を反映していると思わせる反面、〝モダン〟の枠組みをさらに発展させ、より充実した〝モダニズム〟の発　への期待を感じさせるなど、非常に興味深い意見を頂戴することができたと思います。個々のご意見については、そのまま掲載させていただきますので、その真意や背景は読者の皆様の方で自由に解釈していただければと思います。いずれにしても、異なった分野に通じる「現代」の姿が、「デザイン」という切り口から多少なりとも見えてくることを期待したいものです。

このアンケートの回答予定者として、一応編集委員会での議論の上、選定させていただきましたが、まだまだ多くの異なる立場の方々のご意見を反映させることも必要かと思いますが、紙面の都合で限定したことをお許し下さい。また、これらのご意見について読者の皆様の方でもいろいろとお考えを抱かれることと存じますので、ぜひとも、それらのご意見、ご感想を協会事務局の方へお寄せいただきますようお願いします。

そして、またつぎの機会にはさらに〝ポスト・モダニズム〟の行く末について、大いに語り合いたいと思います。

（田中直人・藤田治彦・田附尚）

〈アンケート設問〉

【1】「ポストモダニズム10年」とは申しましても、それは「ポスト・モダン」という言葉が一般化する10年であり、実際のポスト・モダン(「モダン」以後)の変革は、アメリカのある建築史家によれば、20年前の出来事になります。さて、あなたの専門分野にとって、そしてあなたご自身のお仕事にとって、この10年ないし20年の間におこったもっとも重要な出来事あるいは変化はどのようなものでしょうか。それは、上記のポスト・モダン的状況の推移と何らかの時間的関係にあるとお考えでしょうか。

【2】「ポスト・モダン」という言葉の獲得、そして、この10年間の一般化あるいは大衆化には何らかの意義があったとお考えでしょうか。それともむしろ何らかの弊害があったとお考えでしょうか。もしご自身のお仕事では「ポスト・モダン」とは別な言葉が新しい有力な動向などに用いられているようでしたら、それに関して同様にお答え下さい。

【3】この約10年の間に現れた建築物、家具、各種製品、日用品などのなかで、あなたがもっとも注目した、または評価できるデザインはどのようなものでしょうか。それを高く評価する理由や、それを「ポスト・モダン」と考えるか否かなどを書き添えて下さい。また、その写真等があれば、添付して下さい。

神話の再検討

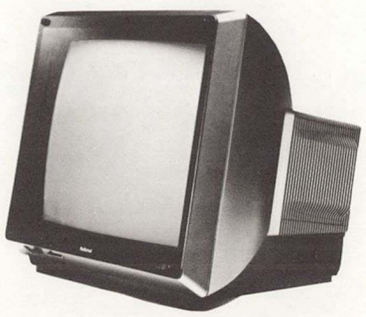
梅澤　修

私が審査官としてかかわっている意匠登録制度は、Gマーク選定制度とともに、日本のプロダクトデザイン分野における国家的な制度の主要なものである。意匠登録制度は、1888年(明治21年)の意匠条例の制定によって始まり、一世紀の歴史を有し、Gマーク制度は、1957年（昭和32年）から今年で30回目になる。

この両制度においては、今のところポスト・モダンのスタイルを顕著に認めることはできない。Gマーク制度での昭和50年代の特色が「省エネルギー」「小形化・軽量化」「機能の複合化」「システム化」などといわれるように、両制度においては、むしろ、モダニズムが進行している。ポスト・モダンのスタイルは、少数派であり、それも本来の過激さや批判は薄められたものが多い。

結局、プロダクトデザインにとってポスト・モダンのデザインは、アヴァンギャルドで芸術的な存在であって、現実のデザインに対して批評として意義があるものであろう。その批評の対象が「近代」であるが、まさに、意匠登録制度とGマーク制度は近代的制度であり、意匠登録制度は、明治以来「殖産興業」「産業の発達」の目的の下に、デザインを近代化の一翼を担うものとして組み込んできた。近年の意匠登録出願は年間約5万5千件もあり、また、Gマーク商品に選定されたことが有力な宣伝材料となる状況は、制度が成熟したことを感じさせる。そして、ここにおける「近代」とは、多様なスタイル（モダンの純粋主義もポスト・モダンの折衷主義・相対主義も）を含みうるものである。

したがって、プロダクトデザインにおける近代は、やはりスタイ



60年グッドデザイン大賞 カラーモニターテレビαTUBE

Gマーク・グッドデザイン大賞

55年　レコードプレーヤ　SL-10
松下電器産業㈱

56年　35㎜カメラ　XA2、エレクトロニックフラッシュ　A11
オリンパス光学工業㈱

57年　ビデオカメラ　GZ-S3、ビデオテープレコーダ　HR-C3、ビデオモニター　TM-P3
日本ビクター㈱

58年　カメラ　T-50　キャノン㈱

59年　小型乗用車　ホンダシビック3ドアハッチバック25i
本田技研工学㈱

60年　カラーモニターテレビ
αTUBE　TH28-DM03
松下電器産業㈱

ルだけでなく、創造や生産のシステムを問題にしなければ、乗り越え不可能であろう。その国家的な制度は、一層拡大充実を計られ、コンピュータによる情報管理や海外進出に見合った国際化等が進むと予想されるが、生活者の視点あるいは真に国際的・地球的な視点から制度を再構成するための回路を模索する必要がある。そして、両制度が前提としている新しきもの（進歩）の神話、および作家的な創造性の神話について再検討しなければなるまい。ポスト・モダンのデザインもいまだこの神話に囚われているように思われる。

（うめざわ　おさむ　特許庁審査第一部産業機器・審査官）

自然科学のポストモダニズム

赤坂一之

建築や芸術一般におけるモダニズムも、自然科学の発達と全く無縁であったわけではあるまい。好むと好まざるとにかかわらず、現代のわれわれの生活、ライフスタイルは、その根底に、近年の自然科学の発展の影響を色濃く反映している。近年におけるわれわれのライフスタイルの急激な変化は、1920年代から始まった自然科学の〝モダニズム〟の帰結ともみられよう。それは量子力学の発見による物理学と化学の〝モダニズム〟で代表され、トランジスター、ＬＳＩ文明、石油化学文明をもたらした。これらは、われわれの生活の隅々まで影響していることはいうまでもない。

1920年代の量子力学の発見以降を主として物理、化学の分野における〝モダニズム〟の時代とすれば、1950年代におけるワトソン—クリックによるDNAの二重らせんの発見以降は生物学における〝モダニズム〟の時代であったといってよかろう。それでは、生物学における〝モダニズム〟はわれわれに何をもたらしたであろうか？物理、化学における〝モダニズム〟と生物学における〝モダニズム〟との決定的な違いは、後者においては人間そのものが対象として含まれる点である。

自然科学の特徴は対象の徹底した客体化と、より広く通用する一般的な原理の飽くなき追求である。1950年代の二重らせんの発見に始まった生物学の〝モダニズム〟は、またたく間に地球上の生物に共通する〝遺伝暗号〟の解読に成功し、このことに端を発して、それまでは本質的に近づき難いものとされ、〝神のみぞ知る〟とされていた多くの基本的な生命現象の物質的基盤を、原理的には明らかにすることに成功したのである。

1970年までには、ＤＮＡ→ＲＮＡ→タンパク質という情報の流れの中に、地球上の生命の一般原理を見出すことができることが確信された。すなわち一つには人間を含む全生命が共通した基本原理で営まれている事実が分子レベルで明らかにされたのであり、もう一つにはその全生命が宇宙を含む森羅万象と同じ物質的基盤を持ち、共通の物理、化学の法則の下で展開してきたものであることが示されたのである。これが〝分子生物学〟という名でも呼ばれる〝生物学のモダニズム〟がもたらした直接の成果であり、その客観的価値であるといえる。

それでは〝生物学のモダニズム〟がもたらした生命に関する客観的事実は、われわれの〝個々の生命〟にどうかかわっているのか？それは〝われは何故にここにあるか？〟という主観的で根源的な問いにどうかかわっているのか？

1970年にJ. モノーが書いた〝偶然と必然〟[1]は、科学者の側から、この問いを真正面に捉えようとした最初の試みを象徴している。冷たい宇宙空間を眺めるのと同じ冷酷なその目で、生命を眺める物質的視点を獲得したわれわれが、どのような哲学的基盤で〝個々の生命〟を生きるのか——が今問われているのだ。これを生物学の、いやより広く自然科学におけるポスト・モダニズムの時代といってもよいかも知れない。

時を同じくして1960年代の終わりから70年代にかけて、欧米、とくにアメリカにおいて、いくつかの新しい宗教運動が起こったが、そのあるものは80年代の今までに急速に拡がっていることが注目される。生物学のモダニズムがもたらしたいわば無機的な生命観は、過去何千年の歴史でつちかわれた宇宙観、生命観を持つ多くの宗派にとってショッキングなものであったに違いない。この新しい相剋の中でインテリ層は既成の宗派からますます遊離する一方で、新興の宗派が急速に人の心を捉えるのは何故か？　その解析は別にするとしても、これらの新興宗教の少なくとも一部の人達は、モダニズムがもたらした生物観から逃避し、これを徹底的に排せきするかにみえる。J. モノーのように真正面から見据える態度とは正反対の態度といえる。このように、〝自然科学におけるポスト・モダニズム〟の時代はまだ始まったばかりであり、行く末のわからぬ不安定な状況にあるといえよう。自然科学者自身をはじめとして、心の広い宗教者やもちろん哲学者を含めてわれわれ現代人が、自然科学のモダニズムが花咲いた20世紀の締めくくりとしても、これを越えた新しい思想、哲学を準備すべき重要なときにきているのだと思う。

1）J.モノー著／渡辺　格・村上光彦訳　「偶然と必然」みすず書房

（あかさか　かずゆき　京都大学理学部助教授・生物科学者・理博）

形態は自ら創造すべき

岡山伸也

1979年、イタリアのグループＡＬＣＨＩＭＩＡによる〝バウハウス〟シリーズが発表された。これらは当時、一般的に、全く予想もできない奇異ともいえる形態を持ったキャビネット、ランプ、その他機能の片鱗は感じられるものの、ほとんどオブジェクトと呼ぶにふさわしいものであった。このときの参加メンバーは最近までＤＯＭＵＳ誌の編集長であったアレッサンドロ・メンディーニ。1981年にＭＥＭＰＨＩＳを始めたエットーレ・ソットサス。現在、デザイン誌ＭＯＤＯの編集長であるアンドレア・ブランジなど、その後のポスト・モダン、ネオ・モダンと呼ばれるデザインの流れに重要な役割を果たすことになる。

このバウハウスシリーズの出現は、私にとっても大きな衝撃であった。デザイナーとして常に未解決な重要な問題の存在に気付きながら、解決のための具体的な方法を見つけだせないでいるときだった。そのやむにやまれぬ未知の何かへの衝動の原因は、今にして思えば、私自身の〝ポスト・モダン〟であった。

●正統なデザインの機能を解体する。なぜなら、それらはもうすで


STOOL KAZENOKO 岡山伸也作 1984

に退屈であり、機能は決して人を幸福にしてくれない。

●量産製品の神話と異なる神話を語る。モノは生産者、流通者のために、その利益のために考えられてきた。マスメリットは本当に人々にとってメリットであるか。それぞれ異なる10人にはそれぞれ異なる10のモノが必要である。

●アノニマスの否定。10人のデザイナーは全く異なったデザインをしなければならない。大量生産、大量販売という罠にかかるな。大衆という幻想はすでに解体している。デザインは自己主張するべきである。

●過去の形態の引用あるいは折衷は逃避である。なぜなら形態あるいは様式は自ら創造するものである。

以上がその後の私の〝ポスト・モダン宣言〟である。

（おかやま　しんや　家具デザイナー）

fromからtoへ

栄久庵祥二

デザインにおけるモダニズムは、その歴史的使命（伝統主義・権威主義の払拭）を終えるとともに、感覚的レベルでは倦きられてしまった。モダン・デザインとは異なるものの中には、キッチュやミッキーマウス的なもの、クラフトの類いを含めてさまざまに分岐している。が、その中にあって、しばしば曲線のコントロールされた使用を通じて表現される形態の「優美さ」は、モダン・デザインの正統的後継であると言ってよい。ドイツのインダストリアル・デザイナー、H・オールは、これを機能の純化（ピューリファイ）によって得られる造形と表現している。規律と情感を合わせて実現した彼による家具は、その例証と言ってよいかもしれない。この新たな古典主義的感覚は、世界的な社会の保守化の傾向にあって、今後長い寿命を保つと予想される。

貴族主義的でかつ知的雰囲気を持つこうしたデザイン感覚の一方には、モーターサイクルやステレオの世界で追求されるマニアックな美学がある。公約数的ではない、唯一無二の独自性こそ、その美学のよって立つ基盤である。量産が進展し、あるいはものとしての性質上、共有共用が重きをなさなくなった（なさない）製品領域では、こうした現象が起きて何ら不思議はない。ここにも「モダン」を越えたもの文化の一つのあり方がある。

ポスト・モダン現象に一つ共通することは、かつてのように信条とか主義を背景にしてものが作られなくなったことである。世直しの気負いなどさらさらなく、デザイナー各人が自らの関心や感覚のおもむくまま、自由かつ気ままに作りつづけている。受け手と同様に作り手もまた、諸個人である。

ポスト・モダンの風潮は、新しい試みを奨励する意味で意義があった。ただ、ポスト・モダンはモダンから（from）の表現であっても、へ（to）についてはまとまったことを主張しているように思えない。その意義は、デザイナーを含め、現代を生きる人々に、それぞれの自主的な探求を促している点にある。

（えくあん　しょうじ　GK研究所所長・デザイン研究者）

クルマ—人間くさく、ひかえ目に

岡田稔弘

私が最近体験したいわゆる「モダンデザイン」ではない〝よいもの〟〝いい感じ〟についてお話ししたい。

今年の2月1日から4日間、伊豆の川奈ホテルに逗留した。無論この有数の高級リゾートホテルに、遊びでこの時期こられる身分ではなく、私が開発のチーフをしている「ソアラ」という車の新型の記者試乗会をこのホテルを拠点として行ったお陰である。この川奈ホテルのロビーと部屋の洗面所がとってもよかった。大変気に入ったロビーは、高い天井に50cm角もある美しい木目の梁（けやきに似ている）がはしり、所々の大理石はその存在を主張しない。落ち着いた調度品とともにすべてが〝さりげない〟のである。何時間そこに居ても追い立てられるような気はしない。部屋の洗面所の方はその大きさが気に入った。適度に遊びのある空間は実にちょうどよく、気持ちよい。昭和の初めに建てられたこのホテルは、近代的モダンデザインのようにスペース効率やインテリアの劇的効果はねらっていないと感じられる。後になって〝ポスト・モダン・デザイン〟とはあの何となく居心地のよい感じなのかなと思った。〝人にやさしく、さりげない〟これがモダンデザインに欠けていたのかもしれない。

さて、自動車はどうなっているのだろうか？　ここ2～3年のモーターショウに世界の各メーカーが出品した近未来の車「コンセプトカー」（写真1～3）を見る限り、建築やインテリアで注目されている〝ポスト・モダン・デザイン〟の兆候は見られない。徹底した「空力スタイル」と走行性能や新しい情報機能のための「エレクトロニクス」が共通したテーマである。それではクルマにポスト・モダニズムはないのか……といわれると、私は実は違ったかたちで



写真1　1985年「フォードプローブV」


写真2　「GM ビュイック ワイルドキャット」


写真3　1985年「トヨタFXV」


写真4　新型ソアラ計器板
数多くの新エレクトロニクス技術を〝さりげなく〟装着

「ある」と思っている。クルマのスタイルや様式が、ヴィンテージカーやアールデコを指向するのではなく、内味の方から始まっているように思える。

私事になるが、今回の新型ソアラの開発で最も力を注いだ点は、数値化できない感性領域での質的向上である。超高速で、いかにストレスなしで走れるか、ハンドルを切ったときの手応え感、フラットでしっかりした乗心地、エンジンやドアの音質、肌ざわりなど、その例は枚挙にいとまがない。これらは何馬力だとか0～400m何秒のように簡単には数値化できない人間の感性である。新型ソアラは世界で最もエレクトロニクスを多用した車であるが、その目的は上述の感性領域の質をより高めるためである。新技術をぎらぎらさせないで、極力〝さりげなく〟をモットーとした（写真4）。

私は当面、クルマの〝ポスト・モダニズム〟とは先端技術やハイテックを「人間くさく、ひかえ目に」行使してゆくことであり、それが様式（スタイル）までおよぶのは相当先のことだと思っている。

（おかだ　としひろ　トヨタ自動車株式会社製品企画室主査・ソアラ開発）

多様化の商品化住宅へ

太田博信＋4

「ポスト・モダン」をデザインの一つの潮流として認識するだけでなく、私は新しい社会変革を表現する概念として理解したい。多くの人々は、工業化社会（モダン社会）は終わりを告げ、新しい脱工業化社会（ポスト・モダン社会）に突入しはじめたと認識している。世紀末でなく世紀始めの、この社会に生存をかけた人々の心のゆらぎをどう捉えるかが私の関心事で、目下その有徴現象を観察中である。身近な仕事仲間の声を順不同で収録した。

●電話で話す▷敢えて手紙を書く
質の良いもの▷かわいいもの
かっこいい？椅子式生活▷「日本人の血」が求める座の生活
カロリーメイト▷愛のこもった手づくりおにぎり

ポスト・モダニズムは単にデザイン上の一つのトレンドではなく、人間性の回復を求める人々の心に根ざした「昭和ルネサンス」である。（大渕和彦）

●シャンデリアの輝くリビングルームと、めったに使わないあるいは使えない6畳の和室を死守している日本の住まいの状況は、まだ形態上の分裂症的折衷主義。新しい住文化の創出のために多元的コミュニケーション〈ポスト・モダン〉がさらに喚起されなければならない。（穐本敬子）

●消費者のトレンドを探ると、嗜好の多様化、感情の重視、記号性・象徴性を優先する傾向など、明らかに変化を見せている。これは交換価値が使用価値を上回るという消費社会の今日的状況を反映しているわけであるが、この「価値観」の多元化、拡大化あるいは転換こそ、まさにマーケッティングにおける「ポスト・モダン」的状況といえる。（進藤正寿）

●キーワードは説得力。説得の対象をより大きな集合に向けるベクトルがモダニズムのベクトル。より小さな集合に向けるのがポスト・モダンのベクトル。前者の極がインターナショナルスタイルとして具現化したとすれば、後者の極は多様化を前提とする商品化住宅の中に具現化されるのだろうか。（田中まほみ）

（おおた　ひろのぶ＋4　積水ハウス東京設計部長ほか）

日本的美意識を掘りおこせ

駒田楊子

1979年、私はニューヨークのS. O. Mでインテリアデザイナーとして働いていた。そのとき、フィリップ・ジョンソンは「AT&T」ビル案を発表し、建築におけるポスト・モダニズム実践段階の第一撃を与えた。

S. O. Mモダニズムの牙城にいる建築家達は、まずは大変な拒否反応を起こした。「フィリップ・ジョンソンがN. Y.にチッペンデールの頭飾りを付けた高層ビルをたてる……。」

R・ベンチューリは、ポスト・モダンの発想を世に問いかけた人である。しかしその作品は比較的少なく、フィラデルフィアという地域性もあり、一般にはマイナーな存在であった。しかし、AT&Tは誰が何と言おうと、フィリップ・ジョンソンが、マンハッタンにポスト・モダンの高層ビルをたてるという、メイジャーのS. O. Mのデザインセオリーを根底からゆるがす衝撃であった。

それから、マイケル・グレーブスが華やかに登場し、「そんなバカな」というショックから、この久しぶりにおとずれた建築界の流行に後れてはならじと、S. O. Mもそれらしい飾りものの工夫をこらしだした。

一方、日本のS. O. M的存在かもしれない日建設計を見ると、一つの見方として「アメリカのモダニズム建築の名作に匹敵する建築は少ない。しかしよく見わたすと、新しく7年の工期をかけ完成した大阪市庁舎のような（日本銀行大阪支店も含め）、大阪の歴史、地域性、前建物の遺物をひきずりながらつくり出した建物の方が、ポスト・モダンとも言え、インターナショナルな眼から見て興味深いのではないか」と言える。日本人にとって、モダニズムは、その工学的発想、シンプルな美意識により、わかりやすいものであった。しかし、ポスト・モダニズムには、大阪市庁舎にみられるような日本の土壌、風土的美意識を掘りおこす芸術的発想が必要であろう。

（こまだ　ようこ　AD&A主宰・インテリアデザイナー）

モダニズムの果てに

有村桂子

〝ポスト・モダニズム〟について語ろうとすれば、まず〝モダニズム〟とはどのようなものであったかという定義が原則としてなされねばならない。そのことに関しては、この特集で論文を書いておられる向井先生の著書〝モダニズムの建築〟（ナカニシヤ出版）で十分位置づけをされているので、私なりの理解と紹介は、ここではやめることにしたい。

この文章の読者が向井論文を読んでおられるものとして、〝ポス

ト・モダニズム〃について考えていることを述べてみたい。

ここ10年から20年の間の種々の芸術的・思想的活動の一つの流れを〝ポスト・モダン〃と呼ぶとすれば、それらの活動にみられる特徴は、〝モダニズム〃と較べて〝多様化、個性化、複雑化、装飾性が強い、象徴性が強い、懐古趣味的傾向が強い〃ということがいえるだろう。そのことは、私たちの日本の現実の生活にどのような意味、意義、方向性を与えたのだろうか。〝ポスト・モダン〃はポスト産業社会、情報社会、消費社会をそのまま、素直に反映して展開されている事態である。そうでない社会、たとえば中国などのような社会では無縁のことがらである。

評論家吉本隆明氏によれば「現在伝統的な表現の世界が、高度なもの、価値のあるものとみなしてきたものが、高度なもの、価値あるものだと決定できなくなってきた。それと逆に低俗なもの、価値のないものとみなされてきたものが、全く別途の差異線にそって、高度なもの、価値のあるものを実現するようになってきた。そういう事態から、現在、わたしは、静かに震撼されているのではないか。だがこれこそ〝ポスト・モダン〃の特徴であって、ベンヤミンや日本の花田清輝のような人々が先駆けてもっていた認識である」と述べている。このような感じ方は、現実の事態の進行（サブカルチュアの氾濫など）をみればなるほど説得力があるようにみえる。しかし、はたしてこのようなオプティミズムでよいのだろうかと考えこまざるを得ない。

ポスト・モダンの特徴が、モダニズムそれ自体が矛盾したものを内包しつつ、掲げた時代意識の問題性（それはある意味では人間の自由や解放の問題、認識の方法論の変革の問題をも含んでいた）を本当の意味でのりこえ、実現していく方向の線上にあるといえるのだろうか。このようなオプティミズムが、ポスト産業社会、消費社会の中で状況に押しながされ、混迷の中になげ出されている私たちの現実をつくり出しているのではないだろうか。

現代芸術の分野でも表れてきている新しい傾向、何でも包んでしまうクリストの作品や、ビデオアートやアンディ・ウォホールらの作品は、それ自体はすぐれた芸術作品であるし、現実への批判精神があふれた作品であり、まさしくポストモダニズムのアートであるが、清水徹氏のいうごとく「〝近代芸術〃と全く異質の作品の作品というか芸術行為」であるとは思われない。

これらの作品すらも、「モダニズム」が提起した新しい概念や思想（とくにダダやシュールリアリズム）から決して自由になってはいず（それ自体悪いことではない）、その表現行為自体がアメリカ的社会、巨大な消費社会、情報社会の中の時代意識の表出として感じられる。それは消費社会、情報社会の中の人間性の悲鳴のような気がしてならない作品群である。

〝モダニズム〃が掲げた命題（それ自体いろいろ矛盾を包むものであったが）の革命性や革新性は1920年代以後さまざまな役割をはたし、さまざまな作品群を産み出してきた。しかし〝モダニズム〃によっては実現されなかった部分、とり残されてきた部分に対して、一つ一つ丁寧な汲み上げの作業が、今、世界の各地で静かに行われつつあるようだ。それらは人間の生活と技術の問題、環境と歴史性や地域性の問題を一つ一つ根本からみつめなおすという、やっかいで地道な作業であり、〝ポスト・モダン〃と十把一からげにしてはいけない活動である。これらの作業や活動が地域に根ざしているために、爆発的な流行やスタイルになるとも思えない。

日本のモダニズムの帰結が、私たちの目の前に展開されている歴史上まれにみる醜い街の風景であるとすれば、それをのりこえ、変革していかねばならない。しかし〝ポスト・モダニズム〃にそのような視点があるとも思われず、むしろ柄谷行人がいうがごとく「〝ポスト・モダン〃はもはや思想的な事件ではありえず、ポスト産業主義の急速な進行の中に吸収され、むしろそれを促進する恰好のイデオロギーとなりはてたのではないか」という問いかけの重さの中に、建築における〝ポスト・モダニズム〃はどのような返答をかえすことができるのだろうか。私は疑問に思う。

（ありむら　けいこ　Team Zoo いるか設計集団・建築設計者）

自己参照システム —アレギザンダーによせて—

難波和彦

昨年3月にとりあえず竣工した（というのは現在も建設中だからであるが）クリストファー・アレギザンダーと環境構造センターの設計による＜盈進学園東野高校キャンパス＞が、最近では最もエポックメーキングな建築だと考える。



盈進学園東野高校キャンパス

ポスト・モダニズムを単なる形態上のファッションとしてではなく、もっと広く「モダニズムを対象化、相対化する思潮」として理解するならば、アレギザンダーの試みはまさにポスト・モダニズムの本流といってもいい。ただし、アレギザンダー自身はスタイルとしてのポスト・モダニズムをはっきりと否定しているから、これはあくまで私自身の独断的な読み取りである。にもかかわらずアレギザンダーをあえてポスト・モダニストと呼びたいのは、彼の思想が極めて体系的なものであり、その底にモダンな科学（建築ではない）を突き抜けることによってそれを＜建築の科学＞へと統合しようとする野心が窺えるからである。

ポスト・モダニズムを特徴づけるキーワードとしては、さまざまなことば——記号、差異性、過剰、演劇性、虚構、不確定性、曖昧、多義性、微分化、消費、エントロピー、ソフトテクノロジーなど——があげられるが、そのすべてに共通する視点は＜システム思考＞である。つまりモノを見るとき、それを単独に切り離して見るのではなく、他のモノとの関係、あるいはそれが置かれているコンテクストを見るのである。さらにいえば、モノが先行するのではなく、関係とコンテクストがモノを生み出すという捉え方である。これを

突き詰めてゆくと、最終的にはシステムの中に自らの視点までも取り込んだ＜自己参照（セルフリファレンシアル）システム＞に到達する。

アレギザンダーの思想を支えているのはこの自己参照システムという視点である。建築をシステムと考えるだけでなく、人間（使用者、設計者、建設者，社会を含む）との関係で捉えること。しかも自らがそのシステムの一員となること。＜パタンランゲージ＞の革新性もそこにある。

建築のデザインとしてだけ見るとき、盈進学園東野高校には当惑させられる面もあるけれど、その実現プロセスを知り、さらにそこに私達の視点を据えてみるならば、そこに潜む問題の広大さに眼もくらむ思いがするに違いない。

（なんば　かずひこ　一級建築士事務所界工作舎代表・建築設計者）

形態情報の自由な獲得へ

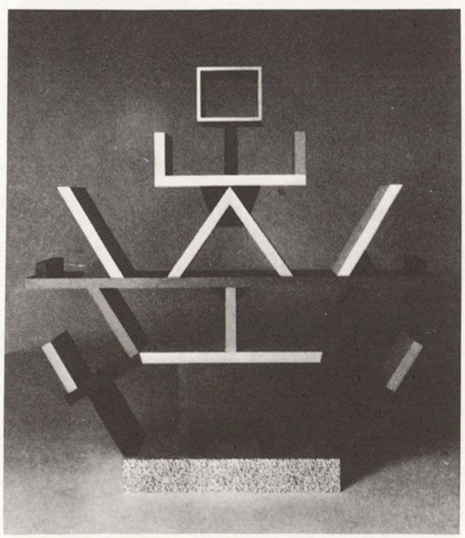
池上俊郎

ポスト・モダニズムという言葉には、いつもあいまい模糊とした世界を感じてしまう。さまざまな定義は、実態を捉えていないような思いがしてならない。私なりに敢えて定義づける――建築・インテリアデザイン・家具デザインにおいて――とすれば、〝シンボリズムをベースとして展開する、非モダニズムな形態あるいは空間の、多様かつ広範で非脈絡な、同時存在〟とでも呼べるであろう。

よく比較される〝インターナショナルスタイル〟は、プロトタイプを軸に、プロトタイプの発展系として、個別の建築家が特殊解を形成していた。〝ポスト・モダニズム〟は、特殊解の連続であり、ルーツとなる一般解すら見極めにくい。

建築における過去20年間の現象は、以下のように考えられる。

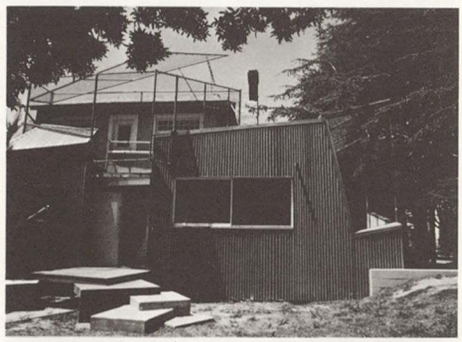
1．モダニズムの確立／　巨匠＝ドグマの時代の終えん
2．モダニズムのさらなる深化／　建築計画理論、機能形態言語の探究（都市論、コンテクスチャリズム、リアリズム、フォルマリズム、etc.）
3．モダニズムの昇華／　既成のカテゴリーからの離脱、他領域への積極的関与と自領域化、背景としての自由な造形意思．



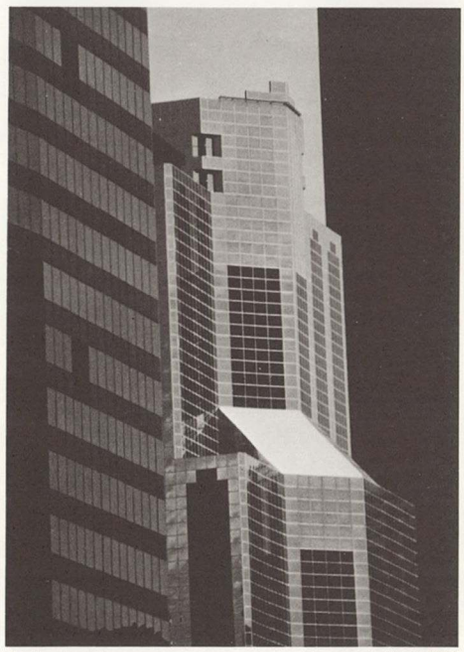
Ettore Sottsass Jr./Carlton/1981

この過程が、いわゆるポストモダニズム状況の、力強い論理的根拠を形成していると考えられる。

ここに示すのは、私が目にした建築を中心とするデザインのいくつかの写真である。ソットサスの家具とゲリーの建築は、異なるジャンルにあって同じ思考にある。本棚あるいは建築としての厳然たる機能を保持しつつ、ステレオタイプ化した機能言語と形態言語の関係は見いだしにくい。ヤーンのカーテンウォールは、都市を象がんしつつ、形態を消し、自立している。



Frank O. Gehry　　Photo T. IKEGAMI



Helmut Jahn　　Photo T. IKEGAMI

形態情報の拡大を図るキーワードとしてポスト・モダンは〝呪文〟の役割を果たすが、原理の言葉として実態化していない。そうした根無し草性に危惧を覚える。むしろモダニズムの正統な発展段階の一局面と位置付け、現実化される実態の論理的背景を探ることの方が重要であるという思いがする。理論的蓄積が、自由な形態情報を確実に獲得し、あいまい性を超えた実態を産みだすことにつながると考える。

（いけがみ　としろう　池上俊郎建築事務所所長・建築設計者）

いま、モダンの爛熟へ

林　昌二

私たちが戦後これまで作ってきた建築が、後の時代にどのような様式として分類され、呼ばれることになるのか分かりませんが、今のところ『近代』『モダン』と仮称されています。現在が『モダン』であるというのに最新の様式を『ポストモダン』と呼ばせようとはいかにも無理な話ですが、過去にも似た例があり、それが新たな様式であることを現在の様式との違いによって名付けようとするところは、かの『分離派』『セセッション』を思わせます。

建築においてもデザインが大衆を相手にした面白いものであるべきは当然のことです。にもかかわらず、過去しばらくの間そうでなかったのは残念なことですが、それは建築が工業化を迎え入れるのに精一杯だったためで、その段階では、工業化の意味を思い詰めるあまり、デザインが禁欲的なものとなるのは無理からぬことでした。

しかし今や、先進諸国では工業化も成熟の段階に達しました。デ

ザインは、背伸びして技術の行く手を指し示す役割から解放され、工業が拓いた前人未踏の可能性を存分に味わうことができます。工業化時代の爛熟した様式が、今から始まります。私たちは、建築を訪れるお年寄りたちが、生きていて良かったと思うような、わくわくする空間体験を作り出すことができるようになりました。

言うまでもありませんが、わくわくするということは、外国や過去の様式の断片に出会うなどということではありません。大衆の興味はそんなものとは無縁です。誰もが理屈なしに面白いと思う建築を作るのが、これからの私たちの仕事です。

（はやし　しょうじ　日建設計・建築設計者）

ポスト・モダンは「お子様ランチ」か

岡橋作太郎

ポスト・モダンの設計を見るとき、私は「お子様ランチ」を連想することが多いのです。「お子様ランチ」は子供のTASTEを軽く見ているのです、小さな紙の旗を立てるなどして子供を甘やかしてもいるのです。

今から60年も前、モダンアーキテクチュアーすなわち近代建築が生まれたときのことをお話ししましょう。真面目な家系に生まれた「近代建築」君の颯爽たるデビュー姿に純真な建築家達は一斉に彼の周に群がりました。近代建築の家元のようなル・コルビュジェの「家は住むための機械である」という言葉も新鮮な魅力であったのです。

その後、いつの頃からか、たぶん日本人の生活が楽になってきた頃からでしょう、近代建築の人気が急速に下がってきました。近代建築は無味乾燥、殺風景だ、というのです。「建築を機械だ」などというような無茶なことがあるものか、という人も出てきました。そこに、「ポスト・モダン」君が登場してきました。

そこで、「近代建築」君の長年の友人である私は一言、同君のために弁じたいのです。ル・コルビュジェはこうも言っています、「建築はすぐれて芸術である。建築は功利的なものの彼方にある。建築とは人を感動させる比例を定立することである。無生の石でドラマを作り出すことである」と。「住むための機械である」という言葉だけを取り上げて非難するのは、文章のCONTEXTに留意しないからであります。これで、「近代建築」君に何の欠陥もないことをほぼご了解いただけたと思います。

しかし実際に出来ている建築はまずいのが多いのは何故か、とおっしゃりたいのでしょう。それは出来上がる建物の数に比べて立派な建築家の数が少ないからです。「近代建築」君のせいではありません。

「ポスト・モダン」君は、私には建築家の発想から生まれたものではなくて、レストラン経営者の発想からのもののように思われます。レストラン経営ということも必要なことですから、ムキにならずに、気楽にこれを眺めることにしたいと思います。

（おかはし　さくたろう　元・日建設計・建築設計者）

人間性復権の社会胎動

久徳敏治

“建設することのあらゆる理論的方法は、必要性がその発端となったし、妥当性がそれを育て、使用がそれを明示した。そして最後に快適性によって監視されたのである”というアルベルティの建築論（相川浩訳）にまつまでもなく、建築様式はその時代の思潮に応じた必然性に順じて位置づけられる。ルネッサンス期をくぐりぬけ、近代合理主義の台頭と時を同じくして、新しい技術的変貌に支えられて、近代主義（モダン）が萌芽したことは周知のところである。この近代主義が古典性を尊重する重厚な歴史主義から脱却しえた背景には、新しい材料なり、構法の援用による技術的建築との表層的な見方もあるが、識者の説くごとくその起爆力はもともと時代の要請としての新しいイデオロギーなり造形感覚の覚醒によっているとの指摘はもっともと理解できる。

ところで、わが国において近代的建築が導入されたのは明治・大正期であり欧米の近代主義の台頭と時を同じくするが、初期の折衷主義という歪められた建築の過渡期を除くと、以来戦前まではどちらかといえば歴史主義的な色彩の強い建築様式を踏襲してきたと見る。さらに，アメリカで根づいた近代主義後期の国際主義の本格的な流入は戦後のことで，戦後の建築ブームを支える一様式として定着しているが、以来アメリカ・コンプレックスからまぬがれていない。

さて様式論議であるが、一技術者の目から見るとき、そもそも近代主義への衣替えにはそれ相当の思想上，技術上の変革に裏付けられた時代的推移と納得するとしても、ここ10年来叫ばれているポスト・モダンの潮流にはそれを支え、原動力となる思考上の変容や技術的な革新にさしたる迫力がなく、近代主義への倦怠からくる反動として、また習慣的手法に対する嫌悪による退行としての素朴な見方もあるが、必然性は希薄である。もっとも私としても新しい息吹を感じないわけではなく、たとえばフィリップ・C・ジョンソンのAT&Tビルに近代主義を支えてきた機能主義、構成主義の脱却を、抽象的で象徴性に富む様式をかいまみるわけであるが、しかし、大衆化、表象化、多元化などの標榜の下に、建築家の横暴も感じないわけではなく、20世紀の巨大な墓標を髣髴とさせる。

しかし、大衆に理解しがたい狭い領域での喧噪なポスト・モダン談義に見られる内容は、実体を伴わない特異な芸術的コードをつくりあげても、多分に遊戯的感はまぬがれず、大衆とくに商業資本と深く結びついてかくも隆盛をきわめたモダンに比して、直接建築物に関係のない建築論であったり、建築評論であるとの誹りはまぬがれがたく、明治・大正期の文学論や文学評論に見られたごとく、欧米の受け売りに終始するもので、自立性に欠けている。わが国は古来より長い歴史に培われた国民性なり、感性があり、欧米の建築様式の踏襲でなく、わが国固有の建築様式の醸成が期待されてよい時期ではなかろうか。

それにしても、戦後40年の経過の中で、科学技術の躍進に焦りを感じ、構成主義にも退屈した状態で新しい様式を創造しなければならないという観念的な悲愴感には同情を禁じ得ないが、そもそもモ

ダニズムは“近代科学”という時代的コンテキストと欧米という社会的コンテキストの合流によって一つの大河に結実した芸術的営為にほかならないが、私達の心のなかには非科学的文化に価値を見いだそうという伝統的な芸術感が気おくれとして潜在するという。この潜在能力を足場にモダンを超越する一つの橋頭堡としたい。もっとも、建築が最終的には個人の意志に依存するものであり、個人を支えている地域的、社会的、経済的特性を反映する情動にもとづくものであるかぎり、ポスト・モダンも個性化、人間性の復権という社会胎動の一つとしての過渡期的役割は高く評価されてよい。

（ひさとく　としはる　竹中工務店大阪本店設計部専門役・構造設計者）

デザインの多様な表現

鈴木良介

［1］R. Venturi の「Learning from Las Vegas」から強い衝撃を受けた。正統的モダンのデザインを学んでいたつもりの私にとって、それは、歴史的現実として否応なしに認めざるを得ない事実であった。しかし、そこからデザインの自由ということについて、いくつかの可能性を感じとることができた。作品の中で、それを試みるということはできなかったが、私自身の意識のなかで、ポスト・モダン的状況を同時的に感じていたことになると思う。

［2］モダン建築が新しい材料と構法などをともなって登場したのにくらべ、ポスト・モダンは、デザイン上の変革であって、基本的にはモダンの線上にあると考える。モダンがモダニズムの必然として、より徹底したイズムのなかで身動きができなくなってしまった状況から自由になったことの意義は大きい。

ポスト・モダン的状況は、すでに若い人たちを中心とする文化的状況としてあった、いわば歴史的必然であって、ポスト・モダンの一般化あるいは大衆化という方向では考えていない。

新しいものには常にいろいろの弊害が伴うものである。たとえば、学生の課題作品などにも、単に変わっていればよい、あるいは、奇抜であればよいとする傾向がみられる。建築を考えるとき、よき形態についての基本は常にまもらねばならないことであり、現代的状況としてのポスト・モダンにあっても、それはモダン等の遺産の上に、多様な表現の可能性を追求する知的なものであって欲しい。

［3］上記の意味で、注目するポスト・モダンのデザインとして槇文彦氏の一連の作品、ここでは「前沢ガーデンハウス」をあげる。



前沢ガーデンハウス　北面

（すずき　りょうすけ　京都工芸繊維大学工芸学部建築学科助教授）

都市を見る側から

紙野桂人

都市の方から、人と空間のデザイン現象を見ている者の立場として一言。

都市の時間は、文化・社会の個々の現象の時間よりもかなりスパンが長いものである。たとえて言うならば、都市という名の博物館の中に、いろいろの文物が入れ替わり立ち替わり登場し、都市の表装を形づくる。しかし博物館そのものは、より長い時間を生きつづける。それが廃墟になったり、建て替えられたり、場所を移したりするのは、都市社会の要請に本格的な変化のあったときである。

このような都市の時間において言うならば、都市はいま本格的にモダンの姿を現しつつあるのであって、ポスト・モダンというよりもハイモダンの入口にあると言うべきであろう。

都市のモダンは、新都市の建設や再開発、道路・交通システムなど都市の骨組みの大規模な組み替えの中で進んできた。それにともなって、人間の居住と職業もそのモードを大きく変えた。それらはこれから都市という名の博物館として、機能を発揮しようというところにある。

この館を館として使いこなし、自分のものにするためには、改めて人間と社会の側からの働きかけが必要である。いま、都市社会に起こりつつあるさまざまな考え方の変化あるいは切り替え、デザイン現象の変容はその一連のリアクションとして理解できると思う。その生き生きとした動きが見られない都市社会には、モダンの廃墟への坂道が待っているだけである。

現在、認められるハイモダンへの精神的リアクションは、つぎのようなことに関連すると理解している。

1．用語・文脈の解体と再提示
2．Ethnic Culture としての空間理解
3．無用の用の認識
4．分ける思考から合わす思考へ
5．夢と現実の邂逅

（かみの　けいじん　大阪大学工学部建築工学科教授）

保全と伝統、地域

柴田正己

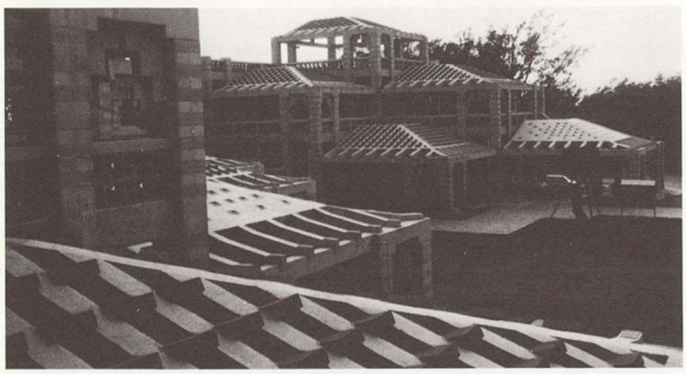
難しいアンケートですが、思うまま簡単にお答えします。

1）日本の近代建築（明治、大正、昭和戦前）の保存に対する考え方に、大きな変化がみられるようになった。10数年前に比べて、これらの建築に対する保全・再生工事が積極的におこなわれるようになったと考えられる。これは歴史的に重要な建築を文化的な遺産として後世に保存していこうというだけではなく、画一化して冷たい感じのするモダニズム建築（現代建築）への批判として、戦前の様式主義建築の保全・再生が試みられている部分があるとは考えられないのか。過去と切り離され経済性・合理性を追求した現代建築

の無表情さにあきたらなくなった人々が、装飾が豊かで、変化に富んだ過去の建築のデザインの表現に価値をみいだしたと考えられはしないのか。

2）G・M・ディクソンによれば、「ポスト・モダンとは過去の伝統によってデザインし、古典主義や地方性をもった建築言語を応用し再構成するものである」と言われているが、近代建築を乗り越えて温かい人間味のある建築へ向かうことは素晴らしいことである。しかし、そのために過去の建築様式が新しい建築につけ加えられているのではないかと思われるのは、少々気になるところである。歴史から学ぶことは大切ではあるが、正しい評価がなされなければならないと思う。

3）日本の現代建築の中で、小生が見た範囲内で言わせてもらうならば、名護市役所（1981年竣工、設計：象設計集団）である。南国のまばゆいばかりの太陽の下でみたときの印象は強烈であった。



この庁舎の外観は沖縄の伝統的な民家の形態をデザインの基調にとり入れながら、新しい解釈の下に発展させ、新しい時代の市庁舎としてまとめられている。この庁舎は正面よりもバックシャン（背面）の方が変化に富んでおり、デザイン的におもしろい。それは沖縄の民家の寄棟屋根を思わせる形をつらねたもので、それぞれの屋根はプレキャスト・コンクリート製のルーバーとなっており、その下はテラス（地元ではアサギ広場といい、昔から集落の精神的、物理的な中心としての役割を果たした広場である）が設けられている。この庁舎は近代建築が切り捨てた伝統的、地域的、文化的なものをとり入れ、みごとに新しい建築形態の中によみがえらせた個性的な建築である。

（しばた　まさみ　堺市立工業高校教諭）

都市景観のパラドックス

佐野潤一

鉾流橋から中之島を眺めたとき、公会堂の様式建築と高速道路がシュルレアリズム絵画のごとく唐突に出合っている様は、現代都市景観の典型であり、そのコントラストは、都市の歴史を感じさせると同時に、それらが作られた時代の違いをも明瞭に示しているようである。コンクリートとスチールのきわめてザッハリッヒな高速道路は、モダニズムの象徴的産物であり、一方、石と煉瓦と装飾的ディテールの公会堂や鉾流橋は、モダニズム以前の時代の産物ということになろう。しかしながら、この単純な時代判定には一つの誤りがある。確かに公会堂は大正時代、高速道路は1960年代の産物であるが、鉾流橋のデザインは80年代のものであり、実はその新旧の関係は逆転している。すなわちこの景観には古いものが実は新しいというパラドックスが潜んでいるのである。



中之島公会堂と鉾流橋、そして高速道路

さて、このパラドックスの謎を解明するために、鉾流橋のデザインの経緯を少し振り返ってみよう。鉾流橋改造の諸条件、すなわち改造は低成長経済を反映した、元の構造体を生かすリノベーションであることや、歴史的建造物となった公会堂に隣接していること等の条件、さらには「近代建築の終焉」「複合と対立」「コンテクスチュアリズム」等々建築ジャーナリズムから聞こえてくる甘言は、鉾流橋のデザインの方向をいきおいディテールや装飾的問題へ、またその戦略を公会堂のフォルムサーベイへと導いたようである。そして公会堂の手摺のグリルの高欄への直接的引用や煉瓦壁と石のトリムの外壁の舗装パターンへの転写といった具体的手法によってその形態が生み出されることになったのである。

もし鉾流橋改造計画が1960年代の高度経済成長期になされていたなら、たとえば全面改造ということになり、構造の新技術を駆使したフォルムや古臭い公会堂とは全く縁のないオリジナルなディテールが追求され、その姿はパラドックスなどあり得ない景観を創出していたかもしれない。このように考えると新旧逆転のパラドックスは、鉾流橋改造計画の背景をなす社会状況やそのデザインの戦略の変化をまさに象徴しているかのようである。

折しも今度はこの高速道路が美観上の問題から改装されることになったが、煉瓦張りの橋脚に刳形装飾付きの桁といった姿や石造アーチ橋を装った姿もあながち夢物語ではなくなりそうな情勢である。今や「バック・トゥ・ザ・パースト」都市景観のパラドックスはますます増幅されそうである。

（さの　じゅんいち　摂南大学工学部建築学科講師）

現代美術と建築 ―やけくそにあこがれる―

鷲見康夫

私は永年平面作品を画きつづけているが、時々どう進めてよいのかわからなくなってくる。そんなとき、「やけくそ」を起こすことにしている。この作品１枚ぐらいつぶしてもと思い、思いきりその上に画いてみる。そうすることによって、よくもこんなものが、こんなもの展覧会場にならべでもしたらこきおろされるのではないだろうかと思うような作品が出来ることが多い。このような作品は日がたつにつれて魅力を感じて来たことが多く、画くという意識がなく制作し目前に表れたものを作品とする「やけくそ」こそ、精神の解放であり、自由の獲得であり、既成概念をのりこえたポスト・モダンだと信じる。

ところで、私は関西大学工学部建築学科で絵画実習の講義を担任しているが、現代美術を説明するのに、「自分が存在し生きているということを表現することである。それは自分が生まれきていなかったらこのような作品はなかったであろう」と、また「現代建築も君

達のような建築家がいなかったらこのような建築物はなかったであろうということになればすばらしい」と、課題に構造学や力学にとらわれない建築物を画くことを実習している。たとえば、点や線で地上に接する建築物、ねじれている建物、木の枝の上の、木の枝自体が建物、円ばんのような建築物などを画いている。建築物を画いた後の余白には、現代美術の絵でうずめるようにしている。たとえば、オップアートで、ポップアートでうずめることによって、1枚の絵画の作品として仕上げる。そして提出された作品はなるべくはやく学生に返還し、学生はこの作品をコピーして世界各国の大学や美術館、美術関係者などにMail Artとして送るようにしている。これも建築家をめざす学生の発表活動であると思う。


学生の作品

私も15年前からMail Artとして、防虫網に布をはりつけソロバンで画き着色したものを諸外国に送付し、また海外からも数多くのMail Artが私のところに送られてきている。このような発表活動もポスト・モダンではないだろうか。

（すみ　やすお　画家）

私の二十年

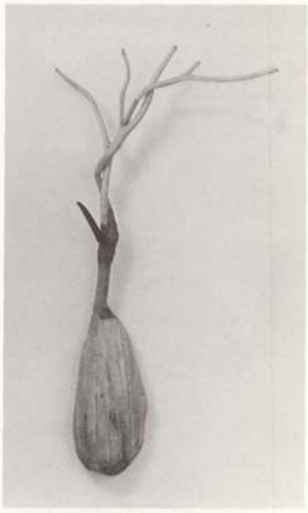
北辻良央

私が美術作品に興味を持ち始めたのは、'60年代後半においてであった。その頃、断片的に出会った作品の中でとくに興味深かったのは、アメリカ美術の展覧会であった。そこには、抽象表現主義・ポップアートなどアメリカ美術が煌き圧倒していた。そして、都会の画廊においても翻訳されたアメリカ美術が展開されていた。その後、ミニマル・コンセプチュアルアートと展開されてきた結果、「もの派」と呼ばれる動向の最中に私は制作を始めた。'60年代後半の展開を見つづけてきた結果、私にいくつかの教訓を示してくれた。技術は作品の完成度などを保証しないこと、表現は制作過程を含むすべてからもたらされるということなど。

そして、'73年にパリビエンナーレに参加しヨーロッパを中心とした同時代の若いアーティストたちの作品に触れたとき、さして驚くことはなかった。そこには私の意識するものが彼らの中にも見出せたし、彼らも決して異国風なものとしての珍しさなどでは見ようとしなかった。

私が学んだ歴史が彼らの歴史と、結果として同質のものであり、私の中に西洋というものが相対化されたように思えた。また、'84年にヴェニスビエンナーレを見る機会があり、テーマ展示において現代芸術が伝統・古典作品をどのように反映しているかを見せていた。

われわれが過去の作品を借用するにつけ、観念的なことの方に注意を向けるが、一同に集められた作品からは、解釈の難解さより、その直接的な作品のもつ力のようなものの方が圧倒しており、彼らの遺産が彼らの環境の中で肉体化されたものとして感覚的に選択され引用されてくることによるのだろう。われわれが引用ということと彼らの間には少なからず溝があり、これは、翻訳においてその原文と和訳されたものとの関係にも似て、決して一体化されることがない。しかし、欠落した部分を埋めるべくわれわれに永遠の欲望を与え、引用の多様性をもたらすことだろう。


「春琴」　北辻良央作　1985年
素材　樫
ポリエステル樹脂
金属弦

芸術作品は、どの時代においても新鮮な姿で立ち現れ、決して古びず、いつも現代にあるという感触がしつつある。しかし、ひとつの言葉の中でゲームとしてある限りは、幻想となるだろう。

（きたつじ　よしひさ　関西女子美術短期大学非常勤講師・美術家）

ポスト大衆・ポスト玄人

江田修司

(1)　建築に縁のない知人の編集者が、ある日突然建築に興味（仕事の上で）を持ったきっかけが「ガウディ」でした。そしていま「ポスト・モダン」。ガウディは建築(家)そのもので、〝ブーム〟にもなったからわかります。ポスト・モダンもいまは思想・表現の諸領域で語られていますが、建築ジャーナリズムが先行（もちろん言葉の上で）したせいか、あるいはそのデザインがエンターテイメントなせいか、やはり建築に興味を持つきっかけとなるのでしょう。このことが気になります。

実際、建築がマス・メディア（もしくは異なるジャンル）で取り上げられ、論じられ、またイベント化されたりすることが目立ってきた気がします。それも玄人（建築家）はだしの内容（情報）で。もっとも逆に建築ジャーナリズムでも言えることですが。建築がもてはやされているのか、侵略されているのか、とにかく意外なところで出くわす、これが変化なような気がしますし、実は、こういった状況が私の身近なポスト・モダンです。

(2)　要するにジャンル（モダン）が解体される。あれもこれも、あっちもこっちもで、みんな玄人で、同時にみんな素人。「大衆」が見えなくなったと言われるが、ポスト大衆、ポスト玄人みたいなことではないでしょうか。サブカルチャーの評価と並行して建築のデザインが流れていく。となれば、行きつく先は「建築家」そのものを常に消去していくところ、立ち止まったらモダン、しがみついたらモダン、生き残ったらモダン、そんなところなのかと心配しています。

(3)　メディアの話ですると、目立ってもてはやし、侵略したので雑誌「ブルータス」。評価の理由は、売れている。

（えだ　しゅうじ　フリー編集者）

ポスト大衆社会のノイズは新しいコードを得られるか

上野千鶴子

社会学の分野でポストがついたのは、ダニエル・ベルの『脱工業化社会の到来』(Bell, D., The coming of post-industrial society, 1975年）が最初だろう。

その中でベルは、情報革命、テクノクラート支配、新しい階級社会などの諸現象をすっかり予言していた。ベルの脱工業化社会論は、'60年代の大衆社会論の延長上にあるものだったが、今から考えれば、大衆社会の変質と終焉を予言していた点で、ポスト大衆社会論のはしりだった。

日本でも高度成長期の'60年代から約20年。高度成長期は日本の近代を完成したが、完成したとたんに解体しはじめたのも日本の近代だったと言える。この20年間は、近代の特質とされていたものが次々に変質し、近代という時代が終わりかけていることを私たちに認識させるに十分な、変化の激しい時代だった。考えてみれば、前近代（プレ・モダン）と脱近代（ポスト・モダン）とにはさまれた近代（モダン）という時代は、どちらから見ても異様な時代だったのである。

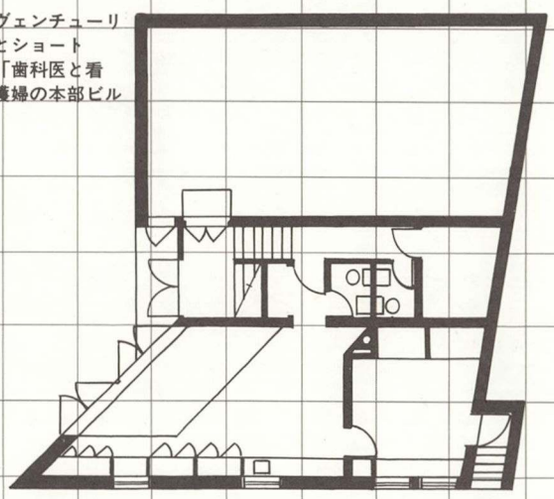
最近の西部邁、山崎正和、さらに電通の藤岡和賀夫や博報堂の関沢英彦らのポスト大衆社会論は、大衆社会が変質した、または大衆社会が終わったということを示している。ベルによればポスト・モダンは、知の支配する理性的なユートピアになるはずだったのだが、お釈迦さまならぬベルの予測を裏切ったのは、オカルト、キッチュ、ジャンク、反近代などのノイズの跳梁である。ガウディ・ブームなどは、ノイズそのものが美と見なされた倒錯的現象に思えてくる。

ノイズがノイズであるのは、それを解釈するコードがない間だけである。このノイズがまだ知られていない新しいコードの存在を予見しているのか、それともこのシステムは、ノイズをかかえこんだままどこまでも増殖するしたたかさでしぶといシステムなのか——ポスト・モダンの帰趨は見きわめがたい。

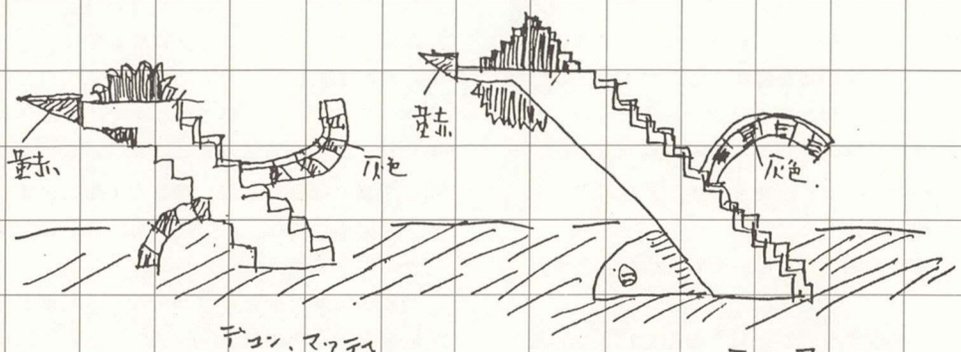
（うえの　ちづこ　平安女学院短期大学助教授・社会学者）



ジョナサン・ボロフスキー個展（1983年10月、バウラ・クーパー画廊、ニューヨーク）
写真提供：河本信治氏

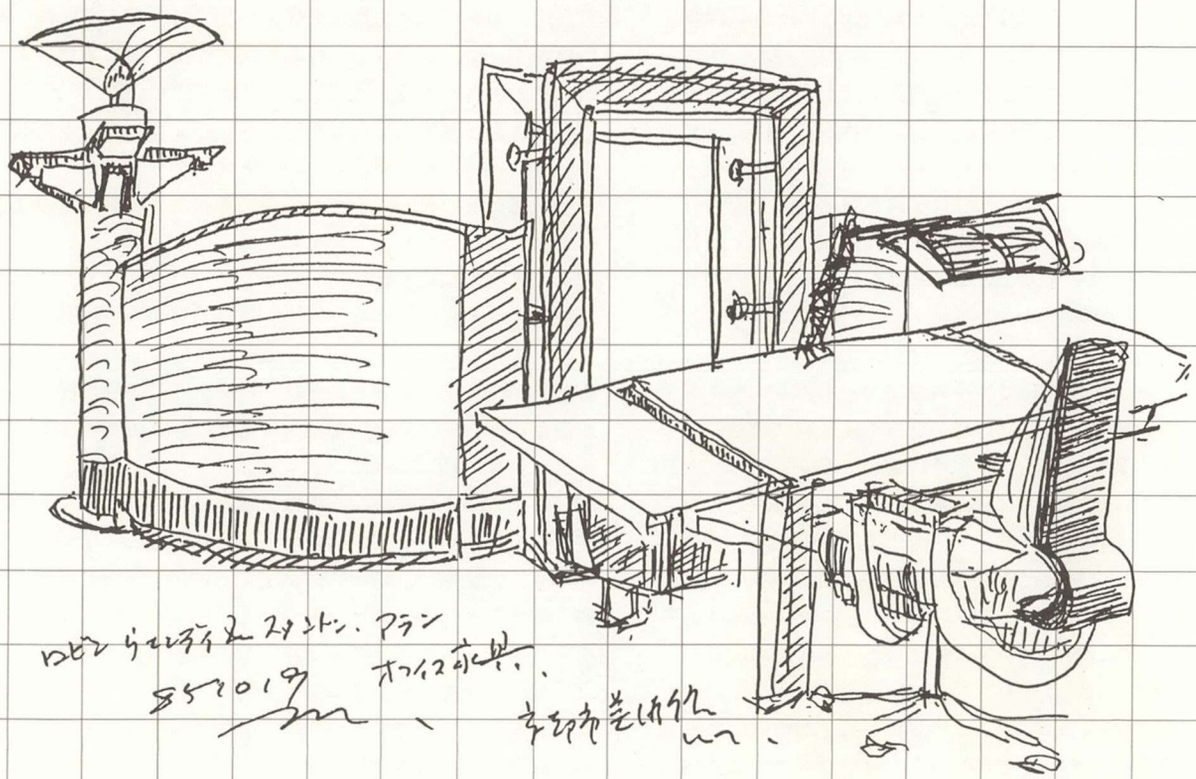


ヴェンチューリとショート「歯科医と看護婦の本部ビル



デュシャン、マッティア 1939
所蔵

デュシャン、マッテオ 1939
所蔵



ロビンソン・クルーソー スタントン・アラン

ポスト・モダンのジャーナリズム

松葉一清

先日、敬愛すべき先輩である宮内嘉久氏と、ポスト・モダンをめぐって言葉を交わす機会があった。それは、あの近代建築の闘将と呼ばれた前川國男氏とそのアトリエの所員、ＯＢを交えた座談の席だった。私が行ったポスト・モダンの建築に関するスライド・レクチュアに対し、前川一派の人たちは機能面の欠点をあげつらい、わずかに宮脇檀氏だけが理解を示す発言を行った。その時、宮内氏の胸中は、多分、その活動の軌跡からみて、ポスト・モダンに対して、否定的だったのは、想像に難くなかった。

議論が一段落したところで、やおら口を開いた宮内氏は、こういった。

「あなたは結局、キッチュ的なデザインが好きなんでしょう。それだと思う。今、ガウディがもてはやされているけれど、ぼくは、どうも駄目なんです。そのことを粟津(潔)さんに話したら、彼も同じだといってました。いくら、みんながほめそやしても、あの造形は気味悪くて。ポスト・モダンに対する是非も行きつくところはそこじゃないかなあ」

ポスト・モダンが単なるキッチュかどうかはおくとして、この宮内氏の発言は、論旨、立場とも明快であり、ディテールの話を突く閉鎖的な議論の場では、とりわけ気持ちよかった。

それにしても、私は少なからず驚かされた。宮内氏が国粋主義的な戦時中の建築界のありように憤りを感じ、前川氏という近代建築の象徴的存在をあと押しして来たことは、よく知られている。それだけに、そのような席においては、もっと理論的に詰めながら、ポスト・モダン批判を展開するものだと、私は思い込み、半ば覚悟してスライド・レクチュアに臨んだ。それなのに、宮内氏は「理論」ではなく、「感覚」でものをいい、第三者に結論を預ける形ながらも、私の立場を肯定したのである。宮内氏は筋の通った人であり、決して、その場でお調子合わせをするようなことはないから、その発言は、彼の現在の本音といえるだろう。

「理論」でなく「好き嫌い」でものをいう。そこに、ポスト・モダンの一つの本質がある。宮内氏は、その論法で、ポスト・モダンに対する見解を示したのだ。それは、私にとっては、実に嬉しいことであり、宮内氏の本質を見抜く眼の鋭さに改めて感心させられた。

10数年前、私は京都にいた。大学は、紛争の残り火で躁然とした雰囲気が残っていた。それはエキサイティングではあったが、授業はつまらなかった。増田友也氏が設計したコンクリートの塊でしかない倶楽部建築をスケッチやらパース起こしやら、させられへきえきとした。今から思えば、当時は、すでにポスト・モダンの文脈は形成されつつあったが、大学はそれに対し肯定も否定もしてくれなかった。あげくの果ては、「新建築」以下の専門雑誌を悪書呼ばわりして、「眼を通すな」とまでいう始末だった。磯崎なんかは見るべからず、建築はもっと深い真理の探求のうえに成り立つというわけだ。

つまり、増田流ブルータリズムが絶対真理であるとだけ教え込み、ポスト・モダンのどこが何故にそれより劣っているかは言及せず、「新建築」はポストはポストでもヤギのポストに放り込めというのだ。近代建築にもし理論というものがあるなら、その論法で、ポスト・モダンを一刀両断出来るはずなのに、それはせず、「信じる者は救われる」式の押しつけが行われた。

私がポスト・モダンを支持するのは、そのような自身が初学者であった時期の、忌まわしい体験に基づいている部分がある。つまり、大学＝アカデミーの外では、すでに多様化が始まっていたのに、形骸化した近代主義者たちは、新しいものを知ろうとする初学者の好奇心を摘み取ることで、自身の正当性を守ろうとしたのだ。このため、初学者たちは、「選択」の可能性を相当程度、奪い取られてしまったのである。

自身の体験に照らして語るなら、初学者にとって、いの一番に与えられるべきものは、「選択肢」である。近代主義は、その選択肢をいわば、たったひとつの枝にしてしまい、教育と洗脳は同義語になった。しかし、好きなもの、自分の肌にあったものを選ぶ権利は、教育の場において保持されるべきなのはいうまでもない。近代主義はそれを封じ込めてしまったのである。

その選択肢の存在を広く知らしめたのが、戦前洋風建築の再評価であったのはいうまでもない。とりわけ関西を活躍の主舞台にした安井武雄、渡辺節、長谷部鋭吉らのエクレクティックな手法は、近代主義の禁欲語法だけが建築術でないことを、私たちに教えてくれた。それによって、私は、形骸化した近代主義者たちが守ろうとした封印に手をかける必然性を痛感し、半ば、確信犯的に、例えば宮内氏がキッチュというところの40代の建築家によるポスト・モダンのデザインへの支持を表明し続けて来たのだ。

宮内氏が「要するにあなたは好きなのでしょう」と指摘するのは、本質を突いている。私はとにかく、建築を志す人たち、さらには、建築に何らかの形でたずさわっている人たちに対し、建築とはいかに多くの選択肢があるかを示し、そこから、めいめいが好きなものを選びとれる状況を作り出したかったのだ。「これが好きだ」とみんながそれぞれにいえるだけの、選択の可能性を作り出すことが、私のポスト・モダンを肯定する大きな目的だったわけだ。だから、宮内氏が「あなたは好き。それで結構。でも、私は嫌いで、こっちが好き」と、立場の違いを互いに是認し合う姿勢を示したのが、驚きでもあり、嬉しかった。

しかし、'85年12月の宮内氏は、そうはいってくれても、'80年に私が日本のポスト・モダン的状況に筆を執り始めた頃は、ほとんどの建築家、批評家が、私が新聞紙上で、ポスト・モダンという言葉を書き記すことにさえ、反発を示した。いわく「あんなものは実態がない」「ポスト・モダンではなく、近代主義の誤りの修正と呼ぶべきだ」「私は、レイト・モダニストであって、ポスト・モダニストではない」等々、いやはや、今では、著作でポスト・モダンを連発している人たちが、当時は猛反発した。

それでも、私が、『近代主義を超えて』『日本のポスト・モダニズム』『東京ポスト・モダン』と三冊続けて、大きな流れとしてのポスト・モダニズムを支持する拙著を手がけてこれたのは、先にも述べた、戦前洋風建築のエクレクティシズムの豊饒さであった。そして、その気風を現代へと息づかせた村野藤吾、浦辺鎮太郎両氏の'80年代に入ってからの、意気盛んな活動も、私にポスト・モダンの流

れが後戻りしないことを確信させてくれた。

磯崎新氏と、ポスト・モダンについて語り合った、というよりは示唆を受けたのは、'83年だったと記憶する。ポスト・モダンを単なる一様式ではなく、大きな時代情況を指す用語として使おうということで一致をみた。'84年10月に刊行された拙著『日本のポスト・モダニズム』の当初のタイトルは『ポスト・モダン時代の建築』であり、拙著が組み込まれている三省堂の〝都市のジャーナリズム〟のシリーズで先に刊行された二冊の書物の扉には、近刊書名として後者が刷り込まれている。そして、磯崎氏が'85年２月に刊行した対談集のタイトルは『ポスト・モダンの時代と建築』であり、奇しくもというか、共通認識を語り合った成果というべきか、ほとんど一致していた。

ポスト・モダンあるいはポスト・モダニズムを単なる一様式と規定し、それを推奨するのは、やはり「選択」の自由を奪うことにほかならない。それより、変容する近代主義を含め、近代主義批判に始まり、脱工業＝産業社会を究極的には指向している、さまざまな模索が平衡に存在する状況を、ポスト・モダンと呼び、布野修司流にいうなら「開く」方向を維持することに留意した。

磯崎氏の『ポスト・モダン原論』が早々と１万部を突破し、拙著も幸いに４刷を重ねることが出来たのは、私たちの認識が、的をはずしていなかった裏付けと受け止めている。

こうした私たちのポスト・モダンの論旨の展開に対して、戸惑いの声が寄せられるのも、敢えて否定はしない。例えば、中央官庁に勤務するある女性技官は、400字の原稿用紙100枚を超す、ポスト・モダン批判を、私の手もとに送って来た。磯崎氏への批判はおくとして、私に対しては、ひとことでいうなら「二枚舌を使うな」との論旨だ。要するに、西欧の文化的文脈に依拠する磯崎と、ポップな和風を指向する石井和紘氏の両方を肯定するのは、けしからんというわけだ。

私に対する批判の項の章名を見て、まず、がく然とした。「建築ジャーナリズム批判」とあったからだ。それは『新建築』『建築文化』など専門誌につけるべき呼称だ。それは、磯崎氏が世界の文化の文脈を意識しているのと同じく、私は日本の文化領域全般に対して、建築の多様な展開を提示しているのである。つまり、脱工業＝産業社会への模索は、あらゆる文化領域で進行しているが、建築界におけるそれは、反価値提示の対象となる近代主義が最もピュアな形で工業＝産業社会の思惟を代弁して来ただけに、他領域よりドラスティックな形で出現している。そのことを、他領域の人に知らしめ、かつその進行の状態が他領域とは比較にならぬほど世界的な文化状況とシンクロナイズしていることを告知して、建築全体に対する社会の関心を高め、ひいては社会的地位を向上出来ないかと考える。

それを『建築ジャーナリズム』つまり、建築への内向きの主張と受け取るところに、批判者の硬直が見て取れる。建築のデザインとは、専門のジャーナリズムが、内的な論争を喚起することにより、進化ないしは、深化するとの硬直した発想である。私には、そんな発想はカケラもない。しかも、現実には、日本の建築ジャーナリズムは、かの伝統論争以後は、そのような有効な議論の場となりえていないことは、動かし難い事実だ。

彼女は、多分、建築ジャーナリズムが、唯一不動の価値を提示し、ぐいぐいと建築界全体を引っ張っていくことを夢想しているのであろう。それが、どんな危険な発想であるかは、戦前、戦中の国粋主義への傾斜、そして、何度も繰り返して来た近代主義の形骸化のあとを振り返ると、火を見るよりも明らかだ。そして、ひとりの人間が、例えば、相反する様式を支持することは、本当に「二枚舌」なのだろうか。ひとりの人間が、安藤忠雄の無機的なコンクリートの箱に座っていたいと思う時もあれば、反対にカラフルに彩色された図形の交錯する早川邦彦の空間が快適と思う時があっても、決して責められるべきではないだろう。

すべては、建て前で語られるべきではない。たったひとつの美学を信じることは、なるほど自己整合性があり、きっぱりと美しいのかもしれない。しかし、人は移ろいやすく、また、迷える小羊であることも確かだ。ましてや、そのひとつの美学を他人に押しつけるなど愚の骨頂である。要は、当人が当人の信念を持てばよい。「私はこれ（複数であって無論かまわない）が好きだ」という信念を持っていればよいことだ。冒頭に掲げた宮内氏は、60歳にも近づこうというのに、一貫して信念を曲げず、他を是認する柔軟性を持っているのに、20代の彼女がどうして硬直しているのかは、いささか理解に苦しむところだ。

私は、極言すれば、すべての様式を是認している。そのうちどれが「好き」かは胸中にあっても、どれが「良い」ので、どれが「悪い」のかは、答えられないし、答えるべきではないと思う。すべての様式が同時平衡に存在し、それぞれの様式が個々に理想形へと成長するのを願っている。私の立場は、そのようなものであることを、ここに明言しておこう。

それにしても、ここ10数年の関西のジャーナリズムの停滞はいかばかりか。わずかに、水谷穎介、出江寛、渡辺豊和、高松伸の各氏らが気を吐いているぐらいで、批評の不在、マクロな視野に立っての論評、紹介にとんと、お目にかかったことがない。

新たなる価値を生み出せないだけならともかく、分離派―近代主義の流れを汲む人たちの物言いには、反動ともとれるものも少なくない。私の接した範囲でも、分離派の某氏が、大正期に建ったある県庁舎の保存運動に対し、「価値の低い建物」と決めつけて立ちはだかり、それを超えて保存へ漕ぎつけるのに難渋した。この某氏は60年前には、当時、バラック装飾社を率いて1920年代東京の建築に新風を吹き込んだ今和次郎に対し、「誤れる建築の芸術化」なる一文をものして、結果的には、大正末～昭和初期の建築の百花斉放に水を差したこともあるから、合理を掲げた反動は筋金入りなのであろう。

かつて人生幸朗という、ボヤキ漫才で名を売った御仁がいた。歌謡曲の歌詞に難クセをつけるワンパターンの〝様式主義〟で、それなりの人気があった。私が、関西にいて神戸の松竹座や花月に通っていた頃でも相当な高齢であり、新感覚についていけぬ老人のもどかしさが、この漫才のうら悲しさであり、持ち味だった。

関西の建築論調に、どうも人生幸朗氏の幻がちらついてならぬ。時折、展覧会のオープニングなんかに出向いても、御老体の姿が目につき、いい若い者が小さくなっている。人生幸朗氏は、戦前洋風建築の保存が出て来たら、それにかみつき、コンセプチュアル・アーキテクチュアに悲嘆し、さらにはポスト・モダンにさじを投げる。

本物の人生幸朗氏のおハコは、ボヤイたあげく、「責任者、出て来い」と、手を振り上げ、怒鳴ることだった。その時、相方の妻君が「出て来たらどうするの」とチャチャをいれると「ワシャ帰る」と頭をかくのが下げだった。建築界の幸朗さんも、お帰りになっては？

（まつば　かずきよ　建築評論家）

資料●ポスト・モダンとその周辺(1976～1985)

藤田治彦(京都工繊大)松井誠(関大)上田知正(京都工繊大) 金村京一(京都芸術短大)

a＋U、新建築、建築文化、SD、インテリア、そして美術手帖の6誌の特集と記事のリストの次に、思想誌から企業PR誌にいたる「各種雑誌」のリストを添えた。1970年代は欧米の専門誌を中心とし、1980年代は国内誌を扱う奇妙な混成リストとなったが、「ポスト・モダン／ポスト・モダニズム」が日本の一般誌にまで及ぶ伝播過程の一部を、逸脱しながらも示してはいないだろうか。

単行本を眺めれば、Robert VenturiのComplexity and Contradiction in Architecture(1966年ニューヨーク刊)を嚆矢として、工場から個々の住居までを普遍的に救済しようとしたモダニズムを超克する試みが、その妥当性はともかくも、この20年間さまざまな形で提出されている。ここでは、領域を超えて、実際にタイトルにあらわれた「ポスト・モダニズム」を中心に概観してみたい。

「ポスト・モダン」という言葉はすでに1950年以前に用いられたことがあるが、Post-modern mass communication(1963年シドニー刊)のように、タイトルに登場するのは1960年代になってもきわめて稀なことだった。これはニュー・サウス・ウエールズ大学で1962年に開催されたマスコミュニケーションに関するシンポジウムによって作られた小出版物である。

エジプト系アメリカ人英文学者で文芸評論家のIhab Hassanによる、The Dismemberment of Orpheus : Toward a Postmodern Literature(1971年ニューヨーク刊)も時期的には例外と思われるかも知れないが、数年後にはスペイン語圏でModernismo y post-modernismo(1974年マドリッド刊)、Los Otros postmodernistas(1974年グアヤキル刊)と、やはり文学関係の出版物がそれに続く。

文学および文芸批評以外の刊行物のタイトルに「ポスト・モダン」が登場するようになるのは建国200年のアメリカで、Calvin TomkinsのThe scene: reports on post-modern art(1976年ニューヨーク刊)、Frederick FerrのShaping the future: resources for the post-modern world(1976年ニューヨーク刊)と、芸術論や文明論にまで波及し、各地で「ポスト・モダン」が論じられるようになる。本誌が1986年を「ポストモダニズム10年」とする理由は基本的にここにある。

翌年にはDouglas DavisのArtculture:essays on the post-modern(1977年ニューヨーク刊)、Michel Benamou, Charles Caramello編のPerformance in postmodern culture(1977年ミルウォーキー刊)、そしてイギリスでもDavid LodgeのModernism, antimodernism and postmodernism(1977年バーミンガム刊)があらわれる。Charles JencksのThe Language of Post-Modern Architecture(1977年ロンドン刊)は、このような文化的状況の中で、出版された。相前後して、Ray Smithが Super-mannerism : New Attitudes in Post-Modern Architecture(1977年ニューヨーク刊)を著しているが、タイトルだけではなく、内容的にも「ポスト・モダン」を強力に主張したのは前者であり、以後数年間、「ポスト・モダン」論はJencksを中心に展開されることになる。

雑誌に目を向けると、JencksやA.A.スクールが近い英国ロンドンの Architectural Design 誌が1977年に次々と「ポスト・モダン」関係の特集を組み、各国の雑誌にも刺激を与えることになる。取り上げられる内容はアメリカのデザインの新動向が中心だが、米国のジャーナリズムは一部を除いて Architectural Design 等の後塵を拝した。「モダン」から比較的早く離れたのはProgressive Architecture誌で、歴史的建造物の保存再利用計画の特集を繰り返しながらの自然な移行であった。1979年12月には、特集「モダニズムを超えて」を出している。

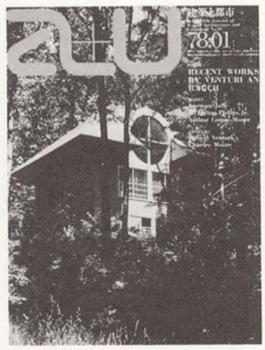
欧州大陸のジャーナリズムは、Architectural Design誌のように集中的な「ポスト・モダン」の取り上げ方をすることは少なかった。Domus誌も1970年代は一応「モダン」を基調としている。だが1979年夏に元 Casabella 誌編集長 Alessandro MendiniがGio Pontiの編集陣に加わり、1980年にPontiが退くと、1985年にまで至る「ポスト・モダン」あるいは「ネオ・ラディカル」的Domus誌が姿を見せる。

国内6誌のリストにも多少あらわれているが、「ポストモダニズム10年」にも紆余曲折があり、1981、1982年頃に幾分沈静化する。アメリカではより早くこの現象があらわれ、1980年前後には「ポスト・モダン」は未消化のまま避けられる言葉となっていた。これは「ポスト・モダン」という概念自体の問題であると同時に、それを標榜する人々と作品のイメージの問題でもあった。「ポスト・モダン」に続いて「レイト・モダン」、「ポストモダン・クラシシズム」と新タイトルを次々と繰り出すJencksらには商業主義的ジャーナリズムの色彩が濃厚だった。

この一時的な沈静は、JencksやArchitectural Design誌だけのものではない「ポスト・モダン」が、より多くの種々の分野の人々に共有される新段階へ進む直前のステップだったのかも知れない。文学と造形芸術を中心として、哲学から舞踏に至るまで、多くの分野で「ポスト・モダン」と銘打った出版物が1980年代前半を通じて増加し、日本でも近年そのピークを迎えた感がある。「各種雑誌」のリストは氷山の一角に過ぎないし、一般誌の中にはその存在自体が「ポスト・モダン」的で、中途半端な専門誌よりも興味深いデザイン特集を出すものがある。だが一方ではBeyond Modernism(モダニズムの彼方)と言われて10年も経ぬうちに、Huston SmithのようにBeyond the post-modern mind(1984年ウィートン刊)といったタイトルを掲げる著者が出てきていることも事実だ。

(藤田治彦)

a+u



a＋Uはおもに海外の建築および建築思想・潮流を、個々の作品、作品解説、批評、論文、講演記事などを通して紹介している。1970年代初頭から、ホワイトvsグレイの論争などをセンセイショナルに掲載することにより、世界の新たな建築潮流を紹介し、さらに建築と記号論のかかわりについての記事や、建築を記号としてとらえることにより新たに生まれた建築形態をさかんに紹介していた。そしてa＋U誌上に〝ポスト・モダニズム〟という言葉が現れだしたのは1978年になってからのことである。

チャールズ・ジェンクスの論文も1970年代半ばから紹介されだした。1977年には、「非合理的合理主義者たち―60年以来のRATS」、1978年には、「建築の記号」という論文が掲載されている。78年10月には、チャールズ・ジェンクス著「ポスト・モダニズムの建築言語」もa＋Uから臨時増刊号として出版された。これを受けてa＋U7901号には、特集『ポスト・モダニズムの建築とは何か』が組まれ、「ポスト・モダニズムの建築言語」に対する日本の建築家たちの最初の批評、批判が掲載された。またこれに反論するかたちで7910号に、チャールズ・ジェンクスの「レイト・モダニズムとポスト・モダニズム」、竹山実の「ポスト・モダニズムの背景」が掲載されている。これら一連の論争により、日本に〝ポスト・モダニズム〟という言葉が定着しはじめた。

しかし建築形態としてのポスト・モダニズムはどのような形態をとるのかは、判然とせずわかり難かった。そのポスト・モダンの建築形態的表現が不鮮明ではあるが示されたのは、8102号に掲載されている特集『ヴェネツィア・ビエンナーレ―第一回国際建築展』によってである。この国際建築展はパオロ・ポルトゲージらにより企画され、〝ストラーダ・ノヴィッシマ〟と名づけられた空間内に招待建築家20人による「ファサードの共演」などが、テーマ「過去の現前」に沿って、展示されていた。

80年代になると、a＋Uに紹介される建築、論文などはポスト・モダン的なものがほとんどを占めるようになり、80年代半ばになると、ポスト・モダン的状況に沿った近代建築の再読、読みかえに関する記事や論文が多く掲載されるようになってきた。(松井誠)

著者等	
ダイアナ・アグレスト＋マリオ・ガンデルソナス	特集
カルロ・アイモニーノ	特集
マンフレード・タフーリ	
	特集
チャールズ・ジェンクス	
チャールズ・ジェンクス	特集
	特集
レオン・クリエ	
	特集
アラン・コフーン	
ジョセフ・リクワート	
チャールズ・ジェンクス	
チャールズ・ジェンクス	
チャールズ・ジェンクス	
	特集
ジョセフ・リクワート	
コーリン・ロウ	
マウント・アトス	
チャールズ・ジェンクス	
竹山 実	特集
	特集
ベンジャミン・クラヴァン	
	特集
アルフレッド・ロート	
	特集
フランチャスコ・ダル・コォ	
チャールズ・ジェンクス	
ロバート・A・M・スターン×	
フィリップ・ジョンソン	
ケネス・フランプトン	
	特集
渡辺 洋	
池澤 寛	
阿部光伸	
特集	
長谷川正充	
特集	
ロバート・A・M・スターン	
チャールズ・ジェンクス	
マイケル・グレイヴス	
マイケル・グレイヴス	
ケネス・フランプトン	
スタンレイ・タイガーマン	
ロバート・ヴェンチューリ	
ロバート・ヴェンチューリ	
リチャード・ワインスタイン	
チャールズ・W・ムーア	
チャールズ・W・ムーア	
ピーター・アイゼンマン	
ピーター・アイゼンマン	
シーザー・ペリ	
エリア・ゼンゲリス	
	特集
ピーター・アイゼンマン	
×クリストファー・アレグザンダー	
アルド・ロッシ	
ロバート・A・M・スターン	
ライリ・アンド・レイマ・ピエティラ×ロジャー・コナー	
ハンス・ホライン	
	特集
	特集

	年月	『特集』・「記事」
	7603	「記号論と建築」
	7605	『アルド・ロッシの構想と現実』
	7607	「アルド・ロッシの現実性」
	7607	『スタンリー・タイガーマンの作品11題』
	7610	「秩序と無秩序—近代建築の弁証法」
	7701	『アメリカ建築の新世代』
	7704	「非合理的合理主義者たち—60年以来のRATS」第1回
	7705	「非合理的合理主義者たち—60年以来のRATS」第2回
	7705	『パオロ・ポルトゲージとヴィットリオ・ジリオッティ』
	7706	『ロブ・クリエ』
	7711	「都市の中の都市—カルテイエの思想」
	7801	『ヴェンチューリ・アンド・ローチの最近作9題』
	7802	「タイポロジイとデザイン」
	7803	「装飾は罪ではない」
	7804	「ロサンゼルスのポストモダンと目される若き建築家たち」
	7804	「建築の記号　第一章」
	7805	「建築の記号　第二章」
	7806	「建築の記号　第三章」
	7901	『ポスト・モダニズム建築とは何か』
	7904	「現代建築におけるさまざまなパラドックス」
	7905	「マナリズムと近代建築」
	7909	「生きた生態学的ポスト・モダニズムの先例」
	7910	「レイト・モダニズムとポスト・モダニズム」
	7910	「ポスト・モダニズムの背景」
	7911	『スタンリー・タイガーマン』
	7911	『ルシアン・クロール』
	7912	「クリストファー・アレグザンダーとパターン・ランゲージ」
	8001	『ピーター・アイゼンマン』
	8003	「現代建築批判」
	8003	『ダイアナ・アグレスト＋マリオ・ガンデルソナス』
	8007	『アメリカ現代住宅』
	8010	「ヴェネツィアにおける10人の建築家」
	8012	「Looking Backward」
	8102	「ポスト・モダン・クラシシズム」
	8102	「ヴェネツィア・ビエンナーレ—第一回国際建築展」
	8103	「恣意の形態」
	8110	「現代建築における五つのイズム」
	8201	『現代アメリカ建築』
	8205	「M・グレイヴス—空っぽの部屋」
	8210	「商業空間におけるポストモダニズム」
	8301	「ポスト・モダンの中で」
	8303	『アトリエ・クロールの作品5題』
	8307	「ポスト・モダンの世代展」
	8308	『エミリオ・アーンバスの建築』
		イエール大学建築連続セミナー「現代建築の問題点」
	8305	第1回 「ポスト・モダニズムは誤解されている」
	8306	第2回 「建築家の名声はなにに依存するのか？」
	8307	第3回 「自作を語る」
	8308	第4回 「自作を語る」〈続〉
	8310	第5回 「現代建築の5つの問題」
	8311	第6回 「私の見るところでは」
	8402	第7回 「創造のための忘却」
	8403	第8回 「純粋より混在を」
	8404	第9回 「建築はイメージではない」
	8405	第10回 「私は普通でないものが好きだ」
	8406	第11回 「原則は固く趣味は柔らかく」
	8407	第12回 「意味論よりも詩学を」
	8408	第13回 「モダニズムvsポスト・モダニズム」
	8410	第14回 「建てなければ建築ではない」
	8411	第15回 「モダニズムを擁護する」
	8408	『アグレスト・アンド・ガンデルソナス』
	8409	討論「建築の協和音と不協和音」
	8412	講演「建築と都市を語る」
	8501	「フィリップ・ジョンソンの四つの塔」
	8501	対談「抑制の問題」
	8502	講演「ホライン・オン・ホライン」
	8503	「アルキミーアの最近作」
	8504	『ヨーロッパの住宅建築のニュー・ウェィヴ』
	8508	『ロバート・A・M・スターンの最近作』

新建築



新建築はおもに日本国内の建築を、個々の作品を豊富な図版とその解説・批評などを通して紹介している。今回、新建築の場合は、原則として個々の作品の解説、批評は取り上げていない。

70年代半ばより、折衷的、多義的な建築作品の紹介が増えてきて、記号論と建築についての記事や論文が掲載され、モダニズム批判の記事が載りはじめた。そして新建築誌上に"ポスト・モダニズム"という言葉が現れはじめたのは79年頃になってからであった。そして80年代にはいると、8301号と8305号の特別企画「近代建築をどうとらえるか」に見られるように、ポスト・モダン的状況において、以前までとは異なるような近代建築の読みかえ、とらえかたの変更が行われるようになった。

新建築誌上において、ポスト・モダニズムについてさかんに論じられるようになったのは、80年代初頭からであり、とくに8309号の丹下健三×篠原一男の対談「ポスト・モダニズムに出口はあるか」によって、"ポスト・モダニズム論争"の口火が切られた。その対談において丹下健三は「ポスト・モダニズムには出口はない」と述べた。これに対して、8312号において、渡辺豊和が「ポスト・モダニズムには出口がある」と反論し、丹下健三に公開質問状をだした。これを受けて、丹下健三は「ポスト・モダニズム論争は5年後作品で勝負」と明確な回答を語らなかった。これらのことによりポスト・モダニズム論争に拍車がかかった。もうひとつポスト・モダニズム論争に波紋をなげかけたのは、8311号に掲載された磯崎新の「つくばセンタービル」である。「つくばセンタービル」は近代都市計画の集大成である筑波研究学園都市の中心に位置し、歴史的、折衷的、装飾的、表象的、多義的な建築形態、つまりポスト・モダン的な建築形態をあらわにしている。同時に8311号には、西澤文隆、M・グレイヴス、三宅理一、北川原温の質問状とともに、それに対する磯崎新の応答と論文が掲載された。

また83年から85年にかけて連載された三宅理一執筆の「現代建築思考」の各タイトルにもうかがわれるように、80年代半ばからポスト・モダン的な記事や建築作品の紹介が多くなってきている。

（松井誠）

著者等	年月	『特集』・「記事」
特集	7603	『都市の経験＝記号分析学の次元として』
多木浩二	7611	建築のレットリック1「形式の概念　建築と意味の問題」
多木浩二	7701	建築のレットリック2「意味の力学としての建築」
多木浩二	7703	建築のレットリック3「ラショナリズムとフォルマリズム」
多木浩二	7705	建築のレットリック4「ランガージュとしての建築」
多木浩二	7708	建築のレットリック5「記号学の役割と限界」
佐々木隆文	7702	「都市計画と建築における超現代」
向井正也	7712	「1977年を顧みて懐古と折衷のデカダンス」
向井正也	7804	「華麗なる末期の憂楽」
磯崎　新	7805	「水のメタフォア」
八束はじめ	7806	「身体を喪ったディオニソス」
渡辺豊和	7904	「奇想反転無尽境」
坂本一成	7906	「建築での象徴作用とその図式—両義的なことの内に」
鈴木博之	7910	「私的全体性の模索」
篠原一男×槇文彦	8001	対談「1970年代から1980年代へ」
伊東豊雄	8006	「俗なる世界に投影される聖」
篠原一男×ロラン・バルト	8007	対談「いまネオ、非創造の時代…」
檜野憲治	8011	「ヴェニス・ビエンナーレ第一回国際建築展覧会」
篠原一男×磯崎新	8101	対談「モダニズムについて」
	8102	「ポスト・モダン　クラシシズム」
安山宣之	8109	「ヴェンチューリ昨日」
安山宣之	8111	「俗なるままに—アメリカン・モダニズムはいま」
佐々木宏	8204	「『ポストモダニズム』とは不毛で奇妙な表現ではなかろうか」
	8210	「フリー・スタイル　クラシシズム」
	8301	特別企画「近代建築をどうとらえるか」
	8305	特別企画「近代建築をどうとらえるか」その2
坂　茂	8302	「クーパー・ユニオンとJ・ヘイダック」
	8309	「M・グレイヴス建築を語る」
丹下健三×篠原一男	8309	対談「ポストモダニズムに出口はあるか」
磯崎　新	8311	「都市、国家、そして〈様式〉を問う」
西澤文隆　M・グレイヴス 三宅理一　北川原温	8311	「質問状　つくばセンタービルを見て」
多木浩二	8312	「安定／流動をめぐって」
渡辺豊和	8312	「ポストモダニズムに出口はある」
三宅理一	8301	現代建築思考1　モダニズムI—健全さをめぐって
三宅理一	8302	現代建築思考2　モダニズムII—『コルビュジェリアニスム』は存続するか」
三宅理一	8303	現代建築思考3　貧しさの美学
三宅理一	8304	現代建築思考4　ハイブリッド・ヴァナキュラー
三宅理一	8305	現代建築思考5　インダストリアル・ヴァナキュラー
三宅理一	8306	現代建築思考6　ニュー・バイオレンス
三宅理一	8307	現代建築思考7　ニュー・バイオレンス—2
三宅理一	8308	現代建築思考8　末期肥大症
三宅理一	8309	現代建築思考9　パンク・アーキテクチャーI
三宅理一	8310	現代建築思考10　パンク・アーキテクチャーII
三宅理一	8311	現代建築思考11　封印願望
三宅理一	8312	現代建築思考12　モノクローム現象
倉本龍彦	8402	「つくば翻訳あそび」
ハンス・ホライン	8410	「伝統の継承と建築の文脈」
鈴木博之	8412	「成熟を拒むもの」
三宅理一	8401	現代建築思考13　世紀末症候群
三宅理一	8402	現代建築思考14　愛の建築譚
三宅理一	8403	現代建築思考15　虚の物質思考
三宅理一	8404	現代建築思考16　危険思想1
三宅理一	8405	現代建築思考17　危険思想2
三宅理一	8406	現代建築思考18　恍惚機械
三宅理一	8407	現代建築思考19　人形愛撫
三宅理一	8408	現代建築思考20　壁派
三宅理一	8409	現代建築思考21　透明風景
三宅理一	8410	現代建築思考22　失われたネクロポリス
三宅理一	8411	現代建築思考23　錯乱の宇宙誌
三宅理一	8412	現代建築思考24　空のモルフォロジー
三宅理一	8501	現代建築思考25　巨根願望
三宅理一	8502	現代建築思考26　記憶へのメタモルフォーゼ
三宅理一	8503	現代建築思考27　記号の迷宮
チャールズ・ジェンクス	8502	「ポストモダニズムの彼方」
アルド・ロッシ	8503	「モダニズム批判の姿勢を通して」
松葉一清	8506	「〈近代〉との闘争」
溝渕一真	8506	「ルシアンの記憶」
小林裕美子	8510	「第3回ヴェネツィア・ビエンナーレ」
田中耕一	8511	「マイケル・グレイヴス雑感」
鈴木了二	8512	「魚の出てきた日」

建築文化



建築文化もおもに日本国内の建築を、個々の作品と作品解説と作品批評を通して紹介し、建築思想・潮流についての論文、記事も多く掲載されている。また、AA、AD、AR、PA、DOMUSなどの海外建築雑誌のなかに、興味ある記事、論文などがあると翻訳して掲載し、海外の建築および建築思想・潮流を紹介している。今回は、建築文化の場合は、原則として個々の作品の解説、批評は取り上げていない。

建築文化誌上において、はじめて〝ポスト・モダニズム〟という言葉が現れたのは1977年の後半である。7710号には、GeoffreyBroadbentによる「The Language of Post-Modern Architecture:a summary」の記事が翻訳され、掲載されている。また7807号には、松永安光による「ポスト・モダンの系譜」の記事が掲載され、他の雑誌よりいち早くチャールズ・ジェンクス著「ポスト・モダニズムの建築言語」の論文に関する記事を載せ、紹介している。また1970年後半から、建築を記号論的にとらえた記事、論文が多く載りはじめ、ポスト・モダン的状況において、以前はあまり取り上げられなかった近代建築をも含めとくに20世紀初頭の建築を読みかえる記事、論文が多く掲載されはじめた。

また8311号においては、磯崎新の「つくばセンタービル」が掲載されている。同時に、土田旭×布野修司、大江宏×藤森照信、川添登×松葉一清、石山修武×伊東豊雄、鈴木博之×三浦雅士たちの「つくばセンタービル」についての対談も載っており、ポスト・モダンに対するいろいろな考え方が掲載され、現代の混迷の状況を表している。また8405号の布野修司による「国家とポスト・モダニズム建築」という記事においても、「つくばセンタービル」などについて述べてある。

1983年頃から、ポスト・モダンに関連した記事、論文、批評が急に増えはじめた。とくに、CRITICAL JUNCTION という項目が連載されはじめて、ポスト・モダンに関する記事が多くなってきている。

(松井誠)

著者等	年月	『特集』・「記事」
チャールズ・ジェンクス	7612	「フェティシズムと建築」
	7703	「Elitist！」
ジェフリー・ブロードベント	7710	「The Language of Post-Modern Architecture：a summary」
特集	7710	『建築調書　1960〜75(ゴールデンSixty)』
	7801	「異化あるいはデペイズマンの都市」
伊東豊雄	7803	「コルビュジェとヴェンチューリの交錯する地点に今日ひとつの建築が成立する」
上野春雄	7806	「THEORY INTO PRACTICE by JAMES STIRLING」
松永安光	7807	「ポスト・モダンの系譜」
八束はじめ	7907	批評としての建築1「批評の不在と不在の批評」
藤井博己	7910	「変形に向けて」
八束はじめ	7911	批評としての建築2「言語領域—開放系と閉域と」
デイヴィド・ベル	7911	「『未完成』の美と統一性」
八束はじめ	8001	批評としての建築3「言語領域—開放系と閉域と(続)」
八束はじめ	8004	批評としての建築4「フォルムとイデオロギー」
八束はじめ	8008	批評としての建築5「建築の中の都市Ⅰ」
八束はじめ	8009	批評としての建築6「建築の中の都市Ⅱ」
パコ・アルバルダネ	8005	「日本のポスト・モダン建築と集合住宅—1」
パコ・アルバルダネ	8006	「日本のポスト・モダン建築と集合住宅—2」
パコ・アルバルダネ	8007	「日本のポスト・モダン建築と集合住宅—3」
太田真美	8008	「作品闘論『いま、建築は…』ポスト・モダンの表現」
小玉祐一郎	8101	シンポジュウム「20世紀の環境とデザイン」—ポスト・モダンに向けて
上野春雄	8108	「混迷する近代建築　Ada Louis Huxtable」
上野春雄	8109	「混迷する近代建築　Ada Louis Huxtable」
上野春雄	8111	「英国のポストモダニスト6人」
ピーター・コリモア	8202	「Ralph Erskine」
	8208	「Current Projects」
松永安光	8211	「ポストモダニズムの先行者　デ・キリコ」
藤森照信・渡辺豊和	8303	「近代の建築遺産をどう読むべきか」
松葉一清		
小玉祐一郎	8305	「ポストモダニズムに欠如するテクノロジーへの視座」
後藤伸一	8306	「〝ポストでなくポトスです〟—知の苦悩を乗り越えて」
布野修司	8307	「幻の戦後建築論争」
土田旭×布野修司	8311	「批判の建築たりえるか—都市と建築のポストモダニズム」
大江宏×藤森照信	8311	「キッチュの海とデザインの方法—新しい規範の所在は」
川添登×松葉一清	8311	「ポストモダンとポストモダニズム—脱近代への混迷の中で」
石山修武×伊東豊雄	8311	「『建築の解体』から『まとめの建築』へ—言葉の前衛性と現実の背反は何か」
鈴木博之×三浦雅士	8311	「建築における〝道化〟の役割—文化的ニヒリズムの行方」
布野修司	8312	「ポストモダニズム批判の不遜」
松葉一清	8401	「ポストモダニズムとハイテクデザイン」
三宅理一	8402	「ハイ・テクそしてハイ・タッチの再登場—欧米に見る'80年代前半の動き」
上野春雄・布野修司	8404	「瓦版：コノゴロキニカカリシコトドモ」
松永安光・松葉一清		
三宅理一		
布野修司	8405	「国家とポスト・モダニズム建築」
藤井博己	8405	「認識することから知的生産は始まる」
竹山実	8406	「国家と様式—記号論を越える？」
松葉一清	8409	「死体解剖的風土デザインを越えるもの」
上野春雄・布野修司	8412	「1984年—建築界の動向」
松永安光・松葉一清		
三宅理一		
向井正也	8501	「ロマン主義の支配」
片木篤	8502	「記号論繁盛記」
平良敬一	8504	「地域主義しか無い」
後藤伸一	8504	「表面をめぐるディスクール—1960年代以降の建築表現」
土岐新	8508	「時代の様式はまだ見えてこない」
西原清之	8510	「ハイテク時代における様式のもつ意味について」
上松佑二	8511	「現代建築の精神状況」

S D



「ポスト・モダン」あるいは「ポスト・モダニズム」と呼ばれる問題を考えるにあたって参考となる資料を挙げよ、という要請に答えることはかなり難しい。それというのも、この動向は現在進行中で、雑多な様相を呈しており、しかも大きく振れ動いてさえいるからである。そのような状況こそが、ポスト・モダンだということもできようが、資料は、取捨選択され、いったんは確定的であるかのように提示されねばならない。

ここに挙げた参考資料は、単純にポスト・モダン等の名の付いたものと、やはりある程度、個人的な視点をもって取り上げられたものである。したがって、このリストは完全ではないし、確定的でもないことを断っておかねばならない。しかし、完全でもなく確定的でもないことを念頭においた上で、この雑多によせ集められた資料のいくつかの間に、個々人が何らかの関係性を見いだし、流動性を残したポストモダン像を知的にブリコラージュすることは可能である。

ポストモダンを肯定するか否定するかは、この作業を行った後に決めるべきであろう。誰かの言うポスト・モダンや、ポスト・モダンに関するあいまいな先入観に対してではなく、自らが積極的に組み立てたポスト・モダン像に対して行うべきである。さもなくばポスト・モダンの動向は流行現象のようにしか見えない。そしてすでに「モダン」とは呼ぶことができないようなわれわれの今日性を直感した人は、肯定すべきものとして、それぞれのポスト・モダン像を組み立てることができるはずである。ポスト・モダンの問題は、これからの未来を、自分たちの未来として実際に作り出してゆこうとする、われわれすべてにとっての問題であると思われる。　(上田知正)

著者等	
特集	
特集	
磯崎　新	
磯崎　新	
磯崎　新	
磯崎　新	
磯崎　新	
特集	
磯崎　新	
特集	
磯崎　新	
特集	
B・ラディーチェ	
E・ソットサス	
M・D・ルッキ	
特集	
特集	
B・ラディーチェ	
特集	
松永安光	
竹山　実	
沼辺国夫	
安山宣之	
片木　篤	
渡辺真理	
彦坂　裕	
竹山実×石井和紘	
竹山　実	
細江勲夫	
特集	
R・ベンチューリ	
特集	
八束はじめ	
鈴木博之	
磯崎　新	
特集	
渡辺妃佐子	
レオナルド・バッカー	
特集	
特集	
特集	
進来　玄	
三宅理一	
松浦寿夫	
特集	
A・ナタリーニ	
磯崎　新	
野口昌夫	
池亀拓夫	
B・ラディーチェ	
特集	
特集	

	年月	『特集』・「記事」
	7604	『磯崎新の全作品』
	7612	『ニューヨークデザイン美術館展』
	7703	「イマジナリーアーキテクチャ：ライムント・アブラハム」
	7704	「イマジナリーアーキテクチャ：ウーゴ・ラ・ピエトラ」
	7706	「イマジナリーアーキテクチャ：ピーター・クック」
	7708	「イマジナリーアーキテクチャ：ピラネージ」
	7709	「イマジナリーアーキテクチャ：ロン・ヘロン」
	7710	『現代建築の新思潮』
	7712	「イマジナリーアーキテクチャ：メンディーニ」
	7803	『現代建築の新思潮―2』
	7804	「ファンシーな傾向」
	7806	「表層化としての建築」
	7808	「ノーナンセンス・ジェネレイション」
	7809	「イマジナリーアーキテクチャ：ペッシェ」
	7810	『スタンリー・タイガーマンの作品』
	7912	『最近のエットーレ・ソットサスjr』
		「エットーレ・ソットサスの近作」
		「デザイナーであるとはどういうことか」
		「環境縮小の新旧の面について」
	8000	
	8103	『新古典主義／ポスト・モダニズムと新古典主義』
	8202	『メンフィス：ニュー・インターナショナル・スタイル あるいは家具のポストモダニズム』
		「ニュー・インターナショナル・スタイル」
	8208	『渦巻くポストモダニズム』
		「エリック・モス：表象としての建築」
		「カリフォルニア・ドリーミン」
		「タフト・アーキテクツ」
		「〝異化〟の流れの中で」
		「アメリカ建築の新しい波と古い伝統」
		「コウター／キム：都市の文脈の解読」
		「イメージパラダイムの回転ドア」
		「アメリカの若い建築家たちは今……」
	8303	(1982年9月メンフィス新作発表展プレス用資料抜粋)
		「〈メンフィス〉の背景―何故家具なのか」
		「重量と体積のある新人達」
	8304	『マイケル・グレイブス』
	8305	「シンボリズムと時代精神（インタビュー）」
	8401	『磯崎新　1976―1984』
		「テクストの戦略とポストモダニズム」
		「主題のない物語―つくばセンタービル」
		「自註」
	8403	『メンフィス1983』
		「イタリアン・パラドクス」
	8404	「ポストモダン・ランドスケープにおける空間の凋落」
	8405	『A・メンディーニ』
	8406	「The Wayout of post-modernism? !」
	8410	『ノル：ペンチューリ・コレクション』
	8502	『ポストモダンのフランス建築』
		「現代フランス建築の特色考」
		「プリミティビズムの台頭」
		「ゲームの規則（1.ゲームの要請　2.言語ゲーム 3.ゲーム規則の要請　4.ポストモダンの条件）」
	8505	『アドルフォ・ナタリーニの建築　1979―83』
		「建築のラブドマンツィア」
		「考古学的思考」
		「記憶の再構築へ」
		「ミケーレ・デ・ルッキ：ポストメンフィスへと始動する若き感性のゆくえ」
		「(デ・ルッキについて)」
	8507	『マルコ・ザニーニ』
	8510	『ポストモダンの地平から―展　より』

JAPAN INTERIOR DESIGN



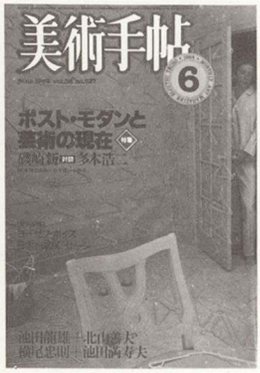
つぎの時代の主流となる動向は、初めてその姿を見せたとき、必ず保守的な勢力から非難の声をあびてきた。しかし時代の感性はそれを自らのものと直感し受け入れる。その意味では、硬直化した一部のアカデミシャンの知性より、一般的な同時代人の感性の方が信用できる。

「インテリア」は、イタリアのラディカル・デザインからポスト・ラディカルであるアルキミアやメンフィスまで、積極的に取り上げてきた。ポスト・モダンという言葉を、われわれのこれからの時代を表す言葉として捉えるという姿勢をとるならば、社会構造の変革を目指したラディカル・ムーヴメントは、ポスト・モダンを考えるにあたって重要な示唆を与えてくれる。それゆえ、「インテリア」からは、デザインと建築におけるラディカル・ムーヴメントに関する資料も積極的に取り上げた。

メンフィスの主唱者であるエットーレ・ソットサスの論文「幼なかったころ（№261）」は、ソットサスの姿勢を端的に表している文章として取り上げた。メンフィスは、自らはポスト・モダンであることを否定している。しかしそれは、ポスト・モダンあるいはポスト・モダニズムが、歴史主義、折衷主義と混同されているためであるにすぎない。　（上田知正）

著　者　等	年月	『特集』・「記事」
E・ソットサス	7603	「椅子の意味」
多木浩二	7704	「詩が言語のコードを開くように空間を開く形式（建築：作品と方法の追跡―2　伊東豊雄）」
特集	7706	『エットーレ・ソットサス：人間のためのデザイン』
B・ラディーチェ		「エットーレ・ソットサスとメンフィス・ブルース」
多木浩二	7711	「〈仮面性〉と現実性（建築：作品と方法の追跡―6　石井和紘）」
特集	7801	『アンドレア・ブランジのデザイン・サーチス』
A・ブランジ		「ラディカル・ノート」
特集	7905	『アドルフォ・ナタリーニのイベント〈生涯、オブジェクト、建築の代わりとしての記憶〉』
特集	7911	『ガエターノ・ペッシェ』
特集	7912	『アバンギャルド・ファニチャ：スタジオ・アルキミアの活動』
フランコ・ラッジ		「ポスト・ラディカル運動とインテリア」
特集	8011	『フォーラム・デザイン展』
E・ソットサス	8012	「幼なかったころ」
A・メンディーニ	8101	「ラディカルデザイン〈今日のアバンギャルド〉」
A・メンディーニ	8102	「ラディカルデザイン〈イタリアのアバンギャルド〉」
A・メンディーニ	8103	「ラディカルデザイン〈キッチュ賞讃〉」
A・メンディーニ	8104	「ラディカルデザイン〈バナール〉」
A・メンディーニ	8105	「ラディカルデザイン〈ポスト・アバンギャルド〉」
特集	8202	『メンフィスの家具』
B・ラディーチェ		「メンフィス：ザ・ニューインターナショナル・スタイル」
山口勝弘		「即時ジャーナリズムのデザイン運動」
特集	8203	『クリスティアーノ・トラルド・ディ・フランシア：スーパースタジオの作品』
フランシア		「イベイジョン・デザイン」
フランシア		「柱・梁・屋根で構成される販売空間」
U・L・ピエトラ	8205	「古き良き時代の様式から清潔で明るいラインへ」
特集	8208	『梅田正徳の新作家具』
特集	8209	『〈アール・エ・アンドゥストリ〉のオブジェクト』
特集	8210	『スタジオ・アルキミアの活動』
佐藤和子		「強烈ロックのスタジオ・アルキミア」
トマーゾ・トリーニ		「馬鹿げた体育実験」
アルキミア		「雌雄両性の建築」
R・リナルディ		「身体の装飾」
特集	8302	『第16回ミラノトリエンナーレ展』
E・ソットサス	8303	「メンフィスの思想とニューデザイン(インタビュー)」
特集	8304	『アンドレア・ブランジの近作』
A・ブランジ		「ラディカルデザインからニューデザインへ（インタビュー）」
A・ブランジ		「デザイン―イタリア・デザイン」
特集	8401	『ウーゴ・ラ・ピエトラ』
特集	8403	『メンフィス1983』
磯崎　新		「メンフィスをどう位置づけるか（インタビュー）」
B・ラディーチェ		「多彩なイメージの展開」
特集	8407	『つくばセンタービル』
A・ナタリーニ		「古典主義へのリファランス」
U・L・ピエトラ		「引用のカタログ」
A・メンディーニ		「厳格な流儀による転移」
磯崎　新		「より折衷的に」
特集	8408	『クリスティアーノ・トラルド・ディ・フランシア：スーパースタジオの近作』
フランシア		「建築とデザイン」
磯崎　新		「BEING MORE ECLECTIC」
特集	8409	『ウーゴ・ラ・ピエトラの家具デザイン』

美術手帖



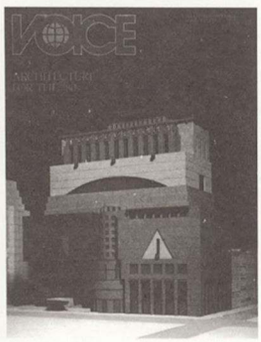
著者等	年月	『特集』・「記事」
多木浩二	7604	「磯崎新の住宅建築」
前野寿邦	7605	「住空間への試み—二つの建築展—」
山本学治	7701	「日本の近代建築とA・レーモンド」
多木浩二	7707	「芸術の概念を提示—『引用と暗喩の建築—磯崎新の建築作品1960—1977』展」
宮島久雄	7810	「脱機能主義への推移—『イスのかたち—デザインからアートへ』展」
	7900	
三村 翰	8009	「パオロ・ソレリのアーコロジー—二つの展覧会を中心に」
柏木 博	8112	「二項対立の出口—ボードリヤール・フォーラム東京'81」
石山修武	8204	「〈ドミノ〉の再生」
藤枝晃雄	8206	「モダニズムからポスト・モダンへ—Joseph Kosuth インタビュー」
石山修武	8210	「商店・キッチュ」
石山修武	8212	「伝統とモダンへの問い」
石山修武	8302	「建築の冬眠現象」
石山修武	8304	「新宿西口・NSビルからの風景」
北野ヒロシ	8306	「デザイナーの『力』—セイコー『スピードマスター』」
石山修武	8309	「痛烈な建築家批判—トム・ウルフ『バウハウスからマイホームまで』」
山口勝弘	8309	「昇華したエンジニア精神の死—バクミンスター・フラー」
北野ヒロシ	8309	「このハサミには『困ったもんだ』」
古館克明	8310	「photo gallery夜汽車の如く」(高松伸の作品写真)
石山修武	8310	「深層ポストモダニズム—大江宏の国立能楽堂」
柏木 博	8401	「日本のモダンデザインの源流を見る—『モダニズムの工芸家たち 金工を中心にして』展」
石山修武	8402	「歴史的感覚としてのポストモダニズム」
特集	8406	『ポストモダンと芸術の現代』
磯崎新+多木浩二		「コズミックジャンプの衝動でさえも」
柏木 博		「前進しつづける近代デザイン」
石山修武	8408	「職人たちの生産力—伊豆の長八美術館」
石山修武	8410	「商店が面白い」
石山修武	8503	「ポスト・モダンの原質—松山巖『乱歩と東京』をめぐって」
石山修武	8507	「日本は甘くない—C・アレグザンダー『盈進学園東野高校』」
特集	8509	『中国的感覚—故宮博物院と現代デザイン』
柏木 博		「中国デザインにデザインの原理を見る」
石山修武		「松永安光の福井邸」
山本衛士	8510	「〝日本じゃないみたいな〟集合住宅」
増刊	8511	『現代イタリアの創造力』

ここ二、三年の間で、美術手帖の印象が何となく変わってしまったと感じるのは、恐らく私だけではあるまい。誤解を承知で敢えて述べるならば、どことなく軽くなってしまったのである。それは、世界中で少なからず見られる現代美術の最先端と風俗やファッションの最先端の結合現象に対する、編集部のフットワークの軽やかさに基づいているともいえるであろう。今やモダンアートを楽しむ人は、MTVで最新のヴィデオクリップを楽しみ、誰よりも早くニューファッションで身を包むのであり、恐らくこの雑誌はそういった若い人々をターゲットの中心へとスライドさせたのであろう。

ポスト・モダンの建築やデザインの現象は、そういった若い人々の興味の対象となり得ると思われるのだが、意外にそれらを扱った記事は少ない。リストアップしたもののほとんどは、見開き2頁の短文であり、系統だてて展開されることはない。'84年6月号に「ポストモダンと芸術の現代」という特集がみられるに留まる。それぞれのエッセイは、論者のその時々の関心に従って書かれているようであり、新聞における囲み記事のような役割を果たしている。恐らくこの雑誌は、美術界の最先端の話題を追うのに忙しいのであろう。なお、現在の美術界を席捲した感のある、ニューペインティングに関する特集は、'83年の半ばあたりから、積極的に組まれている。

(金村京一)

各種雑誌



著者等	
フランコ・ラッジ	
特集	
特集	
特集	
特集	
特集	
特集	
特集	
特集	
ウゴ・ラ・ピエトラ	
特集	
特集	
特集	
特集	
特集	
A・メンディーニ	
特集	
東野芳明	
特集	
K・フランプトン	
佐藤和子	
特集	
レナード・コーレン	
阿部公正	
E・ソットサス	
佐藤和子	
J.−F.リオタール	
特集	
坂 茂	
竹山 実	
松葉一清	
特集	
J.−F.リオタール	
竹山 聖	
渡辺豊和	
特集	
布野修司	
長谷川堯	
石井和紘	
ピーター・ホフマン	
レナード・コーレン	

	年　月	『特集』・「記事」
	7603	Franco Raggi編集号（Casabella411号）
	7603	『Charles W. Moore』（仏A/A184号）
	7608	『New York in White and Gray』（仏A/A186号）
	7701	『Arata Isozaki』（英A/D47－1号）
	7704	『Post-Modernism』（英A/D47－4号）
	7705	『OMA』（英A/D47－5号）
	7706	『America Now』（英A/D47－6号）
	7707	『Venturi & Rauch』（werk·architese 64－7/8号）
	7710	『Architettura e linguaggio』(Casabella429号)
	7801	『Post-Modern History』（英A/D48－1号）
	7803	「Architettura radicale in Italia」（DOMUS 580号）
	7807	『Venturi et Rauch』（仏A/A197号）
	7811	『Reclaiming the past』（米P/A11月号）
	7904	『もうひとつの建築論－建築における構造主義』（建築雑誌4月号）
	7905	『魅惑の「メカ・デザイン」』（芸術新潮5月号）
	7912	『Beyond Modernism』（米P/A12月号）
	8001	「Editoriale」（DOMUS602号）
	8009	『Interior Design』（米P/A 9月号）
	8100	「エクレクティシズムに想う」（AXIS Vol. 1）
	8100	『モダニズムとの訣別/マイケル・グレイブス』（AXIS Vol. 2）
	8107	「アメリカ建築の方位（対談・磯崎新）」（KAWASHIMA第4号）
	8200	「ポストモダンの源流をさぐる：イタリアデザイン界の現状と展望」（AXIS Vol. 3）
	8207	『数寄屋と現代建築』（建築雑誌7月号）
	8210	「ポスト・モダニズム展」（ブルータス51号）
	8210	「ポスト・モダニズムをめぐって」（施工10月号）
	8300	「メンフィス・その発想と回帰（インタビュー）」（AXIS Vol. 6）
	8300	「イタリア・デザインの潮流」（AXIS Vol. 8）
	8303	「ポストモダンの条件」（現代思想11巻3号）
	8305	『デザインの王国イタリア』（ブルータス64号）
	8306	「模倣からの離陸・日本建築のポストモダニズム」（EOS 3号）
		「70年代　モダニズム建築の死後　錯綜するコード選択」（EOS 3号）
	8309	「遊びの空間－ポスト・モダン時代の建築」（季刊panoramic magazine is 22号）
	8312	『染織のポストモダニズム』（KAWASHIMA 13号）
	8400	「実験期における哲学と絵画－ポストモダン理念への寄与」（理想608号）
	8405	「P. P.（ポスト・ポスト）モダン・ファニチュアを探る」（ブルータス87号）
	8407	「楽しきことのみ機能的である」（ブルータス92号）
	8409	「建築雑誌のアンダー・グラウンド《極》《群居》」（ブルータス96号）
	8505	『〈仕掛け〉考－意味とコンテクストを仕掛ける」（都市住宅5月号）
	8506	「建築のポストモダンと「間」－現代建築に「間」は可能か」（KAWASHIMA 17号）
	8509	「擬態としてのポスト・モダン建築」（季刊panoramic magazine is 29号）
	8510	「Architecture for the '80s」（VOICE 1985年10号）
	8511	「ニューヨーク発怪電波・啓示次元のＴＶ業界　民事次元のデコ・トーン」（ブルータス 123号）
	8512	「ニューヨーク・アート・ナウ展」ポストモダンの旗手たち（TRENDS 1985年12月号）

「ポストモダニズム10年」

—編集を終えて—

ひとそれぞれのポスト・モダン、というのが多くの読者諸氏の感想だろうか。世界観の問題として語っていただいた方も、きわめて個人的なコードで論じていただいた方も、また聖俗を辛抱強く縫い合わせるように記述していただいた方もある。一方、モダンに関しては、各人その許容範囲は異なるにしても、われわれは案外に共通した理解の仕方をしているものだと、改めて感心させられたりもする。むしろ、ここが問題なのだろうか。

ポスト・モダン（モダン以後）という言葉が定着した今、モダンを過去のことと錯覚しがちだが、言葉の矛盾だ。いかに長生きをしても私たちはモダン・タイムズ（現代）に属し、死後、子孫はポスト・モダンの人間となるが、彼らにとっても自分たちの時代はやはりモダン（今）となるのであり、それをポスト・モダンと呼べるのは私たちから見たときだけのことだ。言葉としてのポスト・モダンは特殊な場合には便利なだけではなく適切でさえあるが、自分の時代ばかりか自分自身をも放棄する無責任な概念でもある。誰ひとりとしてポスト・モダン（今後あるいは未来）を今、生きることはできない。

それにもかかわらず、モダン全体を、「近代」はおろか「現代」までをも私たちは昔のことと感じつつある。モダンという言葉は、仮に別のものを指し示していたにせよ、前世紀の中頃から次第に多用されるようになり、現在に通じる価値概念、様式概念、そして時代概念としてのモダンが一応の成立を見てからもすでに久しい。「近代」にせよ「現代」にせよ、あまり頻繁に永く使われ続けたために、現代デザインを語るには「現代」という形容では事足りなくなってしまっている。

ポストモダニズムは、その本来の意味を考えるならば、（過去とではなく）現在との自覚的で計画的な絶縁と新たな表現形式を探究する最前衛または超前衛の動向であると同時に、モダニズムとおなじく、あるいはそれ以上に、上記のような私たちの時に関する他覚的症候なのだと思える。それは加速するモダンからさらに前方へ高速で打ち出されようとする物体のようなもので、ある超高速に達したとき、すべての個体がその空間に自由に浮遊し、混在することになるのだろうか。搭乗者がポスト・モダンからモダンへ引き戻されるのは、モダンの宇宙船を超えたはずのシャトルが宙に散るときだ。すべては制御され、誰にも責任はない。人類への課題であると同時に、きわめて日本的な問題でもある。

*

ポストモダニズムという矛盾に満ちた概念をいったんは寛大に受け入れ、興味深い原稿をお寄せいただいた執筆者の皆様にお礼申し上げたい。アンケートの回答の中には、数ページを用意して、むしろ論文の執筆をお願いすべき内容のものが含まれていた。

そして、アンケートの設問では、ポスト・モダンという切り口で、建築から都市のデザインはもとより、多様な領域を意識したせいか、また誌面も限られていたので、回答者の真の意図を十分に反映しがたかったように思えるが、本テーマについての多様性をそのまま各層の感性の中でどのように映し出しているかを物語っている。これからの各位の視座を構築する一助になれば幸いである。

「建築と社会」で〝ポスト・モダン〟をとりあげたのは、今回が最初であると思われる。全体の誌面を通じて、本特集の特徴でもあるが、ややビジュアルに語る部分が少なくなっている。具体的作品等のイメージは他誌等のプレゼンテーションにより補完していただかざるを得ないことをお許し願いたい。いずれにしても今後もこの概念と〝建築と社会〟との関連性を見守りながら、しかるべき機会に再度編集企画したいと思っている。

今回の企画にあたり、石井和紘建築研究所からは直島町役場の写真をご提供いただいた。また、本誌の前編集委員、藤本憲太郎氏（関東学院女子短期大学講師）の協力にも感謝したい。

ご協力いただいた方々に重ねて感謝申し上げます。

（編集幹事　田中直人、藤田治彦、田附尚）

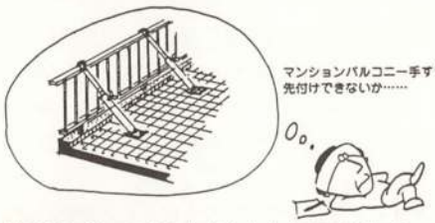
企画：日本建築協会

プロのノウハウ　最新刊　あなたもアイデアマンになれる

現場マンのアイデア発想

四六・ 224頁・定価1800円

戸田建設株式会社 **合原 一夫 著**



金属工事ではコストを大きく左右するアイデアテーマが多い

厳しい時代を生きぬく原動力はアイデアだ!!

- どうしたら施工のコストが下げられるのだろう？
- どこを改善したら現場がスムーズに動くか？

厳しい不況からの脱出を目指し，各社ともコスト・品質競争に必死である．本書は，そうした現場で生かせる施工のアイデアや，盲点になっている改善テーマなどを数多く集めた．また，どうすれば役立つアイデアが得られるのかなど，日常生活や職場でのアイデア発想法などを提案．即実行に移せるアイデアの本．

プロのノウハウ　好評発売中

TQCから見た建設業 問題解決の決め手
荒木睦彦著 / 四六・ 192頁・定価1600円

軀体工事監理のチェックポイント100
須賀好富著 / 四六・ 224頁・定価1800円

パソコン会計術 設計事務所編
西部明郎著 / 四六・ 224頁・定価1800円

建物の値打ちの高め方 ビル・マンションの新しい評価法
小林清周著・四六・ 208頁・定価1700円

空調設備のトラブル50 建築に携わる人へのヒント
建築設備トラブル研究会著・四六・ 224頁・定価1800円

衛生設備のトラブル50 建築に携わる人へのヒント
建築設備トラブル研究会著・四六・ 224頁・定価1800円

〈目録進呈〉

学芸出版社

〒600 京都市下京区木津屋橋通西洞院東入
TEL 075(343) 0 8 1 1

企画：日本建築協会



プロのノウハウ

最新刊

……建築に携わる人へのヒント

知りたくても知るすべがなかったこと，書きたくても公には書けなかった
さまざまなトラブルの事例・原因・対策から，その解説・ヒントまで——

最新の設備や技術ゆえに起こるトラブルから，いつも失敗をしながら明確な解決策が出されなかったトラブルまで，現場サイドの技術や知識に裏付けられた，実際に起こった事例とその対策の数々．トップレベルの技術者たちの知識と勇気を結集してまとめた．空調設備や衛生設備で失敗しないための方法や技術をすべて盛り込んだ，画期的なトラブル解消のトラの巻である．

空調設備のトラブル50

四六・224頁・定価1800円 **建築設備トラブル研究会著**

●内容概略
1 熱特性にまつわるトラブル
2 梁と天井裏スペースにまつわるトラブル
3 シャフトまわりのトラブル
4 ガラリまわりのトラブル
5 屋上・屋外設置機器まわりのトラブル
6 空調機械室まわりのトラブル
7 居室内のトラブル



衛生設備のトラブル50

四六・224頁・定価1800円 **建築設備トラブル研究会著**



●内容概略
1 地中・床にまつわるトラブル
2 シャフト・壁・便所にまつわるトラブル
3 浴室・外壁にまつわるトラブル
4 地下・屋上にまつわるトラブル
5 腐食にまつわるトラブル
6 給水・給湯にまつわるトラブル
7 排水にまつわるトラブル

〈目録進呈〉

学芸出版社

〒600 京都市下京区木津屋橋通西洞院東入
TEL 075(343) 0 8 1 1

特集
これからの防水工法

総論

防水の歴史とJASS 8 制改定の経緯／小池迪夫

リフォームと防水——屋上防水の改修／辺見　仁

各論 1 メンブレン防水

最近のアスファルト防水の動向／斉藤　彪・荒木　孝

塗膜防水／伊藤松夫

シート防水工法の動向／藤木俊昭

各論 2 シーリング防水

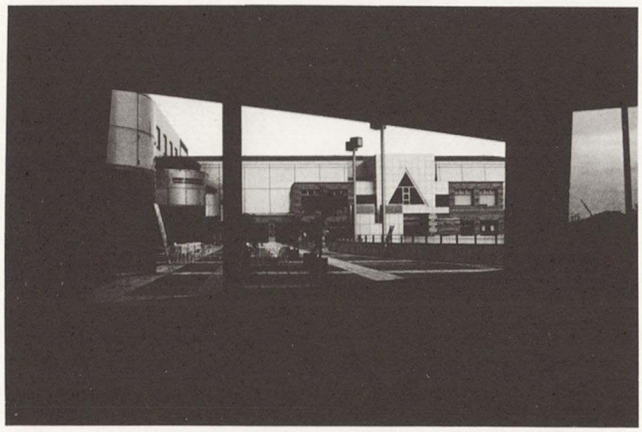
シーリング防水の現状と今後の課題／操上弘昌

各論 3 外壁防水

外壁塗膜防水／永井健太郎

各論 4 特殊防水

ステンレスシート防水／高橋行雄



技術資料頁・防水工法データ・シート

外側断熱工法・脱気工法／近畿防水事業協同組合

断熱露出防水SC－25GF（ギルフォーム）／東亜アスファルト事業協同組合

特許NK式断熱防水工法／日興化成

日立バイナリーシートP／日立電線ゴム事業部

サンロイドDN防水システム／筒中シート防水

エキスパンタイTE型／タイセイ商工

R－T工法(ステンレスシート防水)／三晃金属工業

ベタウォールスーパー3200エクシード／サンスター技研

ロードシル／クリヤマ

関連広告

鐘淵化学工業……表 2

ARセンター…… 2

東レ・シリコーン…… 2

東洋ゴム工業…… 4

東亜アスファルト防水事業協同組合／東亜工業…… 5

ダウ化工…… 6

タイセイ商工…… 7

日立電線…… 8

日新工業…… 9

三ツ星ベルト…… 10

マサル工業…… 40

東亜合成化学…… 41

横浜ゴム…… 41

フタバ興業…… 100

木下謹三商店…… 100

高山工業…… 101

三星産業…… 101

大阪防水建設社…… 102

日新建工…… 102

本号特集編集幹事

吉田健次　藤田孝吉　平等一之　山下修司

●総論

防水の歴史とJASS 8 制改定の経緯

小池迪夫

1. 防水の歴史

紀元前150年ごろ、ギリシャの植民市ビザンチウムの数学者で旅行家のフィロンは、〝世界の七不思議〟を選んだという。その中に〝エジプトの大ピラミッド〟〝ロードス島の巨人像〟などに混って〝バビロンの空中庭園〟がある。

「新バビロニア王国のネブカドネザル大王は、メディア王キャクサレスの王女アミティスを王妃とした。しかし、彼女は乾燥した担々たるバビロニアの風景に親しまず、故国メディアの緑の山々を慕って楽しまなかった。

王妃を熱愛した大王は多くの建築家・技術者を集め、その首都バビロンに、高さ約350フィートの、テラスが重なりあった建物をつくるように命じた。各テラスには各種の樹木や草花が植えられ、ユーフラテスからくみあげられた水で灌漑され、その水はまた特殊な装置で排水された。こうして王妃はバビロニアに留まり、幸せな生活を送ったという。

……中　略……

メソポタミアの建築物の窓はいずれも小さく、その壁は厚いが、これは炎暑をさけるためであった。しかし、このテラスでは、外部の植物の葉からたえずしたたり落ちる水滴の幕によって外部の暑熱をさえぎり、その内部は盛夏でも涼しかったであろう。ネブカドネザルの工匠たちの苦心は、部屋の上の庭にたえず給水されている水が、どうしたら部屋に滲みださないようにするか、ということだった。

彼らの結論は、部屋の天井に葺と瀝青（チャン）をふき、さらにその上に鉛の厚い板を置くことであった。これは成功した」（板倉勝正：バビロンの空中庭園、森本哲郎編：目でみる世界七不思議の旅、㈱文芸春秋刊、1986）

これは紀元前6世紀の前半の話であり、遺跡も発掘されているという。古代人は、規模においても、精巧さにおいても現代人を驚かすような技術をもっていたようである。防水技術も例外でなく、その主役は天然アスファルトであり、ブロックや土管の目地にも天然アスファルトが利用されていた。

さて、話は近代の日本まで下る。

日本建築学会の前身である造家学会は明治19年（1886）に創立され（本年100周年を迎えた）、翌20年から機関誌「建築雑誌」を創刊した。No.13（明治21年1月）には前年中に行われた講演会が紹介されている。その中に、新家孝正による〝土瀝青の説〟というのがある。

No.17（明治21年5月）には、黒沢利八による〝地瀝青〟と題する論議があり、地瀝青が道路建設、水道管やガス管の防食、湿地の防湿、屋根などに用いられることを紹介している。No.28（明治22年4月）には中村達太郎が〝フェルト葺〟について触れており、また、No.70（明治25年10月）に、ゼー・コンドル設計の海軍官舎の工事要領報告が掲載されており、屋根はスレート、平屋根は鉛板、地中煉瓦壁外側へアスファルトを塗布したことが報告されている。

No.97と98（明治28年1、2月）に別掲囲み記事のような陸屋根防水に関するQアンドAが掲載されている。この答をみると、すでに積層防水が発想されているように思われるが、建築雑誌にアスファルト防水の記録が掲載されたのは、明治38年8月竣工の「大阪瓦期株式会社事務所」が最初である。No.233（明治39年5月）に「屋上は3階建の部分亜鉛板葺き平家の部分はグラベルルーフ式上部を運動場とす」（平家建は4間半×3間半）とある。添付の平面図によれば、社長室に続くバルコニーになっている。〝グラベルルーフ〟とは砂利押えの防水屋根であろうが、当時その用語が一般化していたかどうかと、建築雑誌をさかのぼってみると、No.72（明治25年12月）の〝海外建築茶話（続）〟に〝砂利屋根〟の話が出ていた。防水業界の長老の話によれば、大阪瓦期で用いられた防水材料は、アメリカからの輸入品であったという。

2. JASS 8の制定と新防水工法の登場

JASSとは（社）日本建築学会が制定している建築工事標準仕様書のことで、英語のJapanese Architectural Standard Specificationのイニシャルからきている。その歴史は古く、大正12年（1923）にさかのぼる。建築施工技術の向上を図るため仕様書の標準化の作業が開始され、昭和16年までの間に建築主体工事に関して16の標準仕様書が公表されている（防水工事は含まれていない）。

昭和26年（1951）に材料施工規準委員会が発足し、標準仕様書の全面更改作業が行われ、翌年から逐次成果が公表された。

JASS８、１節アスファルト防水工事(案)は昭和27年９月号の建築雑誌に公表された。当時、いわゆるメンブレン（膜）防水工法には、アスファルトは防水しかなかったといえる状態であった。(補修用のアスファルト系塗膜が輸入されていたかもしれないが)。

昭和30年発足の日本住宅公団（現・住宅都市整備公団）は、当初大阪支所管内および東京支所の札幌地方を除いて、屋上にモルタル防水を採用していた。しかし、雨漏り事故が多発してその解決のために、狩野博士を長とする委員会を設けて、屋根防水コンクリート工法を開発し、昭和33年度から公団はその実施に踏切った。それを受けてJASS化され、昭和36年３月号の建築雑誌に、２節屋根防水コンクリート工事（案）が公表された。この仕様書は今回の改定まで存続したが、皮肉なことに公団は昭和38年度からこの工法の採用を止めた。それは、昭和37年の８月から10月までの約３ヵ月間、異常といえる日照り続きでコンクリートにクラックが入り、そのあと来襲した台風により雨漏りが多発したためである。

新しいメンブレン防水工法の発場は昭和30年ごろからであろう。最初に用いられたのは酢酸ビニル樹脂のエマルションであったが、惨たんたる結果に終ったことをご記憶の読者も多いことと思う。間もなく改良品と称する製品も出されたが大したことはなく、無責任な結末を迎えたものも少なくなかった。クロロプレンの塗膜材が輸入されたのも昭和30年代の半ばごろで、40年近くなって国産化されたが、屋根防水としては期待はずれであった。結局のところ、塗膜防水工法が一人前として認められるためには、昭和40年代のはじめに開発された、２成分反応硬化形のウレタンゴム系塗膜防水材の登場を待たねばならなかった。この工法の先駆的工法として、昭和30年代の末期に登場したエポキシ変性ポリウレタンに注目する必要があろう。また、それより以前に登場した、タールエポキシ防水の悲惨な結末も忘れてはならない歴史の一コマであった。

シート防水工法が急に注目されるきっかけになったのは、昭和35年（1960）西ドイツからポリイソブチレンシートの技術導入である。それより先、昭和33年ごろから輸入され、主として地下構造物に試用されていた。技術導入の動きは業界関係者の強い関心を集め、その対応の素早さには目を見張るものがあった。ある会社では、アメリカ人の技術者の指導による加硫ブチルゴムのシートを、昭和36年に生産を開始した。また、もともと生産技術のある可塑化塩化ビニルのシートも前後して登場することになる。

このような、防水業界にとって未曽有のインパクトの最中、JASS８１節の改定作業が行われ、昭和37年８月号の建築雑誌に、１節アスファルト屋根防水工事(案)が公表された。この案では、その名称のように適用範囲は屋根に限定され、昭和27年案に含まれていた。地下室、貯水槽、室内が除かれた――委員であった筆者にもその真意はわからなかったが。

さて、衝撃的なスタートをしたシート防水工法ではあったが、その発展は必ずしも順調ではなかった。ポリイソブチレンシートは下地の不連続部における動きで容易に破断した。当時、コンクリート下地のクラックでアスファルト防水層が破断する事故が続発し、その対応が工夫されていた。数%の伸び率しかないアスファルトルーフィングに比べて、500 %の伸び率を示すポリイソブチレンのシートは魅力的であった。その頃にわかに建設ブームとなったボウリング場の屋根、体育館の屋根に用いられ、下地の激しい動きによって３～４ヵ月で破断した。それは〝ゴム〟という名称に惑わされ、加硫しないゴムの疲労に対する弱点に無知であった建築技術者と、防水下地の動きに無知なメーカー側の化学者との狭間に生じた事故といえる。後になってわかったことだが、欧米では屋根用のポリイソブチレンのシートは石綿フェルトで裏打ちされ、しかも絶縁工法で用いていたのだが、その情報が入っていなかった。技術導入したのは地下防水用のシートだったのである。

加硫ブチルゴムシートも順調ではなかった。加硫ゴムという網状構造は疲労に強い反面、分子の主鎖にある２重結合のためにテンション状態でオゾンクラックを発生する欠点がある。従来、オゾンは山岳や海岸地域に多く都会にはほとんど存在しないと考えられていたが、実はそうではなかった。ロスアンゼルスで注目された、自動車の排気ガスによるオキシダントの発生が、日本でも起っていたのだ。加硫ブチルゴムシートは施工後２年ほどでオゾンクラックを生じた。追随して登場した加硫クロロプレンゴムのシートも例外ではなかった。この加硫ブチルゴムの欠陥は、昭和40年ごろからＥＰＤＭをブレンドすることで解決されたが、シート間接合の信頼性確保は、現在に至る重要な課題である。

このような失敗を繰返しながらも、シート防水工法は徐々に定着してきた。建築学会では、シート防水工事をJASS化すべく昭和42年に小委員会を設置したが、JISの制定を先行すべきであるという意見により「JIS A 6000合成高分子ルーフィング」が制定された昭和44年に作業を再開し、昭和45年２月の建築雑誌に３節合成高分子ルーフィング防水工事(案)が公表された。なお、昭和45年には「JIS A 6009基準その他を積層した合成高分子ルーフィング」が制定されている。

昭和47年６月号の建築雑誌に、１節屋根アスファルト防水工事（改訂案）、２節屋根防水コンクリート工事（改訂案）、４節シーリング工事（案）が公表され、会員の意見を入れて再検討し、先に公表した３節とあわせて昭和47年10月「JASS８防水工事」の第１版として出版された。解説をつけて本の体裁を整えたのは、このときが最初である。

先に、昭和40年代に至るまでの新防水工法の登場経緯の大略を述べたが、その後もめまぐるしく消長しつつ、それでも収束の方向に向いつつあった。

酢硫ビニル樹脂のエマルションは、アクリル樹脂との共重品を経てアクリル樹脂のエマルションへ落着いたが、常識的に軽微な用途に限定された。昭和44年ごろ、ゴムアスファルトの

エマルション（アスファルトエマルションとゴムラテックスの混合物）をエマルション分解剤と同時に多頭ガンで吹付けて、早期に皮膜化させる材料工法が西ドイツから導入され、間もなく追随工法が登場したが、施工経験からやがて土木用途に限定されるようになった。昭和47年に入って業界誌の広告に、アクリルゴム系の塗膜防水が登場した。このような流れを踏まえて昭和51年に「JIS A 6021屋根防水用塗膜材」が制定された。アクリルゴム系の塗膜防水は、その後、美粧性の特長を生かして壁面防水に進出し、それに対抗して高級化してきた壁面化粧材と正面衝突することになる。

シート防水の分野の動向もめまぐるしかった。加硫ブチルゴムのシートが、ＥＰＤＭのブレンドにより耐オゾン性を克服したことは前に述べたが、このシートは以来20年間シート防水の主流をなしている。昭和40年代の前半には、シート間の確実な接合を意図した非加硫ブチルゴムが登場し、主として押え工法に用いられたが、ＥＰＤＭのブレンドにより、露出工法にも進出した。ポリイソブチレンのシートは、登場後間もなくアメリカ製の原料による追随品も出現したが、やがて衰微し、現在では国産されていない。加硫・非加硫のクロロプレンシートも登場したが、衰微した。最も消長が激しかったのはエチレン系のシートであった。JIS 制定時の試作品を先取りして規格化したが、それは実用にたえるものではなかった。以来、各社がトライしたが一人前の製品にならなかった。一時期アクリル系のシートも製造されたが、すぐに消えた。今年JIS A 6008の改正で、ＥＶＡ（エチレン・酢ビ共集合体）のシートを入れ、製品規格をそれに合わせた。

以上の新防水工法の嵐の中で、アスファルト防水も手をこまねいていた訳ではない。昭和46年には「JIS A 6011防水工事用アスファルト」を制定して品質向上をはかった（このJISは昭和55年に「JIS K 2207石油アスファルト」へ統合された）。また、同年には「網状アスファルトルーフィング」も制定されている。しかし、その後のアスファルト防水に特に大きな影響を与えたのは、ルーフィングの原反として合成繊維が用いられるようになったことである。

昭和30年代の中頃から、ビニロンの帆布がルーフィングの原反として用いられたが、その優れた強さにもかかわらず寸法安定性が極端に悪かった。その欠点を改善するものとして昭和40年頃（あるいはその少し前）から、ビニロンの不織布をベースとするルーフィングが上市され、その成果が次第に注目されるようになった。先に述べた昭和47年出版のJASS 8、1節では、その品質規格を解説で定め〝特殊ルーフィング〟の名称で組込んだが、昭和50年「JIS A 6022ストレッチルーフィング」として制定され、同54年の改正で〝砂付ストレッチルーフィング〟も包含された。

このような防水業界の変革を背景として、昭和56年２月「JASS 8 防水工事」の改定第２版が刊行された。その内容はつぎのとおり。

１節　屋根防水コンクリート工事
２節　アスファルト防水工事（６種類、合計19種別）
３節　合成高分子ルーフィング防水工事（加硫ゴム系ルーフィング防水層　５種別、非加硫ゴム系ルーフィング防水層　３種別、塩化ビニル樹脂系ルーフィング防水層　１種別、エチレン樹脂系ルーフィング防水層　３種別）
４節　塗膜防水工事（ウレタンゴム防水層　４種別、アクリルゴム防水層　３種別、クロロプレン防水層　３種別、アクリル樹脂防水層　３種別、ゴムアスファルト防水層　３種別）
５節　シーリング工事
付録　関連JIS

3. 今回のJASS 8 の改定の骨子

上記のように、昭和56年度版のJASS 8は、いささか総花式であった。それは改定作業中から認識していたことであった。今回の改定はその反省をこめて、つぎのような抜本的なものとした。

１節　メンブレン防水工事（アスファルト防水層　６種別、シート防水層　５種別、塗膜防水層　７種別）
２節　ステンレスシート防水工事（新制定）
３節　シーリング工事
付１　危険物・労働安全衛生
付２　施工要領書の例
付３　関連JIS
参考資料　１．メンブレン防水層の性能評価試験方法（案）
　　２．モルタル防水工事施工指針（案）
　　３．珪酸質塗布防水工事施工指針（案）
（なお、屋根防水コンクリート工事は廃止）

１節　メンブレン防水工事

アスファルト、合成高分子ルーフィング、塗膜の３防水工法は、設計者にとって平等な選択対象であるため、メンブレン防水として統合した。その際合成高分子ルーフィング防水の呼称を、一般に広く用いられ、職業訓練法の種類区分にも用いられ

8.1.1表　メンブレン防水層の種類と適用部位

適用部位 / 防水層の種類	屋根	開放廊下 ベランダ	外壁	地下外壁（外部側）	室内	水槽類
アスファルト防水槽	○	○	－	－	○	－
シート防水槽	○	○	－	○	○	○
塗膜防水槽	○	○	○	○	○	○

〔注〕○：適用、－：標準外

8.1.2表　下地の種類と適用部位

適用部位 / 下地の種類	屋根	ベランダ 開放廊下	外壁	地下外壁（外部側）	室内	水槽類
現場打ち鉄筋コンクリート*1	○	○	○	○	○	○
プレキャストコンクリート部材*2	○	○	○	－	－	－
ALC パネル	○	－	○	－	－	－

〔注〕○：適用、－：標準外、*1：以下の表中ではＲＣと略す。*2：以下の表中ではＰＣ部材と略す。

ている〝シート防水〟に変更している。それぞれの仕様を整理して、標準的なグレイドのみに限定し、その高級化はモディフィケーションとして設計者の判断に任せることにした。メンブレン防水層の適用部位を**8.1.1表**に、下地の種類と適用部位を**8.1.3表**および**8.1.4表**に示す。アスファルト防水層は従前の19種別を6種別に整理したが、その中で断熱材を組込んだ仕様（A－TF）を加え、いわゆるupside down工法及び脱気工法の可能性を〔注〕で示している。

シート防水層の種別および適用を**8.1.5表**及び**8.1.6表**に示す。

8.1.3表　アスファルト防水層の種別

種別／工程	A－PF	A－GS	A－MS	A－LS	A－TF	A－IF
1	アスファルトプライマー（0.3ℓ/m²）	アスファルトプライマー（0.3ℓ/m²）	アスファルトプライマー（0.3ℓ/m²）	アスファルトプライマー（0.6ℓ/m²）	アスファルトプライマー（0.3ℓ/m²）	アスファルトプライマー（0.3ℓ/m²）
2	アスファルト（1.0kg/m²）	穴あきアスファルトルーフィング2種	穴あきアスファルトルーフィング2種	穴あきアスファルトルーフィング2種	アスファルト（1.0kg/m²）	アスファルト（1.0kg/m²）
3	アスファルトルーフィング35kg品	アスファルト（1.5kg/m²）	アスファルト（1.5kg/m²）	アスファルト（1.5kg/m²）	アスファルトルーフィング35kg品	ストレッチルーフィング2類
4	アスファルト（1.0kg/m²）	アスファルトルーフィング35kg品	アスファルトルーフィング35kg品	ストレッチルーフィング2類	アスファルト（1.5kg/m²）	アスファルト（1.0kg/m²）
5	ストレッチルーフィング2類	アスファルト（1.0kg/m²）	アスファルト（1.0kg/m²）	アスファルト（1.0kg/m²）	断熱材	ストレッチルーフィング2類
6	アスファルト（1.0kg/m²）	ストレッチルーフィング2類	ストレッチルーフィング2類	ストレッチルーフィング2類	アスファルト（1.2kg/m²）	アスファルト（2.0kg/m²）
7	ストレッチルーフィング2類	アスファルト（1.0kg/m²）	アスファルト（1.2kg/m²）	アスファルト（1.2kg/m²）	ストレッチルーフィング2類	－
8	アスファルト（2.0kg/m²）	ストレッチルーフィング2類	砂付きストレッチルーフィング	砂付きストレッチルーフィング	アスファルト（1.0kg/m²）	－
9	－	アスファルト（2.0kg/m²）	－	－	ストレッチルーフィング2類	－
10	－	－	－	－	アスファルト（1.2kg/m²）	－
11	－ －	－	－	－	砂付きストレッチルーフィング	－

〔注〕(1)　立上りおよび立下り部は押え金物で固定し、アスファルトルーフローチングで処理する。なお、室内で防水層の立上り高さが低い場合には、押え金物を網状アスファルトルーフィングに置き換えることもできる。

(2)　出隅・入り隅には幅300㎜程度のストレッチルーフィングによる増し張り（アスファルトの使用量は1.5kg／m²とする）を行う。
ただし、A－GS、A－MS、A－LSにおけるスラブと立下りの交差部（出隅）では、幅700㎜程度のストレッチルーフィングによる増し張りとする。なお、工程の2の穴あきアスファルトルーフィングは、スラブ面において、増し張りルーフィングに100㎜程度張り掛けて止める。

(3)　A－PFおよびA－GSにおいて、立上り部の保護・仕上げをなし、または塗装とする場合は、床面に200㎜張り掛けて砂付きストレッチルーフィングを増し張りする。

(4)　ドレンならびにパイプなどの突出物の周辺には、網状アスファルトルーフィングなどを併用する。

(5)　A－LSにおいて、ALCパネル下地の場合は、母屋上のALCパネルの接合部には、工程2に先立ち、幅70㎜程度の絶縁用テープを張り付ける。

(6)　A－TFにおいて、ALCパネル下地の場合は、工程Iのアスファルトプライマーを0.6ℓ／m²とする。

(7)　A－PFおよびA－IFにおいて、PC部材を下地として現場打ちコンクリートまたはモルタルの保護・仕上げを施す場合は、PC部材の接合部に両側のPC部材のそれぞれに70㎜程度張り掛かるストレッチルーフィングを増し張り（アスファルトの使用量は1.5kg/ m²とする）する。

(8)　A－TFにおける断熱材の厚さは、特記による。

(9)　A－PF、A－GSにおいて、断熱材を用いる場合は、保護・仕上層と防水層の間とし、その厚さは、特記による。

(10)　A－MS、A－LSにおいて、脱気装置を設置する場合のその装置ならびに取付け間隔は特記による。

8.1.4表　アスファルト防水層の適用

種別		A－PF	A－GS	A－MS	A－LS	A－TF	A－IF
保護・仕上層の種類		現場打ちコンクリート、モルタル*1、ブロック類	砂利	なしまたは塗装	なしまたは塗装	なしまたは塗装	現場打ちコンクリート、モルタル
適市部位 ＼ 下地のこう配	適用下地	1/100～1/50	1/100～1/50	1/50～1/20	1/50～1/20	1/50～1/20	1/100～1/50
屋根	RC	○	○	○	－	○	－
屋根	PC部材	○*2	○	○	－	○	－
屋根	ALCパネル	－	－	－	○	○	－
開放廊下ベランダ	RC PC部材	○	－	－	－	－	－
室内 A	RC	○	－	－	－	－	－
室内 B	RC	○	－	－	－	－	○

〔注〕(1)　○：適用、－：標準外、室内Aは駐車場・浴室・ちゅう房
*1：屋根は除く
(2)　*2：保護・仕上層はブロック類に限る。

8.1.5表　シート防水層の種別

種別／工程	S－VF	S－NF	S－CF	S－CM	S－DF
1	プライマー（0.2kg/m²）	プライマー（0.2kg/m²）	プライマー（0.2kg/m²）	発泡ポリエチレンシート	プライマー（0.2kg/m²）
2	接着剤（0.5kg/m²）	接着剤（0.4kg/m²）	接着剤（0.5kg/m²）	固定金具	接着剤（0.4kg/m²）
3	加硫ゴムルーフィング1.2㎜	非加硫ゴムルーフィング2.0㎜	塩化ビニル樹脂ルーフィング2.0㎜	塩化ビニル樹脂ルーフィング1.3㎜	加硫ゴムルーフィング1.0㎜または非加硫ゴムルーフィング1.5㎜
4	－	－	－	－	接着剤(0.3kg/m²)
5	－	－	－	－	加硫ゴムルーフィング1.0㎜または非加硫ゴムルーフィング1.5㎜

〔注〕(1)　立上りおよび立下りの防水層の末端部は、押え金物で固定し、不定形シーリング材で処理する。

(2)　出入り隅角の処理は、特記による。

(3)　ALCパネルの短辺接合部には絶縁用テープを張り付ける。なお、S－CFにおいては、その種類を特記する。ALCパネルの長辺接合部、PC部材の接合部の処理の有無は特記による。なお、S－CFにおいては、その種類も特記する。ただし、ALCパネルおよびPCに断熱材を組み込む場合およびS－CMにおいては目地処理を行わない。

(4)　S－DFに使用するルーフィングの種類および厚さは、特記による。

(5)　断熱材を使用する場合は、次による。
(i)　S－VF、S－NFおよびS－CFでは、工程2に先立ち断熱材用接着剤を用いて断熱材を張り付ける。ただし、S－CFに用いるルーフィングは、中間にガラス繊維の基布を積層したものを用いる。
(ii)　S－CMでは、工程1に先立ち断熱材を敷き並べ、工程2の固定金具を併用して固定する。
(iii)　S－DFでは、防水層の上側とする。
(iv)　断熱材の厚さは、特記による。

(6)　脱気装置を設置する場合、その装置ならびに取付け間隔などは、特記による。

8.1.6表　シート防水層の適用

種別		S－VF	S－NF	S－CF	S－CM	S－DF
保護・仕上層の種類		塗装	塗装	なしまたは塗装	なしまたは塗装	現場打ちコンクリート、モルタル*1、ブロック類*2、コンクリートブロック*3またはなし
適用部位 ＼ 下地（平場）のこう配	適用下地	1/50～1/20				1/100～1/50
屋根	RC	○	○	○	○	○
屋根	PC部材 ALCパネル	○	○	○	○	－
開放廊下ベランダ	RC PC部材	－	－	○	－	○
室内 A	RC	－	－	－	－	○*4
室内 B	PC	－	－	○*4	－	○*4
水槽	RC	－	－	－	○*5	－
地下外壁	RC	－	－	－	－	○*4

〔注〕○：適用、－：標準外、室内Aは駐車場・浴室・ちゅう房。室内Bは便所・湯沸室。

8.1.6表注記

*1：屋根および地下外壁は除く。*2：室内、地下外壁は除く。*3：地下外壁に

限る。*4：非有機溶剤系プライマーならびに接着剤を用いる。*5：飲料用水槽に用いる場合は、水道法水質基準などの制限がある。*6：保護緩衝材を用いる。

8.1.7表　塗膜防水層の種別

	L－UF	L－US	L－AF	L－AW	L－GF	L－GS	L－GU
1	プライマー (0.2kg/m²)	プライマー (0.2kg/m²)	プライマー (0.3kg/m²)	プライマー (0.2kg/m²)	ゴムアスファルト防水材 (1.5kg/m²)	接着剤 (0.3kg/m²)	ゴムアスファルト防水材 (7.0kg/m²)
2	ウレタン防水材 (0.3kg/m²)	ウレタン防水材または接着剤 (0.3kg/m²)	アクリルゴム防水材 (0.5kg/m²)	外壁用アクリルゴム防水材 (1.7kg/m²)	補強材	下張り緩衝材	－
3	補強材	下張り緩衝材	補強材	－	ゴムアスファルト防水材3) (2.0kg/m²)	ゴムアスファルト防水材3) (2.0kg/m²)	－
4	ウレタン防水材 (1.5kg/m²)	ウレタン防水材 (1.5kg/m²)	アクリルゴム防水材 (1.5kg/m²)	－	ゴムアスファルト防水材3) (1.5kg/m²)	ゴムアスファルト防水材3) (1.5kg/m²)	－
5	ウレタン防水材 (1.7kg/m²)	ウレタン防水材 (2.0kg/m²)	アクリルゴム防水材 (1.5kg/m²)	－	ゴムアスファルト防水材3) (2.0kg/m²)	ゴムアスファルト防水材3) (1.5kg/m²)	－
6	－	－	アクリルゴム防水材 (1.5kg/m²)	－	－	ゴムアスファルト防水材3) (2.0kg/m²)	－

〔注〕(1)　現場打ち鉄筋コンクリートの打ち継ぎ部・ＡＬＣパネルおよびＰＣ部材の接合部は処理する。ただし、Ｌ－ＧＵでは増し吹きとする。
(2)　ＡＬＣパネルの表面は、目止めを行う。その材料および工法は、特記による。なお、Ｌ－ＧＦ、Ｌ－ＧＳの場合は、省略することができる。
(3)　Ｌ－ＧＦ、Ｌ－ＧＳおよびＬ－ＧＵに使用するゴムアスファルト防水材は固形分が60%（室量）の材料の使用量を示す。それ以外のものは、固形分が同量になるように使用量を変える。
(4)　Ｌ－ＧＳにおける立上り部は、下張り緩衝材を補強材に変える。
(5)　Ｌ－ＡＷ、Ｌ－ＧＵでは使用量を塗布量と読み替える。

8.1.8表　塗膜防水層の適用

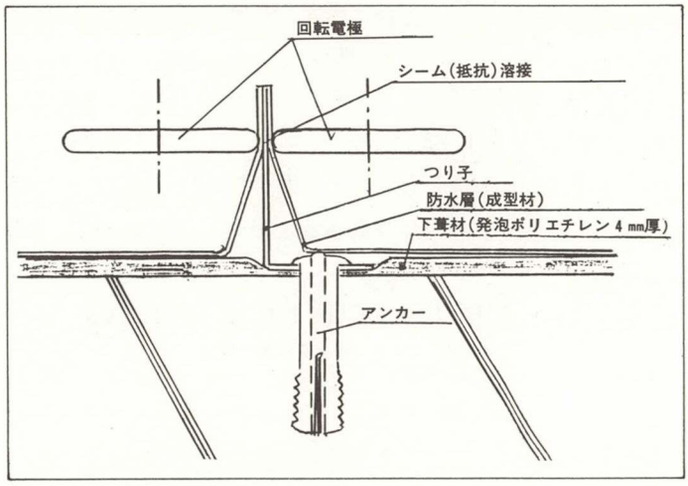
種別		L－UF	L－US	L－AW	L－AW	L－GF	L－GS	L－GU
保護・仕上層の種類		塗装ウレタン塗装舗モルタル*1	塗装舗装ウレタン	塗装ポリマーセメントモルタル	化粧材	塗装モルタル*1	塗装	現場打ちコンクリート、モルタル、コンクリートブロックまたはなし
適用部位 ＼ 下地のこう配	適用下地	1/100～1/50	1/100～1/50	1/50～1/20	－	1/100 1/50	1/50～1/20	
屋根	ＲＣ部材 ＰＣ部材 ＡＬＣパネル	○	○	○	－	○	○	－
開放廊下 ベランダ	ＲＣ ＰＣ部材	○	○	－	－	－	－	－
室内Ｂ	ＲＣ ＰＣ部材	○	－	－	－	○	－	－
外壁	ＲＣ ＰＣ部材 ＡＬＣパネル	－	－	－	○	－	－	－
地下外壁	ＰＣ	－	－	－	－	－	－	○*2

〔注〕(1)　○：適用、－：標準外、室内Ｂは便所・湯沸室室内Ａ標準外。
(2)　*1：屋根は除く。
(3)　*2：保護緩衝材を用いる。

シート防水層の種別は、従来の４種類計12種別を５種別に縮少し、エチレン樹脂系を廃止した。その整理の中で塩化ビニル樹脂ルーフィングを下地へ機械的に固定する仕様（Ｓ－ＣＭ）とゴム系ルーフィングの２枚張り仕様（Ｓ－ＤＦ）を加えた。前者は下地の乾燥が悪い時期の、または雨の多い地方で便利であるばかりでなく、改修工事にも適している。２枚張り仕様は、シート防水層の中で押えを設けることができる唯一のものである。

塗膜防水層の種別および適用を**8.1.7表**および**8.1.8表**に示す。従前の５種類計16種別を７種別に縮少し、クロロプレンおよびアクリル樹脂防水層を廃止した。その整理の中で外壁用１仕様（Ｌ－ＡＷ）と下張り緩衝材を用いる２仕様（Ｌ－ＵＳ、Ｌ－ＧＳ）を加えた。外壁用仕様では、玉吹きおよびトップコートは化粧材として位置付け、特記で指定することにした。下張り緩衝材とは、下地のムーブメントに対する緩衝効果や通気効果を期待する材料で、通常繊維製品、発泡プラスチックまたはそれらの複合製品が用いられている。建前はともかく、実際問題として下地の十分な乾燥が望めない工事に有力な仕様といえよう。なお下張り緩衝材として、溝付き防水シートを用いた場合でも、それを塗膜防水層と呼称するかどうか、今後の検討課題である。

図１　ステンレスシート防水層のシーム溶接



２節　ステンレスシート防水工事

ステンレス鋼の薄板を全溶接して防水層とする工法の開発は昭和52年ごろから活発となり、同54年ごろから実用化された。

8.2.1表　下地の種類(1)

部位 ＼ 下地の種類	屋根	ベランダ	ひさし	壁	床	水槽類
現場打鉄筋コンクリート	○	○	○	○	○	○
プレキャスト鉄筋コンクリート	○	○	○	○	○	○
木質構造	○	○	○	○	○	－
鋼構造フレーム	○	○	○	○	○	－
デッキプレート	○	○	○	－	○	－

(1)　○：適当な部位と下地の組合せ、－：標準外
(2)　この場合の下地は吊子を固定する部材をいう。

8.2.2表　防水層の種別と適用区分(1)

防水層の種別		屋根ベランダ 露出 一般	屋根ベランダ 露出 海岸	屋根ベランダ 非露出	庭園	壁	床	開放型水槽	プール
M－304	DW	－	－	○	－	－	*	－	－
	DS	○	－	－	－	○	○	○	○
	TS	○	○	－	－	○	－	－	－
M－316	DW	－	－	○	○	－	*	－	－
	DS	○	○	－	－	○	○	○	○
	TS	○	○	－	－	－	－	－	－

(1)　○：適用、*：押えが重い場合に適用、－：標準外
(2)　M：ステンレスシート防水であることの区分
304または316：ステンレスの材質がＳＵＳ304またはＳＵＳ316であることの区分
D：ステンレスシートの表面が２Ｄ仕上げであることの区分
T：ステンレスシートに表面処理を施してあることの区分（但し、その種類の指定は8.6.4 a.(1)の特記事項である。
W：成型材がステンレスシートの全幅を加工したものであることの区分（860～960㎜幅）
S：成型材がステンレスシートの半幅を加工したものであることの区分（400～460㎜幅）

薄板を溝形に成型し、打上げ部を上に向けて並べ、**図1**のように、隣り合う折り上げ部を拝み合せにし、その間に下地に固定したつり子をはさんで、回転電極で連続抵抗溶接（シーム溶接）する工法である。工法のルーツは純国産と、それより少し遅れてスウェーデンから導入されたものの２本立でスタートしたが、最近２、３の追随工法が現われた。建築学会は、昭和58年に小委員会を設置して作業を開始し、今回のJASS ８改定に合せて標準仕様書を作成した。異例ともいえる素早い対応を行ったのは、寿命の短い防水工法が、あたかも標準的なものであるかのように受取られている風潮の中で、瓦に匹敵する寿命を期待されるステンレス防水層の順調な発展を希望したからである。言葉を換えるならば、見よう見真似の知識不足による施工不良が、工法の将来性を阻害することを恐れたともいえる。

8.2.1表にステンレスシート防水の下地の種類、**8.2.2表**に防水層の種類と適用区分を示す。ステンレスといえども環境によっては赤錆を生ずる。錆びてもその進行は極めて遅いのだが、錆でステンレスとしてのイメージを損わないよう、鋼種はSUS 304（18Cr－8Ni系）と、それより高級なMo含有のSUS316 の２種類に限定した。将来は、試用実績をみながらよりエコノミカルな材質も検討されようし、逆により高級な金属としてチタンの利用も既に検討されている。

その他の重要なポイントとして、全溶接の確実な実施と検査、およびつり子による適切な下地への固定強さの確保がある。つり子を含めたステンレス防水層の接合部分は、温度応力による疲労が生じない工夫が大切である。

3節　シーリング防水工事

シーリング防水工事の改定は簡単な整理にとどまるが、解説における目地設計の部分が充実された。

先の歴史的考察の部分で、意識的にシーリング材に触れなかったので、残された紙面で述べてみたい。

昭和30年代の中ごろに、アメリカから油性コーキング材が輸入された。一見パテに似ているためコーキングパテと呼ばれた時代もあり、終戦前にも、コーキング材やシーリング材と同様な目的で特殊なパテが用いられたこともあったという話である。

油性コーキング材が関係者の注目を集めたのは、昭和29年竣工の東京都、渋谷の東横デパート（現東急デパート）のプレキャストコンクリート板の目地に大々的に用いられたことによる。翌30年には国産品が現われ、次第にメーカーの数もふえた。昭和36年「JIS A 5751　建築用コーキング材」が制定された。丁度その年、大阪市御堂筋に面する日本板硝子㈱のガラスのカーテンウォールに輸入品のポリサルファイドシーリング材が用いられた。同JISは昭和41年の改正の際「建築用油性コーキング材」と改名された。ポリサルファイドシーリング材の輸入後間もなく、一成分形シリコンシーリング材が輸入され、国産品も登場して実績が多くなってきた。昭和44年「JIS A 5754建築用ポリサルファイドシーリング材」および「JIS A 5755建築用シリコーンシーリング材」が制定された。

明治28年のQアンドA

問：木製平臺ノ雨漏ヲ防グ法

杉（厚１寸５分、幅５寸）板を以て単に肌合せに続合せたる平屋即ち陸屋根あり相続目には充分横ハダを打込み其上部にはアスファルトを流し込みたり然るに夏期に於てアスファルトは平臺の勾配に沿ふて次第に流れ去り随って雨漏を生し又冬期に晴雨によりて床材の伸縮甚たしきによりアスファルトの続目に空隙を生し亦雨漏を生するの恐れあり之れが為めに桁梁の朽腐を催すの傾向あり如何なる材料をアスファルトに代用せば可なるや又船艦の甲板続合法をも参考として承給りたし。

雨漏生（建築雑誌第97号、明治28年１月）

答：平均家根を防く法

板の続目に横はだを打込み上部にアスファルトを流すも夏期勾配に沿うて流れ込み冬期亀裂云々とあれとも答62に述へたる如く製造の不完全より伸縮亀裂するものなり素より木材に伸縮あるが故に是れを防くが為めアスファルトを塗布したる上にアスファルトフエルトを布き如此三度にて其上部に可成厚くアスファルトを塗布すれば毫も流るゝなど又亀裂する等を生し雨漏の憂なし余が数十ヶ所の実験により明瞭なり。

但しアスファルトフエルト並にアスファルトの真の物なるに御注意ありたきものなり、

銀街　土瀝青（建築雑誌第98号　明治28年２月）

ポリサルファイドやシリコーンシーリング材の導入に刺激されて、昭和40年代は新しいシーリング材が続々と登場した。そのそれぞれに規格をつくるのではなく、どのような材種のものにも対応させる意図で、昭和50年「JIS A 5757建築用シーリング材の用途別性能」が制定されたが、JIS 表示工場の制度に不具合いということで、昭和54年、シーリング材を主として主成分と耐久性による区分によって規定する「JIS A 5758建築用シーリング材」が制定された。主成分による区分は、シリコーン系、変成シリコーン系、ポリサルファイド系、ポリウレタン系、アクリル系、ＳＢＲ系、ブチルゴム系の７種類であった。今年の改正で、アクリルウレタン系が追加されて８種類となる。

むすび

以上、防水の歴史の要点とJASS ８制改定の経緯にいて述べた。JASS ８はあくまで標準的として推奨できる仕様と用途およびその工事方法を規定したものであって、一般の工事に拘束力をもつものではない。既に**8.1.1表**などでお気付きと思うが、JASS ８では適用しない部位その他の用途に対し、今回から〝標準外〟という表示を用いることとした。それは、設計者が自己の判断で適用するときの抵抗感を少しでもなくそうという意図である。

このJASSが有効に活用されることを期待するとともに、ご意見をお寄せ下さるよう、心からお願いする次第である。

引用文献　㈳日本建築学会発行　建築工事標準仕様書・同解説・JASS ８防水

（こいけ　みちお　東京工業大学教授）

屋上防水の改修

辺見　仁

最近、リフォームに関する話題が非常に多くなり、昨年は、建設省からも官庁建物に限定されてはいるが、屋上防水の「改修設計指針(案)」が公表され、新たな話題を呼んでいるようである。

1．既存屋根の調査

屋上防水の改修は、簡単のように思えても新築工事の場合と異なり多くの難かしい問題がある。新築工事の場合には、そのほとんどが防水に対する品質性能を要求するための、下地や納まりおよび環境などの条件がある程度はととのえられているが、改修工事の場合には、これに反して、ととのえられた条件はまったく無いに等しい状態である。ただすくわれることは既存の屋根において、防水層あるいは、防水層をとりまく周辺部などになんらかの不具合があって漏水したり、また、その可能性がある状態が確認できることである。したがって屋上の改修工事に当っては、既存屋根を丁寧に調査して、その現状を把握することが重要であることは衆知の通りである。

蛇足ではあるが下記に必要最少限度の調査項目を示しておく。

(1)　既存建物の概要把握として
- 建物の名称とその所在地
- 建物の構造
- 建物の階高
- 建物の竣工年月日
- 建物の用途
- 建物屋上の用途
- 屋根面積

(2)　既存建物周辺の環境条件の把握
- 近隣状態
- 建物周辺の敷地
- 建物周辺の道路状況

(3)　施主の希望条件の把握
- 屋上用途の有無
- 施工時期および工期
- 予算
- その他必要事項

(4)　既存屋根の現状把握
- 漏水の有無とその原因
- 既存屋根の断面構造
- 既存屋根の構法および防水工法
- 既存屋根の仕上げの種類とその表面状態

表－1　調査時のチェックポイント

特殊部位の納まり状態

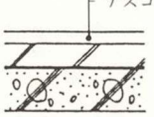
1．パラペット関係……防水層の止め位置と水切り状態の良否
2．一般立上がり関係……防水層の止め位置と水切り状態の良否
3．排水側溝関係……防水層のなじみと作業性の良否
4．ルーフドレン関係……ルーフドレンの形状とその損傷の有無、およびしぼれ水の有無
5．設備関係とその基礎……防水層の止め位置と水切り状態の良否
6．手すり関係とその基礎……撤去の必要性の有無、撤去後の復旧の必要性の有無
7．塔屋等の出入口関係……防水層の止め位置と水切り状態の良否
8．屋上の外階段関係……防水層の止め位置と水切り状態の良否
9．エキスパンション・ジョイント関係……納まり状態の良否と防水層の止め位置および水切り状態の良否

} 否である場合は、その処理対策を十分に検討する。

押え仕上げの状態

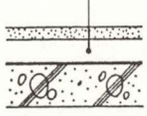
モルタル(セメントモルタル等)……浮き、剝離、表面強度
タイル(クリンカータイル等)……浮き、剝離、平滑性
ブロック(平板ブロック等)……平滑性、挙動、継手
コンクリート(押えコンクリート直)……表面強度、浮き
} 伸縮目地
アスコン(アスファルト舗装)……表面劣化

注1）防水層の上に断熱材がある場合は、特に含有水分に注意。
2）否がある場合は、撤去、補修の程度を検討する。



シンダーコンクリート……
軽量コンクリート……
発泡コンクリート……
} 浮き、含水量、挙動、パラペットの損傷
普通コンクリート……浮き、含水量

注1）防水層の上に断熱材がある場合は、特に含有水分に注意。
2）否がある場合は、撤去、補修・その他の対策を検討する。



露出仕上げの状態

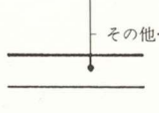
アスファルト防水……浮き、ふくれ、破損、劣化、水たまり、砂利
合成ゴムシート防水……浮き、ふくれ、破損、劣化、塗料、水たまり
塩ビシート防水……浮き、ふくれ、破損、劣化、水たまり
ウレタン防水……浮き、ふくれ、破損、劣化、水たまり、塗料
線防水……剝離、劣化、水たまり
モルタル防水……剝離、亀裂、劣化、水たまり、表面強度
その他……防水工法の種類、材料名、表面状態

否がある場合は、撤去、補修の程度を検討する。



RC　普通スラブ……動きによる亀裂発生
RC　D・比(＋)コンクリート…動きによる亀裂発生
　　断熱材打込み……動きによる亀裂発生
PC……継手部の挙動
ALC……継手部の挙動、損傷
木毛セメント板類……継手部の挙動、板材の反り、ボルトの突き出し、損傷
その他……種類

否がある場合は、補修の程度を検討する。



• 排水機能の状態

• 屋上各部位の納まり

既存屋根の現状を把握する上でのポイントは、下地の状態や納まり状態でありこれをまとめて見ると**表－1**に示すようになる。

2．改修構法

既存屋根の改修構法には、**図－1**および**図－2**に示すようないくつかの種類がある。

3．改修工事における防水工法の選定

防水工法の選定に当っては、前にも述べてある通り、既存屋根および、その周辺の環境条件などを考慮して選定しなければならないのは当然であるが、既存屋根がかかえている多くの問題のうち特に、下地の乾燥の問題や立上がりおよび設備機器関係などの納まり、また、その屋上の用途条件の有無などを確認して、十分に対応できる防水工法を選定しなければならない。最も一般的な条件下で既存屋根の下地状態に適正と思われる防水工法をまとめてみると、**表－2**に示したような結果になると思われる。

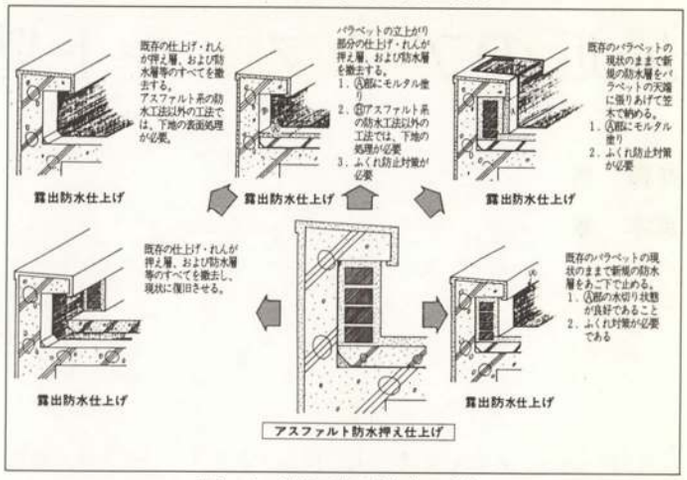
4．あとがき

最後に、現在の改修工事に対する考え方が一般的に既存屋根の押え層や防水層を撤去せずに行う、「かぶせ」方式が主流となりつつあるなかで、常に問題となるのが、設備関係の納まりである。

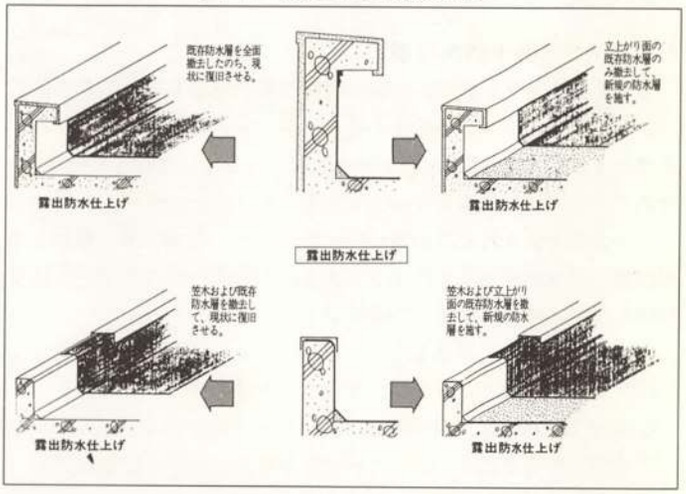
重要設備であるような場合には、一時撤去することもできず、大部分が無理な状態で改修工事を行なっているものが多く、長期保証の対象とならないような状況下にあります。そこで設計者の方々にリフォームの時点に、少しでも問題点が少なくできるような設計を再考いただければ幸いと思います。

※ 注）本原稿の表および図は、すべて井上書院発行ワンポイント＝建築技術「屋上防水の改修」辺見 仁共著より転載。 （へんみ ひとし 高山工業株式会社取締役技術部長）

図－1 改修工事の主な施工方法



図－2 改修工事の主な施工方法



表－2 屋根防水改修工法の適用表

改修工法の種類			押え工法										露出工法																							
			アスファルト防水				シート防水						アスファルト防水								シート防水							塗膜防水			ステンレス
			熱工法		冷工法		加硫		非加硫		塩ビ		熱工法				冷工法				加硫		非加硫		塩ビ			ウレタン		ゴムアス							
既存屋根の状態	撤去の有無	改修の下地	3層		2層		2層		2層				砂付きルーフ		砂利敷き		アスファルト成形板		砂付きルーフ		砂利敷き		アスファルト成形板													
			普通	断熱	普通	断熱	普通	断熱	普通	断熱	普通	断熱	普通	断熱	普通	断熱	普通	断熱	普通	断熱	普通	断熱	普通	断熱	普通	断熱	絶縁	普通	絶縁	普通							
押え仕上げ	撤去する	アスファルト防水	◎	◎	△	△	×	×	×	×	×	×	○	△	○	○	○	×	△	△	△	△	△	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	◎			
		シート防水	◎	◎	△	△	△	△	○	○	△	△	△	△	△	△	△	×	○	△	○	△	○	×	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	◎		
		デッキプレート＋RC	◎	◎	△	△	△	△	○	○	△	△	△	△	○	○	△	×	△	△	○	△	△	×	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△		
		断熱材＋RC	◎	◎	△	△	△	△	○	○	△	△	△	△	○	△	△	×	△	△	○	△	△	×	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△		
		RC	◎	◎	△	△	△	△	○	○	△	△	○	△	○	△	△	×	○	△	○	△	△	×	△	△	△	△	△	△	△	△	○	△	△		
		PCパネル	◎	◎	△	△	△	△	○	○	△	△	○	△	○	△	△	×	○	△	○	△	△	×	△	△	△	△	△	△	△	△	○	△	△		
	撤去しない	モルタル											△	△	△	△	△	×	△	△	△	△	△	×	△	△	△	△	△	○	×	○	×	○			
		コンクリート											△	△	△	△	△	×	△	△	△	△	△	×	△	△	△	△	△	◎	×	◎	×	◎			
		クリンカータイル											△	△	△	△	△	×	△	△	△	△	△	×	△	△	△	△	△	◎	×	○	×	○			
		平板ブロック											×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
露出仕上げ	撤去する	デッキプレート＋RC											△	△	○	△	△	×	△	△	○	△	△	×	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△			
		断熱材＋RC											△	△	○	△	△	×	△	△	○	△	△	×	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△			
		RC											○	△	○	○	△	×	○	△	○	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△	△	○	△			
		PCパネル											○	△	○	△	△	×	○	△	○	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△	△	×	△			
	撤去しない	アスファルト砂利敷き											○	△	○	○	○	×	△	△	△	△	△	×	×	×	×	×	×	×	○	△	△	○	○		
		アスファルト砂付きルーフィング											◎	○	◎	○	○	×	○	△	○	○	○	×	△	△	△	△	△	△	◎	△	△	○	◎		
		合成ゴムシート											△	△	△	△	△	×	○	△	○	○	○	×	◎	○	◎	○	○	△	◎	△	○	○	◎		
		塩ビシート											○	○	○	○	○	×	○	△	○	△	○	×	△	△	△	△	○	△	◎	△	△	△	◎		
		ウレタンゴム											△	△	△	△	△	×	△	△	○	○	○	×	△	△	△	△	△	△	◎	△	△	△	◎		
		ゴムアスファルト											◎	△	◎	○	○	×	○	○	○	○	○	×	△	△	△	△	△	△	◎	△	△	○	◎		
		断熱＋アス防											○	×	○	×	×	×	△	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	◎		
		断熱＋シート											×	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	○	×	○	×	×	×	○	×	×	×	◎		

注）コスト的な判断は一切加えていない。 ◎：問題なく適用可能 ○：適用可 △：種々の対策検討が必要 ×：不適

最近のアスファルト防水の動向

斉藤　彪
荒木　孝

今回のJASS 8改定及び、これに関連するアスファルト防水の防水層の種別、防水材料、防水工法などについて記すこととする。

1．アスファルト防水の種別

もともとメンブレン（membrane)は被膜の意をもち、防水工法の内、防水被膜を有するものとして、アスファルト防水、シート防水塗膜防水があり、今回のJASS 8改定に当ってこれらを総称して、改めてメンブレン防水と呼ぶこととなった。

このたび発表された改訂案の内、アスファルト防水層の種別と適用は**表**（総論の頁参照）の通りである。これをみると現行のものと相違しているのは、ほぼ次のようなものである。

①設計者の判断に標準を与える仕様のみを示すということから、仕様の数が大巾に少くなって基本となるもののみとしている。

②関連JISの改正が行なわれ、ストレッチルーフィングの内容が充実してきたこと。

③断熱防水仕様が採用されていること。

- 露出断熱防水
- 押え断熱防水

④露出防水にふくれ防止対策として、脱気装置設置が配慮されたこと。

⑤施工内容についても、施工要領書的に詳細を記す必要がなくなっていること。

2．材料

(1)　ストレッチルーフィング（JISA6022－84）

昭和59年に改正されたストレッチルーフィングは、従来品(２類)に、いわゆるスーパーストレッチルーフィング（１類）と砂付ストレッチルーフィングが加わり、３品種となり整備充実された。砂付ストレッチルーフィングは前回（JASS)にすでに採りあげられたものの、規格が明確でなかったのがこれが制定されたこと。ストレッチルーフィング１、２類については「原規格値の見直し」が発展し、結果１類が追加されたものとなった。ストレッチルーフィングの品質は**表－１**の通りである。

表－１　ストレッチルーフィングの品質

3.2 **品　質**　ルーフィングの品質は、表１の規定に適合しなければならない。

項目＼種類		ストレッチルーフィング 1類 21m巻	ストレッチルーフィング 2類 21m巻	砂付ストレッチルーフィング
1巻の質量 kg		34.0以上	34.0以上	34.0以上
1巻の長さ m		21.0以上	21.0以上	10.5以上
幅 cm				
製品の単位質量 g/m²		1500以上	1500以上	3000以上
原反の単位質量 g/m²				
アスファルトの単位質量 g/m²		850以上	850以上	1000以上
鉱物質粒子の単位質量 g/m²		－	－	1200以上
引張性能	引張強さ［幅10mm当たり（長手・幅両方向とも）］kgf{N}	12.0 {117.7} 以上	8.0 {78.5} 以上	8.0 {78.5} 以上
	最大荷重時の伸び率（長手・幅両方向とも）%	10.0以上	6.0以上	5.0以上
	3%引張応力［幅10mm当たり（長手・幅両方向とも）］kgf{N}	6.0 {58.8} 以上	4.0 {39.2} 以上	6.0 {58.8} 以上
	抗張積［幅10mm当たり（長手・幅両方向とも）］kgf・cm {N・cm}	18.0 {176.5} 以上	10.0 {98.1} 以上	8.0 {78.5} 以上
折り曲げ性能（長手・幅両方向とも）		試験片10個中９個以上にき裂が生じないこと。		
加熱処理後の折り曲げ性能（長手・幅両方向とも）				
アスファルトの浸透状況		アスファルトの不浸透部分のないこと。		
寸法安定性	伸縮量 mm	5.0以下	5.0以下	3.0以下
	変形	しわ、反り、はく離など異常な変形を生じないこと。		
寸法安定性試験後の引張性能（長手・幅両方向とも）%		引張性能規格値の90.0以上。		
耐熱性能		－	－	アスファルトの発泡又は鉱物質粒子の５mm以上のずれ落ちを生しないこと。

（JIS A 6022－1984の品質表より抜すい）

4．**製造方法**　ルーフィングは、主に合成繊維をランダムに集積固定して得るシート状の原反に、加熱溶融したアスファルト(1)を含浸塗覆して、ストレッチルーフィングの１類及び２類の場合は、表裏面に鉱物質粉末を散布し、砂付ストレッチルーフィングの場合は、表面の片側、幅約90cmに鉱物質粒子(2)を密着させ、残りの表裏面に鉱物質粉末を散布して製造する。

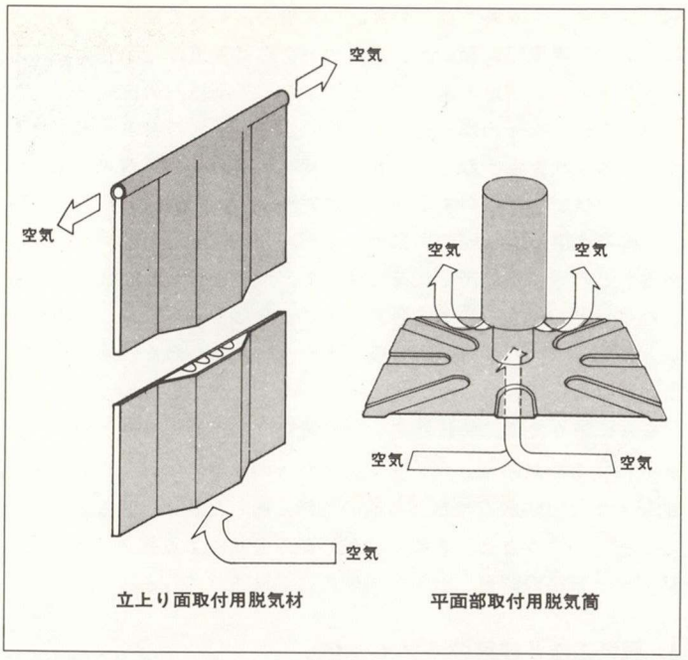
注 (1)　アスファルトは、JIS K 2207(石油アスファルト)の防水工事用アスファルト３種又は４種適合品とする。

(2)　鉱物質粒子は、JIS Z 8801（標準ふるい）の附属書に規定する呼び寸法1680μmのふるいを通過し、149μmのふるいに残るものとする。

(2)　断熱材

外断熱防水工法、A－TF、A－PF(A－GS)＋断熱材に使用される断熱材は次のようなものである。

- 硬質ウレタンフォーム保温材
  JISA9514－１種３号
  圧縮強さ1.5 kg/cm²程度、熱アスファルトとなじみの良いもの、耐久性の良いもの
- ポリスチレンフォーム保温材
  JISA9511－B類３種



図－1

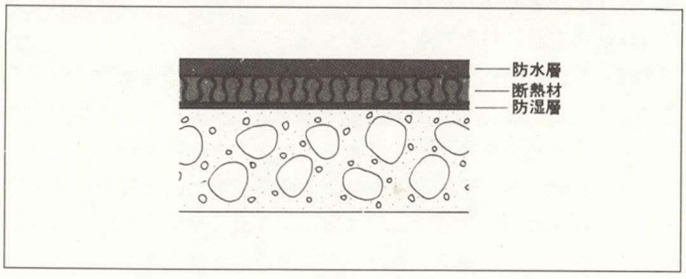
(3) 脱気材

露出防水のふくれ防止対策として、下地の水蒸気を脱気させる脱気材については、平面部から脱気するものとして、プラスチック、ステンレス、銅製などの脱気筒や、立上り部からのものとしてプラスチック製のものがある。具体例として**図－1**のようなものがある。

3．工法

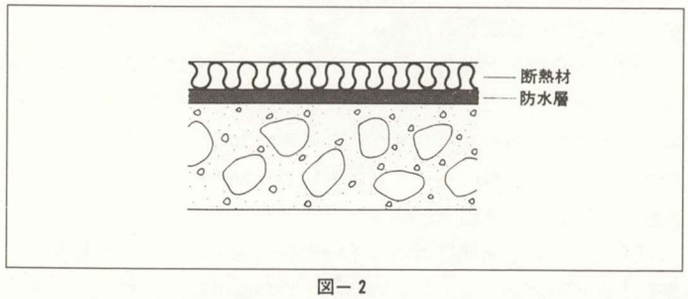
一般工法

硬質ポリウレタンフォーム系断熱工法のようにスラブと防水層との間に断熱材を設ける工法。



USD工法（UD工法）

ポリスチレンフォーム断熱工法は断熱材と防水層の位置関係が一般工法に対して上下逆となる。通常これをUpside Down工法という。



図－2

今回のJASS8改定案の内、仕様について標準化、あるいは配慮されたもののうち、現実的で大きな工法は、断熱防水と脱気工法である。

(1) 断熱防水

外断熱防水については、今更その工法・特徴について詳細を述べる必要はないと思われる。防水層と断熱材の位置関係は**図－2**の通りである。なお押え断熱防水については建設大臣官房官庁営繕部建築工事共通仕様書ですでに標準仕様化されている。

(2) 脱気工法

露出防水の「ふくれ」は防水工事の難問の一つである。これは、コンクリートスラブに残留している水分が太陽熱によって温められ水蒸気になり、この時逃げ道のない水蒸気が膨張を始める。その水蒸気圧がアスファルトと下地との接着強度をこえた時に「ふくれ」現象が始まる。例えば、スラブ下側に断熱材を打ち込む工法、デッキプレート類にコンクリートを打設する工法、あるいは押えコンクリートの上に行う防水改修工法などの場合、下地乾燥はとくに期待できない。

防水層のふくれ防止には、水蒸気圧を外部に誘導することが必要であるが、このさい防水層は部分接着工法を採用することが必要である。なお部分接着用下張材は穴あきルーフィング2種の他、無機質基材を使用した砂付特殊ルーフィング類が使用される。

常温工法（冷工法）	積層式	①粘着工法―粘着層を設けた高級ルーフィングを積層する工法
		②接着工法―溶剤型、反応型、エマルジョン型接着材により特殊ルーフィングを積層する工法
		③融着工法―特殊ルーフィングの表面を加熱して融着積層する工法
	塗膜式	アスファルト系溶液、エマルジョン、あるいは反応型溶液による塗膜工法、必要に応じて補強材を敷きこむ

表－2　常温工法の分類

4．その他の動向

(1) ゴムアスファルト防水

ゴムアスファルトはゴム化アスファルトとも呼び、アスファルトの弱点を補うためゴム分をアスファルトに混入させたものである。従ってゴムアスファルトルーフィングは、耐候性、温度特性、弾性、延伸性等に優れた材料である。その特徴を生かして防水工事用アスファルトやゴムアスファルトコンパウンドとの組合せで使用される。

また、このルーフィングに接着用の粘着層を設け剝離紙をつけたものもある。これは本来常温工法用材料であるが、熱工法との併用も可能で下地と軟接着が特徴である。

(2) 常温工法

補修・改修工事の場合、工事環境からアスファルト熱工法の採用が難しい場合が多く、常温工法が採用される例が多い。常温工法の分類は**表－2**の通りで、主に使用されるのは、積層式①粘着工法、②接着工法である。

(3) 他防水との組合せ

改修工事あるいは特殊下地や特殊納まり等の場合、各々特徴を有する防水材料、工法とアスファルト防水を組合せて使用することがある。例えば次のような組合せである。

- 常温工法用ゴムアスファルトルーフィングと熱工法アスファルト防水（全面、部分）
- 常温工法用ゴムアスファルトルーフィングと塗膜防水（全面、部分）
- 熱工法アスファルト防水と塗膜防水（部分）

（さいとう　あきら　田島ルーフィング株式会社研究開発部長
あらき　たかし　同上　防水技術課長）

塗膜防水

伊藤松夫

今回改定されたＪＡＳＳ８防水工事を通読して感ずることは、塗膜防水がアスファルト防水、シート防水とともにメンブレン防水工事として総括されていることである。

ＪＡＳＳ８はその時代の防水技術水準を集約したもので改定の主旨によると、合成高分子系材料による防水工事も20年の実績を重ね材料および仕様の評価が定まりメンブレン防水工事として括るまでになったと判断すると記述されている。このことは塗膜防水業界にとって歓迎すべきことであると同時に、いっそうの研究と開発を要請されていると理解すべきであろう。

1．塗膜防水の発達

日本経済の高度成長期における建築業界の好況に支えられて急成長してきた塗膜防水は、開発当初のアクリル樹脂系塗膜防水材に代表される数多くの乾燥硬化形の防水材から反応硬化形のウレタンゴム系塗膜防水材が登場するに及んで、塗膜防水の評価は定着したといえよう。このウレタン防水材に代表される塗膜防水は建築の構法の変化、様式の多様化、工法の省力化という新らしい社会的背景に対応しうる防水工法として建築に携わる識者の注目するところとなり、需要は急速に拡大していった。

しかるにオイルショックを契機とする景気の後退は防水業界にもそのかげをおとし塗膜防水の需要は低迷をよぎなくされた。この低迷はたんなる景気の後退に起因するものではなく、塗膜防水そのものの品質並びに工法の再検討を迫っていることは誌上の論評をかりるまでもないことであろう。ややもすれば簡易防水のイメージに走りがちな姿勢を正すべく、塗膜防水業界は積極的なＪＩＳ認定の商品の上市による品質の維持、塗膜防水施工技能士資格取得者による正しい施工の推進をはかり、その仕様についても昭和56年ＪＡＳＳ８防水工事に新規参入をはたしその普及につとめ材料・仕様・施工の三位一体の体制を確立した。

一方、研究は防水をシステムとして捉えた工学的研究、つまりメンブレン防水工法の耐ムーブメント性に関する防水層の具備すべき条件など防水技術の全般的な見直しの機会とした。なぜならば、塗膜防水は一体どのような品質の材料をどのような仕様で施工すれば要求される防水保証が可能なのかという課題に取り組まざるをえないからである。しかも今回メンブレン防水工事の仲間入りをした現状を直視し、これから背負わされるであろう「屋根防水層の性能評価基準」に応え得る防水層を生み出す努力を進める必要がある。「固有技術」にたよった前工学的な防水工事は多様化する建築防水の期待に応えるためにも耐久性に収斂された防水システムにまで昇華すべきであろう。

2．塗膜防水の耐久性

塗膜防水の耐久性について、日頃指摘される問題を考えてみよう。まず塗膜厚の確保、つぎに塗膜のふくれ、それから下地のひびわれに対する追従性の３点であろう。

塗膜の厚さの確保は技能士教育の徹底と工法上フールプルーフ方式の採用により改善されている。防水層のふくれの発生は直接漏水につながる現象ではないが、オーナーからは苦情の対象となる。ふくれは主として下地の水分に起因するもので下地内の湿気を含んだ空気の膨張・収縮の繰り返しにより防水層と下地の接着が弱まりふくれ・はがれを生ずるといわれ、現場では散見される現象である。

下地のひびわれに対する塗膜の追従性については、「安全度の高い塗膜防水層とは塗膜の引張強さと下地への接着強さのバランスにある」との報文が発表されるに及んで、よく接着することから出発したウレタン防水層の工法研究がはじまったといえよう。その研究から得た補強材の挿入は、塗膜防水の安全度を高める効果として一応の評価を得て普及した。

さらに業界では、塗膜防水の用途開発を求めて断熱材との組み合わせによる断熱防水、ウレタン舗装材との積層により実現した多目的屋上歩行用防水、既存防水層の改修に適した脱気工法など、塗膜とシートの組み合せ、塗膜と塗膜の組み合せによる複合防水工法の研究が、市場の開発とともに積極的に推進されている。

3．脱気工法と建築のリフォーム

なかでも脱気工法の研究は、前述の塗膜のふくれの防止、下地のひびわれに対する抵抗性の向上、という長年の懸案を一挙に解決しようというものである。この脱気工法はいわゆる下張り緩衝材を防水層の下面に敷き込み、下地スラブのひびわれに対して緩衝効果をもたらすとともに、下地スラブに含まれる水分を緩衝層を経由して、脱気盤または、脱気塔より大気中に放出することにより、ふくれを防止する仕組みである。ここでいう緩衝用シートとは特殊加工されたプラスチック発泡体や不織布から構成されるシート状の材料で、ＪＡＳＳ８には３タイプが記述されており、市場にはそれ以上の種類の緩衝材が開発され活況を呈している。なぜならばこの脱気工法は改修防水工法に最適だからであろう。

すなわち、わが国の経済が大きく転換するなかで建築物に対する考え方も大きく変わり、かつてのスクラップ・アンド・ビルド的な考え方は、建物のライフサイクルを重視する方向に変わってきた。とくに省資源・省エネルギーを掲げる建築業界の耐久性討議の中核として、いま改修工事がクローズアップされリフォーム時代の到来が唱えられている。建築のリフォームの中心は防水であり、その防水の中心は塗膜防水が最適であることは衆目の一致するところであろう。納まりの難かしい改修こそ塗膜防水が適しており、ウレタン防水は複合工法の枠も拡がり改修工事の中で着実に施工実績と技術蓄積を伸ばしておりアスファルト防水、シート防水にない塗膜防水ならではの付加価値があるからといえよう。

はやくから開発が進められている断熱防水工法はＵＳＤ工法が試みられており、最近の建築物防火性能の検討が外断熱防水工法を対象とすることとあわせ研究を進める必要があろう。このような複合防水工法は防水材料のハイブリッド化もあわせ考えるとその方向は多岐にわたりその適用も一層拡大されたものとなろう。

いずれにしても塗膜防水は将来の屋根防水システム評価基準に照準をあわせ設計者・ゼネコンの防水仕様の選択に十分耐える防水層に脱皮し、かりそめにもブラックボックス視されてはならない。そのためにも材料業者は品質の研究にとどまることなく、また工事業者は手造りの心構えを忘れず材工一体となって塗膜防水工事に取り組む姿勢が肝要である。今回のＪＡＳＳ改定を契機としてハイグレードな防水工法の展開を計り喧伝されている改修・補修の枠から跳び出し塗膜防水をより信頼される工法としたい。

（いとう　まつお　保土谷建材工業株式会社技術部長）

シート防水工法の動向

藤木俊昭

シート防水工法は、工場で一定寸法に成型、製造されたシート（合成高分子ルーフィング）を単層または、二層で防水層を形成させるメンブレン工法の一種である。

シート防水材が我国で最初に用いられたのは、1957年で、塩化ビニル樹脂シートとゴム系のポリイソブチレンシートである。1962年にブチルゴムによる加硫シートが開発され、その改良タイプとしてＥＰＤＭ（ＥＰＴともいう）をブレンドしたシートが1964年に出現し、新しい防水材（シート防水）としてその性能が本格的に評価されはじめた。1967年には、ジョイント性能を特長とした非加硫ゴムシートも開発された。その後、幾多の試行錯誤を繰り返し、材料、工法の改善が加えられ、加硫ゴムシートをメインに着実に業績をあげて来ている。

1．シート防水材料

シート防水材を材料で分類すると**表－1**のように、合成ゴム系、合成樹脂系、ゴム化アスファルト系に分類される。各防水材料の概要は次の通りである。

表－1　シート防水の分類

シート防水材	合成ゴム系	加硫ゴム系
		非加硫ゴム系
	合成樹脂系	塩化ビニル樹脂系
		エチレン樹脂系、その他
	ゴム化アスファルト系	

①加硫ゴム系

合成ゴムの中で最も防水材として適しているＥＰＤＭとブチルゴムが主原料として用いられている。繰り返し疲労、機械的強度の増強を目的に、補強材、加硫剤を加え、加硫（分子間に網目構造を結合させ、弾性化させる）を行ったものである。とくにＥＰＤＭタイプの加硫ゴムシートは、耐候性にすぐれていることより、主に露出防水工法に採用されており、そのシェアーもシート防水材の75％を占めているといわれている。また、最近、熱溶着ができることを特長とした熱可塑性ゴムによるシートも商品化されているが、まだ施工性に問題が残されているようである。加硫ゴムシートはJISA6008タイプである。

②非加硫ゴム系

主原料としては再生ブチルゴムとＥＰＤＭである。この主原料に補強材、老化防止剤を加え、シート状に圧延したもので、加硫を行わずに用いられる。加硫ゴムに比べ、引張強度は低いが、ジョイントの接着性にすぐれている。JISA6008、JISA6009の両タイプのシートがある。

③塩化ビニル樹脂系

塩化ビニル樹脂シートは、加硫ゴムシートのように弾性体でなく、熱、外力によって塑性変形がおこりやすく、低温時に硬く、高温時に軟かくなる性質がある反面、熱溶着ができ、軽歩行も可能であるなどの特長をもっている。JISA6009タイプが主であったが、ここ数年JISA 6008タイプのシートが増えてきている。

④エチレン樹脂系、その他

塩化ビニル樹脂以外の樹脂シートは、アクリル、エチレンがJIS化されたが、現在ではほとんど使用されていない。最近では、エチレン酢ビ樹脂シートが土木用途分野で伸びており、JISA6008で規格化される予定である。

⑤ゴム化アスファルト系

ゴム化アスファルト系シートは、天然ゴム、合成ゴム、合成樹脂等でアスファルトを改質したコンパウンドをシート状に成型したものであり、その多くは補強材（不織布等）と積層されている。改質するポリマーの種類が多く、また接着剤工法、トーチ工法等数種の施工法があり現状では、JIS、JASSでの標準化にはまだ少し時間がかかりそうである。しかし使用量は年々増加している。

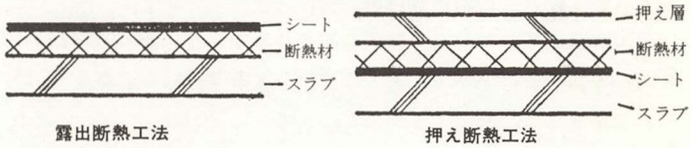
2．JASSによるシート防水工法

今回のJASS改正では、加硫ゴム、非加硫ゴム、塩化ビニル樹脂系シートが対象となっており、防水層の種類は**表－2**の通りである。

表－2　シート防水層の種別①

種別 工程	S－VF	S－NF	S－CF	S－CM	S－DF
1	プライマー	プライマー	プライマー	発泡ポリエチレンシート	プライマー
2	接着剤	接着剤	接着剤	固定金具	接着剤
3	加硫ゴムルーフィング 1.2mm	非加硫ゴムルーフィング 2.0mm	塩化ビニル樹脂ルーフィング 2.0mm	塩化ビニル樹脂ルーフィング 1.3mm	加硫ゴムルーフィング 1.0mmまたは非加硫ゴムルーフィング 1.5mm
4	－	－	－	－	接着剤
5	－	－	－	－	加硫ゴムルーフィング 1.0mmまたは非加硫ゴムルーフィング 1.5mm

露出工法では、加硫ゴム（Ｓ－ＶＦ）、非加硫ゴム（Ｓ－ＮＦ）は密着張り工法であるが、塩化ビニル樹脂シートは密着張り（Ｓ－ＣＦ）と部分的に鋼板で下地に固定する絶縁張り（Ｓ－ＣＭ）工法がある。押え工法（Ｓ－ＤＦ）は、加硫ゴム、又は非加硫ゴムシートの２層張り工法となる。その他、下図に示すよう断熱工法も採用されており、現状にマッチした内容に改善されている。



露出断熱工法　　押え断熱工法

3．今後の課題

建築物における防水工事は、外部からの水の浸透を防ぐ機能を現場で築り上げ、構造物の一部として構成させなければならない。このため、使用される材料だけでなく、設計、施工、施工管理、保守点検、維持管理等、一連の防水保証体制を確立する必要がある。一枚のシートを張り合せて行くシート防水工法では、特に重要な要素であり、防水をとりまく関連の人々の認識と相互協力を欠かすことはできない。新しい市場の要求に対し、断熱材と一体化させた複合シート、絶縁工法の採用、シート防水材と熱アスファルト、塗膜材と組合せ、両工法の長所を活かした複合工法等、活発な研究、開発が行われ、より信頼性の高い防水工法の確立へと対処している。しかし、一方では、古くからの問題点である膨れ対策（脱気工法の採用）、押え工法における信頼性向上、最近、急増している改修工法での適切な工法選択等、シート防水工法の課題は、まだ多く残されているようである。

引用文献①ＪＡＳＳ８防水工事、1986、日本建築学会
参考文献①シート防水マニュアル、1980、合成高分子ルーフィング工業会
②防水工法事典、1981、産業調査会
③日本建築学会大会学術講演梗概集、1984、日本建築学会

（ふじき　としあき　三ツ星ベルト株式会社建材事業部生産技術部長）

シーリング防水の現状と今後の課題

操上弘昌

はじめに

我国にカーテンウォール構法が導入され、弾性シーリング材が使用されはじめたのは昭和40年頃からと記憶している。とくに霞ケ関ビル以後は中・高層ビル建設の最盛期でもあり、ポリサルファイド系シーリング材が多用された時期でもあった。以後は漏水事故の連続でにがい経験をしたものである。以後、品質の改良や伸縮に強い新素材の製品開発がされはじめた。

後に新ＪＩＳ、ＪＡＳＳが制定され、さらに今年改定さるに至って材料、工法ともにかなりの高いレベルになってきたといえる。さらに品質で補ないきれない部分には適材適所の仕様、すなわち工法を定めることで防水機能を満足させるという方法が定着し、未完成とはいえ顧客の要求に答えられる見通しがついてきたように思う。

1．近年のシーリング防水のできばえ

低モデュラスシリコーン、変性シリコーンが市販されてからは接着性や汚れなどの事故が発生し問題もあったが、事前に施工検討がなされた５～６年前の建物を調査した限りでは、初期（１年目）では施工の不備あるいはそれに類したもの以外の故障はあまり見られない。３、５年目ではほとんど見られず、むしろ外装全体の汚れや割れ、錆、アルミの腐触等に目が向けられがちである。

これらは一般的ではなく特別なものかも知れないが、以前のように雨期や台風時に漏水でてんてこ舞いをすることはここ数年激減したことは事実である。

2．施工計画（事前検討）

寿命の長いシーリング防水をするには、外装の寿命を延すには、施主、設計者の要求性能（値）がどうなのかが一つの目標となる。従って施工計画は壁全体の耐久性、すなわち地震、風、雨水など全体を考慮した全部材間の目地設計として施工計画を進めることが大切である。

従って目地巾は層間変位、風圧、部材の伸縮、形状、取付方法、納り、シーリング機の性能、施工難度、２次排水計画などによって決ってくる。

ここでの２次排水機構は工事中の雨仕舞いと雨水による軀体周辺からの汚れなどの防止に役立つ。工事期間中は排水機能の良否を試され、完工時から本設機構となる。

高層ビルになるほど部材取付作業が上下に長期間行われるので安全上からも仮設ゴンドラ作業は後施工が望ましい。排水機能が万全であればより上層に取付を進行させることができ、ゴンドラ使用期間短縮となるので経済性も高まるので一石二鳥である。これらの構想を基にして目地設計とディテール、施工図の検討を進めるのが望しく、我々は排水計画について深く関心をもたざるをえない。従って２次排水機能とシーリング防水とは雨仕舞い全体としての性能として、施工計画の一環として欠くべからざる項目となる。最後に竣工後１、３、５年目に条件の異った部位を定め、その良否を判断する追跡調査の計画をたてておき、点検時に不具合部が発見された場合は点検範囲を拡大する。これは将来の改、補修工事時に大切なことでしかも有効であり、我々はこの計画を「メンテナンス計画」と呼んでいる。現在もこの計画は続いているが近年の調査結果の出来映えは良好であり申し分ない。

従来工法以外の等圧構法（オープンジョイント）についても同じことがいえる。より気密性が要求されるこの構法は外力による挙動への対応、取付制度などについて高レベルの施工計画がなされなければならない。全般的にいえることだが将来の改、補修事時に対する施工性、経済性について十分納りを考慮する必要がある。

3．施工管理

施工管理は本来施工計画とは異質のものであるが、しかし両方一つとなって現場では評価を受けているのが現実である。施工計画が完了し、実施に移った場合、実際の施工者に伝達、完遂させるまでの過程に種々の問題が発生するのでこれらを防止することが大変な作業なのである。その点では近年施工管理技術は向上したと思うし、シーリング管理士、技能士制度の確立など業界としては大きな意義を持っている。現場で実践する施工者の技能、知識はどうかというと適材適所の仕様などこまかい点で向上してきた反面、複雑化したため能率低下はいかんともし難く、また施工に対する機械化は多少進歩したが、手作業にたよらざるを得ない点が多く、品質アップにはなっても能率アップにはならず、現状から脱却できていない。この点について我々はなんらかの改善を興じなければならないことを痛感している。

4．改、補修

リフォームという言葉がささやかれてから数年になるが、シーリングでいえば、とくにカーテンウォールに使用したポリサルファイドが残した多くのクレームが業界発展への大きな遺産になっているような気がしてならない。

これらが残した功罪は業界の発展に大きく影響を与えてくれた。新製品の開発、工法の確立、ＪＩＳ、ＪＡＳＳ、建設省の仕様などの制定に役立っており、そして等圧構法出現への加速化、雨水の侵入が建物に与える問題等について関心が高められたからである。改、補修の際、この点について目を向ける知恵を我々に与えてくれたからである。吹付塗装の改、補修の場合も同じことがいえるであろう。

5．これからのシーリング工法

シーリング防水に関しては高水準になっていると前述したが、最近また難問がもち上ってきたようだ。外国ではすでに実績のあるシリコンシーリング材を使用した「ストラクチャルグレージング構法」である。漸新なデザインとしてガラスカーテンウォールに使用されており、地震国の我国でどこまで実現可能かは今後の課題であろう。徐々に実績を重ねてゆく以外にないと思うが、勇気をもって取組みたい。サスペンド構法、ガラスの突付、バックマリオン方式など今までの実績を考えたなら手掛りがないわけではなく、むしろ積極的にその耐久性を実験などによって理論の確立を急ぐことが大切である。

この件については種々の意見があると考えられるが、バックマリオン方式とかストラクチャルシールの定義を明らかにし、別々の構法として計算式や工法を解明してゆくことが望ましい。これらは今後の課題となりそうなので各先輩諸氏の意見や研究の成果のご指導を賜わんことを期待致します。

（くりがみ　ひろまさ　マサル工業株式会社代表取締役副社長）

外壁塗膜防水

永井健太郎

1．まえがき

鉄筋コンクリート造建物の外壁には、吹付リシンや合成樹脂塗料などにより、化粧仕上げを施工されていたが、これらの硬い材料では、建物の外壁に発生するひび割れに追従できず、外壁からの漏水事故が、昭和40代より多くなった。

それ以後、壁面の漏水対策としては、建築物に発生するひび割れや、それらの動きに追従する柔軟な塗膜材、すなわち、アクリルゴム系、ウレタンゴム系、クロロプレンゴム系、アクリル樹脂系などの塗膜防水材が開発・上市されるようになった。

その中でも、長期にわたる耐久性にすぐれ、施工性にすぐれたアクリルゴム系塗膜防水材の需要が順調に伸び市場の大半を占めるまでになった。ここでは、アクリルゴム系塗膜材について、材料の特徴および、品質・性能について述べる。

2．アクリルゴム系塗膜材

外壁塗膜防水材は、長期にわたり厳しい環境にさらされるので、低温（－20℃）から高温（80℃）の幅広い温度領域にわたり、安定したゴム状弾性を維持し、かつ、耐久性にすぐれていることが必要で、ＪＩＳ　Ａ　6021「屋根防水用塗膜材」の規格に合格する品質に設計されるべきである。

市場には、アクリルゴム系の材料のような、低温でも柔軟な性質を有するように、硬い樹脂に可塑剤などの助剤を添加し、塗膜に伸び性能を与えたものがあるが、このような材料では、厳しい環境条件下では、可塑剤が、徐々に揮散して元の硬い樹脂の性質に戻り、経年によりトラブルを生ずるものがある。

塗膜防水材の上には、美観を主目的として、防水材と同質の模様材と着色・汚れ防止および耐候性付与のために、トップコートが施工される。トップコートは防水材の性能を損わないことが大切であり、防水材の製造業者の指定する材料を使用することが必要である。

3．塗膜の伸び性能と下地ひび割れ追従性

日本建築学会の「鉄筋コンクリート造ひびわれ対策指針（案）」では、ひび割れ幅の制限目標値を0.3㎜としているが0.5～1.0㎜のひび割れも実際には見られる。

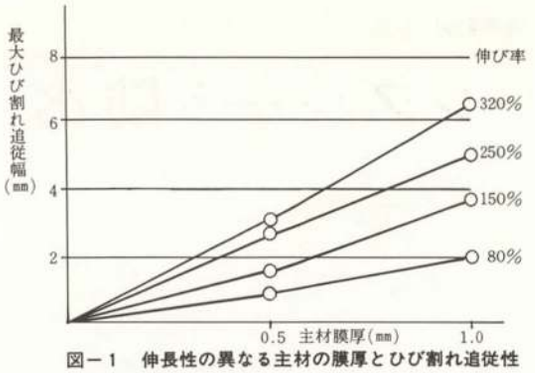
アクリルゴム系塗膜について、自由皮膜の伸び率と膜厚のひび割れ追従性との関係について試験を行い、**図－1**に結果を示す。そこから、次の実験式を得た。

$Z = \alpha S t$　　Z：ひび割れ追従幅　〔㎜〕
α：樹脂固有の係数
S：伸び率　〔％〕
t：膜厚　〔㎜〕

α値としては、1.5×10^{-2}～3×10^{-2}の値を各種防水材の測定から得た。

防水材の重要な品質の一つである、ひび割れ追従性は塗膜の膜厚と伸び率に比例することがわかった。

塗膜防水をする下地の粗さ、吹付け塗膜のバラツキを考慮すると



図－1　伸長性の異なる主材の膜厚とひび割れ追従性

膜厚の管理は防水性能を確保する上で重要であり、責任施工体制が必要となっている。

防水材の性能としては、地震・地盤沈下・過荷重による大きなひび割れに耐えるほどの性能は要求されないが、先述の１㎜のひび割れに追従するには、長年月の塗膜の劣化も想定して、初期に３～４㎜のひび割れ追従性が必要であると思われる。防水材の品質としては、塗膜厚さを１㎜確保するとして、３～４㎜のひび割れ追従性を得るのに、250％以上の伸び率のあることが必要である。

4．ひび割れ部での塗膜の劣化

ひび割れ部分では、常に伸縮を繰り返していて、塗膜は繰り返し疲労劣化を受ける。こうした疲労劣化に対する防水材の性能として10年間以上の耐久性を考えると、１㎜の伸縮幅に対して、夏・冬を考慮した、常温と低温で、合計5000回程度の繰返し疲労試験に耐える品質が必要であると考える。アクリルゴム系塗膜材は、繰り返し疲労による劣化を受けにくく耐久性にすぐれるが、樹脂比率の低い材料やゴム性弾性の弱い材料では、耐久性に劣る傾向がある。

また、ひび割れ部分では、塗膜は伸びた状態で長期にわたり劣化を受けることになるが、アクリルゴム系はウレタンゴム系やクロロプレンゴム系のように、オゾンや紫外線により劣化をうけ易い化学結合を含まないので伸び時の劣化に対しても安定である。

5．軀体の総合保護機能

60年以上の耐久性を有するといわれてきた鉄筋コンクリート構造物の、予想以上に早い劣化が、その耐久性を問われ、社会問題となっている。この原因としては、建物の構造的な欠陥によるもの、塩分を含んだ海砂や反応性骨材などの使用によるコンクリートの品質によるもの、凍害や塩分の侵入など地域環境による原因があげられ、ひび割れ、鉄筋腐食、表面劣化を起している。

これからの外壁塗膜防水は、防水性能のみならず、建物の総合的な保護機能、すなわち、中性化防止、塩害防止、鉄筋の防錆効果、耐凍害性、耐風害性など高機能が要求されている。

アクリルゴム系塗膜は、防水性能はもとより、遮断性能にすぐれ炭酸ガス、塩分、水分の透過を押える。アクリルゴム系のアロンウォールによる外壁塗膜防水は、昭和46年より始められ、コンクリートの中性化・塩害・凍害などによる建物の劣化に対して、総合的な軀体保護性能が高く評価されている。

6．あとがき

鉄筋コンクリート造建築物の総合的な軀体保護には、品質の優れた外壁防水材の性能を充分に発揮させる上で正しい施工がなされなければならない。その意味で責仕施工体制のより充実が今後とも、望まれるところである。

（ながい　けんたろう　東亜合成化学工業株式会社中央研究所主任研究員）

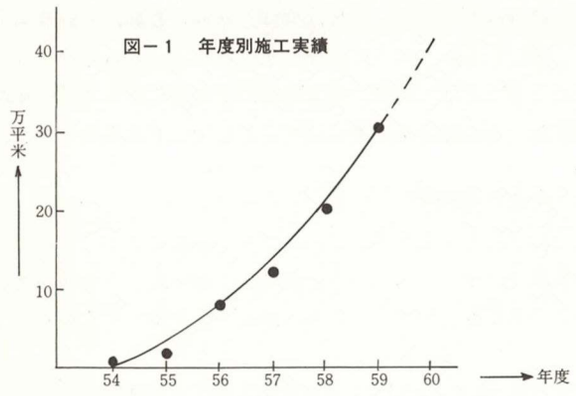
ステンレスシート防水

高橋行雄

1963年（昭和39年）にスウェーデンのステンレス鋼のメーカー、Fagersta、ＡＢがステンレス鋼の需要開拓を目的に、開発し、新会社、Rostfria、Tak ＡＢを設立し販売を始めたのが、最初で、同社では、1970年（昭和46年）までの７年間、試行錯誤的に改善を操返し、現在の仕様になったのは、1970年からといわれている。販売開始より、22年経過し、300万平米以上の実績をもっている。

日本での歴史は浅く、1979年（昭和54年）に日本ステンレス㈱が、Ｐ＆Ｐ工法を独自に開発し、販売を始めたのが、最初で７年の経験である。翌年の昭和55年に三晃金属工業㈱が前記のRostfria、Tak社と技術提携し、Ｒ－Ｔ工法として販売を開始した。その後59年暮頃より、日本冶金工業㈱がＳＧ工法、川崎製鉄㈱がＲＳＷ工法、日本冶金工業㈱がＮＺ工法を各々開発し、市場に参加している。日本での施工実績は約120万平方米で、年度別実績は、ほぼ**図－１**の通りで、伸び率は著しい。

一方、日本建築学会では、ＪＡＳＳ８防水工事標準仕様書に制定すべく諸作業は完了し、来る３月４日より全国８ブロックで説明会の開催を予定されている。ここではステンレスシート防水の概要とおもな特徴について述べてみる。



図－１　年度別施工実績

１．概要

１）使用材料

鋼　種：ＪＩＳＧ4307　ＳＵＳ304、ＳＵＳ316

板　厚：0.4㎜

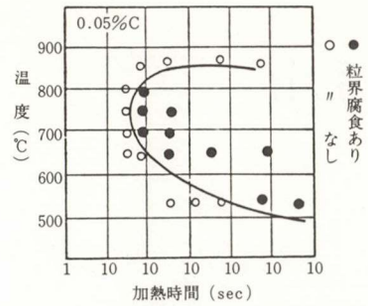
板　巾：500㎜、1,000㎜

仕　上：生地（ＺＤ仕上）

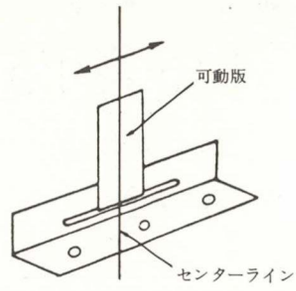
塗装仕上（シリコンポリエステル系、フッソ樹脂系）

メッキ仕上（銅メッキ）

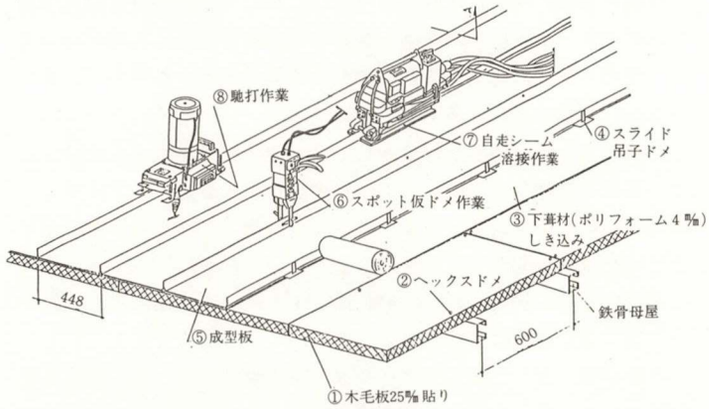
ステンレスシート防水用として特にＪＩＳ規格値より、炭素量の低いものを使用しているメーカーがある。これは溶接部の粒界腐食環境から、より安全にするための対策である。すなわち粒界腐食環境は加熱温度と、その時間と、材料の炭素の含有量に左右される。**図－２**参照、加熱温度が同じの場合、炭素の含有量の少い方が、加熱時間が長くなっても安全になる。一方、ステンレスシート防水の溶接は、シーム溶接であるので加熱温度は一般の溶接に較べ低く、溶接速度が速く、材料の板厚も0.4㎜と薄いので、熱容量も小さいので冷却速度が速く、危険温度を急速に通過するので、ＪＩＳ規格値でも安全サイドにある。



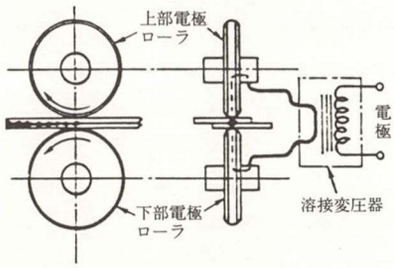
図－２　粒界腐食感受性Strauss試験



図－３　スライド吊子



図－４　作業手順



図－５　シーム溶接の原理

２）作業工程

ステンレスシート防水は耐食性のよい、オーステナイト系のステンレス薄板の、両端を立上げ、その立上げ部を拝み合せにして、自走式のシーム溶接機により、自動溶接し、役物部材は役物用シーム溶接機により、溶接してメンブレンを形成する工法である。躯体との取付は吊子（主としてスライド機構を内蔵した、スライド吊子**図－３**参照）を介して、ファスナーにて躯体に取付ける、面材と吊子とはスポット溶接機により固定する。従って在来（有機材）工法の密着工法ではなく、完全な絶縁工法であり、躯体のムーブメント、躯体の亀裂には充分追従できる工法である。作業工程は**図－４**の通りである。

３）シーム溶接

抵抗溶接の一種で、接合すべき部分を挟み、加圧して直接大電流を通して、その電流による抵抗熱で溶接部の、温度を上昇させ、溶接を行うものである。ステンレス鋼は、電気抵抗値が大きいので、この溶接には適した材料である。シーム溶接はスポット溶接が連続しているものであり、電極の形状が、シーム溶接は円板状で、スポット溶接は棒状との違いはあるが、原理は同じである。**図－５**参照。

４）溶接部の検査

ステンレスシート防水工事は溶接が生命であるといっても過言ではない。作業員の技能にあまり左右されないよう、自動シーム溶接機、役物用半自動シーム溶接機が使用され、均一な溶接ができるよ

う工夫されているが、溶接条件の調整、メンテナンス（電極手入、交換など）を作業員任せではなく、専門員による、チェック・システムが重要である。溶接部の検査としては、

○作業前：ピーリングテストを行い溶接条件をチェックする。
○作業中：溶接部のテンパーカラーの状況を監視する。
○作業後：必要によりバキューム・テストを行う。
　　：必要により水張りテストを行う。

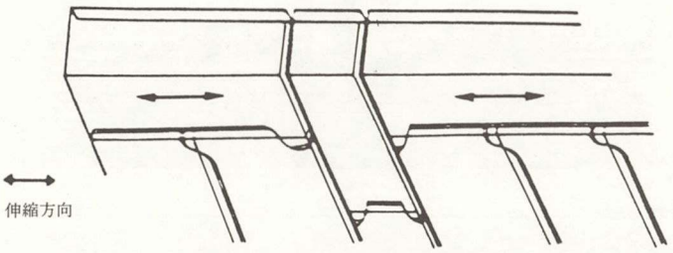
2．ステンレスシート防水のおもな特徴

1）経年変化が極めて少い。

在来の防水材（主として有機材）は太陽光線による劣化が早く、従って露出工法には不向で、非露出工法が良いとされている。ステンレスは太陽光線による劣化は極めて少い。また通常の立地条件での風水による劣化も少い。しかし腐食環境下（海岸近くで塩粒、工業地域でのHcl、H_2SO_4など）では材質を選択する必要があり、また異種金属と接触すると「もらい錆」の原因になる場合があるので、異種金属とは直接接触しない（塗装、ゴムシートなどで絶縁）よう、配慮は必要である。

2）適用温度範囲が広い

断熱防水でとくに断熱材の上に防水層を設けると、防水層の温度は最高86℃まで、上昇することが確認されている。また夜間は輻射熱の関係から、気温より数度下ることも実測されている。従って温暖地では90℃位、寒冷地では100℃位の温度変化があるが、在来防水材は数100℃では溶解し、マイナス温度では硬化収縮し、（膨脹係数が下地材より数倍大きいので、伸縮量が大きく）ひけが生じ亀裂を生じたり、剥離などトラブルの原因になっている。ステンレスは高温（数百度）から超低温（マイナス百度以下）でも強度の変化は少く、また膨脹、収縮は在来の防水材ほどではないが、下地材（コンクリート）よりは大きいが、エキスパンション工法（**図－6**）と、前述のスライド吊子により、伸縮を吸収し熱によるトラブルを解消している。



図－6　取合部エキスパンション

3）軽くて機械的強度がある。

在来工法の有機材の中には、断熱材の上に防水層を設けた場合、断熱材の動きにより破断したり、保護層を設けないと、飛来物などによる破損の、心配があるものもあるが、ステンレスシート防水は、4kg／m²以下で軽く、強度も53kg／mm²以上で有機材と較べて、桁違いに強い。

4）下地材の動きに完全に追従できる。

在来の防水工法の主流は密着工法であるため、下地（コンクリート）に亀裂が生じたり、下地（ＡＬＣ）が動いた場合など、防水層に破断などのトラブルが生じていたが、ステンレスシート防水では、完全な絶縁工法（スライド吊子と、エキスパンション工法により、下地とは別にメンブレンのみ、単独に伸縮ができる）であるため、下地のムーブメントに充分追従することができる。

5）不燃材でかつ作業は安全である。

在来の防水材の中には、作業温度が250℃前後で、火気を要したり、また溶剤などによる有毒ガスが発生するなど、消防、衛生面で心配があるものもあり、また一般的に可燃性である。ステンレスシート防水は、不燃性で主作業がシーム溶接であるので、作業は安全でかつ確実である。

3．ステンレスシート防水の適用について

在来の防水工法と同様に、いかなる防水工法にも適用できるが、前述2項の特徴を生かすには、次の工法に適するのではなかろうか。

アップサイド・アップ（ＵＳＵ）工法。

太陽光線、風雨による劣化が少く、特殊な腐食環境でない限り、耐久性も抜群であるので、露出工法に適する。一方、第一次石油ショック以来、省エネルギー対策として、断熱材の使用は、住環境向上の要求と、あいまって、最近では不可欠のものとなってきている。断熱効果（躯体の熱ショックからの保護と、結露対策の関係）の面から、外側断熱工法が良いといわれている。外側断熱工法では、防水層と断熱材の組合せとなり、防水層をスラブ上に設け、断熱材をその上に置き、押え層をその上に設ける工法、いわゆるアップサイドダウン（ＵＳＤ）工法と、スラブの上に防湿層を敷き、断熱材を置き、その上に防水層を設け、最上部に保護層を設ける、アップサイドアップ（ＵＳＵ）工法の2通りがあり、在来工法ではそれぞれ一長一短があるが前者の方が、ベターだという人の方が多いようである、ＵＳＤ工法は防水層には太陽光線を、断熱材で遮断するので、温度変化も少くなり、ベターである。しかし断熱材から見ると今ひとつである、すなわち上に防水層が無いので、雨水が浸入し、吸湿したり、水浸することにより断熱効果は低下するからである。ＵＳＵ工法は断熱効果は100％期待できるが、防水層が断熱材の動きにより、破断したり、保護層の動きにより破損することがある。

ステンレスシート防水は、自然条件に強く、また機械的強度も強いので、下地の断熱材のオドリなどにより、損傷することはない。また押え層も省略でき、外側断熱工法の理想とする、ＵＳＵ工法が実現できる。

4．ステンレスシート防水の課題

1）イニシャルコストの低減

在来の防水工法より、イニシャルコストは2～3倍高い、しかしメンテナンス費を含めた、ランニングコストを加味した、トータルコスト的に長い眼でみた場合、ステンレスシート防水が優位になるが、イニシャルコストも下げるべく、材料メーカー、施工業者の努力が望まれる。

2）機能面から意匠性へ

0.4㎜の薄板を溶接し、継ぎ合せているので、溶接歪みが発生し、意匠性を重要視する、屋根には問題になる場合がある。防水性能、意匠性の両者を満足するものはないが、意匠性に重点を置いたものに三晃金属工業㈱のＲ－Ｔ屋根瓦棒、日本ステンレス㈱のⅡ型がある。防水機能も完全で、しかも意匠性もあるものを各メーカー鋭意工夫中（下地材、リブ加工など）であるが今一つでこれからの課題といえる。

3）プレハブ化。

現状では各社とも、工場加工は極めて少く、コイルのスリットと切断程度であり、面材の成型作業から、現場で行い、役物の加工は現場での、手加工が主体となっている、作業能率が悪く、人手が多くかかっている、現場作業は、天候に左右されることが多く、工程も長くなる、コストダウン、工程の短縮のため、いっそうの機械化及び、プレハブ化が望まれる。

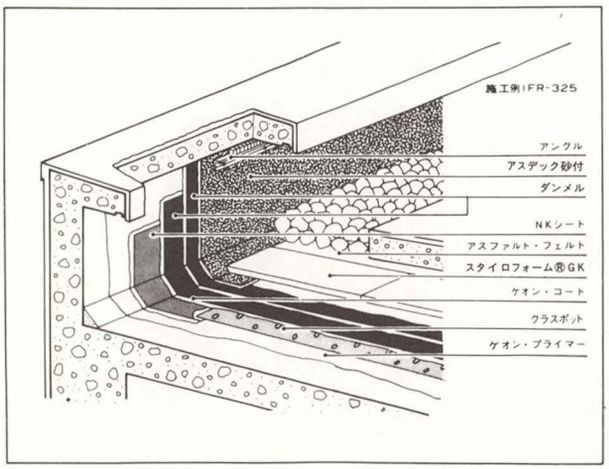
（たかはし　ゆきお　三晃金属工業株式会社ＲＴ営業部課長）

製品名	信用ある建築は信頼できる近畿防水から **外側断熱工法・脱気工法**
会社名 担当部課 （担当者）	近畿防水事業協同組合
材料名	

標準施工法

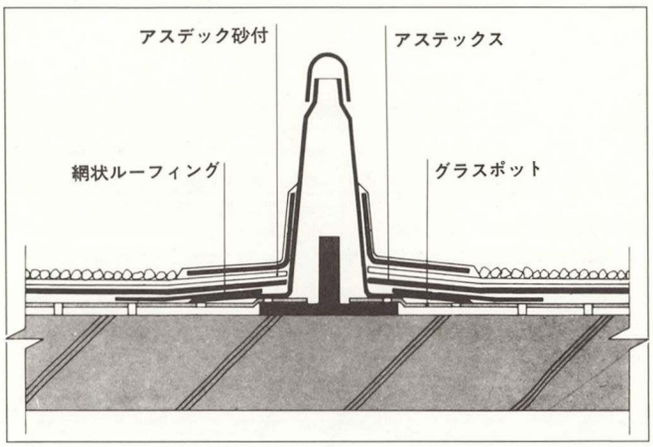
住所	〒557　大阪市西成区橘３丁目18番27号 ㈱工英社内
電話	大阪(06)661－8861
FAX	大阪(06)661－8831
用途	断熱工法（スタイロフォーム®ＧＫ）とは絶縁工法にて防水施工した後、アスファルト防水層の上に断熱材を張り付け、さらに押え層の挙動と縁をきるため、アスファルト・フェルト等を敷く工法で躯体及び防水層の外側に断熱材がくるのでＵＳＤ工法ともいわれ歩行用保護防水を採用される場合には最も適した工法です。
特長	●躯体を熱劣化から保護し長持ちさせる。 ●防水層を温度変化から保護し耐候性が増す。 ●すべての結露発生を容易に防止できる。 ●スラブ天井の直仕上げが容易にできる。 ●火災が発生する室内側に対して安全側にある。

断熱工法（スタイロフォーム）



施工例ＩＦＲ－325

脱気工法



施工例ＶＳ－325Ｓ

脱気工法はフクレ・結露の問題を絶縁工法に脱気筒を適切な位置に設置し屋根スラブと防水層の間の湿潤空気による膨張圧力を排出することにより解決した工法で近畿防水では露出屋根防水・砂利撒屋上防水の仕様に採用しております。

歩行用断熱防水工法仕様例	露出脱気工法仕様例
ＩＦＲ－325	ＶＳ－325Ｓ
フェルト	アルペースト（別途）
スタイロフォームＧＫ30㎜	アスデック砂付
ゲオンコート	ゲオンコート
ダンメル	アステックス
ゲオンコート	ゲオンコート
ダンメル	脱気筒　フランヂ
ゲオンコート	グラスポット
グラスポット	脱気筒　コアー
ゲオンプライマ	ゲオンプライマ

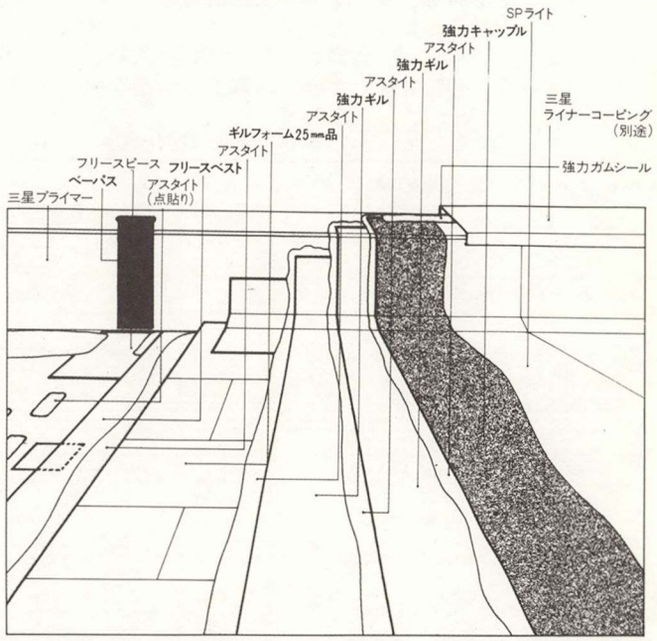
工法名	断熱露出防水SC-25GF(ギルフォーム)

会社名 担当部課 (担当者)	東西アスファルト事業協同組合 芳賀正善
住所 電話	大阪　〒550 大阪市西区京町堀1－10－5 TEL 06－443－0431 東京　〒101 東京都千代田区岩本町3－11－13 TEL 03－862－8531
用途	断熱、防水、軀体保護
特長	●断熱材 断熱効果 耐熱性 寸法安定性 軀体保護 ●防水層 高級アスタイト防水
仕様 規格寸法	ギルフォーム 920×600×25（他に20、30、40、50㎜品）
仕様 形状	ギルフォーム板状
仕様 仕上	強力キャップルSPライト塗布
仕様 熱伝導率(kcal/mh℃)	ギルフォーム 0.018
仕様 密度(kg/m³)	ギルフォーム 38
仕様 圧縮強度(kg/cm²)	ギルフォーム 2.0（23℃　5％歪時）

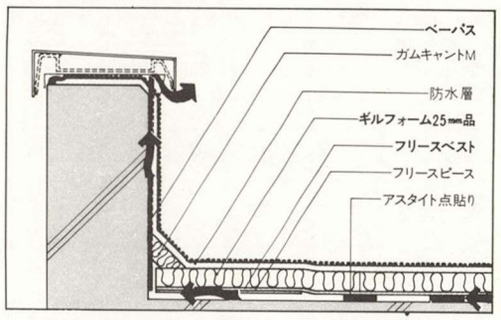
工法名	

標準施工法

施工法〈標準施工例 SC－25GF〉



ベーパスによる通気図



設計単価	8,760円/m²
施工体制	東西アスファルト事業協同組合員 全国 142社 近畿　27社
耐用年数と年限保証	20年程度 10年以内
維持管理	施主管理 清掃等
備考	流通範囲　全国 発注方式　ゼネコン→防水工事店（組合員） 納期　1週間 流通システム　メーカー→防水工事店（組合員）

工法名	特許NK式断熱防水工法	ゴムアス常温積層断熱防水 NKフォームとゴムアス防水伴用工法

会社名	日興化成株式会社
住所	本社　〒532 大阪市淀川区西三国4丁目3番46号（藤村ビル） ☎06－331－5953(代)
	営業所・工場　〒561 大阪府豊中市庄内栄町5丁目1の16 ☎06－332－2058(代)
電話	研究所　〒563 大阪府池田市石橋2丁目9番11号 ☎0727－61－8244(代)



施工例　NKシートSS工法

●NKフォーム物質性比較表（ポリエチレンフォーム）

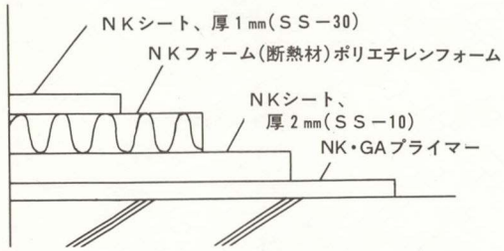
JIS－K－6767

		ニッコー ポリフォーム	A社 3006	B社 3005	C社 3005
公称厚み (mm)		4	6	5	5
製法分類		放射線架橋法	架橋法	架橋法	架橋法
発泡倍率		31.5	31.7	31.7	25.8
抗張力 (kg/cm²)	縦	3.69	3.56	3.35	3.04
	横	2.63	2.64	3.13	2.63
伸び (%)	縦	261	105	110	80
	横	166	98	120	105
引裂強度 (kg/cm)	縦	2.23	2.46	2.10	2.06
	横	1.29	1.59	1.85	1.97
圧縮速度 (kg/cm²)	25%	0.36	0.43	0.37	0.60
	50%	1.00	0.97	0.95	1.22
	75%	2.89	2.80	2.74	3.13
圧縮永久歪 %		5.7	4.93	5.87	2.57
繰返し圧縮永久歪 %		3.02	6.38	3.07	3.06
吸水率 mg/cm²		0	0	0	0
加熱寸法変化 70℃ 22hr	縦	1.12	1.23	1.18	0.95
	横	0.23	0.33	0.22	0.06

●吸水率、透湿率、熱伝導率比較表

材料品目	密度 p(KG/cm³)	透湿率 p(g/cm²hrm/mHG)	吸水率	熱伝導率
ポリスチレンフォーム(押出品含)	20	0.0025		
ポリスチレンフォーム(押出品含)	30	0.0017	0.0017	0.033(0℃)
硬質ポリウレタンフォーム	20	0.005		
硬質ポリウレタンフォーム	40	0.0025	0.0003	0.020(0℃)
NKフォーム	33	0.000020	0.000020	0.027(0℃)

NK式ゴムアス常温積層断熱防水
標準仕様

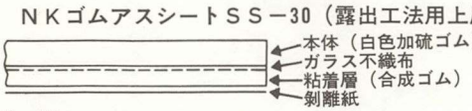


構成

NKゴムアスシートSS－10（下層材）



NKゴムアスシートSS－30（露出工法用上層材）



寸法

	厚さ(mm)	幅 (mm)	長さ(m)	重量(kg)
SS－10	2.0	1000	15	37
SS－30	1.0	1000	15	20

耐衝撃性

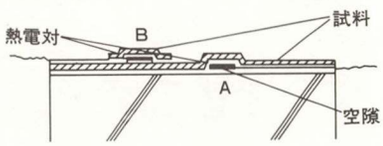
試験方法：各工法を鉄板上に作成し、衝撃刃0.5R、荷重8.3kgを落下させ最下層が破壊するまでの高さを調べた。

	SS－1020	SS－1030
高さ (cm)	18	12

露出工法用上層材（SS－30）の膨れ防止効果

試験方法：黒色ゴムシートとSS－30を下図のような形で下地に張りつけ、各温度の測定と膨れの発生を調べた。

日時：59．7．17快晴　　日中最高気温　33.5℃



	最高温度 (℃) A	B	膨れの有無
黒色ゴムシート	66	58	有
SS－30	40	40	無

なお、数値は全て測定値であり保証値ではありません。

基本物性

項目		SS－10	SS－20	SS－30	備考
引張試験	引張強さ (kg/cm)	4.1	12	3.3	JIS A－6022 JIS A－6008
	伸び (%)	500	40	550	
	引裂強さ (kg)	3.2	6.4	2.2	
揮発減量 (%)		0.19	0.14	0.25	80℃×7日
吸水率 (%)		3.5	3.1	2.2	70℃水×7日

接着力

項目	SS－10	SS－20	SS－30	備考
下地接着力 (kg/25mm)	3.5	——	——	引張速度
層間接着力 (kg/25mm)	——	3.5	2.0	200mm/min
ジョイント接着力 (kg/25mm)	3.5	3.5	2.0	

下地亀裂追従性

試験方法：突き合せた下地（石綿スレート板）上に各工法を作成したものを試料とする。突き合せ部上の試料の幅が10mmになるように試料に切れ目をいれ、下地亀裂幅を連続的に変えた場合の防水層の挙動を調べた。

引張速度：5mm/min

工法	SS－1020	SS－1030
下地追従性(mm)	35	30以上

製品名	日立バイナリーシート P

会社名	日立電線株式會社
担当部課（担当者）	関西支店　ゴム課 山崎　照

材料名	EPDM／ブチルゴム／断熱材(発泡ポリエチレン)

住所	〒541 大阪市東区北浜４－６（日生日立ビル）
電話	06（203）3821　代表

用途

○屋根外断熱用防水工事

○屋根改修用防水工事

特長

①外断熱による省エネ・結露防止がはかれる。
②防水シートと発泡ポリエチレンの複合によって二重防水効果がある。
③積層一体化なので、表面ふくれの心配がなく、外観仕上りがきれい。
④防水シートと外断熱材の別貼り手数が省け、さらに下地への片面接着が可能なので施工迅速かつ能率的である。
⑤発泡ポリエチレンが下地調整材にもなるので、改修防水工事などにも適している。

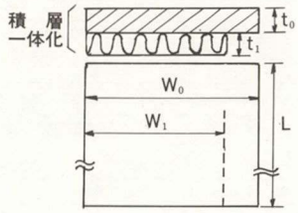
仕様

規格寸法

寸法	シート	厚t_0(mm)	1.0	1.2	1.0	1.2
		幅W_0(mm)	1,200			
	発泡ポリエチレン※	厚t_1(mm)	4.0		10.0	
		幅W_1(mm)	1,100			
	長さL(m)		20	20	15	15
重量(kg／本)			30	34	25	29

※断熱材(発泡ポリエチレン)の厚さは他サイズ(2.5、15、20、25、30mm）も積層可能。

形状



荷姿　長尺ロール巻

引張強さ（kg／cm²）
切断伸率（%）
引裂強さ（kg／cm）
伸び劣化など

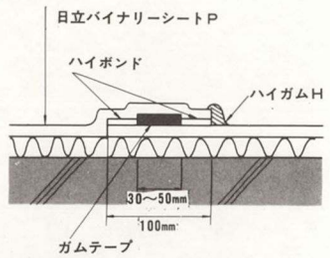
JIS A 6008規格(表示許可374030)による。

材料名　EPDM／ブチルゴム／断熱材(発泡ポリエチレン)

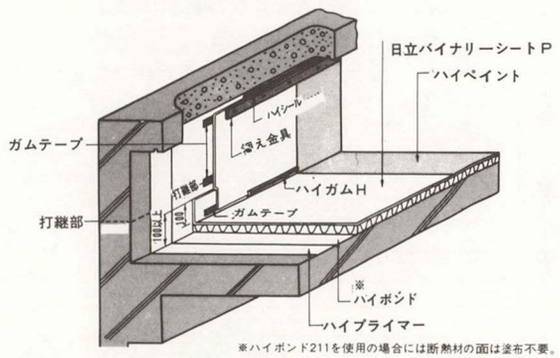
標準施工法

〈施工工程〉
① 下地処理（清掃）
② 接着剤塗布
③ 日立バイナリーシートP貼り
④ ジョイント部等の処理（ガムテープ挿入）
⑤ 端末処理（ハイガムH、金具押え）
⑥ 表面仕上

〈日立バイナリーシートPのジョイント法〉



〈施工展開図〉H－AP工法



※ハイボンド211を使用の場合には断熱材の面は塗布不要。

設計単価

○施工単価（材工込）　単位：円/m²

シート厚＼工法	H-AP		H-CP	H-PP	H-PS
	Ⓟ4	Ⓟ10	Ⓟ4	Ⓟ4	Ⓟ4(+)Ⓢ25
1.2mm	4,700円	5,300円	6,550円	4,500円	6,200円

●断熱材(mm)
Ⓟ発泡ポリエチレン
Ⓢポリスチレンフォーム
●露出工法
RCシルバー仕上

- 施工300m²以上
- 山間部、離島および改修防水は別途見積
- 押え金具・コーキングは別途見積

○他のシート厚および詳細は別途御照会下さい。

施工体制　関西日立防水シート工業会員による責任施工

耐用年数と年限保証　標準保証年限　10年
（同上の施工体制の場合に限る）

維持管理　同上の施工体制による定期点検

備考

●日立バイナリーシートPとは……
日立防水シート（JIS A 6008）と外断熱材（発泡ポリエチレン）を、昭和53年から日立独自の特殊技術によって積層一体化した、わが国で最初の複合防水ゴムシートです。

日立防水シート（＋）発泡ポリエチレン（P）　積層一体化（長尺ロール巻）

製品名	サンロイドDN防水システム

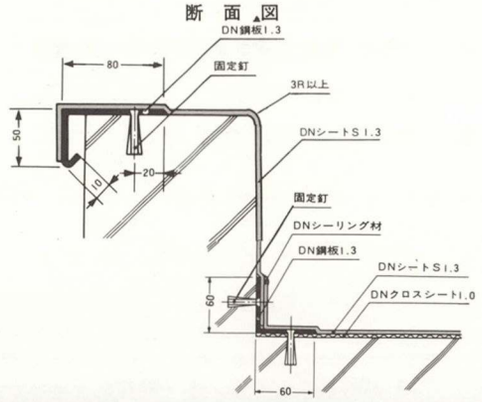
会社名	筒中シート防水株式会社
担当部課（担当者）	営業部
住所	〒541　大阪市東区瓦町5－71
電話	☎(06)222－0646

材料名	サンロイドDNシート DN鋼板、DN溶着剤他

標準施工法

用途	屋上（RC、ALC）プール、蓄熱槽、受水槽などの防水
特長	塩ビ系シート防水（DNシート）を独特の絶縁工法でシートを躯体に密着させずにコーナー部にDN鋼板を固定し、シートをDN鋼板に溶着する。

断面図





施工例

仕様	規格寸法	Sシート 1.3㎜ 1.5㎜ 2.0㎜厚など
	形状	1000㎜×20m巻物（標準） 色調　シルバー色
	仕上	その他各用途別にあり、カタログを参照下さい。

	JIS規格値	品名		
		S	T	WB
切断時の伸び率(長手方向)	200以上	220	230	230
(幅方向)	300未満	215	225	220
引裂き強さ(長手方向)	200以上	350	340	350
(幅方向)		360	350	360
加熱伸縮量(長手方向)	40以上	70	70	75
(幅方向)		70	70	70

設計単価	屋上 300㎡　5,600円／㎡ 蓄熱槽断熱材込み 1,000㎡　12,500円
施工体制	サンロイドDN工業会（販工店全国組織） 自社施工あり　全国50社
耐用年数と年限保証	10年保証（20年耐久性）
維持管理	プールについて特に薬剤投入注意。

用途	特長		品種	サイズm	厚み㎜	㎡／本	kg／本	色調	
屋上用	耐候性、耐オゾン性、耐磨耗性、耐寒性、耐薬品性	非歩行	S	1.0×30	1.0	30	38	シルバーグレイ	
				1.0×20	1.3	20	36		
				1.0×20	1.5	20	38		
			S－LM	1.0×20	1.3	20	38	ライトブラウン	
			S－MG					モスグリーン	
		軽歩行	S－DG	1.0×20	2.0	20	38	ダークグレイ	
				1.0×20	1.3	20	36	ダークグレイ	立上り用
			SV	1.0×15	2.0	15	38	ダークグレイ	
土木・蓄熱槽・消火水槽用	耐熱性、耐寒性、耐鼠性、耐水性		T	1.0×30	1.0	30	41	イエロー	
				1.0×20	1.5	20	41		
飲料水槽用	無毒性（水道法、厚生省告示に適合する）		TW	1.0×30	1.0	30	39	ラベンダー	
				1.0×20	1.5	20	39		
プール用	耐候性、耐オゾン性、耐薬品性、耐寒性（水道法に適合する）		WB	1.0×25	1.5	25	51	フロリダブルー	
			WBN					ナイルグリーン（温水プール用）	
			WBP	1.0×25	2.0	25	58	フロリダブルー	滑り防止用
			WGP					グリーン	
プール防汚用			WBH	0.15×30	1.0	4.5	－	フロリダブルー	
防湿用	水蒸気透過抵抗大		DS	1.0×40	0.5	40	28	ブラック	

製品名	エキスパンタイ® TE型 (TE20、TE25 TE30、TE40)
会社名	タイセイ商工株式会社
担当部課（担当者）	企画研究室 小島広樹
住所	〒332 埼玉県川口市弥平3－8－20
電話	0482（24）6811
用途	ビル、駐車場、工場、市場、プールサイド、土間、構内道路等の高級仕上げに最適の成形伸縮目地材。
特長	5つのステージから構成され、それらの複合する効果によって、可逆性・密着性・防水性など伸縮目地に要求されるすべての物性を充分に満たしている。

仕様

規格寸法

型式	目地巾	伸縮材巾	高さ
TE 20	20㎜	18㎜	30～500㎜
TE 25	25㎜	22㎜	30～500㎜
TE 30	30㎜	25㎜	30～500㎜
TE 40	40㎜	33㎜	30～500㎜

形状

- キャップ
  - 第1ステージ…EPTゴム、非加硫ブチルゴム
  - 第2ステージ…硬質塩ビ
  - 第3ステージ…軟質塩ビ
  - 第4ステージ…硬質塩ビ
- 本体
  - 第5ステージ…ポリエチレン発泡体
- 支持脚……ポリプロピレン

仕上　硬質塩ビ、軟質塩ビをEPTゴム、非加硫ブチルゴムで覆い、耐磨耗性・絶縁性・耐熱性を高めている。

引張強さ（kg／cm²）　103kg／cm²

切断伸率（%）　564%

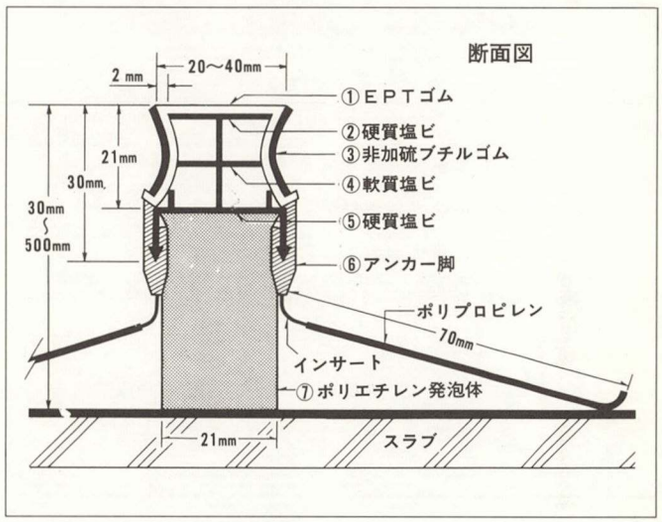
引裂強さ（kg／cm）　43kg／cm

伸び劣化など　熱膨張係数　7×10^{-5}
吸水率　0.15%

材料名	キャップ……EPTゴム、硬質塩ビ、軟質塩ビ、非加硫ブチルゴム 本体……ポリエチレン発泡体 支持脚……ポリプロピレン

標準施工法

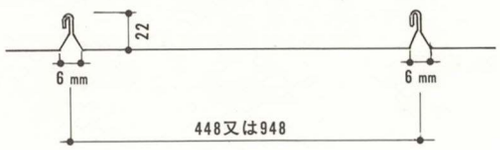
①高さ調整……墨出し線、水糸に合わせる。
②接続……附属品で直線、クロス部分接続。
③固定モルタル(配合比)……セメント：砂＝1：5。
④剥型紙をとる（剥離する）。
⑤仕上……打設後天端の養生テープ剥離。



設計単価	TE 20　850円（高さ60㎜、長さ2m） TE 25　950円（高さ60㎜、長さ2m） TE 30　1,100円（高さ60㎜、長さ2m） TE 40　1,350円（高さ60㎜、長さ2m）
施工体制	全国防水業者および左官業者
耐用年数と年限保証	補償期間　5年
維持管理	①溶剤等を常時流さないようにする。 ②難燃材であるが、火を近づけないようにする。 ③目地本体に直接荷重がかからないようにする。
備考	●用途に応じ、高さを自由に選べる。 ●施工が簡単である。(カッターナイフ、金ノコ等で切断可) ●脚部のレベル調節機能をそなえ、かつ、目地材の飛び出しを防ぐアンカー機能がある。

工法名	Ｒ－Ｔ工法（ステンレスシート防水）

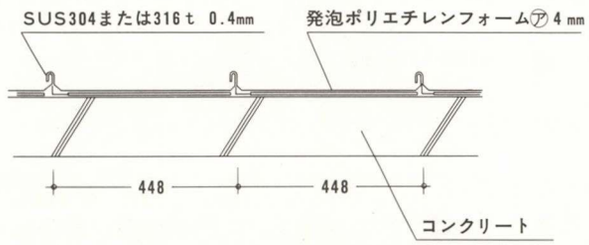
会社名 担当部課 （担当者）	三晃金属工業株式会社 Ｒ－Ｔ営業部　藤　井　保　行
住所	東京都中央区京橋２－９－２
電話	03（567）3551
用途	1．屋上防水 2．ＬＮＧタンク保温 3．人工地盤 4．プール等
特長	1．水密性は完全である。 2．耐久性、(耐候性）は抜群である。 3．不燃性である。 4．軽くて、機械的強度も強い。 5．絶縁工法である。 6．エキスパンション工法で伸縮を吸収している。 7．作業時、有毒ガス等の発生なく安全。

仕様		
	規格寸法	板厚　0.4㎜、働き巾　448㎜ （948）
	形状	
	仕上	生　地：２Ｄ仕上 塗装品：シリコンポリエステル系塗装品 ：フッソ樹脂系塗装品 ：銅メッキ品
	引張強さ（kg／cm²）	5,300以上
	切断伸率（％）	40以上
	引裂強さ（kg／cm）	
	伸び劣化など	膨張係数　17.3×10⁻⁶/℃

材料名	ステンレス鋼帯（JIS G 4307 SUS 304 又は SUS 316）

標準施工法

イ．断熱材なしの場合



1．面材の成形……成型機で両端を立上げる。
2．吊子(スライド式)取付……オールインアンカーＳＵＳ製ファスナーで下地に固定する。
3．下葺材敷込み……発泡ポリエチレンフォームⓐ４㎜を敷く。
4．吊子と面材の固定……吊子の舌片に面材の立上り部をスポット溶接する。
5．面材と面材の溶接……自動式シーム溶接機を使用し４m/minで溶接する。
6．溶接の上部の馳せ折……立上り端部を安全のため自走馳折機で折り曲げる。

設計単価	SUS 304　生　地　　9,500円/㎡（露出） SUS 316　〃　　11,500円/㎡（露出） SUS 304　カラー　11,500同/㎡（露出）
施工体制	責任施工
耐用年数と年限保証	耐用年数：半永久的 年限保証：10～20年
維持管理	ドレーン廻り点検掃除　１回/年 程度
備考	

アクリルゴム系化粧防水材

ベタウォールスーパー3200エクシード

材料の概要

材料名（機能）／項目	ベタウォールシーラー（シーラー）	ベタウォールスーパー3200エクシード（主材）	ベタウォールトップS（トップコート）
外観	褐色透明液	着色されたペースト状	調色されたペースト状
成分	含塩素系樹脂	アクリルゴム系	アクリル樹脂系
粘度	13秒（フォードカップ）	40,000cps	KU値88
固形分	15%	74%	52%（白）

材料の特長

(1) JIS A 6021に全項目合格した強靱かつ柔軟な物性。
(2) アクリルゴム系で、下地のクラックに柔軟に対応します。
(3) 耐久性にすぐれた理想的な防水層を形成します。
(4) 水性一液タイプで、連続吹付け作業が可能です。
(5) 下地への密着性能にすぐれています。
(6) カラフルで豊富なパターンの美しい仕上がりが得られます。
(7) 耐候性にすぐれています。
(8) 耐寒性・耐熱性にすぐれています。
(9) 防錆効果にすぐれています。

施工例





塗装方法

工法	工程	材料名	塗布量 kg/㎡	塗装間隔	塗装器具
玉吹き（SP）	シーラー	ベタウォールシーラー	0.2	1時間以上	スプレー、ローラー、ハケ
	主材	ベタウォールスーパー3200	1.7	3時間以上	タイルガン、ジュラクガン
	玉吹き	ベタウォールスーパー3200玉用	0.5～0.8	12時間以上	タイルガン
	トップコート（2回塗り）	ベタウォールトップS	0.3	1時間以上	スプレー、ローラー
ヘッドカット（SH）	シーラー	ベタウォールシーラー	0.2	1時間以上	スプレー、ローラー、ハケ
	主材	ベタウォールスーパー3200	1.7	3時間以上	タイルガン、ジュラクガン
	玉吹き	ベタウォールスーパー3200玉用	0.7～1.0	約1時間後	タイルガン
	ローラー押え	——	——	12時間以上	軟質ヘッドカットローラー
	トップコート（2回塗り）	ベタウォールトップS	0.3	1時間以上	スプレー、ローラー、ハケ
小クレーター（SC）	シーラー	ベタウォールシーラー	0.2	1時間以上	スプレー、ローラー、ハケ
	主材	ベタウォールスーパー3200	2.0	12時間以上	タイルガン、ジュラクガン
	トップコート（2回塗り）	ベタウォールトップS	0.3	1時間以上	スプレー、ローラー、ハケ
なみがた（ST）	シーラー	ベタウォールシーラー	0.2	1時間以上	スプレー、ローラー、ハケ
	主材	ベタウォールスーパー3200	1.0	3時間以上	砂骨ローラー
	主材	ベタウォールスーパー3200	1.0	12時間以上	砂骨ローラー
	トップコート（2回塗り）	ベタウォールトップS	0.3	1時間以上	スプレー、ローラー、ハケ

JIS A 6021による試験結果

屋根防水用塗膜材の規格は、建築物の外壁材に要求される機能のうち、広い環境温度範囲における防水性および亀裂追従性を重視した塗膜物性試験です。ベタウォールスーパー3200エクシードは(財)建材試験センターにてJIS A 6021に全項目合格し、すぐれた塗膜物性と耐久性が認められました。

項目			試験時の温度℃	規格値（変化率）	試験結果測定値（変化率）	試験条件
引張試験	引張強さ kg/㎠	無処理	−20	(100～400)	36 (200)	
			−10	(100～200)	28 (156)	●240hr以上養生後、ダンベル3号形
			20	(100とする) 10以上	18 (100)	●引張速度 200mm/min
			60	(30以上)	18 (100)	
		加熱処理	20	(80～150)	17 (94)	●80℃、168hr
		紫外線処理	20	(80～150)	21 (117)	●ウェザオメーター250hr
		アルカリ処理	20	(60～150)	20 (111)	●0.1%NaOHと飽和$Ca(OH)_2$水溶液中 168hr
		酸処理	20	(40～150)	11 (61)	●2%H_2SO_4水溶液中168hr
	破断時の伸び率 %	無処理	−20	50以上	219	
			−10	100以上	268	●240hr以上養生後、ダンベル3号形
			20	250以上	518	●引張速度 200mm/min
			60	150以上	351	
		加熱処理	20	200以上	650	●80℃、168hr
		紫外線処理	20	200以上	498	●ウエザオメーター250hr
		アルカリ処理	20	200以上	582	●0.1%NaOHと飽和$Ca(OH)_2$水溶液中 168hr
		酸処理	20	200以上	387	●2%H_2SO_4水溶液中168hr
	抗張積 kg/cm	無処理	20	100以上	187	$TS\times\frac{L-20}{10}$ TS:引張強さ(kg/㎠) L:破断時の標線間距離(mm)
	引裂強さ kg/cm	無処理	−20	(100以上)	27 (193)	
			−10	—	—	●B形
			20	(100とする) 5以上	14 (100)	●引張速度 200mm/min
			60	(30以上)	10 (71)	
加熱伸縮率 %				伸び縮み1以下	−0.3	●300×30mmの短冊 ●18℃、168hr
伸び時の劣化	加熱劣化			いずれの試験片にもひび割れおよび著しい変形を認めないこと	ひび割れなし	●ダンベル1号形 ●100%伸長80℃、168hr
	紫外線劣化				〃	50%伸長 250hr
	オゾン劣化				〃	40%伸長40℃、75pphm 168hr

（S59.10.31(財)建材試験センター測定）

壁面仕上材　亀裂注入材　エポキシ注入材
各種シーリング材　各種接着剤

サンスター技研株式会社

本社　〒569 大阪府高槻市明田町7番1号 TEL/0726(81)0351

大阪支店　〒569　大阪府高槻市川西町1－35－8　TEL/0726(84)0600
広島営業所　〒733　広島市西区庚午センター5－15－25　TEL/082(277)8444
松山営業所　〒790　愛媛県松山市高岡町80－3　TEL/0899(72)0065
福岡営業所　〒812　福岡市博多区店屋町8-24 九勧日産ビル3F　TEL/092(281)3581
本社工場　〒569　大阪府高槻市明田町7番1号　TEL/0726(81)0351

製品名	ロードシル
会社名	クリヤマ株式会社
担当部課（担当者）	大阪本社建材三課 課長　吉田忠義
住所	〒532　大阪市淀川区西中島1－12－4
電話	06－305－5611
用途	●カーテンウォール工法ジョイントシール ●窓サッシュシール ●浴槽、洗面器等のシール ●プラスチック、陶器タイルの継目シール ●高温、冷凍室の継目シール ●土木用
特長	1．一液性、常温加硫、施工容易 2．耐熱、耐水、耐候性がすばらしい 3．驚異的な弾性 4．強力な接着力 5．電気的特性が優れている 6．無毒性

材料名		シリコン系シーリング材
仕様	規格寸法	1ℓ缶（1.05kg） 1/3ℓカートリッジ
	耐熱性 耐寒性	+250℃ −65℃
	引張強さ（kg／cm²）	25～30kg／cm²
	切断伸率（%）	600%
	引裂強さ（kg／cm）	7kg／cm
	容積変化率	0.5%
耐用年数と年限保証		7年

防水工事

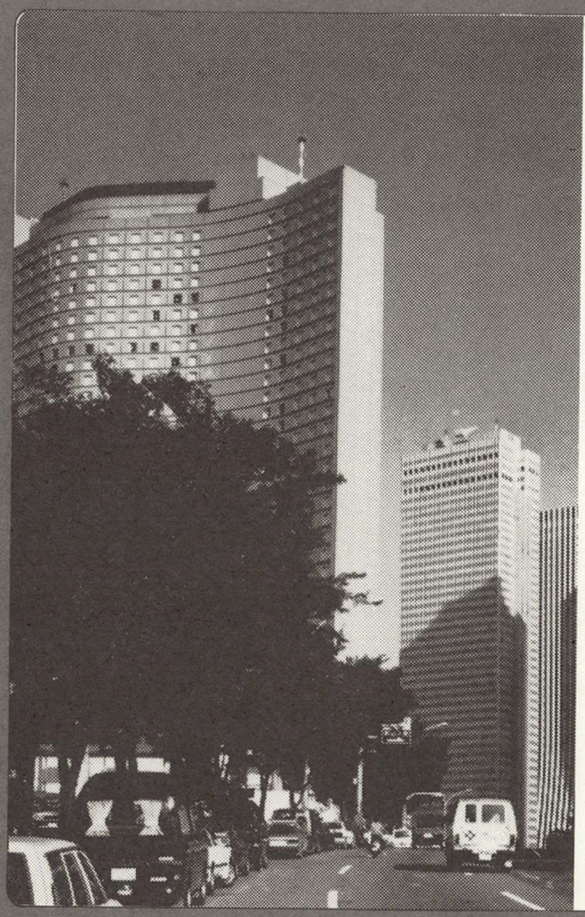
株式会社　木下謹三商店

〒550　大阪市西区江戸堀3丁目6番12号
電話　06－443－0115

総合防水工事業

フタバ興業株式会社

本　　社　〒564 大阪府吹田市南金田1丁目10番18号
電話 06(385)2781(代)
東京営業所　〒105 東京都港区西新橋1丁目21－8 第2鈴木ビル
電話 03(591)2491(代)



防水
防熱
防音

53年のキャリアと実績を誇る技術の高山工業

TAKAYAMA

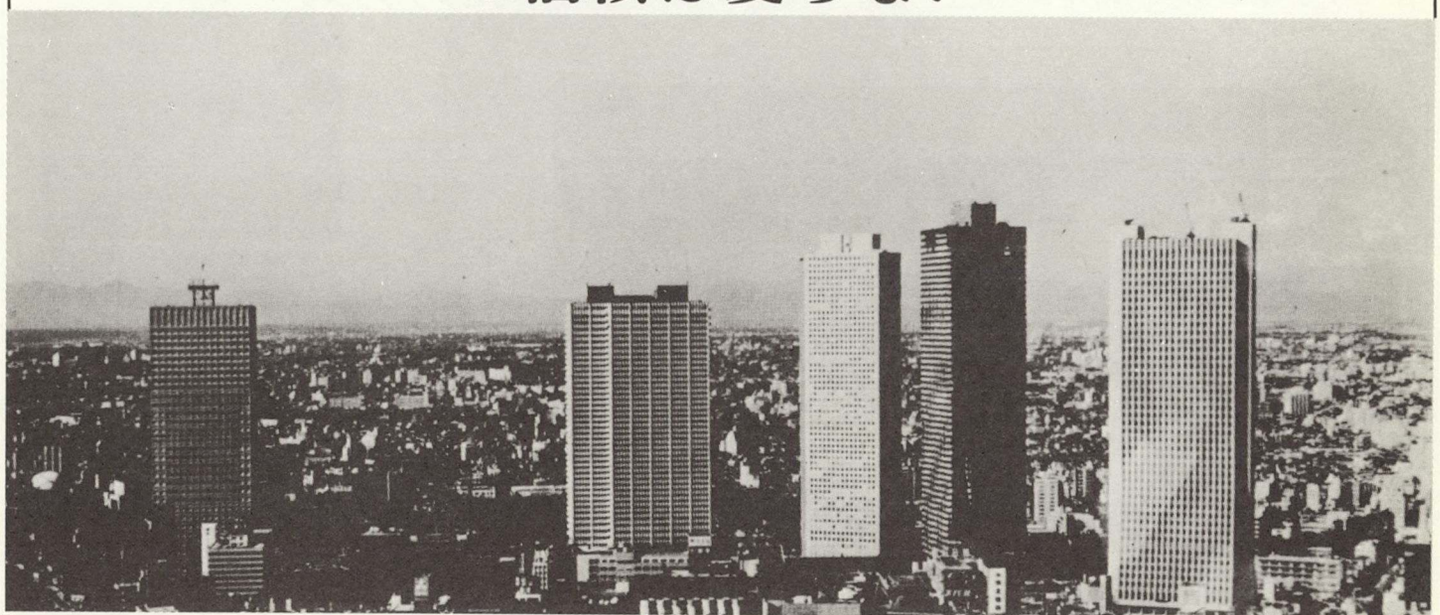
●技術を通じてより良い人間環境づくりを目指す……

高山工業株式会社

建設業許可番号－建設大臣許可　第5222号

本　　社	東京都千代田区富士見1－11－21	☎東京〈03〉265－5631(代表)
大阪支店	吹田市広芝町4番34号江坂第一ビル	☎大阪〈06〉386－9312
仙台支店	仙台市二日町4－1　北斗ビル	☎仙台〈0222〉65－7591
千葉営業所	千葉市小仲台2-9-1　稲毛駅前市街地ビル	☎千葉〈0472〉51－6382
横浜営業所	横浜市旭区今宿1－1589	☎横浜〈045〉951－1106
北関東営業所	埼玉県大宮市大成町2－188	☎大宮〈0486〉67－3520
西東京出張所	東京都八王子市鑓水1406	☎八王子〈0426〉75－5560

構造が変っても——
ビニロイド防水
の信頼は変らない



営業品目

- ビニロイド防水工事
- アコシート防水
- ＤＮ防水工事
- 三星プラスタイル貼工事
- 保温・保冷防熱工事
- シポレックス工事
- 三星プラスオール製造・販売
- 三星シーリング材製造・販売

アスファルト防水に取り組んで60年

三星産業株式会社

大阪出張所　〒550　大阪市西区京町堀1－10－17　大栄ビル内
TEL〈443〉9721

本社・東京〈292〉1961(代) 札幌〈721〉6031(代) 仙台〈62〉5201(代)
名古屋〈931〉4574(代) 福岡〈781〉3361(代)

営業科目

1. 防水工事全般，吹付工事全般
2. 注入工事全般，土木関連工事全般
3. 既設配水管錆取、防錆塗装工事

業歴50年

建設大臣許可（特－59）第265号

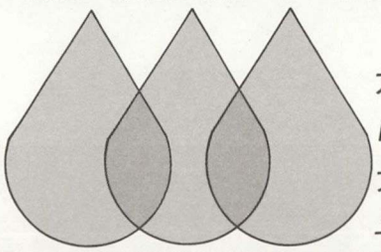
株式会社 **大阪防水建設社**

社長 宇賀照夫　専務 宇賀大三郎

本社 大阪市天王寺区餌差町7の6 〒543 TEL代表（06）762－5621
支店 東京・名古屋・福岡　営業所 仙台・京都・広島・鹿児島

技術と品質と信用の防水施工会社

お得意様本意の正確な施工　無限の可能性を秘め水に挑戦するコンテックスシリーズ!!



営業品目
- アスファルト防水工事
- NSパール防水工事（常温工法）
- プレノコートDX工事（　〃　）
- ユータム防水工事（　〃　）

高度のアスファルト防水責任施工

日新工業株式会社製品にて施工する直結工事会社

日新

日新建工株式会社

本社■〒120 東京都足立区千住東2-21-28☎03(870)6231
FAX (870)6236

大阪出張所■〒533大阪市東淀川区瑞光3丁目6番2号☎06(326)3845
札幌出張所☎011(663)1525 仙台支店☎0222(73)1921 千葉出張所☎0472(52)0707
郡山出張所☎0249(23)1677 青森出張所☎0177(52)1697 秋田出張所☎0188(65)0341
山形出張所☎0236(41)5891 盛岡出張所☎0196(41)7888

構造の頁

135
香港上海銀行新本店ビルの構造

丸岡　義臣

「ハイテック建築の集大成、世界で最も進歩した20世紀を代表する摩天楼をつくる」とノーマン・フォスターが豪語、また莫大な建設費をめぐっても、世界中の建築関係者、世論の関心を大いに集めた香港上海銀行新本店ビルを紹介する。

建設への経緯

1979年　1935年に建設された旧本店ビルの建てかえを決定。香港、英国、オーストラリア、米国などの７名の建築家による国際コンペを実施。その後、約３年をかけて設計の細部をつめる。
1981年　設計完了
1982年　着工
1985年11月　HAND OVER
1986年４月　GROUND OPEN

建物の特徴

香港上海銀行新本店ビルは、１階がオープンなコンコース、ここから３台の大型エレベーターで地上12m、10層にわたる大吹抜けのある銀行メインホールへ、そして23基のエレベーターで何層かの床を吊る巨大なブレースが配置されている中間階へ、中間階からは、61台のエスカレーターで各事務所階へ導かれる。

この建物における特徴は、なんといっても巨大な吊り構造であるが、そのほか、全階床にフリーアクセスフロアを用い、現在・将来のＯＡへの対応、23基のエレベーター、61台のエスカレーターによる人間の機動、能率を重視したムーブメントシステムおよび諸設備機器・洗面所のコンパクト化・竪配管のユニット化などによるサービスモデュール＆ライザユニットなどの採用である。

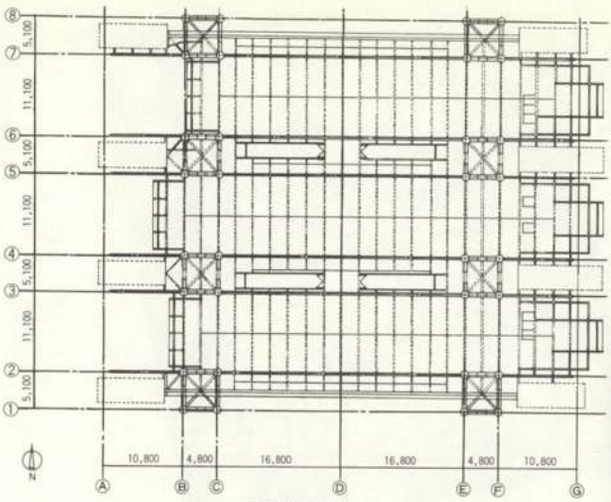
構造上の特徴

当ビルにおける構造上の大きな特徴は、前述したとおり、直径1.10～1.70mの鋼管柱４本（4.80×5.10m）を、梁でフィーレンディール状につなぎ櫓状に組んだマストを、東西妻面に16.2mの間隔で４基ずつ、38.4mのスパンでむかい合うように４対８基にたて、このマスト間を何層かごとに５ヵ所、２階分の高さを利用した巨大なＶ型ブレースで結び、このブレースから縦ハンガーで４層から８層の床、全体では41層の床を吊るという建築上、きわめて大胆な吊り構造形式を採用していることである。

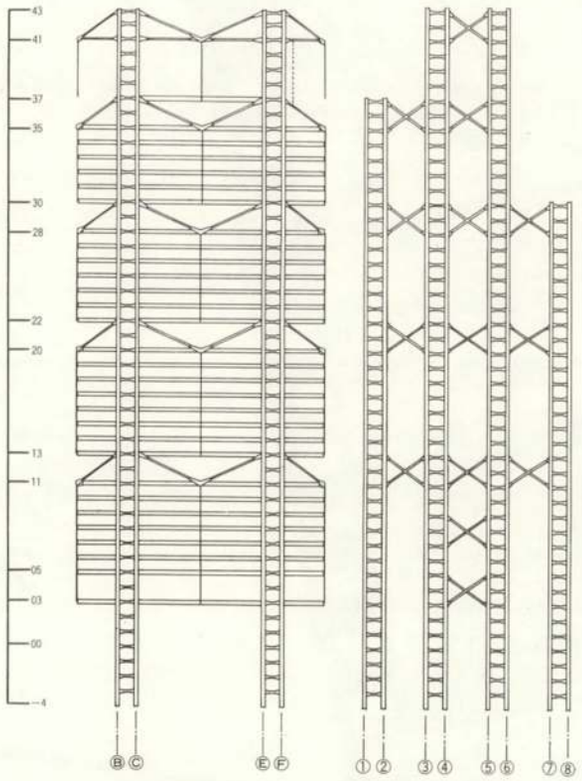
また南北間の架構は、Ｖ型ブレースが配置されている同じ２層を利用し、マスト間をＸ型ブレースで一体化している。

垂直関係が必要な諸設備機器をモデュール化し、東西の妻面、すなわち本体より外側に配置し吊り構造が実現したことにより、設計者は、通常のセンターコアー型超高層ビルに比して、有効床面積率が10%近く上昇、また無柱空間によって将来、構造上の制約を受けずに自由な改造ができることが利点と強調している。

もう一つの特徴は、事務所階の床構造が、デッキプレート上に50mmのコンクリートを打設した床と、その上に1.20m角のコンピュータ化に対応するべきフリーアクセスフロアを敷きならべた二重床となっていることである。とくにこの二重床は床パネルと床ダイヤフラムをシステム化し、その隙間を高密度に空調、照明、通信、情報関連の諸設備を整然と配置し、将来の改造、ＯＡの進歩にたやすく対応できるよう考えられている。



17階床伏図

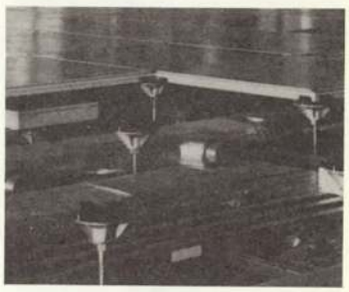

3通軸組図

E通軸組図


北東よりみた香港上海銀行新本店ビル

建物概要

建築主	ONE QUEENS ROAD CENTRAL L.T.D
建築地	1 QUEENS ROAD CENTRAL HONG KONG
構造規模	鉄骨造、地下３階、地上43階 高さ178.1m
延床面積	98,000㎡(≒30,000坪)
用途	事務所（銀行）
設計	ARCH:FOSTER ASSOCIATES STRACT:OVE ARUP/PARTNERS M/E:J.ROGER PRESTON/PARTNERS
施工	M/C:JOHN LOK/WIMPEY JV.


事務所階のシステム床

おわりに

以上、香港上海銀行新本店ビルの特徴を、見学し、また文献を参考に述べてきたが、この建設で注目すべきことは、建築家が世界の最新技術を建築に、いかに適用、応用し、高品質、高精度の建物をつくりあげているかということと、なんといっても、建築家と構造技術者が一体となって「建築を創りあげた」ことではないだろうか。

参考文献

(1) 日経アーキテクチュア　1983年１月31日号および1984年５月７日号
(2) ａ＋ｕ　8310
(3) THE NEW HEADQUARTERS FOR THE HONG-KONG AND SHANGHAI-BANKING CORPORATION
THE CONSTRUCTION-A PERSONAL FOLIO OF PHOTOGRAPHS BY IAN LAMBOT
(4) THE HONGKONG AND SHANGHAI BANKING CORPORATION DESIGN-JANUARY 1983

（まるおか　よしおみ　竹中工務店大阪本店設計部）

AICHI
高所作業車の専門メーカー。

建設のやり方を変えた。
スカイマスターが変えた。

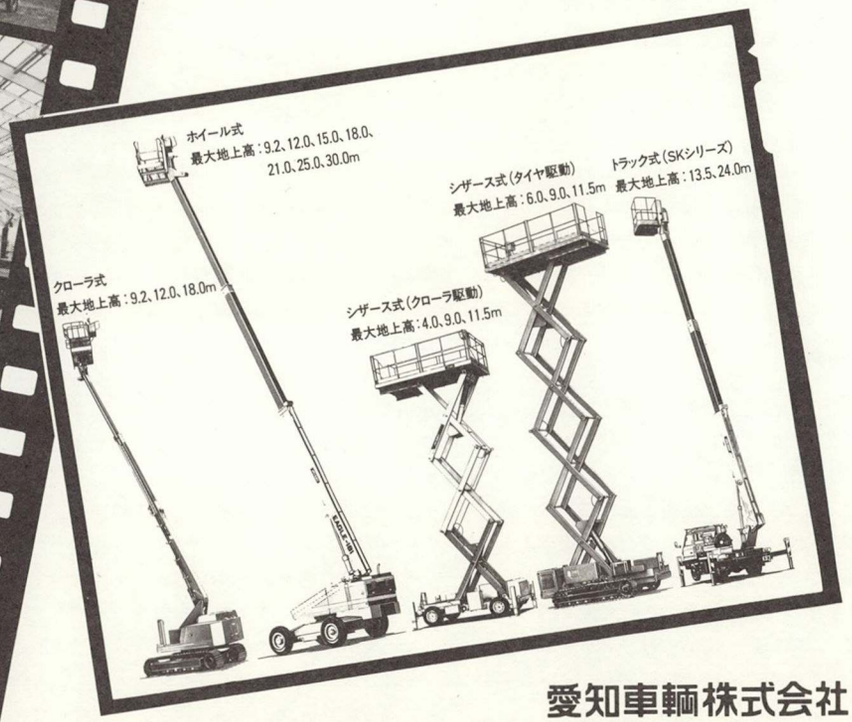


建設現場の足場を不要にした、
アイチのスカイマスター・シリーズ。

私たちアイチは「無足場工法」と名付け、建設現場の足場作業を、スカイマスターによるバケット内作業に変えました。この無足場工法は、建設作業の安全と能率を両立させます。

スカイマスターはそれぞれの個性を生かし、各工程で威力を発揮。たとえば、鉄骨組立、本締、ダメ塗装、屋根工事には自走式。不整地ではクローラ式、整地された現場ではホイール式が大活躍。さらに、内・外壁、空調、電気設備、サッシ工事には、広い作業台のシザース式。クローラ駆動とタイヤ駆動の2タイプが作業に貢献。また、短期の工事には、機動力あるトラック式が即応。アイチは、現場の多様な条件とニーズに応え、スカイマスターを多彩にシリーズ化し、お届けしています。

アイチ スカイマスター シリーズ



愛知車輛株式会社

東京支店☎03(862)4121㈹・名古屋支店☎052(621)5112㈹・大阪支店☎06(968)7731㈹・営業本部☎0487(81)1111㈹・愛知車輛北海道販売㈱☎011(665)1301㈹・愛知車輛東北販売㈱
☎0222(36)0421㈹・愛知車輛北越販売㈱☎0764(34)2181㈹・愛知車輛中国販売㈱☎082(285)0201㈹・愛知車輛四国販売㈱☎0878(74)0808㈹・愛知車輛九州販売㈱☎092(935)5353㈹

施工材料の頁

136 無足場工法

駒形　康雄

建設現場に足場。よく見かける光景である。しかし、足場を使わず、高所作業車で作業している現場を見たことはないだろうか。足場を組まないので、現場はスッキリと整頓されている。これがアイチの提案する「無足場工法」の現場である。

この無足場工法には、数々のメリットがある。まず、足場の架設・撤去にかかっていた時間と費用が不要になる。もちろん、重い工具や資材を持って足場を登り降りする苦労もない。バスケット内作業だから安全である。作業位置にピタリと接近し、ていねいに効率よく作業が行える。

無足場工法は、セーフティでスピーディな建設工法である。

無足場工法は、鉄骨を地上で塗装し、組み立てることからスタートする。従来は、この工程前に土間整地が必要であったが、クローラ式スカイマスターの充実により、即組み立てが可能になった。つぎに、本締めであるが、従来工法と異なり、ネット張り前に済ませる。その後、駄目塗装、ネット張り、屋根工事、内外壁工事とスムーズに進行し、工程は完了する。また、建方以外の空調・電気工事が並行して行えるのも無足場工法の特長である。

（こまがた　やすお　愛知車輌株式会社営業本部販売企画部）



❶鉄骨置場
鉄骨建方時は、建屋内にできるだけ部材を置かないようにする。また、鉄骨は地上で塗装するため、塗装作業用スペースを確保する。



柱建込み



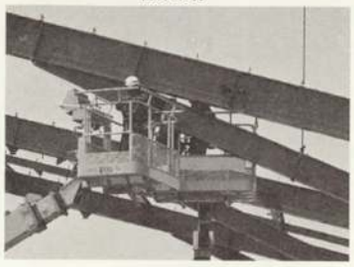
桁梁取付



桁梁頬杖取付



合掌取付



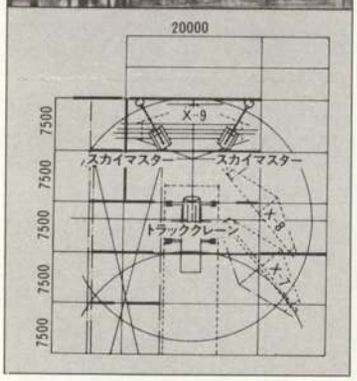
合掌頬杖取付



ブレース取付

❸鉄骨建方　まず、両サイドの柱の建て込みと、桁行トラス架けから実施。この時点では、建方部分に鉄骨部材が残っているため、作業範囲の広い高所作業車を使用する。





❷機械の配置
トラッククレーンや高所作業車の停止位置は、鉄骨配置図に従い、床面にマークしておく。ムダのない、効率よい作業が可能となる。

❹本締め
従来工法では、吊り足場、ネットの組み立て後に本締めとなるが、無足場工法は、建方と並行して、本締めが行える。高所作業車のバスケット内から、平地と同じ感覚で、作業できる。





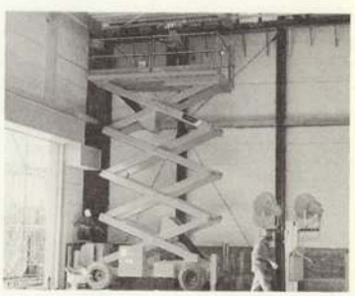
❺駄目塗装
建方前に、鉄骨の塗装はほとんど地上で終わっているが、駄目部分は、高所作業車で行う。従来工法のような、鉄骨の汚れや吊り足場部分の補修が不要である。



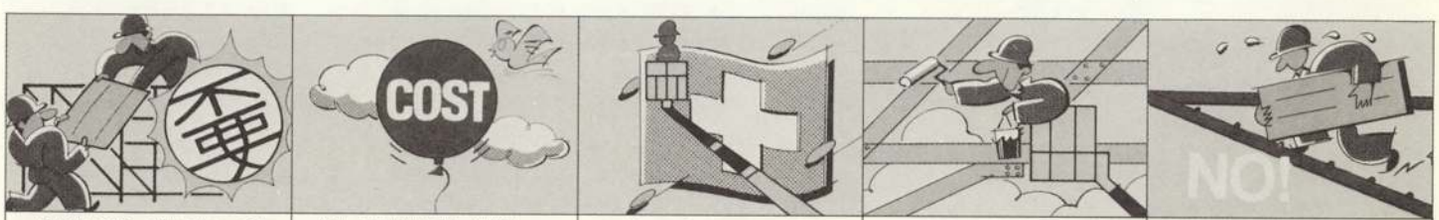
❻ネット張り
ネットの組み立ては、鉄骨につけてある親ロープにつなぐだけ。従来のような、吊り足場は不要である。



❼屋根工事
屋根折板が作業床になるため、他の工程より高所作業車の使用台数は減少する。



❽内壁・外壁
仮設足場なしの施工により、壁工事が終われば、即コンクリート打ちが可能となる。また、建物内の空調・電気工事も行える。



足場の組み立て、撤去にかかっていた時間が、ゼロになる。スカイマスターなら、悠然とした作業場で、すぐに作業を始めることができる。	当然、足場組みに要した費用も、いらなくなり、足場の管理費も不要となる。	スカイマスターのバスケットに乗っての作業だから、安全。墜落などの心配がない。	バスケットに工具・資材を積めるので、作業員は身軽。作業位置にピタリと接近し、ラクな姿勢で、ていねいな作業ができる。	重い工具・資材を持って、足場を登り降りする苦労がないので、疲労が大幅に軽減。ベテン社員も、ラクに作業ができる。

設備の頁

137
氷蓄熱空調システム

市橋　隆

はじめに

ここ数年、電力消費の昼と夜の較差増大が目立ち、発電所の設備稼動率が悪化の傾向にある。さらには電力のベース運転の役割を担う原子力発電の比率が年々上昇し、今後も大きな伸びが予想され、夜間電力をいかに使うかが電力各社の課題となっている。

この対応策の一つとして昭和59年４月１日から「業務用蓄熱調整契約」を結ぶことにより、夜10時から朝８時までの10時間の夜間電力料金が昼間料金の約½に引き下げられ、日中の電力を夜間に移行させる蓄熱式空調システムが新たな展開を見せることになった。

氷蓄熱空調システム

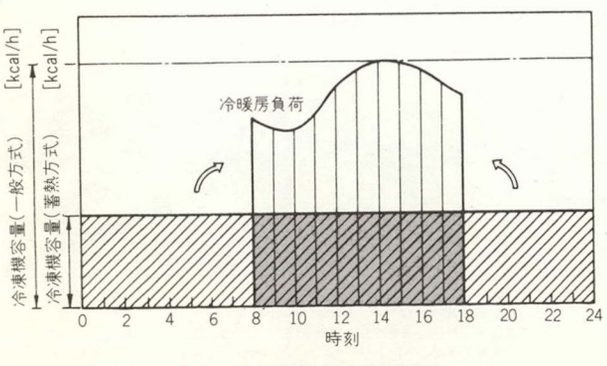
蓄熱式空調システムは、電力料金の安い夜間に冷凍機を運転して蓄熱させ、これを昼間の空調時間帯に負荷に応じて冷房や暖房に活用するシステムで、その長所として、

①熱源容量の低減が可能
②熱源を最高効率ポイントで運転可能
③空調負荷対応が容易

などが挙げられる。反面、水を蓄熱材として使う場合は蓄熱槽のスペースが大きくなり、設置スペースが限られる中小ビルなどでは採用が難しいなどの短所も指摘されている。ここで、氷の蓄熱量（水１kgを氷にすると80kcalの潜熱が蓄えられる）に注目したのが、氷蓄熱空調システムである。蓄熱材に氷を使用することにより、蓄熱スペースの低減を計ることができ、その結果、屋上にユニットとして設置することも可能となるほか、水蓄熱方式の欠点である搬送動力を低減させることもできる。

しかし、氷蓄熱システムがすべての面で有利というわけではなく、ＣＯＰ（冷凍機成績係数）の低下が短所として挙げられる。

従来のクローズ方式、水蓄熱方式とも、冷水温度は７℃～12℃程度で使用しているのに対し、氷蓄熱では－５℃～－８℃の冷媒（ブライン）を用いて製氷を行うためである。蓄熱方式は、**図－１**でみるように昼間も冷凍機を運転することにより冷凍機容量を½以下にして熱源コストおよび基本料金を安くする方法が多く、昼間の時間帯に冷凍機の運転をいかに効率よく行うかが一つのポイントである。



図－１　蓄熱空調方式の運転

冷凍機の方式

氷蓄熱空調システムの熱源として、低温用冷凍機を用いる。冷凍機は直膨式のものとブライン式のものとに大別される。直膨式は、製氷コイルに直接冷媒ガスを送り、製氷を行う方式である。この方式はＣＯＰは良いが、冷媒ガスの配管に高度な技術が必要になり、規模が大きくなると装置そのものが圧力容器の対象となる欠点をもつ。逆にブライン式は、製氷コイルに低温にも凍結しないブラインを送り製氷を行う方法で、非常に扱いやすい長所をもつが、冷媒方式に比べ熱交換回数が１回多く、蒸発温度を低くしなければならない欠点をもつ。このようにどちらの方式も長所・短所があり、一概にどちらが有利とは言えない。この両方の特性を生かした方法で、冷凍機内部に蒸発器を二つもったダブルクーラータイプのものがある。

すなわち、夜間は片方の蒸発器でブラインを作り、これを製氷部に循環し、昼間はもう一方の蒸発器に冷水の戻り（12℃程度）を通して運転する方法である。これにより昼間は従来のクローズ方式と同程度のＣＯＰが得られる。

冷凍機は水冷式、空冷式があり、また、冷房専用、ヒートポンプの冷暖房用がある。

製氷方式

氷を作り蓄える点では同じであるが、この氷をどのような形で製氷し、負荷に応じて解氷するかという点で考え方は数多くある。さらには冷房専用とするか、冷暖房兼用とするかによっても考え方は異なる。冷戻時の氷の製氷割合（ＩＰＦ）を多くした場合は、冷房・暖房時の蓄熱量に大きな差が生じ、暖房熱量が不足する場合もある。

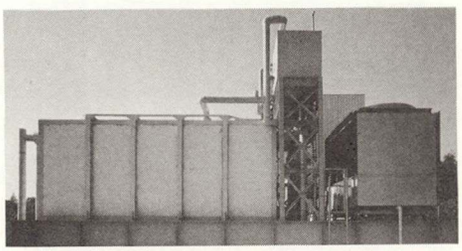
代表的方法として、水槽内に製氷用配管を沈め、このコイルの外側に氷を成長させる方法、ブライン槽の中に連通させた製氷用配管の中央に水の部分を残して製氷し、解氷時はこの中に冷水を通過させ熱交換させる方法、ヒートパイプの表面に氷を作る方法、別場所で氷を作り水槽内に落下させて蓄氷する方法等がある。

ユニット式氷蓄熱空調システム

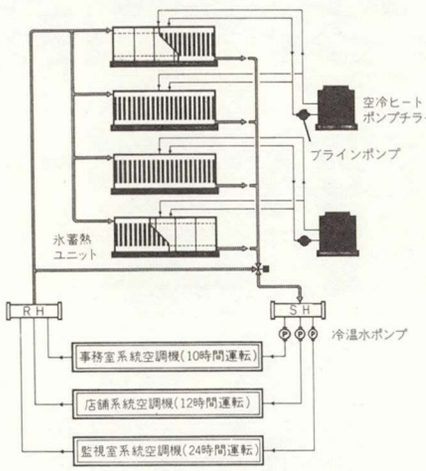
写真－１に、屋上設置を原則としたユニット式氷蓄熱空調システムの例を示す。これはユニットとしてまとめ、屋上にコンパクトに設置したものであり、建物規模に応じてユニットを増やす方式である(**図－２**)。従来の水蓄熱システムが建物ごとに設計を行い現場で施工していたのに対し、工場製作で作るため、製品の安定性、建物への設計の容易性が挙げられる。

製氷方式は**図－３**のごとく配管内部に製氷し必ず冷水と接触して解氷させる方式であり、蓄熱能力は１ユニット当たり冷房時520,000kcal、暖房時200,000kcalとなっている。

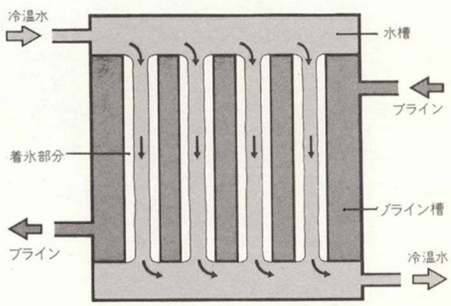
冷凍機は空冷ヒートポンプチラーを用い、ダブルクーラーでＣＯＰの向上を計っている。



写真－１　ユニット式氷蓄熱システム



図－２　氷蓄熱空調システム系統図



図－３　ユニット式氷蓄熱槽断面図

おわりに

以上、氷蓄熱空調システムについて概要を述べた。今後の電力事情を考えると、さらに蓄熱式空調システムが有利になることが予想され、なかでも省スペースの氷蓄熱システムの普及が進むものと確信している。

（いちはし　たかし　大成建設株式会社技術開発部）

日本建築協会

月間の動き

昭和61年１月分

理　事　会

常任理事会
29日　４時～５時　於 本会会議室
出席者　佐野会長ほか15名
議事　(1)表彰候補者に関する件
(2)借入金の一部償還の件
(3)事務局転員１名定年退職の件
(4)建築士及び建築士事務所実態調査報告書配布の件
(5)昭和60年度収支決算見込報告の件
(6)創立69周年記念日に関する件
(7)入退会者承認の件
(8)報告事項

評　議　員　会

技術部門評議員懇談会
22日　４時～５時　於 本会会議室
出席者　多井評議員ほか２名
議事　技術部門選出評議員の推せんについて

企　画　委　員　会

24日　３時半～５時　於 本会会議室
出席者　佐野会長、三品委員長ほか４名
議事　(1)創立70周年記念式典、祝賀会等の開催
(2)表彰制度の創設
(3)住まいの絵本の編集、出版
(4)「技術選書」「プロのノウハウ」「関西の建築家」の刊行
(5)その他

事　業　委　員　会

第６回見学会小委員会
９日　６時～７時45分　於 本会会議室
出席者　正楽井副委員長ほか７名
議事　(1)前回の事業委員会の報告
(2)60年11月及び12月の見学会実施報告
(3)２月以降の見学会企画
(4)その他
第７回広報小委員会
13日　６時～８時45分　於 本会会議室
出席者　原見副委員長ほか６名
議事　(1)前回の事業委員会の報告
(2)本年度の事業企画
(3)その他
第６回若い会員の集い小委員会
14日　６時半～９時　於 本会会議室
出席者　山形、石川両副委員長ほか６名
議事　(1)前回の事業委員会の報告
(2)本年度第２回～第４回企画の実施報告
(3)第５回以降の企画
(4)その他
第６回委員会
16日　０時半～１時50分　於 本会会議室
出席者　三品委員長ほか４名
議事　(1)各小委員会事業報告及び事業企画
(2)次年度事業委員の編成
(3)その他
広報研修分科会
28日　３時～６時　於 松下電器産業技術館
出席者　原見副委員長ほか４名
議事　松下ビデオルームの見学ならびに「ビデオ」に関する企画

建　材　委　員　会

16日　３時半～５時半　於 本会会議室
出席者　牧田委員長ほか15名
材料説明：「アクアシール」
担当　尾松一夫委員
議事　(1)今後の検討建材
(2)今後の「新建材紹介コーナー」掲載予定
(3)その他

編　集　委　員　会

第10回委員会
16日　４時～５時半　於 本会会議室
出席者　井上委員長ほか４名
議事　(1)２月号「屋根―そのデザインと素材」特集報告
(2)３月号「現在のデザインの動向―ポストモダニズム10年」特集「防水」特集企画報告
(3)４月号「インテリジェントビルの建築・設備計画」特集経過報告〈構造特集〉企画
(4)５月号「建築防災と法」(仮称) 特集の企画、「官庁営繕」特集の特別企画
(5)小委員会、分科会の提案
(6)収支状況報告
第４回「設計者のプロフィール」幹事会
20日　４時半～５時半　於 本会会議室
出席者　加藤幹事ほか５名
議事　本会創立70周年記念
「設計者のプロフィール」別冊発刊企画
５月号(予定)「官庁営繕と公共建築」特集第３回編集幹事会
20日　６時～９時　於 本会会議室
出席者　加藤幹事ほか９名
議事　「官庁営繕と公共建築」特集編集企画
第10回広告企画小委員会
28日　４時～５時半　於 本会会議室
出席者　渡辺副委員長ほか８名
議事　(1)２月号「屋根―そのデザインと素材」特集広告途中経過報告
(2)３月号「デザインの動向―ポストモダニズム10年」特集「これからの防水工法」特集広告途中経過報告
(3)４月号「インテリジェントビルの建築・設備計画」特集広告企画
(4)５月号「建築防災と法」(仮称)特集「官庁営繕と公共建築」特集広告企画
(5)特別企画
(6)「設計者のプロフィール」臨時増刊
(7)収支状況報告
５月号「官庁営繕と公共建築」特集第４回幹事会
29日　６時～10時　於 本会会議室
出席者　吉羽特別幹事ほか５名
議事　特集内容の決定

教　育　委　員　会

24日　５時半～７時半　於 本会会議室
出席者　片倉、佐々木正副委員長ほか７名
議事　(1)講習会・工高生教育両小委員会の事業報告並びに事業計画（次年度）
(2)次年度の委員編成
(3)その他

出　版　委　員　会

28日　３時～４時　於 本会会議室
出席者　須賀委員長ほか５名
議事　(1)選書とプロのノウハウの経過報告
(2)今後のテーマと執筆者選定
(3)創立70周年記念事業の出版について
(4)その他

建築９団体合同新年交礼会

４日　２時～３時　於 大阪コクサイホテル
出席者　570名

建築９団体大阪21世紀計画特別懇談会

24日　３時～５時　於 大阪府建築健保会館
出席者　平田氏ほか各委員、事務局

建　築　ク　ラ　ブ

新年宴会
９日　６時～７時　於 大阪グランドホテル
出席者　70名

１月の入会者（敬称略）

〔団体会員３社〕
㈱大久保　三協樹脂建材㈱　㈱ミヤガワ
〔個人会員９名〕

永田庸視（石本建築㈱）	吉田康則（住宅・都市公団）	入塩安高（高松組）
豊田充広（高松組）	中谷紀之（高松組）	中西由一（高松組）
藤本厚（高松組）	河野博之（西日本写房）	山本研一

日本建築協会会議室のご利用案内

貸会議室として使用できます。

大会議室ならびに小会議室は、本会の未使用時には、貸会議室としてご使用できますので、本会事務局まで早目にお申込下さい。(電話06-348-0635)
会議室の使用料金は下記のとおりです。

室別 / 時間帯	大会議室60㎡（30名）		小会議室30㎡（16名）	
	会　員	その他	会　員	その他
9:30－12:00	6,000円	8,000円	3,000円	4,000円
13:00－12:00	8,000	10,000	4,000	5,000
17:15－20:00	10,000	12,000	6,000	8,000
9:30－17:00	12,000	14,000	6,000	8,000
13:00－20:00	15,000	17,000	9,000	11,000

編集後記メモ

■本号は、「ポストモダニズム10年」の特集と「防水工法」の特集の二本建てとなりました。

ポスト・モダニズムの論議は本文で詳しく記されています。日本の立場、西洋の立場、建築界以外の人も含む各分野の方のアンケート意見、10年間の文献リスト等、限られた紙面（それでも予定頁より超過）で、一応のまとまりをみせることができたように思います。

■ただ、いいたいことは、1920年代のあの燃えるようなロマンをもつモダニズムの輸入現象から学びとる要素があること、60年代の脱工業化、情報化現象への突入からの検討が必要だということです。20年代のロマンティシズムが、次第に機械主義におされていくにつれ、さらに、60年代以降の技術革新がそれを追いうちし、その結果としての「都市」の画一化と荒廃を促したなかで、多元化、多様化、多感化、個性化、破調化、歴史化というカテゴリが問い直されてきました。モダニズムの頭に、ポストとつけようが、スーパーといおうが、あるいはレイトと名付けようが、それは、「建築」だけの問題でなくて、むしろ、建築以外の各分野を含む「都市」の末期的変容の問題だと思うのです。こんにち、大衆でもなく、さりとて群衆でもない、分衆あるいは知衆といったギャザリングの状況をもつ価値観が、末期的「都市」化変容にあふれています。この末期的「都市」化現象の意味を除いては、ポストはありえないと思うのですが、いかがでしょうか。

■本誌でも、約10年ぐらい前に、ポスト・モダンと関連の深いデザインの特集として、つぎのものが組まれています。

参考までに見ていただければ幸いです。

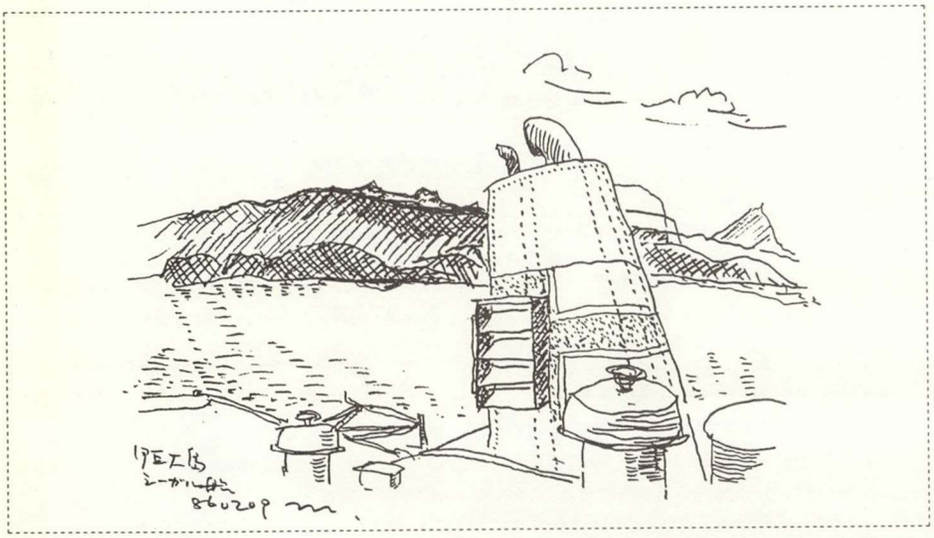
- 1976年1月号「証言'76—デザインの動向」特集
- 1977年1月号「デザインの動向—部分と全体」特集
- 1978年1月号

「デザインの動向—新旧のコントラスト」特集

■ところで、最近、三つの「み」がいわれだしています。すなわち「みず」「みどり」「みち」の三つの三位一体論です。この三つの「み」が、建築も含めて、末期的「都市」の変容の再生に組み入れられることができればよいのですが……。その組み入れの主体はどこにあるのでしょうか。それが問題です。行政衆か、分衆か、知衆か、住衆か、財衆か。いずれにせよ、とにかく三つの「み」の自然性、田園性、地域性、修景性、安らぎ性などが主体性をとりもどして、味のあるものになってほしいものです。そこには、ポスト・モダンというより、20年代以降の新しいポスト・ロマンの獲得といった方がよりふさわしいように思えるものがあるのですが……。

■本年度(60年度)の12号分の頁数は、59年度よりも、170頁以上増えました。ギャラリー頁などの新設も含めて、カラー頁やカラー件数も大幅に増加し、またシリーズもののタイトルも改善して一定の誌面刷新に努力してきました。それだけに経費も増加しています。頭のいたいところです。

表紙もカラーになりました。本年は12月号まで、吉田隆一氏のカラースケッチをのせる予定です。聞くところによりますと、希望者があれば、表紙のスケッチのオリジナルなものを吉田さんよりおわけする用意があるとのことです。　（松井記）



企画：日本建築協会



プロのノウハウ

最新刊

……建築に携わる人へのヒント

知りたくても知るすべがなかったこと，書きたくても公には書けなかったさまざまなトラブルの事例・原因・対策から，その解説・ヒントまで——

最新の設備や技術ゆえに起こるトラブルから，いつも失敗をしながら明確な解決策が出されなかったトラブルまで，現場サイドの技術や知識に裏付けられた，実際に起こった事例とその対策の数々．トップレベルの技術者たちの知識と勇気を結集してまとめた．空調設備や衛生設備で失敗しないための方法や技術をすべて盛り込んだ，画期的なトラブル解消のトラの巻である．

空調設備のトラブル50

四六・224頁・定価1800円　建築設備トラブル研究会著

●内容概略
1　熱特性にまつわるトラブル
2　梁と天井裏スペースにまつわるトラブル
3　シャフトまわりのトラブル
4　ガラリまわりのトラブル
5　屋上・屋外設置機器まわりのトラブル
6　空調機械室まわりのトラブル
7　居室内のトラブル



衛生設備のトラブル50

四六・224頁・定価1800円　建築設備トラブル研究会著

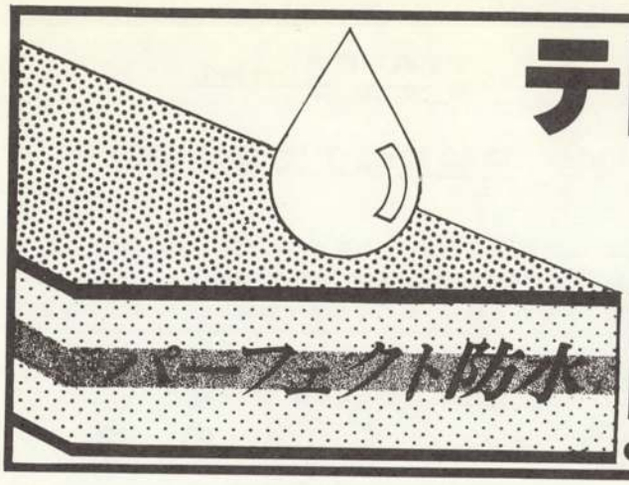


●内容概略
1　地中・床にまつわるトラブル
2　シャフト・壁・便所にまつわるトラブル
3　浴室・外壁にまつわるトラブル
4　地下・屋上にまつわるトラブル
5　腐食にまつわるトラブル
6　給水・給湯にまつわるトラブル
7　排水にまつわるトラブル

〈目録進呈〉

学芸出版社

〒600 京都市下京区木津屋橋通西洞院東入
TEL 075(343)0811



テトカッパー防水層

防水専業の研究・経験から生れたすくない資源のパーフェクトな防水層です。
この防水層は（一層防水）施工するだけで、防水は完璧です。
温度変化に伸びがなく、柔軟性に富み、耐酸、耐薬品性に優れ、腐蝕しません。

カッパー防水帯　コーバータイト　新工法
オクロン防水帯　プレノテクト吹付工法

●お申込次第カタログ進呈

奥山化工業株式會社

本　社	東京都中央区銀座8—4—9	電話03（571）2703
大阪事務所	大阪市淀川区東三国6—1—41	電話06（391）1081-2
埼玉営業所	埼玉県桶川市東1—3—30	電話0487(74)2845-6
厚木出張所	神奈川県厚木市金田259	電話0462（21）1761
名古屋出張所	名古屋市南区若草町33	電話052（811）3660
九州出張所	佐賀県佐賀郡諸富町大字諸富津450	電話0952（47）2945

■防火・防煙シャッター　■軽量シャッター
■ステンレスシャッター　■クリスタルシャッター
■アルミニュームシャッター　その他特殊シャッターの製造

アフターサービスの24時間態勢完備

鈴木シャッター工業株式会社

大阪市北区茶屋町5番2号	電話大阪（06市外局番）	371代表 4151～6
北陸営業所　金沢市長田町119番地	電話金沢（0762市外局番）	65－5135～6
神戸営業所　神戸市長田区大橋8-4-7	電話神戸（078市外局番）	611－7971 631－2021

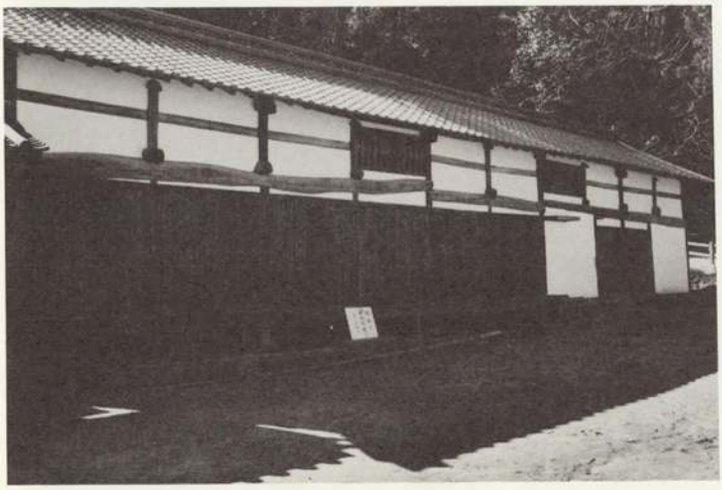
防火・防煙から避難装置まで
建築防災の総合メーカー

豊かな経験
最新の技術

東洋シャッター

東洋シャッター株式会社

本社：大阪市東区両替町1—12 日生ビル　☎（943）6571代表
東京・横浜・盛岡・仙台・水戸・静岡・岡崎・名古屋・富山・大津・京都・神戸・広島・高松・福岡他全国主要都市





空気調和・給排水・衛生・防災設備　設計・施工

株式会社 朝日工業社

本　社　東京都港区浜松町1-25-7　電話 (434)6171(大代)
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話 (302)2271(代)
支　店　北海道・東北・名古屋・中国・九州
営業所　釧路・函館・盛岡・横浜・静岡・京都・神戸

空気調和設備
衛生設備 設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町3番5号　電話 (352)1131 (代)
本　社　東京都中央区日本橋蠣殻町1-35-8　電話 (667)3431 (大代)
支　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

空調・衛生
防災・汚水処理 設計施工

株式会社 大阪城口研究所

取締役社長　城口庸平

大阪市北区角田町2番15号 電話 大阪372局7151(代)
京都市東山区大和大路正面上ル 電話 京都561局4944(代)
神戸市中央区下山手通6-2-8 電話 神戸341局5892

空気調和・衛生設備 設計施工

株式会社 三晃空調

本　社　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話 06—363—1371
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話 03—344—1911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話 06—363—1371
支　店　仙台市大町2丁目2番10号　電話0222—61—3002
名古屋市中村区名駅南2丁目14番19号　電話052—581—8571
広島市中区紙屋町1丁目2番22号　電話082—247—4535
福岡市中央区大名2丁目4番22号　電話092—761—3795
出張所　青森・秋田・宇都宮・千葉・川崎・横浜・富山・福井・京都・神戸・松江・高松・下関・熊本・鹿児島・沖縄

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

大阪電気暖房株式会社

本店・大阪本社　大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　〒550 電話(06)441-8231(大代)
東京本社　東京都中央区銀座2丁目2番17号　〒104 電話(03)535-5251(大代)
支　社　名古屋・福岡
支　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・京都・神戸・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・松江・徳島・長崎・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン・スリランカ

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　社　大阪市南区瓦屋町2丁目11番16号 (オートセンタービル1.2階)
郵便番号542　電話 大阪(06) 768—5031代表
メンテナンス部　電話 大阪(06)768—1651代表
東京支店　東京都千代田区九段南2丁目2番5号(九段ビル2～4階)
郵便番号102　電話 東京(03) 262—3241代表

■給排水衛生　■冷暖房
■空気調和設備　■その他管工事一切の設計・施工

斎久工業株式会社

本　社　東京都千代田区大手町2-6-2 (日本ビル)
電話 03-(270)-7411(代)
大阪支社　大阪市北区中之島4-2-38　電話 06-(443)5041(代)
支　店　札幌・岡山
営業所　仙台・千葉・横浜・名古屋・金沢・四国・広島・福岡
出張所　福井・倉敷・松山・宇都宮・静岡・苫小牧

新日本空調株式会社

大阪支店　大阪市北区堂島浜1丁目2番6号 (新大ビル)
電話 (06) 344—6031 (代)
本　社　東京都中央区日本橋本石町4-2(三井第二別館)
電話 (03) 279—5671 (大代)
名古屋・九州・広島・札幌・東海村・北陸・大分

空気調和設備
給排水・衛生水道
電気設備
厨房

環境衛生施設
荷役運搬機械
化学鉱山機械

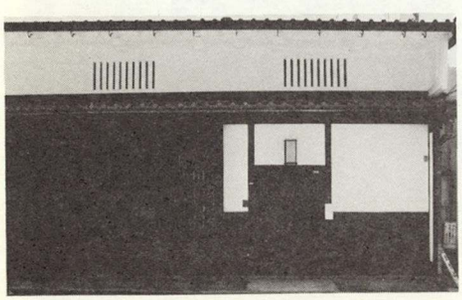
三機工業株式会社

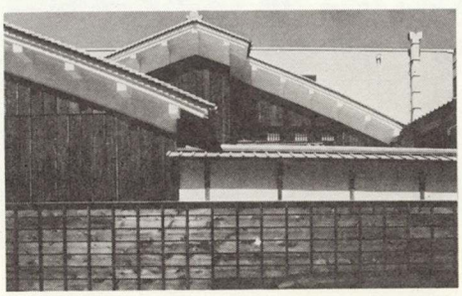
取締役社長　玉置純治郎
大阪支店長　杉浦敏郎

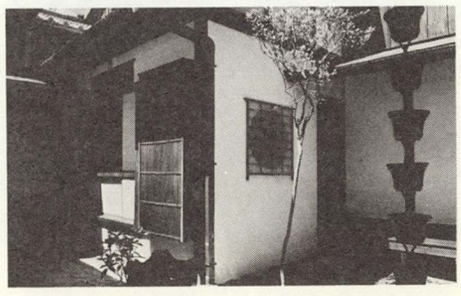
大阪市東区北浜2丁目22番地　電話 大阪(202) 代表3071
本　店　東京・日比谷・三信ビル
支　店　名古屋・九州・北海道・中国・東北・北陸・四国・シンガポール
営業所　横浜・静岡・豊田・岡山・金沢・新潟・香港

cleanair
一年中 秋のすがすがしさ!

創業1901
須賀工業株式会社
大阪市西区土佐堀1丁目2番30号 TEL.06-441-5171(大代表) 〒550







電気・計装工事 設計施工

栗原工業株式会社

取締役社長 栗 原 信 英

大阪市北区角田町1-1 東阪急ビル TEL06-313-1101
支 店 東 京・名 古 屋・舞 鶴・京 都・天 理
大 阪 南・神 戸・広 島・四 国・九 州

電気設備 設計施工

朝陽電気株式会社

代表取締役 山 本 貴 士

本 社 大阪市北区中之島3－2－4 朝日ビル TEL 大阪06 (385)1361(代)
大阪営業所 TEL 大阪06(385)1361(代) 京都営業所 TEL 京都075(311)1185(代)
東京営業所 TEL 東京03(574) 0 6 6 5 福岡出張所 TEL 福岡092(771) 6 1 6 8

電気工事設計施工

株式会社 三 興 社

代表取締役 土 井 敏 裕

本 社 大阪市北区西天満2丁目6－8(堂ビル7階)
電 話 (361) 3 6 7 1 (代)
支 店 東京都中央区日本橋箱崎町20番5号
電 話 (671) 1 4 7 8 (代)
出張所 川 崎・相 模 原・堺・滋 賀

電気設備工事設計施工

東光電気工事株式会社
大 阪 支 社

大阪支社長 横 田 幸 一

大阪市東区高麗橋五丁目二八番地 電話大阪 (202)0325～9番
本 社 東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支 社 札 幌・仙 台・丸 ノ 内・名 古 屋・福 岡
営業所・出張所 全国主要都市2ヶ所

総合設備工事《設計・施工》
建築・電気・通信・送電線・プラント・計装・空調・土木

住友電設株式会社

取締役会長 小 林 四 郎
取締役社長 代 谷 正 元

本社 大阪市福島区福島7—22—8 Tel 06-452-1151(大代)
東京 東京都港区芝2—2—17 Tel 03-454-7311(大代)
支社 福岡・広島・名古屋・神戸・京都

限りなきクリーンに挑戦する!!
電気設備・クリーンルーム・冷暖房設備
給排水衛生設備・計装制御設備・立体自動倉庫
エネルギー集中監視システム・回転式自転車置場
設 計 施 工

三宝電機株式会社

取締役社長 嘉 納 伝 三

本 社 〒530 大阪市北区西天満2－6－8(堂ビル) TEL 06(364)1471
TELEX 523—3287
東京支店 〒105 東京都港区新橋2-16(ニュー新橋ビル) TEL 03(504)0231
TELEX 222—6724
名古屋支店 〒462 名古屋市北区金城三丁目12－14 TEL 052(991)5131
神戸支店 〒657 神戸市灘区岩屋中町1-2-9(エビスビル) TEL 078(881)5571

奉仕感謝の店
タイル工事施工

株式会社 川岸窯業商店

本 社 〒550 大阪市西区西本町1－13－33
電話 大阪 06(532)代0461 〒550
天理営業所 天理市丹波市新町50

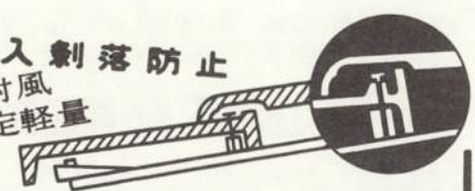
電気・計装・空調工事 設計施工

ヤマト電気エンジニアリング株式会社

取締役社長 山 本 永 造

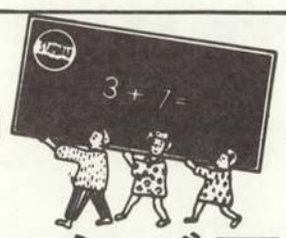
本 社 大阪市北区西天満5丁目1番3号
TEL 06—364—3056 (代)
支 店 東京・神戸・広島・岡山
事業所 名古屋・岡山・札幌・苫小牧・浜松・滋賀
京都・高砂・三原・徳山・松山・新居浜・福岡・沖縄

雨水浸入剝落防止
耐震耐風
安定軽量



ナニワ緩勾配瓦
3寸緩勾最適軽量水止付(空葺)瓦

ナニワ瓦株式会社
大阪市浪速区難波中一—三—一八
TEL〇六—六四一—五〇六五



Standard Board&Slate

フタバ工業

〒547 大阪市平野区加美北3－4－5 TEL 大阪06(792)5858代

模型製作
石膏模型・アクリル模型製作

宮岡建築模型製作所
〒103 東京都中央区日本橋浜町3-14-11
電話 (03)669-7565 FAX (03)669-7565

商品は空気です。

熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03—344—1851(大代)　大阪本社 ☎06—448—3603(代)
大阪支社 ☎06—448—5851(代)　名古屋支店 ☎052—211—1535(代)　中国支店 ☎082—247—5541
九州支店 ☎092—431—2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

給・排水・衛生・消火・暖冷房設備

株式会社 西原衛生工業所大阪店

大阪市大淀区中津6丁目8番4号　電話大阪(458)3628番
支店・営業所　福岡・京都・天理・川西

空気調和　搬送機設備
給排水衛生　設計施工

第一工業株式会社
大阪支店

大阪支店　〒530 大阪市北区西天満3丁目6番14号
電話　06—364—6661(代表)
本　社　〒100 東京都千代田区丸の内3丁目3番1号
電話　03—211—8511(代表)

空調・衛生・防災設備　設計並施工

日本管工業株式会社

本社及京都支店　京都市南区西九条豊田町20番地の1
電話(681) 5101～5・夜間専用(691) 1045
大阪支店　大阪市北区天満1-5-20　電話(06)352—3501(代)
三重支店　津市栄町2—111　電話(0592)26—3610(代)
四日市営業所　四日市市西末広町　電話(0593)53—7431(代)
滋賀営業所　大津市中央2丁目4-28　電話(0775)22—9738(代)

暖・冷房・空気温湿度調整装置
設計施工

高砂熱学

大阪支店　大阪市北区芝田1丁目4-8(北阪急ビル9階)
電話　大阪(372)2511　(代表)
本　社　東京都千代田区神田駿河台4丁目2番地

Carrier
冷暖房はキャリア
CARRIER

東洋キヤリア工業(株)デストビューター関西地区
日本冷熱工産株式会社
本社及大阪営業所　吹田市豊津町40番38号
電話大阪(384)1201～7

MODAIR
空気調和設備
換気・除塵設備　設計施工

東洋熱工業株式会社大阪支店

大阪市西区靭本町3—1—27　TEL(443) 8071
本社　東京都中央区京橋2丁目9　TEL(562) 1351
支店　名古屋・福岡

活字のない印刷

日本写植印刷株式会社

代表取締役　神田都義

本社　〒545 大阪市阿倍野区阪南町7-5-30　☎06(606)1111代
日本写植センター　〒892 鹿児島市名山町4-7 三宝ビル　☎0992(26)4371
津山写植センター　〒708 津山市大手町8番5号 模範店会館　☎08682(4)1771
沖縄写植センター　〒900 南風原村兼城 沖縄印刷団地　☎0988(55)6100

ガス設備の設計・施工のご相談は
大阪ガス指定工事会社・大阪ガス住設機器特約店

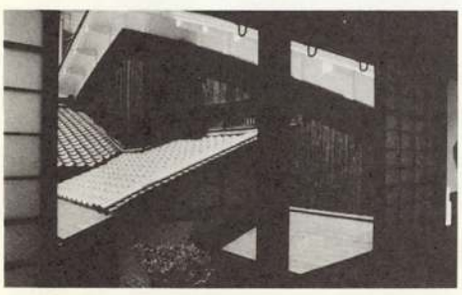
大晃設備株式会社

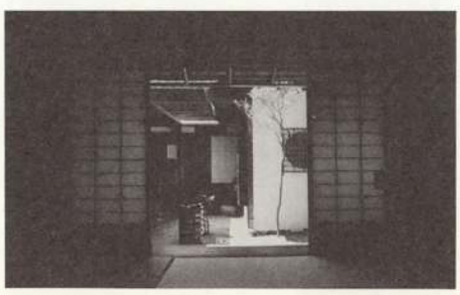
本社：設備部
大阪営業所　大阪市北区西天満5-11-12　電 06—313—1846
枚方営業所　枚方市甲斐田東町9—3　電0720—49—2128

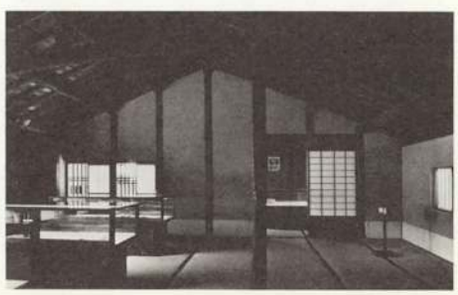
空気調和設備・給排水衛生設備・上下水道施設
環境衛生施設・公害防止施設／設計・施工・監理

山田工業株式会社

本社　大阪市西区京町堀1—6—8　電話 06(443)8161(大代表)
(環境装置事業部専用)　電話 06(447)0831　(代表)
分析センター　大阪市淀川区三津屋南1-1-35　電話 06(308)1491
支店　東京・名古屋・福岡
営業所　京都・神戸・姫路・広島・高松・松山







特殊壁装材製造販売　和室に最適
●聚楽壁紙●ホクシノン(無機質壁紙)
(株)ホクシンクロス
〒583 大阪府羽曳野市島泉８－173－1
TEL(0729)39－3610
工場　〒580　大阪府松原市三宅中8丁目1番9号
第一　〒639-11奈良県大和郡山市小泉町2744
第二　〒597　大阪府貝塚市王子５０１

岡田ペーパー株式会社
大阪市西区北堀江２丁目５番20号
ＴＥＬ 06－531－4601(代)
06－541－2305(代)
フロアーサンディングシステム関連商品
研磨材料 & 研磨機器
布紙ペーパー & ジスクペーパー

営業種目
●防　水　工　事　塗布防水・シート防水・モルタル防水
●樹脂注入接着工法　各種樹脂注入接着補修工事
●亀裂補修工事　各種樹脂注入・充填・コーキング
●シーリング工事　シリコン・チオコール・ウレタン・アクリル
●吹　付　工　事　アクリル・リシン・弾性タイル・その他
◇建設業許可　大阪府知事許可（般－53）第51225号
◇日本シーリング工事業協会々員
大阪市北区末広町３－２１
星和地所扇町ビル201Ｓ
TEL 06(315)0701
(株)特殊技研

建設業界をアシストする
ポゾリス
■コンクリート用混和剤　■無収縮クラウト材
■鉄筋コンクリート用防せい剤　■工業用特殊床材
製造元 日曹マスタービルダーズ株式会社
販売元 ポゾリス物産株式会社
本　社／東京都港区六本木3－16－26　☎ 03-582-8811
大阪営業所／大阪市東区北浜３－７　☎ 06-202-3294

デンカCSA　デンカセメント
セキサンバイル(S M.AC.PC.RC)
カネライトフォーム.ALC.鋼材
建築材料一式
浜宗産業株式会社
代表取締役 濱岡　浩
本　社　〒629-31 京都府竹野郡網野町字網野
ＴＥＬ　(07727)2－２２２０(代)
舞鶴営業所　〒624　舞鶴市福来１６０-１
ＴＥＬ　(0773) 76－0133(代)

省エネルギー時代の断熱用シート防水材
日立バイナリーシートP
日立バイナリーシートPは,日立防水シートに発泡ポリエチレンを独自の貼り合わせ技術で積層した,二重構造の断熱兼用二重防水シートです。
日立電線株式會社 本社 東京都千代田区丸の内2丁目1番2号(千代田ビル)

デンカCSAファミリー製品
●デンカCSA……コンクリートのひびわれ防止に
(膨張性混和材)
●デンカタスコン……鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
(グラウト用無収縮材)
●デンカキューテックス……コンクリート軀体の漏水補修に
(止水・補修用急硬セメント)
●デンカES……地盤補強用薬液注入
(土質安定用急硬材)
●デンカΣ1000……コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に
(製品用超高度混和材)
電気化学工業株式会社
近畿地区販売店
金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（０６）３３２－６８６１
TEL 東京（０３）２７２－８５０１
小浦産業株式会社
TEL 大阪（０６）４４３－６１８１
光洋物産株式会社
TEL 大阪（０６）２５２－６０００
株式会社トーゴー／本社
TEL 滋賀・守山（０７７５）８３－２３８１

特　許・耐酸被覆鋼板
耐久建築屋根・外壁材料

オリエンタルメタル

半世紀の実績が誇る技術とアフターケアー！

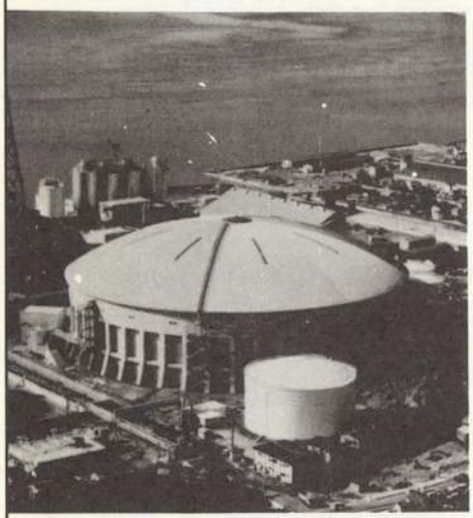
長尺物・色彩豊富・責任施工

品　種・オリエンタルカラースーパーメタル(CSPM)
・オリエンタルスチールライト(ＳＴＬ)
・オリエンタルメタル(ＯＰＭ)

波板規格　S小波・S大波・V波・ボックス波・Wジャンボ波・Vデッキ
SVジャンボ波・其の他

用　途　平板・波板・棟包・雨押類・谷樋・竪樋・軒樋
各種換気装置〔モニター・ベンチレーター・ムーバー・エキゾスター(強制)〕
ホーンタイト(防音壁)・其の他

※ カタログを御請求下さい



電発竹原火力石炭庫屋根に採用

オリエンタルメタル製造株式会社

大阪本社　〒660　尼崎市昭和南通り３－26 松本ビル　電話大阪(06)412－5131(代)
営業部　〒660　尼崎市昭和南通り３－26 松本ビル　電話大阪(06)412－5131(代)
支店及工場　大阪・九州・名古屋・広島・東条・刈谷
姫路(東洋建材工業．株)
東京本社及工場　〒335　蕨市塚越５丁目６番32号　電話 蕨(0484)42－3115(代)
支店及工場　東北

21世紀を見つめて大きく飛躍する総合技術誌

月刊 建築技術　No. 416　1986. 4月号

予定目次　定価 ¥1,000

免震工法はいま　和泉正哲

好評連載中!!
★土留工法のコスト・スタディ(3)　須賀好富他
★建築企画の実務対策(最終回)　田中　修一

ひろがりのある平面をもつ鉄骨現場溶接の実際例
日本設計事務所＆フジタ工業・三井建設共同企業体
或る恒久的骨組構造物の設計と施工　藤井考晏
メキシコ地震が物語る建築実務者への教訓　広沢雅也
簡易な砂地盤の液状化防止工法　中村純平
総プロ：建築物の耐久性向上技術　楡木　堯

ニュース・ハイライト　材料と工法　読者コーナー

建築構造設計実務に携わる人のために

建築構造問題快答集　建築技術編集部編

好評シリーズ第五巻は新耐震設計法に関する質疑応答を実に二百二十問もあつめた労作。回答はすべて構造家懇談会技術委員会の専門家で，難問もわかりやすく回答されている。

[1] A5・430頁
[2] A5・385頁
[3] A5・373頁
[4] A5・340頁
[5] A5・366頁
各巻共 定価3,800円・送料300円
定価3,700円・送料300円
定価3,800円 送料 300円

うっかり間違える構造力学　井上允彦 著　B6・93頁 ¥1,200(送料¥200)

山形骨組の応力計算　簡井助幸 著　A5・210頁¥3,200(送料¥300)

出版案内

建築設備読本 Ⅰ 給排水衛生設備篇　井上　博 著　B5・180頁　¥3,200(送料¥300)

配筋読本 納まりやすい配筋の指導書　井上　博・北小路宏 著　B5・162頁　¥3,200(送料¥300)

増補 最新場所打ぐい工法　北中克己 著

目と耳で確かめた水と土の記録!!　その開発の苦難の過程は月刊「建築技術」３月号の誌上で紹介されています。

A5・325頁　¥3,500(送料¥300)

〒160 東京都新宿区北新宿1-8-1 中島ビル 建築技術 振替口座 東京0-72417 ☎363-4211



「カベを飾る」という気分。
TOTOインテリアタイル。



Valentino Garavani

ヴァレンティノ・ガラヴァーニ

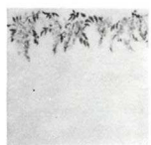
1932年、北イタリアのボゲーラ生まれ。パリ洋裁学院でデザインを学んだ後、ジャン・デッセのアトリエ主任を経て、ギ・ラロシュのアシスタントとなる。1959年、ローマに戻り、ヴァレンティノ・デザイン・ハウスを設立。1967年には白のコレクションを発表し、ニーマーカスの"オスカ賞"を受賞。以後、婦人物・紳士物のlineを網羅しつつ、アクセサリー、インテリアも手掛けている。



HARUO

ハルオ・宮内

1943年生まれ。ニューヨーク・プラット・インスティチュート・グラフィックセンター卒業。ニューヨーク・アートディレクターズクラブ会員。AIGA会員。1971年、プッシュピンスタジオ入社。日本人として初めて「TIME」「NEW YORK」などの表紙を手掛けた。現在、ニューヨーク、東京を中心にリビングアーティストとして活躍中。



David Hamilton

デビッド・ハミルトン

1933年4月15日、ロンドン生まれ。家具作り、建築、装飾の基礎を学んだ後、印刷、レイアウトに興味を持ち、フランスで"Elle"誌や"ル・プランタン"誌のアート・ディレクションを担当。ロンドンに帰ってからは、ヨーロッパのグラフィック界で最高の権威を持つ"クイーン"誌に入社した。1960年、写真に専念することを決心。その後の活躍は世界中の人が知るところである。

TOTOの新インテリアタイルは、「芸術空間」のコンセプトから生まれました。ただ単に空間をカラーコーディネートする次元を越えて、空間を彩るアート装飾へ。つまり「カベを飾る」気分。世界の著名アーティストによる内装タイルです。

新発売のTOTO外装タイルもご注目ください。

良いものだけを作りたい

TOTO

インテリアタイル

東陶機器株式会社　東京支社/〒105 東京都港区虎ノ門1-1-28　大阪支社/大阪市北区曾根崎2-3-7梅新第一生命ビル東館

■TOTOショールームへお出かけ下さい。●札幌(011)231-2271●仙台(0222)64-1010●新潟(0252)41-2255●富山(0764)24-4081●金沢(0762)31-1010●福井(0776)25-0588●東京(03)595-9680●TOTO銀座パビリオン(03)573-1010●横浜(045)312-1010●静岡(0542)54-2405●浜松(0534)56-7371●名古屋(052)232-1067●大阪(06)364-1181●神戸(078)391-8411●広島(082)246-8411●高松(0878)21-8001●北九州(093)951-2710●福岡(092)713-1010

建築と社会　第67輯第3号
昭和61年3月25日発行（毎月1回25日発行）
昭和24年3月19日第3種郵便物認可
正会員の購読料は会費に含めて徴収
定価九五〇円（送料共）
表紙スケッチ・吉田隆一（説明目次頁）

旭シポレックス

ALC新世紀



シポエース

画期的新製法！900㎜広幅。性能の向上、免震性への配慮。

――「シポエース壁」がいま、話題を呼んでいます。新製法による単体の900㎜ワイド幅。気泡が細かく安定した性状。新構法採用による免震性の向上、施工のスピード化そして安全性。現代建築が要求する苛酷な条件に、一つひとつ的確に応え得るＡＬＣとして、設計・施工される皆様に、そしてまたご使用いただいた施主の方々に高く評価されています。

●ここにご紹介する作品は、事務所建築の外壁に採用されたシポエースです。従来幅600㎜から、300㎜幅広になった900㎜。ゆとりが感じられます。気品が感じられます。ＡＬＣの壁面構成を大きく変えたこの意匠。シポエースならではの外部空間の創出です。

●シポエースの物性は、従来ＡＬＣと全く同一で、その製法に際しては「ＪＩＳ Ａ 5416」の規定に従っており、すべての数値をクリアーしています。ＡＬＣを越えるＡＬＣとして、ＡＬＣのエポック・メーカーとして、シポエースはいま脚光を浴びています。

●「シポエース技術資料」カベパネルに加え、ヤネパネルの資料が出来ました。ご請求ください。

東日本・中日本・西日本
旭シポレックス株式会社

東京(03) 254-7100　大阪(06) 538-0521　名古屋(052)581-7421　富山(0764)41-5175　京都(075)343-1992
神戸(078)531-7111　岡山(0862)24-2417　広　島(082)221-5276　福岡(092)771-7271　高松(0878)51-9665　和歌山(0734)53-3390